

小池・宮城・神送塚

昭和48年度竜丘地区農業構造改善事業埋蔵文化財発掘調査報告書

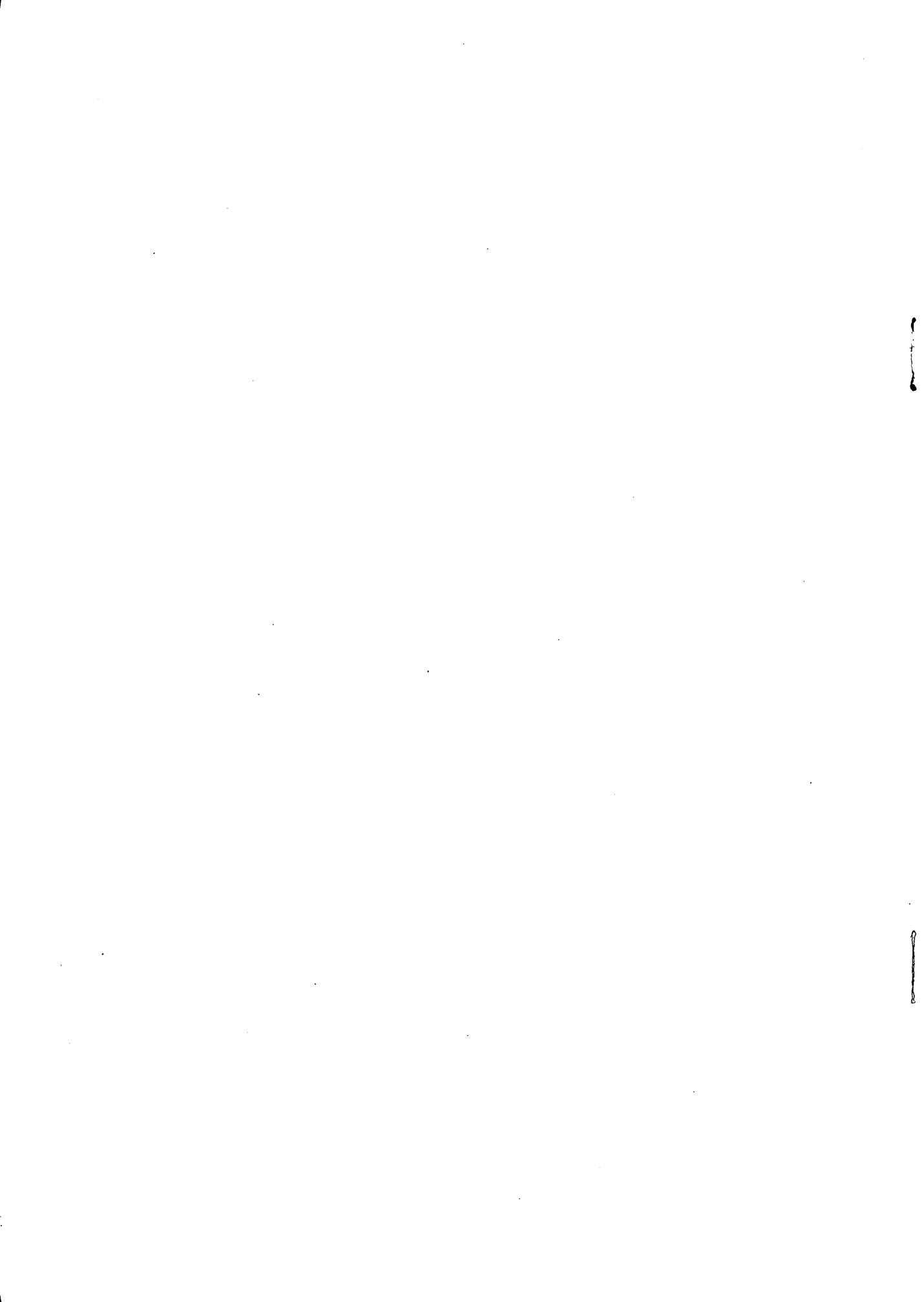
1974.3

長野県飯田市教育委員会

小池・宮城・神送塚

昭和48年度竜丘地区農業改善事業埋蔵文化財発掘調査報告書

1974.3



序

飯田下伊那地区内には各地に古墳や古代遺跡地が散在して、先住民族の生存生活について貴重な資料を提供している。これら遺跡には住居址や生活用具である遺物が包含されていて多数出土し古代文化のすばらしさに感慨をおぼえる。

今回郡市内では比較的下段の小池，鈴南地籍に於て竜丘地区の構造改善事業を行うことになり，ここが遺跡地であることから飯田市教育委員会の直営事業として調査発掘を行った。この一帯は水田と桑園で古くからの耕地であるから農業事業関係者と調査する側とは十分協議を行った。規模が大きいため相当の日数と費用を要したが調査関係者の献身的努力によって所期の目的を果すことが出来た。

それにつけても調査団長の佐藤甦信氏，調査主任遮那藤麻呂，調査員今村正次，塩沢仁治，松村全二，片桐孝男の諸氏の労を謝し，指導に当られた大沢和夫，県指導主事桐原健，今村善興の方々にもお礼申し上げます。尚図版や写真のほか出土品の保存などに佐藤，遮那両氏の並々ならぬ御骨折のおかげでこの様な立派な記録の出来たことを思う時，深甚な謝意を表し厚く御礼申し上げます。

昭和49年3月

飯 田 市 教 育 長

矢 亀 勝 俊

例 言

- 1, 本書は昭和48年度国の補助事業として飯田市竜丘地区における第2次農業構造改善事業に伴う、小池遺跡・宮城遺跡と神送塚付近古墳群の発掘調査報告書である。
- 2, 本書は報告書作成の期限があり、このため調査結果について十分な検討・研究がとれないため、調査によって検出された遺構・遺物などをできうる限り図示することに重点をおいて編集した。
- 3, 宮城遺跡と神送塚付近古墳群の調査は遮那が分担し、その執筆は遮那が調査員の所見をもとにまとめたものである。また、遺構・遺物の作図も遮那が担当し、拓本・石器等の実測は中央道遺跡調査団伊那班の協力を得た。遺構写真は佐藤が担当し、一部遮那のものも使用し、遺物写真は宮沢恒之氏を煩わした。
- 4, 小池遺跡は佐藤が分担し、その執筆は、遺構については今村・塩沢・松村・片桐・佐藤が分担し、遺物その他は佐藤が、遺構・遺物の作図は佐藤が、一部を塩沢・松村があたり、下伊那教育会考古学委員会の応援を得た。遺構写真は佐藤、遺物写真は木下平八郎氏に依頼した。
- 5, 環境、調査経過、考察は佐藤が執筆し、編集は佐藤、遮那があたった。
- 6, 遺構実測図のうちピット内に記してある数字は、床面からの深さをcmであらわし、縮尺については図示してある。
- 7, 遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

目 次

| | |
|----------------------|-----|
| 序 | 3 |
| 例言 | 4 |
| 目次 | 5 |
| I 環 境 | 7 |
| II 発掘調査経過 | 12 |
| III 調査結果 | 15 |
| 1. 宮城遺跡と神送塚付近古墳群 | 15 |
| (1) 位置と付近の遺跡 | 15 |
| (2) 宮城遺跡の遺構と遺物 | 16 |
| (3) 宮城遺跡における土器様相 | 20 |
| (4) 神送塚と付近の古墳群 | 25 |
| (5) 下伊那における古墳文化とその背景 | 30 |
| 宮城遺跡・神送塚付近古墳群挿図・図版 | 34 |
| 1. 小池遺跡 | 83 |
| (1) 位置 | 83 |
| (2) 遺構と遺物 | 85 |
| (3) まとめ | 87 |
| 小池遺跡挿図 | 111 |
| IV 考 察 | 123 |
| 調査組織 | 126 |
| おわりに | 127 |
| 小池遺跡図版 | 129 |

【挿図目次】

宮城遺跡と神送塚付近古墳群

| | | |
|------|---|----|
| 第1図 | 遺跡付近地形図及び遺跡分布図 | 8 |
| 第2図 | A地点遺構配置図及び1号住居址実測図 | 34 |
| 第3図 | A-2号住居址, 3号住居址実測図 | 35 |
| 第4図 | A-土壇1,2,石組1,2,溝状遺構実測図 | 36 |
| 第5図 | 1号住居址出土土器実測図(A) | 37 |
| 第6図 | 1号住居址出土土器実測図(A) | 38 |
| 第7図 | 1号住居址出土土器実測図(A) | 39 |
| 第8図 | 1号住居址, 2号住居址出土土器実測図(A) | 40 |
| 第9図 | 1号住居址, 土器集中部出土土器実測図(A) | 41 |
| 第10図 | 1号住居址出土土器拓影 | 42 |
| 第11図 | 1号住居址出土土器拓影 | 43 |
| 第12図 | 2号住居址出土土器拓影 | 44 |
| 第13図 | 2号住居址出土土器拓影 | 45 |
| 第14図 | 3号住居址出土土器拓影 | 46 |
| 第15図 | 3号住居址, 土器集中部出土土器拓影 | 47 |
| 第16図 | A-土壇1出土土器拓影 | 48 |
| 第17図 | 1号住居址出土土器実測図 | 49 |
| 第18図 | 1号住居址出土土器実測図 | 50 |
| 第19図 | 1号住居址出土土器実測図 | 51 |
| 第20図 | 2号住居址出土土器実測図 | 52 |
| 第21図 | 2号住居址出土土器実測図 | 53 |
| 第22図 | 2号住居址出土土器実測図 | 54 |
| 第23図 | 2号住居址出土土器実測図 | 55 |
| 第24図 | 3号住居址出土土器実測図 | 56 |
| 第25図 | 土器集中部出土土器実測図 | 57 |
| 第26図 | A-遺構外出土土器実測図 | 58 |
| 第27図 | A-遺構外出土土器実測図 | 59 |
| 第28図 | A-住居址出土土偶, 土器集中部出土土偶 実測図 | 60 |
| 第29図 | A-住居址出土土製品, 石製品, 古銭実測 図及び拓影 | 61 |
| 第30図 | B地点古墳分布図及び井ゾエ1号墳周濠実 測図 | 62 |
| 第31図 | ツカノコシ古墳, 井ゾエ2号墳周濠, ツカ ノコシ古墳石積下部遺構実測図 | 63 |
| 第32図 | B-集石, 土壇1, 2, 火葬墓実測図 | 64 |
| 第33図 | 井ゾエ1号墳, 井ゾエ2号墳周濠内出土土 器実測図 | 65 |
| 第34図 | ツカノコシ古墳周濠内出土土器, その他出 土土器実測図 | 66 |
| 第35図 | 神送塚古墳, 井ゾエ1号墳, ツカノコシ古 墳出土鉄製品実測図 | 67 |

小池遺跡

| | | |
|-----------|------------------------------------|---------|
| 第36図~第58図 | 小池遺跡遺構図 | 83~108 |
| 第59図 | 6号住居址遺物図 | 110 |
| 第60図~第65図 | 1号, 2号, 3号, 5号住居址遺物図 | 111~115 |
| 第66図~第70図 | 4号, 7号, 8号, 9号, 10号, 11号 住居址遺物図 | 115~118 |
| 第71図~第73図 | 柱列址遺物図 | 119~120 |
| 第74図~第76図 | 竪穴遺構, 土壇, その他, 遺物 | 120~122 |

【図版目次】

宮城遺跡と神送塚付近古墳群

| | | |
|------|-----------------------------------|-----|
| 図版1 | 宮城遺跡, 神送塚付近古墳群 | 69 |
| 図版2 | 1号住居址・出土遺物 | 70 |
| 図版3 | 1号住居址出土遺物 | 71 |
| 図版4 | 1号住居址出土土器 | 72 |
| 図版5 | 2号住居址・出土遺物 | 73 |
| 図版6 | 3号住居址・出土土偶 | 74 |
| 図版7 | A区その他の遺構 | 75 |
| 図版8 | 井ゾエ1, 2号周濠 | 76 |
| 図版9 | ツカノコシ古墳・遺物出土状態 | 77 |
| 図版10 | B区その他の遺構 | 78 |
| 図版11 | 神送塚古墳出土遺物 | 79 |
| 図版12 | 神送塚古墳出土遺物 | 80 |
| 図版13 | スナップ | 81 |
| 小池遺構 | | |
| 図版14 | 小池遺構全景 | 129 |
| 図版15 | 遺構 | 130 |
| 図版16 | 弥生時代の住居址(6号) | 131 |
| 図版17 | 古墳時代の住居址(1号・2号・3号・5号) | 133 |
| 図版18 | 平安時代の住居址(4号・7号・8号・ 9号・10号・11号) | 137 |
| 図版19 | 柱列址(I~IV) | 139 |
| 図版20 | 竪穴遺構・土壇その他 | 140 |
| 図版21 | 発掘スナップ | 142 |

【表目次】

| | | |
|-----|-----------------------------------|----|
| 第1表 | A地点出土土器一覧表 | 21 |
| 第2表 | A地点遺構別出土遺物一覧表 | 59 |
| 第3表 | 神送塚古墳, 井ゾエ1号墳, ツカノコ シ古墳出土鉄器計測表 | 29 |

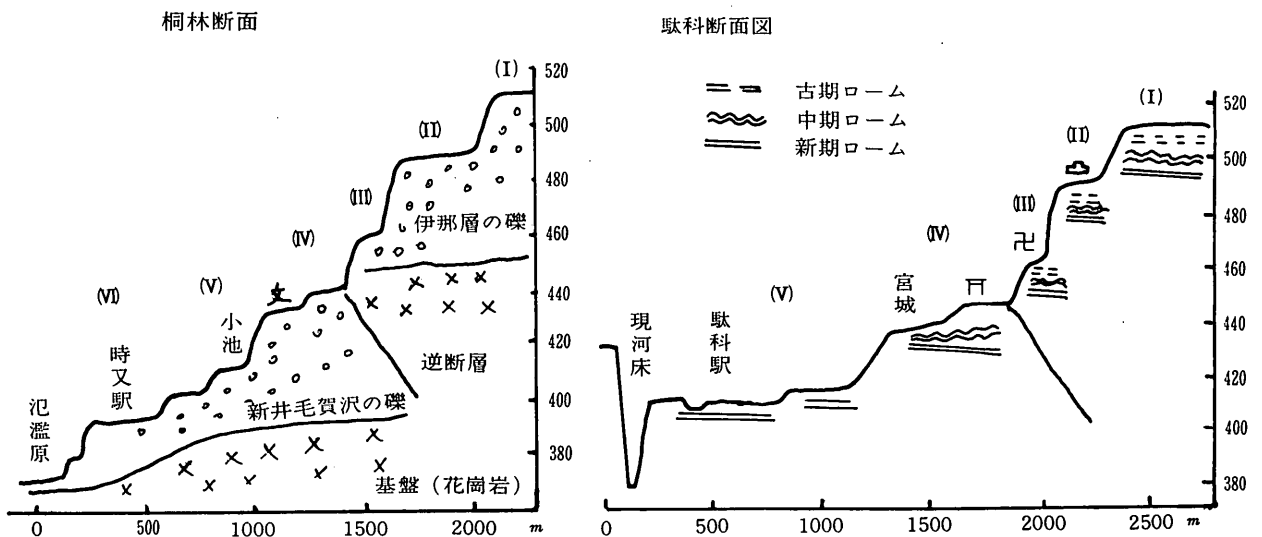
I 環 境

1. 自然的環境

長野県飯田市竜丘地区は旧竜丘村で、飯田市駄科・桐林・長野原、時又・上川路となり、竜丘地域全体の呼び名となっている。飯田市街地から5 km～6 km南にある。北は毛賀沢で松尾・鼎町に、南は久米川で川路に、東は天竜川で下久堅・竜江に境し、西は丘陵でもって伊賀良に接している。西半分は丘陵、東半分は段丘の平坦面となり、天竜川に沿って並ぶ松尾と川路の間であって、川が削り残した丘—自然堤防の上にある。東境をなす天竜川が花崗岩を刻みこんだ溪谷をなしているため、天竜川に接するというものの沖積低地は地区の南東の上川路と時又の一部の僅かであり、大部分は洪積期の台地からなり、その台地上に東から西に次第に高くなっている段丘地形が発達している。

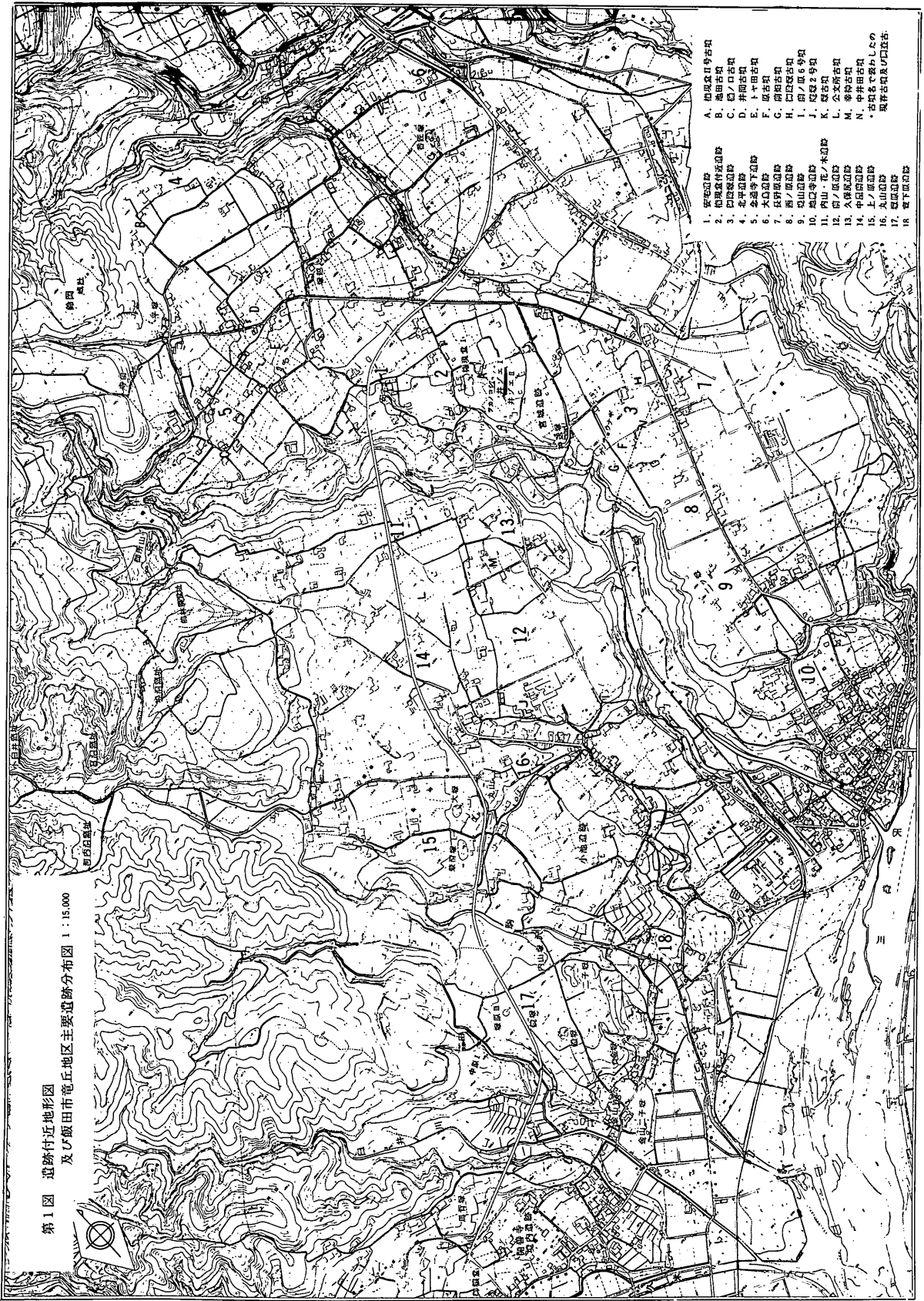
竜丘地区の段丘を上段面からみると、(I)最上段に高位段丘0の白井原段丘面があり、長い間の風雨に削られ凹凸ある残丘面をなしている。(II)は(I)より20 m下った鈴岡公園面・前林面で、巾は駄科で200 m、桐林で400 mほどであり、(II)との比高差40 mの段丘崖をもつて(III)の念通寺面の巾は50 m以内の狭い段丘面がある。

(IV)は伊那谷の第6段丘で中位段丘に位置づき、駄科・長野原・桐林面で竜丘の大部分を占めている。(V)は駄科駅面と桐林小池・久保尻平面で、伊那谷の第7・8段丘面の下位段丘となり、(VI)は沖積段丘となって時又駅面、上川路面となり、さらに時又・川路の最低位面となり、天竜川の氾濫原にとつながっている。これを地形断面図でみると次のようである。



竜丘地区断面図 (竜丘村誌による)

第1图 道跡付近地形图
及ひ飯田市竜丘地区主要道跡分布图 1:15,000



- 1. 安地通跡
 - 2. 他種遺付通跡
 - 3. 田圃通跡
 - 4. 水干通跡
 - 5. 金通寺下通跡
 - 6. 本通跡
 - 7. 谷野通跡
 - 8. 原ノ原通跡
 - 9. 田山通跡
 - 10. 堀通跡
 - 11. 内山・花ノ木通跡
 - 12. 野ノ原通跡
 - 13. 大田通跡
 - 14. 平田通跡
 - 15. 大田通跡
 - 16. 大田通跡
 - 17. 大田通跡
 - 18. 野下通跡
- A. 畑道跡
 - B. 尾田通跡
 - C. 堀ノ口通跡
 - D. 井田通跡
 - E. 十ノ田通跡
 - F. 原通跡
 - G. 御田通跡
 - H. 田圃通跡
 - I. 所ノ原通跡
 - J. 冠2号通跡
 - K. 谷通跡
 - L. 公文所通跡
 - M. 寺通跡
 - N. 井田通跡
 - O. 田圃通跡
 - P. 田圃通跡
 - Q. 田圃通跡
 - R. 田圃通跡
 - S. 田圃通跡



これら段丘を切って天竜川の支流が、北から毛賀沢川・新川・駒沢川・久米川の支流白井川・久米川が東流して天竜川にそそいでいる。このうち新川の浸蝕は著しく、東流する新川はさらに大きくカーブして南流し、巾100m～230m、深さ30m～40mの浸蝕谷を形成して、もとは同一面であった駄科・長野原面と桐林面を分けている。

宮城遺跡と神送塚は駄科面に所在している。標高429m。駄科面は北は毛賀沢川の浸蝕崖によって切られ、東は10m位の段丘崖をもって下位の駄科駅面となる。ここには旧河床を示す凹地があり、さらに東は天竜川が花崗岩を刻みこんだ深い溪谷となっている。北北西の鈴岡公園、念通寺の段丘崖下から2000m、南南東にのびる平坦面で長野原面となっているが、その間には地形的な大きな変化はない。水の少ない台地で部落の中央を大井川という井水が通っており（完成は江戸時代後期）ごく最近までは大井川の水をこして飲料水に供していた。台地面は北側では東西巾900m、東にいくに従って狭くなって300mとなり、長野原面になると、その東西巾は500mと広がる。この最も幅員が狭まった浸蝕崖に面した所に神送塚が、これより北から東に広がる平坦面に宮城遺跡は立地している。

小池遺跡の所在する桐林は竜丘地区の中央にあつて、西は白井原の丘陵にさえぎられ、北から東にかけて新川の浸蝕谷によって切られている。桐林面は標高426～431mの平坦面で桐林の大部分を占めている。南から南西にかけて小さな低段丘が小池・塚原、一段下がって久保尻平・家下原、さらに沖積段丘時又駅面、上川路へと続いて天竜川氾濫原となる。

小池地籍は北と西は桐林段丘崖によってとりかこまれた状態にあり、桐林面との比高差20mを測り、標高405～409m、天竜川との比高差35m、伊那谷の第7段丘面にあつて南北300m、東西300mの小台地である。西は駒沢川の深さ10mの浸蝕谷で切られ、塚原古墳群のある塚原と対し、南には比高差12mの一段低い家下原、久保尻平面があつて、さらに比高差16mで沖積段丘時又駅面となる。

小池遺跡の微地形をみると、南西側は駒沢川の自然堤防となつて微高地形をなし、北東にいくに従って低地となり、大部分が湿地帯となっている。このため集落は高地形をなす駒沢川に面した西側から南側に発達し、湿地帯は古くから水田が開発されたところである。

2. 歴史的環境

竜丘地区の段丘面上には多くの遺跡が存在しているが、調査されたのは僅かで、これらの中駄科面では昭和43年に国道151号付替工事の際の発掘調査によって弥生後期・古墳時代から平安時代の住居址18が発見され、この周辺から耕作中に発見された縄文中期の土器片や土偶がある。北平では耕作中に縄文中期の土器の出土をみており、駄科面から駄科駅面となる段丘崖に川端遺跡があり、中世の土壇墓が発掘調査されている。

桐林面では昭和42年国道151号付替工事の際の内山・花ノ木遺跡では、古墳時代から平安時代の住居址10が発掘調査され、前ノ原遺跡では、飯田高校考古学クラブによって縄文中期加曾利E式の住居址1軒が発掘調査され、多くの好資料が得られている。上川路面では今年度の発掘調査の開善寺境内遺跡で縄文中期から弥生後期、古墳期、平安期、中世にいたる多くの資料の出土をみている。

これら発掘調査は限られた小範囲であるが、これら段丘面に展開された集落の存在が予想されるもので

あった。

竜丘地区で特に注目すべきは、下伊那地方で最も密度の高い古墳群地帯である。竜丘地区の面積7.9km²の小範囲に138基の古墳のあったことが調査されており、現存する古墳は37基を数える。この中に前方後円墳9基がある。駄科面には前方後円墳に塚越1号古墳、権現堂1号古墳がある。鈴岡面から念通寺面には横穴石室をもつ小古墳3基が残存しているが、駄科面の円墳は安宅・ゲンチョウナギ古墳以外は残存していない。権現堂1号古墳を盟主として、南に権現堂2号、井ゾエ1号・2号、ツカノコシ、神送塚古墳が存在していた。ここが今次発掘調査地域である。この南に原、ゲンチョウナギ古墳があり、さらに長野原古墳群へと続いている。駄科面には円墳では下伊那地方二番目の大きさをもつ番匠塚古墳がある。

桐林面には段丘西縁部に下伊那地方で最も古いグループにはいる前・Ⅳ期とみる兼清塚、丸山、大塚の前方後円墳があり、この段丘崖下に小池遺跡がある。小池遺跡の西に対する塚原面には、塚原(1号)二子塚を主座にし、内山(2号)、3号、鏡塚(4号)、鎧塚(5号)、黄金塚(10号)の規模の大きな円墳が現存し、下伊那地方における典型的な古墳群の姿を残しており、二子塚は飯田市指定、鎧塚は下伊那地方第一の円墳である。この古墳群の南の低位段丘面に金山二子塚の前方後円墳を主座とする金山古墳が続いている。臼井川の西の小台地上に馬背塚(県指定)、上川路面に御猿堂古墳(県指定)の前方後円墳がある。馬背塚は前方部後円部におおの横穴式石室を有する後・Ⅲ期の、御猿堂古墳は重文の四仏四獣鏡の出土をみた後円部中腹に横穴式石室をもつ後・Ⅰ期の代表的古墳である。

前林は奈良時代に比定される古瓦・瓦塔破片の出土した「前林廃寺跡」が存在しており、宮洞よりは埴仏の出土、開善寺境内よりの多量の古瓦の出土は奈良時代の寺院の存在が推定されるものである。宮洞・小白井・堤洞・河内洞には平安期の須恵器の窯址群がある。

中世にはいはって鎌倉時代には伊賀良庄の地頭北条江馬氏によって開善寺が創建され、さらに信濃国守護小笠原氏によって発展をみている。室町初期には鈴岡城が構えられ、鈴岡小笠原氏の本拠となって中世末にいたっている。

注1 松島信幸「伊那谷の段丘」1966 下伊那地質資料、62

注2 注1に同じ 松島は伊那谷の段丘を高位段丘0～2、中位段丘2～6、下位段丘7・8、沖積段丘9・10を設定している

注3 大沢和夫、佐藤勉信「安宅・大島」1969 長野県飯田建設事務所

注4 ”

注5 遮那藤麻呂「内山遺跡調査概報」1967 「伊那」10月・11月号

大沢和夫・佐藤勉信「内山・花ノ木調査報告書」1968 飯田市教委

注6 市村威人「下伊那史 第2巻」下伊那誌編集会

注7 ”

注8 大沢和夫「前林発見の瓦塔について」1961 「伊那」7月号

注9 遮那其周「飯田市竜丘宮洞発見の埴仏」1966 「伊那」4月号

注10 ” 「飯田市竜丘宮洞古窯跡調査報告書」1963 「伊那」8月号

中田美穂「古跡」昭43 竜丘村誌 竜丘村編纂委員会

注11 宮下 操「下伊那誌 第四巻」下伊那誌編集会

II 発掘調査経過

第二次農業構造改善事業飯田市竜丘の昭和48年度計画は駄科橋場鈴南と桐林小池の両地区において実施されることになった。橋場鈴南は前方後円墳権現堂1号古墳を主座とする古墳群のある所で、用地内には六鈴鏡・陶馬の出土で知られる神送塚があり、井ゾへ1号・2号、ツカノコシ古墳のあったところでもあり、また宮城遺跡として知られている。

小池地区は、縄文中期の遺跡であり、農業構造改善事業計画がたまった時点の分布調査では、土師器片須恵器の多くが表面採集され、古墳時代から平安時代の遺跡であることも判明した。

これら遺跡を工事前に調査して記録保存することになり、国の補助事業として飯田市教育委員会が主体となって行なったのが本次発掘調査である。

構造改善事業面積は橋場鈴南では5.4ha、小池では5.1haの広い範囲であり、調査費・工事の進捗による時間的制約により、調査地域を設定し、この範囲の調査に重点をおくことにし、これ以外は工事中に遺構発見段階で調査をすることにした。

小池遺跡は遺物の採集状況により、第I調査区、第II調査区を設定できたが、橋場鈴南では神送塚の所在したといわれる地域を古墳調査対象A地区としたが、宮城遺跡の表採遺物は僅少でピット調査をなし、重点地区を設定することにした。

発掘調査は昭和48年10月8日から12月6日までの2か月を要したもので、発掘調査日誌は次の表に示すことにした。

発掘調査日誌

| 月 日 | 天 候 | 日 誌 |
|------|----------|--------------------------------------|
| 10・1 | | 調査準備会を開き、発掘準備にかかる。 |
| 8 | くもり 晴 | 宮城遺跡・神送塚 器材運搬 テント張り 結団式 ピット調査にかかる |
| 9 | 晴 | ピット調査 |
| 10 | | (休み) |
| 11 | 晴 | |
| 12 | くもり | |
| 13 | くもり 雨 | 午前中雨となり作業中止 |
| 14 | くもり 晴 | B地区を設定 |
| 15 | | (休み) |
| 16 | 晴 | 本格的調査にかかる B地区のグリッド調査 |
| 17 | 雨 | (休み) |

| 月 日 | 天 候 | 日 | 誌 |
|-------------|------------|---|------------------------------|
| 10・18 | 晴 | 黒土のおちこみを検出 住居址？ | |
| 19 | 晴 | 黒土のおちこみの調査 | |
| 20 | 晴 | | |
| 21 | | (休み) | |
| 22 | 晴 | 黒土のおちこみは溝状遺構となる | |
| 23 | 晴 | 溝状遺構の調査 内部より多量の川原石を発見 下伊那史二巻による井ゾエI号・II号古墳の位置に合致してくる | |
| 24 | 晴 | 井ゾエ1号・II号古墳の周濠と確認 川原石は葦石の崩壊 | |
| 25 | 晴 | ツカノコシ古墳の所在地にグリッド調査 井ゾエ1号墳周溝表土をブルトーザで排徐 | |
| 26 | 晴 | 三基の古墳の周濠内部調査 | |
| 27 | 晴 | シカノコシ古墳より古墳破壊時に剣・大刀を埋め替えた円形石組を検出する | |
| 28 | 雨 | (休み) 大雨 | |
| 29 | 晴 | 前日の大雨で古墳周溝内部は水浸しとなり、調査不能 A地点の調査 1号・2号住居址の存在をたしかめる | |
| 30 | 晴 | 住居址1・2号の調査 住居址3号？を発見 縄文中期の遺物多し | |
| 31 | 晴 | 覆土掘りこみ 住居址3号？は遺構なし | |
| 11・1 | くもり | " 1号住居址より勝坂式土器セットを検出 遺物多し 三基古墳周溝掘り上げ 写真撮影 縄文後期土壇検出 | |
| 2 | 晴 | 3号住居址を確認 炉を検出 神送塚発見のためのグリッド調査 | |
| 3 4 | | (休み) | |
| 5 | 晴 | 住居址1・2号掘り下げ | |
| 6 | くもり 雨 | 午前中作業 3号住居址掘り下げ | 神送塚発見できず |
| 7 | 晴 | 写真撮影 遺構実測 小池遺跡 器材移動 テント張 I調査区へグリッド設定 | |
| 8 | 晴 | | グリッド調査 湧水多く遺構なし II調査区へ 移る |
| 9 | くもり | 宮城遺跡・神送塚調査完了 周辺古墳調査 | グリッド調査 1・2号住居址確認 1号土壇検出調査 |
| 小池遺跡 | | | |
| 11・10 11 | 雨 (日) | (休み) | |
| 12 | くもり | グリッド調査 3号住居址を検出調査 柱穴群Iの検出 | |
| 13 | 晴 | プラン検出 4号住居址確認 溝状遺構検出調査 | |
| 14 | 晴 | 2・3・4号住居址の調査 1部掘り上げ実測 | 5号住居址確認 |
| 15 | 晴 | 2号土壇発見調査 | |
| | | プラン検出 | |
| 16 | 晴 | 3号住居址掘り上げ実測 | 北側に柱穴群Iを発見 |
| 17 | くもり 時々雨 | 2号住居址掘り上げ 遺物多し | |
| 18 | 雪あれ | 1号住居址のプラン検出 (下伊那教育会考古学委員会分担) | |
| 19 | | 6号住居址を発見調査 4号住居址掘り上げ 実測 (2・4住居址) | |
| 20 | 晴 | プラン検出 柱穴群II？ | 配石遺構を発見 |
| 21 | 小 雨 | 火災の住居址 炭化物多し 7号住居址を発見 | |
| 22 | 晴 | 火災跡実測 ブルトーザで上の田の表土排徐 | 掘り上げ 実測 |

| 月 日 | 天 候 | 日 誌 |
|-------|------------|---------------------------------------|
| 11・23 | 晴 | 1号住居址覆土掘り |
| 24 | 晴 | 6号住居址掘り上げ 実測（弥生終末） 竪穴遺構検出調査 |
| 25 | 晴 | 1号住居址掘り上げ実測 遺物多し（土師器 鬼高期のセット） 柱穴群Ⅲ？発見 |
| 26 | 晴 | 8・9・10号住居址を発見 調査 柱穴群Ⅲは柱列址Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとなる |
| 27 | 晴 | プラン検出（平安期） |
| 28 | 晴 | 8・9号住居址掘り上げ 7号住居址の調査 |
| 29 | 晴 | 10号住居址掘り上げ 柱列址Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを掘り上げ |
| 30 | 晴 | 7号住居址掘り上げ（平安期） 7・8・9・10号住居址実測 |
| 12・1 | 晴 | 柱穴群Ⅱ？は柱列址Ⅳとなり掘り上げ 柱穴群Ⅱ 土壇群の検出調査 掘り上げ |
| 2 | | （休み） |
| 3 | 小 雨 | 11号住居址検出調査 遺構実測 |
| 4 | 時 々 吹 雪 | |
| 5 | 晴 | 実測のみ |
| 6 | 晴 | 11号住居址掘り上げ 実測完了 現場作業終了 器材を徹収する |

発掘作業終了後、遺物の整理・実測、製図をなし報告書の作成にとりかかる

III 調査結果

1. 宮城遺跡と神送塚付近古墳群

今回の調査は竜丘橋場・鈴南（宮城遺跡と神送塚付近）地区における農業構造改善事業に伴うものであり、昭和47年の分布調査においてこの地域一帯より須恵器、土師器などが採集された事と、権現堂古墳群に伴う消滅古墳の神送塚古墳が存在した事実より、消滅古墳の正確な位置を確認することと、各時期の遺構の存在も推定されたため今回の調査となった。調査対象となった橋場、鈴南地域は広大な調査面積であるため、調査区をA地点とB地点に限定しA地点は宮城遺跡と神送塚古墳の調査に主眼をおき、B地点は権現堂古墳群の消滅古墳であるイゾエ1・2号墳とツカノコシ古墳の確認調査に主眼をおいて実施した。

A地点の宮城遺跡と神送塚古墳の調査は、縄文時代中期中葉の住居址3、土器集中部1、縄文後期土坑1、集石址2、溝状遺構1、時期不明土坑1の発見があり、消滅古墳である神送塚古墳は調査対象地内においては確認できなかった。B地点においては調査地内に権現堂古墳群の消滅古墳三基の存在が認められたため、この調査に主力を注いだ。また調査時期が10月という関係上、おりからの稲刈り後にあたり、調査区には無数のハザが存在し発掘調査はもとより、写真撮影や計測に大きな障害となった。このような事情と調査面積が広大なため限定された範囲内の調査に止まり十分な調査とはいえなかった。なお消滅古墳確認調査において市村氏の「下伊那史」2・3巻をもとに推定所在地を確認した。今時の調査結果については、十分な分析をしたいと思ったができなかったため、調査の概要を中心に報告を進めていきたい。

(1) 位置と付近の遺跡(1図)

飯田市竜丘に所在する宮城遺跡と神送塚付近の古墳群（権現堂古墳群）は、国鉄飯田線駄科駅の西方約1km地点に位置し、天竜川の西岸で竜丘の段丘上にあたる。飯田市の南部に位する竜丘地区は、東南を天竜川が流れ、駄科駅付近より時又付近に至る間は川幅が局端にせばまり深い谷を形成している。今時調査の対象となった所は、天竜川により形成された河成段丘上であり、さらにこの段丘上を西方伊賀良地区の山地より源を発する毛賀沢川と新川とにより浸蝕され、南側と北側はきわめて深い谷が形成されている。

このように竜丘地区は天竜川の河成段丘上をその支流である数本の小河川により分断されており、同一段丘があたかも舌状台地のごとく天竜川に向い発達しているかに見える。また寸断された段丘上は、先端部より山麓に沿う地帯まで各時期を通じて遺跡が存在し、また段丘上は多くの古墳が群在しており、神送塚も権現堂古墳群の一つに数えられるものである。段丘上はほとんど同一レベルの平端面であり、標高400

mラインより500mラインの間にあり、弥生時代より歴史時代はもちろん現在においてもこの平端面は重要な生産地帯としてその位置を占めている。

遺跡が所在する新川と毛賀沢川にはさまれた駄科の台地は、比較的広大な面積をもち天竜川に接する段丘先端部は段崖となり、これより山麓の伊賀良境までの距離も長い。この段丘の中央部には松川より井水が引かれており、水利の悪い段丘上に重要な役割をはたしている。最近国道151号線天竜峡バイパス工事に伴い、段丘中央部を横断する道路が出来念通寺東方の安宅遺跡からは、弥生時代、平安時代の住居址が数多く発見されている。また対岸の桐林段丘上の新川に接する内山、花ノ木遺跡においても多くの住居址が確認されている。今時調査の対象となった地点は、安宅遺跡よりさらに東方100mの地点であり、新川に接する段丘端にあたる権現堂1号墳（前方後円墳）の東側一帯とこれに接する宮城遺跡一帯である。今時調査の宮城遺跡においても縄文中期の住居址が発見されているが、対岸の前の原遺跡（竜丘小学校付近一帯）からも縄文中期末葉の住居址が発見され、出土遺物もまとまった良好な資料が発見されている。この付近一帯からは地表採集により、縄文・土師器・須恵器なども認められており、各時期を通じて大集落址の存在が推定される地帯である。また古墳密集地域としても重要な地帯で、前方後円墳の大部分が竜丘地区に分布しており、これらの前方後円墳と円墳との関係、いわゆる群集墳にまつわる諸問題、また前方後円墳と円墳に対する構築時期の諸問題、古墳群発生などの様々な問題を含む問題提起の場所である。このように遺跡地帯、古墳密集地帯にもかかわらず、考古学的調査は数例にすぎず誠にお寒い状態である。特に縄文時代においては、飯田高校考古学研究会が行った前の原遺跡からは、1住居址中より20数個体にのぼる土器の発見があり、また今時調査の住居址からも下伊那では数少ない資料が発見され、下伊那における縄文時代の編年に組込まれるべき好資料が得られている。歴史時代においては、特記するものに前林の山麓より舌状にのびた台地平端部から多量の古瓦や瓦塔の発見があり、この地に寺院址の存在が考えられる遺跡もある。なおこれらと有機的関係にある古窯址群も付近に存在し、天竜川流域における唯一の古代窯業地帯として注目されている。またこれらと共に同時期の集落址との関係など様々な問題を含んでいる地帯である。現在までに同地区一帯で出土した遺物類は、竜丘小学校に保管されているだけでも膨大な量にのぼるが、おしいことに出土地点が明瞭でないため資料的価値は半減している。そのためにも少なからず考古学的に調査した資料は充分検討し分析をはたさなければならないと思う。

（2）宮城遺跡の遺構と遺物（A地点）

当初神送塚古墳の確認調査を目的として実施したが確認できず、縄文時代の住居址、土坑、土器集中部、集石址、溝状遺構などの発見があった。

ア）1号住居址（2図.5図.～11図.17図～19図.28図.29図）

調査区北側の吉川氏宅地横に発見されたものでほぼ円形の竪穴住居址である。炉址は住居址中央部よりやや北寄りに存在するが、炉石はすべて取り除かれておりその痕跡が認められた。おそらく河原石を円形に組んだ石囲炉と思われる。内部からはわずかな焼土が認められた。主柱は5本で床面は良くない。住居址の覆土は中心部のみ黒色土が認められたが、その他はすべて粘質の茶褐色土であり、壁の検出にはきわめて困難であった。出土遺物は中心部の黒色土中より多くの土器、石器の出土があり、その出土状態は住

居が廃絶された後の凹地に投げこまれたごとき状態であった。住居址は南北5.45m×4.65mを計りローム面より掘り込んで構築されたものである。

遺物 土器、石器、土製品がありその出土量はきわめて多いが、床面からは認められていない。

土器 (5図～11図) 深鉢、浅鉢、台付土器、有孔罎付土器などがあり、器種の変化にとんでいる。また個体数からみると24個体分以上が数えられることも注目される。豪華な装飾把手付深鉢形土器(5図)があり完形品である。正面、裏面、側面と図示しておいた。口径20cm、器高45cm、底径14.4cmを計り特に口縁部に豪華な飾りが集中しており、個々の小さな突起はいずれも土器内側に文様をつけている。器面は半肉彫の隆帯、コの字状隆帯、無文帯部には大きな三叉文、それに太い沈線と渦巻文などが組合されて文様を構成している。下伊那では、現在この種の出土例は少ない。台付土器(9図1)も完形品であり、口径が19cm、器高25cm、底径14cmを計る。口縁部は袋状の無文帯であり、口唇部に小さな把手が付くようであるが欠損している。器面の文様は半肉彫の隆帯を半円弧状に3箇所配し、その他は区画文である。台部は隆帯を山形に配し太い沈線と無文帯部に三叉文が認められる。その他ほぼ器形を知り得る土器(6図1～13、7図1～3、8図1～6)がある。諏訪地方における藤内系土器(6図2.4.5.10図16～20)であり特殊な土器として(6図6.7.10図1.2)きわめて薄手で竹管文と波状口縁をなす土器の存在が注目されている。そのほか口縁部と胴部下半に文様帯をもつ土器の一群(6図8～13、7図1～3、8図1～3、6.10図3～10)があり、この中でも沈線と指頭圧痕文を主体とした土器(6図11～13、11図12～19)また半截竹管による押引爪形沈線を連続させる特徴をもつ土器(6図8～10、7図1、11図4～7)などがある。この種の土器の共通する点は、ともに胴部下半部に楯形文が存在することである。なお大形の器形を示し口縁部に4個の山形をつける土器(7図3、8図1.2)が認められ、この種のものには主に沈線を主体とするものである。これと同種であるが、大波状口縁をもつ特殊な土器(7図2)も存在する。無文土器(8図5)もあり、浅鉢形土器(8図4)と、有孔罎付土器(6図3)も存在する。また曾利I式土器とみられる(6図1)のものも認められる。これらに伴い縄文が施文される土器(10図11、13、21～23)もわずかに認められる。

石器(17図、18図、19図、29図) 石器の出土量も多い。磨製石斧(17図1～5)で側面に多くの打痕が認められるものもある。打製石斧(17図6～19、18図1～17)磨石(18図18、19)敲打器(18図20～22)があり、横刃形石器(19図1～22)粗製石匕(19図23)石錘(19図24～33)がある。石鏃(29図16～18)はすべて黒曜石製である。

土製品としては土偶(28図1～3)と土器片利用の土製円板(29図1～8)が出土している。土偶の文様はすべて押引竹管文である。

イ) 2号住居址(3図、8図、12図、13図、20図～23図、28図、29図)

1号址に接し南側に発見された竪穴住居址である。(3図) 南北4.8m×東西4.55mを計り、主柱は6本で炉址は中央やや西寄りに河原石8個を円形にならべた径45cmの石囲炉が存在する。炉石は編平河原石を立ててあり、正面のものは平らに置かれている。焼土の存在はきわめて薄い。また炉址の東南部にわずかな凹みが存在する。この凹みは住居址のほぼ中央部にあり、床面は部分的に良好な所もあるが、全体的にはよくない。住居址中央部のみ覆土が黒色土であったほかは、すべて粘質の褐色土であり遺物類も大部分が中心部の黒色土中より発見された。

遺物(8図12～16、12図、13図、20図～23図、28図、29図) 土器、石器、土製品があり、その出土量はきわめて多く、特に石器の出土量は注意する必要がある。

土器（8図、12図、13図）深鉢と台付土器（8図12～16）があり器形を知る得るものである。藤内期に比定される土器（8図12～16）13図1～5）があり、口縁部と胴部下半に文様帯をもち、胴下半に楕形文を有する土器（12図1～26）がある。口縁近くの無文帯に把手が付く土器（13図9）底部（13図25）器台（13図26）がある。縄文が施文される土器（13図23、24）もあるが量はきわめて少ない。なお井戸尻Ⅲ式土器（12図10～15）に含まれるものもある。

石器（20図～24図、29図）磨製石斧（20図1～5）打製石斧（20図6～20、21図1～25、22図1、2）がある。敲打器（22図3～13）敲打器と磨石を兼用したもの（22図14）磨石（22図15、16）石皿（22図17、23図1）がある。横刃形石器（23図2～28）石鏃（29図20、21）があり、スクレイパー（29図22、23）がある。

石鏃²⁰とスクレイパー²²は黒曜石製、（21、23）はハリ質安山岩製である。その他小形磨製石斧（29図20）がある。石錘（24図2～12）粗製石ヒ（24図1）が出土している。

土製品（28図4.5、29図9～15）土偶2個体分が出土している。（28図4.5）土偶はきわめて大形なものであり、胴部には押引竹管文が施文されている。その他土器片利用の土製円板（29図9～15）があり、また土器口縁部に付くと思われる蛇身装飾の蛇頭（29図15）がある。

ウ）3号住居址（3図、14図、15図、24図、28図）

1号址の西方約40mに発見されたもので、南北4.7m×4.7mを計る円形の竪穴住居址である。炉址は住居址中央やや西寄りにあり、河原石7個を使用する径60cmの石囲炉である。焼石はすべて遺存し扁平河原石を立て正面の炉石のみ平におかれている。主柱は7本認められ、床面は炉址周辺部が良好であるがその他はよくない。この住居址は掘り込みも浅く覆土はすべて粘質の褐色土であり、出土遺物も少ない。

遺物（14図、15図、24図、28図）土器、石器、土製品があるが、1号址、2号址に比較するとその出土量は少ない。

土器（14図、15図）すべて破片であり、器種は深鉢と浅鉢がある。大形な山形口縁部（14図1～3）井戸尻Ⅲ式土器に比定される土器（14図4～9）があり、胴部下半部に楕形文が認められるもの（14図10～17）がある。また口縁部に押引竹管文と指頭圧痕文を隆帯上に付ける土器（14図22～25）があり、浅鉢形土器（14図26）がある。深鉢土器の破片（14図27～30）と底部近くの破片（14図31～34）押引竹管文と隆帯による区画文、三叉文などの認められる土器（15図1～7）縄文が施文される土器（15図9、10）があり底部（15図10）がある。

石器（24図）磨製石斧（24図13）打製石斧（24図14～21）突棒状石器（24図22）横刃形石器（24図23～28）があり、石錘（24図29）がある。

土製品（29図）土偶2個体分の出土がある。（29図7.8）文様は押引竹管文を連続させている。

エ）土器集中部

2号住居址の東側において多量の土器、石器の集中出土地点が注意された。遺物類の出土は多いが、遺構の存在が確認できずいかなる性格のものか不明である。時期は住居址とほとんど変わらない。

遺物（9図、15図、25図、28図、29図）土器、石器、土製品の出土がある。

土器（9図）器形の知り得るものを図示した。深鉢（9図2～4）で、4個の山形口縁をもつもの（9図2）と胴部2個体分（9図3.4）がある。特に4は半肉彫の隆帯で複雑な区画文が認められ、口縁部と底部を欠損し焼成の悪い土器である。

石器（25図）磨製石斧（25図1）打製石斧（25図2～15）横刃形石器（25図16～23）石錘（25図24～26）がある。また黒曜石製スクレパー（29図19）がある。

土製品（28図）土偶脚部（28図6）と思われるが磨滅している。

オ）土壇№1（4図、16図）

調査区南の新川に面する台地先端に近い所で発見されたものである。遺構は径95cm、深さ35cmを計る円形のもので、遺構上面に人頭大から拳大の河原石が数個おかれ、その周囲より縄文後期土器の出土があった。縄文後期の所産と考えられる。

遺物（16図）

土器（16図1～24）縄文後期堀之内式土器（16図1～15）と胴部に結節縄文が認められるもの（16図16～18）こまかな縄文が器面に施文されるもの（16図19～21）太い沈線のみのももの（16図22）などと、底部（16図23、24）の2個体がある。

カ）土壇№2（4図）

長径1.80m、短径1.4m、深さ20cmを計る長方形の浅い竪穴遺構である。覆土は黒色土が充満しており遺物の出土は認められない。

キ）石組№1（4図）

遺構上部に人頭大の焼けた河原石が立てならべられており、内部にも比較的大形な扁平石2個がほぼ平におかれていた。長径1.2m×短径75cm、深さ35cmを計る長楕円形を呈し、遺構上面には木炭が認められた。

内部からの出土遺物はない。

ク）石組№2（4図）

№1の南側に存在し溝状遺構を切断して構築されている。上部石組は№1同様であるが、内部にも多量の河原石が存在していた。また壁に接し二段に石が積まれており、№1と比較するとその構築ははいねいに行われている。長径1.3m×短径85cm、深さ55cmを計るもので、内部からの出土遺物は認められない。これら2つの石組遺構は、地上に無記銘の石碑が存在し、その近く一帯からの発見である点、この石碑となんらかの関係が推測できる。

ケ）溝状遺構（4図）

1・2号住居址の南方を東西に走る幅95cm、深さ20cmの溝状遺構である。覆土は黒色土であり、内部からの出土遺物はない。また底面にわずかに砂質土が存在している。なおこの溝は石組№2に切断されており石組遺構より古い時期のものである。

コ）宮城遺跡遺構外出土遺物（26図、27図）

打石斧（26図1～21、27図1～4）敲打器と磨石斧を兼用したもの（27図5）敲打器（27図6）横刃形石器（27図7～11）石錘（27図12）がありすべて石器類である。

(3) 宮城遺跡における土器様相

宮城遺跡（A地点）では、住居址3ヶ所の発見があり、いずれも独立した円形プランのものである。そのうち2ヶ所（1号、2号）の住居址からきわめて多量の、土器石器の出土をみた。その出土状態は住居址の中心部付近が黒色土の覆土であり、大部分の遺物がこのレンズ状に堆積した黒土中からの発見である。

このような事例は飯田市座光寺宮崎B遺跡（加曾利E）高森町増野新切遺跡（加曾利E）飯田市竜丘前の原遺跡（加曾利E）なども注意されている。いずれの遺跡においても床面密着土器は、特殊な埋壘などをのぞき少ない事実注意到注意される。これらは最近問題にされている土器廃棄に関する諸問題の好例であり下伊那において勝坂期の例としては初めてのものである。1号住居址の場合は完形土器3個があり、これらはいずれも諏訪地方の編年では藤内II式に組込まれる時期のもので、そのほか器形を推定できるものが多い。この種の土器は平出Ⅲ類Aに比定されるものであり、土器石器類は住居址内において比較的中心部のせまい範囲内に集中して発見され、その大部分が一括資料でレンズ状に堆積した黒土中でも特に床面に近い部分に多く発見され、これらはきわめて細かな破片で遺存していた。さらにこれらの上部位置に完形土器と人頭大の自然石の存在が注意され、これとともに土偶の発見があり、あたかもこの完形土器と土偶などは住居の埋没直前に、投げこまれたごとき状態であった。（PL2-5）完形土器は、すべて藤内期に比定されるもので、全器面をみごとに区画文でかざる台付土器と豪華な装飾把手付深鉢形土器、それに楕形文を器面に多く認める小形深鉢形土器の3点で、深鉢形土器の器形はかなり特徴的である。台付土器にあつては、底部が一部穿孔されている点にも注意したい。これより下部で出土した土器類は（5図～8図）薄手で焼成良好なもので、文様は押引竹管文と指頭圧痕文、平行沈線文などを組合せたもので、土偶のそれと一致する。文様帯は口縁部と胴部下半に存在する楕形文とに分けられ、一部胴部に沈線が認められるものもある。いわゆる平出Ⅲ類Aの土器類と考えられるもので、藤内期と平出Ⅲ類Aとの土器の組合せられる例に飯田市大門町出土の資料が良好なものである。1号住居址における土器のあり方は90パーセントがⅢ類Aの一群であり、のこり10パーセントが藤内期の豪華な土器である。このような土器のあり方にも注意したい。また石器類の量も多く、特に打製石斧がその中心的存在を示し、石鏃などは少く土製円板の出土にも注意したい。おそらく廃絶された住居址の凹地に土器、石器を遺棄したようであり吹上パターン形態を示すものと考えられる。1号址に比較して2号址の場合も同様である。また住居址以外に多量の土器集中地点が確認されているが、遺構とはまったく無関係の場所であり、土器の廃棄が住居址以外の場所にも行なわれた例もあるのでこの点にも注意したい。住居址とは比較的近い距離にあり、同時期に両種の形態がとられた可能性もある。

土器様相からみると、最も量的に多いのが平出Ⅲ類Aの一群の土器に比定されるもので、その中で施文方法の違いと、文様構成の相違から三種に分類する事が可能である。

A一口縁部に文様帯をもちその中心的施文方法に押引竹管文を連続させるもので、すべて主体となる文様がこれで構成されている。

B一口縁部に文様帯をもつのは同様で、平行沈線文と隆帯上を連続指頭圧痕文の組合せで文様帯を構成する。

C一口縁部が4つの大きな山形を呈し、山形の頂部より隆帯上を指頭圧痕するものを中心に、口縁部部を平行沈線や細かな複線波状文を配し、胴部は縦の沈線が密に認められ、さらに胴部上半に沈線に

よる直弧文を配している。胴部下半にはおそらく指頭圧痕する隆帯が存在するものであろう。

以上三種に共通する点は、文様帯が口縁部と胴部下半に存在する櫛形文である。器種、器形ともに統一されており、これらに伴い浅鉢形土器、有孔罎付土器などが存在する。また特殊な形態を示す小形土器（6図6.7）が認められる。これらは兩種共に波状口縁で、文様帯も口縁部付近に集中し、文様は半截竹管による連続爪形文であり、胴部上半に波状沈線が認められる。きわめて薄手であり底部の形態は不明であるが、一見中期の土器とは思われにくい土器である。これらの土器にともない器面全体に豪華な文様を施す土器の一群が少量伴っている。下伊那においてはこのような土器のあり方を示す住居址の発見例は数例にすぎないが、今回調査した住居址のように明瞭な土器様相を示すものは始めてであろう。特に平出Ⅲ類Aに比定される土器は、諏訪地方において九兵衛屋根Ⅱ式期に発生し、新道式期に盛行したものであると確認されている。平出Ⅲ類Aの土器群は、器肉が比較的薄手で焼成はきわめて良好なものであり、文様帯も口縁部に集中している。さらに主体となる文様は半截竹管による押引、沈線、連続爪形文、など竹管文がその中心的存在である。また隆帯上部に認められる指頭圧痕文の存在といい、特殊な器形を示す土器のあり方といい、口縁部に小形な山形を付け頂部より隆帯を懸垂附着させる手法といい、この種の土器の祖形はかなり古い時期に求める事が可能ではなかろうか。松本平、諏訪地方においては比較的この種の土器は少ないように見受けられる。下伊那においてはこの時期の調査が少なく決定的な事実を証明するには致らないが、平出Ⅲ類Aに比定される土器が多く、豪華な半肉彫の隆帯で文様を構成する土器は比較的少ないように感じられる。二、三の住居址調査例からもこのような現象がうかがい知れた。したがって松本平や諏訪地方と下伊那とではまったく逆の傾向があると判断されるように思われる。平出Ⅲ類Aとされる土器は、その祖形に中越遺跡の木島Ⅱ式土器の一群とのつながりがありそうである。それらは、施文の方法、施文具の統一性、器形の統一性、指頭圧痕文の存在などかなり近似する点が多分に認められる。今回の調査において出土した特殊な土器などは、胴部のみ観察すると、焼成、胎土ともに中越遺跡出土の土器に近い。中越遺跡の土器群が、天竜川流域において発生した土器と推測すれば、平出Ⅲ類Aの土器一群も、天竜川流域で発生したものと推測し、その中心が南信地方に存在するものとみれば、先に記した松本諏訪地方と下伊那とのこの種の土器のあり方にもうなづけるものがある。今後の資料の増加をまちたい。また平出Ⅲ類Aに比定される土器の一群は、下伊那においては勝坂期の末葉まで伴出し、加曾利E期になると、この種の土器の存在は認められなくなる。

A 地点出土石器一覧表（第1表）

| 図番号 | № | 石質 | 重量 | 出土地点 | 種別 | 図番号 | № | 石質 | 重量 | 出土地点 | 種別 |
|-----|---|-----|------|------|-----|-----|----|-----|------|------|-----|
| 17 | 1 | 砂岩 | 440g | 1号住 | 磨石斧 | 17 | 9 | | | 1号住 | 磨石斧 |
| | 2 | 緑泥岩 | 610 | " | " | | 10 | | | " | " |
| | 3 | " | 520 | " | " | | 11 | 緑泥岩 | 220g | " | 打石斧 |
| | 4 | 安山岩 | 145 | " | " | | 12 | " | 90 | " | " |
| | 5 | 砂岩 | 80 | " | " | | 13 | 硬砂岩 | 240 | " | " |
| | 6 | 緑泥岩 | 710 | " | 打石器 | | 14 | 緑泥岩 | 130 | " | " |
| | 7 | " | 550 | " | " | | 15 | 硬砂岩 | 160 | " | " |
| | 8 | " | 700 | " | " | | 16 | 緑泥岩 | 160 | " | " |

| 図番号 | № | 石質 | 重量 | 出土地点 | 種別 | 図番号 | № | 石質 | 重量 | 出土地点 | 種別 |
|-----|----|-----|------|------|-------|-----|----|--------|------|------|-------|
| 17 | 17 | 硬砂岩 | 140g | 1号住 | 打石斧 | 19 | 12 | 硬砂岩 | 50g | 1号住 | 横刃形石器 |
| | 18 | " | 140 | " | " | | 13 | " | 60 | " | " |
| | 19 | " | 150 | " | " | | 14 | " | 50 | " | " |
| 18 | 1 | 緑泥岩 | 80 | " | " | | 15 | " | 40 | " | " |
| | 2 | 硬砂岩 | 110 | " | " | | 16 | " | 40 | " | " |
| | 3 | " | 140 | " | " | | 17 | " | 65 | " | " |
| | 4 | " | 150 | " | " | | 18 | " | 70 | " | " |
| | 5 | 緑泥岩 | 90 | " | " | | 19 | " | 30 | " | " |
| | 6 | " | 50 | " | " | | 20 | 緑泥岩 | 50 | " | " |
| | 7 | 硬砂岩 | 150 | " | " | | 21 | 硬砂岩 | 35 | " | " |
| | 8 | " | 170 | " | " | | 22 | " | 80 | " | " |
| | 9 | " | 110 | " | " | | 23 | 緑泥岩 | 20 | " | 石ヒ |
| | 10 | " | 110 | " | " | | 24 | 硬砂岩 | 60 | " | 石錘 |
| | 11 | " | 60 | " | " | | 25 | ホルンヘルス | 65 | " | " |
| | 12 | " | 100 | " | " | | 26 | 硬砂岩 | 45 | " | " |
| | 13 | " | 70 | " | " | | 27 | 頁岩 | 30 | " | " |
| | 14 | " | 50 | " | " | | 28 | 硬砂岩 | 40 | " | " |
| | 15 | 緑泥岩 | 110 | " | " | | 29 | " | 30 | " | " |
| | 16 | 硬砂岩 | 80 | " | " | | 30 | " | 30 | " | " |
| | 17 | 緑泥岩 | 70 | " | " | | 31 | " | 35 | " | " |
| | 18 | 砂岩 | 95 | " | 磨石 | | 32 | 緑泥岩 | 30 | " | " |
| | 19 | " | 360 | " | " | | 33 | 砂岩 | 5 | " | " |
| | 20 | 緑泥岩 | 275 | " | 敲打器 | 20 | 1 | " | 490 | 2号址 | 磨石斧 |
| | 21 | 花崗岩 | 860 | " | " | | 2 | 安山岩 | 450 | " | " |
| | 22 | 緑泥岩 | 140 | " | " | | 3 | 砂岩 | 110 | " | " |
| 19 | 1 | 硬砂岩 | 110 | " | 横刃形石器 | | 4 | 変成岩 | 250 | " | " |
| | 2 | " | 110 | " | " | | 5 | 緑泥岩 | 80 | " | " |
| | 3 | " | 95 | " | " | | 6 | 変成岩 | 1380 | " | 打石斧 |
| | 4 | " | 95 | " | " | | 7 | 緑泥岩 | 130 | " | " |
| | 5 | " | 100 | " | " | | 8 | 硬砂岩 | 220 | " | " |
| | 6 | " | 95 | " | " | | 9 | " | 150 | " | " |
| | 7 | " | 90 | " | " | | 10 | " | 180 | " | " |
| | 8 | " | 70 | " | " | | 11 | 緑泥岩 | 180 | " | " |
| | 9 | " | 55 | " | " | | 12 | " | 140 | " | " |
| | 10 | " | 80 | " | " | | 13 | 硬砂岩 | 110 | " | " |
| | 11 | " | 65 | " | " | | 14 | 緑泥岩 | 190 | " | " |

| 図番号 | № | 石質 | 重量 | 出土地点 | 種別 | 図番号 | № | 石質 | 重量 | 出土地点 | 種別 |
|-----|----|-----|-------|------|-----|-----|----|-----|-------|------|-------|
| 20 | 15 | 緑泥岩 | 110 g | 2号住 | 打石斧 | 22 | 6 | 緑泥岩 | 330 g | 2号住 | 敲打器 |
| | 16 | 硬砂岩 | 130 | " | " | | 7 | " | 350 | " | " |
| | 17 | 緑泥岩 | 240 | " | " | | 8 | " | 230 | " | " |
| | 18 | 硬砂岩 | 180 | " | " | | 9 | " | 260 | " | " |
| | 19 | " | 150 | " | " | | 10 | " | 285 | " | " |
| | 20 | 緑泥岩 | 130 | " | " | | 11 | " | 430 | " | " |
| 21 | 1 | 硬砂岩 | 150 | " | " | | 12 | 砂岩 | 200 | " | " |
| | 2 | " | 160 | " | " | | 13 | " | 110 | " | " |
| | 3 | " | 140 | " | " | | 14 | 片麻岩 | 620 | " | " |
| | 4 | " | 150 | " | " | | 15 | 花崗岩 | 480 | " | 磨石 |
| | 5 | " | 120 | " | " | | 16 | " | 840 | " | " |
| | 6 | " | 120 | " | " | | 17 | " | 1560 | " | 石皿 |
| | 7 | 緑泥岩 | 80 | " | " | 23 | 1 | 花崗岩 | 2850 | " | " |
| | 8 | 硬砂岩 | 80 | " | " | | 2 | 硬砂岩 | 450 | " | 横刃形石器 |
| | 9 | " | 110 | " | " | | 3 | " | 210 | " | " |
| | 10 | 緑泥岩 | 120 | " | " | | 4 | " | 240 | " | " |
| | 11 | " | 90 | " | " | | 5 | " | 120 | " | " |
| | 12 | " | 120 | " | " | | 6 | " | 120 | " | " |
| | 13 | " | 60 | " | " | | 7 | " | 100 | " | " |
| | 14 | 硬砂岩 | 80 | " | " | | 8 | " | 110 | " | " |
| | 15 | 緑泥岩 | 90 | " | " | | 9 | " | 110 | " | " |
| | 16 | 硬砂岩 | 90 | " | " | | 10 | " | 110 | " | " |
| | 17 | 緑泥岩 | 50 | " | " | | 11 | " | 40 | " | " |
| | 18 | " | 80 | " | " | | 12 | " | 40 | " | " |
| | 19 | 硬砂岩 | 50 | " | " | | 13 | " | 100 | " | " |
| | 20 | " | 90 | " | " | | 14 | " | 60 | " | " |
| | 21 | " | 100 | " | " | | 15 | " | 50 | " | " |
| | 22 | 緑泥岩 | 120 | " | " | | 16 | " | 90 | " | " |
| | 23 | 硬砂岩 | 60 | " | " | | 17 | " | 50 | " | " |
| | 24 | " | 150 | " | " | | 18 | " | 100 | " | " |
| | 25 | 緑泥岩 | 80 | " | " | | 19 | " | 60 | " | " |
| 22 | 1 | " | 100 | " | " | | 20 | " | 70 | " | " |
| | 2 | " | 50 | " | " | | 21 | " | 90 | " | " |
| | 3 | " | 110 | " | 敲打器 | | 22 | " | 50 | " | " |
| | 4 | 砂岩 | 270 | " | " | | 23 | " | 40 | " | " |
| | 5 | 緑泥岩 | 460 | " | " | | 24 | " | 60 | " | " |

| 図番号 | № | 石質 | 重量 | 出土地点 | 種別 | 図番号 | № | 石質 | 重量 | 出土地点 | 種別 |
|-----|----|-----|-----|-------|-------|-----|----|-----|------|-------|-------|
| 23 | 25 | 硬砂岩 | | 2号住 | 横刃形石器 | 25 | 4 | 硬砂岩 | 240g | 土器集中部 | 打石斧 |
| | 26 | " | 50 | " | " | | 5 | " | 125 | " | " |
| | 27 | " | 30 | " | " | | 6 | 緑泥岩 | 170 | " | " |
| | 28 | 砂岩 | 45 | " | " | | 7 | " | 140 | " | " |
| 24 | 1 | " | 50 | " | 石匕 | | 8 | " | 95 | " | " |
| | 2 | 硬砂岩 | 60 | " | 石錘 | | 9 | 硬砂岩 | 130 | " | " |
| | 3 | " | 50 | " | " | | 10 | " | 130 | " | " |
| | 4 | " | 40 | " | " | | 11 | " | 80 | " | " |
| | 5 | " | 30 | " | " | | 12 | " | 190 | " | " |
| | 6 | " | 50 | " | " | | 13 | " | | " | " |
| | 7 | " | 35 | " | " | | 14 | " | 50 | " | " |
| | 8 | " | 50 | " | " | | 15 | " | 90 | " | " |
| | 9 | " | 50 | " | " | | 16 | " | 100 | " | 横刃形石器 |
| | 10 | " | 30 | " | " | | 17 | " | 110 | " | " |
| | 11 | " | 30 | " | " | | 18 | " | 70 | " | " |
| | 12 | " | 10 | " | " | | 19 | " | 50 | " | " |
| | 13 | 緑泥岩 | 490 | 3号住 | 磨石斧 | | 20 | " | 80 | " | " |
| | 14 | " | 230 | " | 打石斧 | | 21 | " | 120 | " | " |
| | 15 | " | 260 | " | " | | 22 | " | 45 | " | " |
| | 16 | " | 170 | " | " | | 23 | " | 40 | " | " |
| | 17 | 変成岩 | 220 | " | " | | 24 | " | 42 | " | 石錘 |
| | 18 | 緑泥岩 | 80 | " | " | | 25 | " | 42 | " | " |
| | 19 | 砂岩 | 110 | " | " | | 26 | " | 18 | " | " |
| | 20 | " | 70 | " | " | 26 | 1 | " | 320 | その他 | 打石斧 |
| | 21 | " | 35 | " | " | | 2 | " | 310 | | " |
| | 22 | 粘板岩 | 190 | " | 突棒状石器 | | 3 | " | 360 | | " |
| | 23 | 硬砂岩 | 60 | " | 横刃形石器 | | 4 | " | 300 | | " |
| | 24 | " | 50 | " | " | | 5 | " | 240 | | " |
| | 25 | " | 100 | " | " | | 6 | " | 200 | | " |
| | 26 | " | 90 | " | " | | 7 | " | | | " |
| | 27 | " | 70 | " | " | | 8 | " | 160 | | " |
| | 28 | " | 50 | " | " | | 9 | " | 150 | | " |
| | 29 | 頁岩 | 65 | " | 石錘 | | 10 | " | 130 | | " |
| 25 | 1 | 変成岩 | 470 | 土器集中部 | 磨石斧 | | 11 | " | 150 | | " |
| | 2 | 砂岩 | 275 | " | 打石斧 | | 12 | " | 160 | | " |
| | 3 | 硬砂岩 | 310 | " | " | | 13 | " | 117 | | " |

| 図番号 | № | 石質 | 重量 | 出土地点 | 種別 | 図番号 | № | 石質 | 重量 | 出土地点 | 種別 |
|-----|----|-----|-----|------|-----|-----|----|-----|-----|------|-------|
| 26 | 14 | 硬砂岩 | 70g | その他 | 打石斧 | 27 | 3 | 緑泥岩 | 60g | その他 | 打石斧 |
| | 15 | " | 100 | " | " | | 4 | " | 60 | " | " |
| | 16 | 緑泥岩 | 50 | " | " | | 5 | " | 650 | " | 敲打器 |
| | 17 | 硬砂岩 | 70 | " | " | | 6 | " | 590 | " | " |
| | 18 | " | 110 | " | " | | 7 | 硬砂岩 | | " | 横刃形石器 |
| | 19 | " | 70 | " | " | | 8 | " | 50 | " | " |
| | 20 | 緑泥岩 | 30 | " | " | | 9 | " | 50 | " | " |
| | 21 | " | 50 | " | " | | 10 | " | 70 | " | " |
| 27 | 1 | " | 120 | " | " | | 11 | " | 40 | " | " |
| | 2 | " | 80 | " | " | | 12 | " | 90 | " | 石錘 |

(4) 神送塚と付近の古墳群 (B地点)

『調査区B地点を設定した所が、権現堂古墳群に含まれる消滅古墳の存在する地点で、これらの確認に重点をおいて調査を実施した。権現堂1号墳は新川にのぞむ台地先端に存在する大規模な前方後円墳であり現在もその外形は変わることがなく、この前方後円墳を中心に、神送塚、井ゾエ1号、同2号、ツカノコシ、権現堂2号古墳が存在していたが、いずれも消滅してしまっている。権現堂1・2号墳は用地外となっており、他の4古墳が調査対象となったものである。

権現堂1号墳の東60mにあった円墳が権現堂2号墳で、現在は水田の畦畔上に三角形の草地となり、柿木が1本植えられており、その位置は確認されていた。さらに南35mに井ゾエ1号墳が存在する。下伊那史第二巻によれば、「水田の畦畔部の少くふくらんだ所がその痕跡である」と記載されているが地表面では確認できず、調査により郡史記載地点と一致をみた。さらに南30mに井ゾエ2号墳があり、これより西25mにツカノコシ古墳が発見された。これらは下伊那史記載の位置に合致するものである。しかし、郡史には玉ツバキのあるのが井ゾエ2号墳となっているが、これはツカノコシ古墳の位置にあった。これについて竜丘村誌編纂委員中田美穂に質問したところ、「市村威人先生(郡史編者)と再三調査にきており、玉ツバキの所がツカノコシ古墳と教えられている」とのことで記述の誤りであることが明らかになった。』

この項『』の内のみ佐藤執筆

ア) 井ゾエ1号墳 (30図、33図、35図)

権現堂1号墳の東南約90mの地点に存在した比較的大形の円墳である。墳丘は削られ平端地となっていたが、調査により古墳周濠を確認しその規模を知ることができた。周濠の幅は東で4.3m、深さ40cm、西で3.4m、深さ60cm、北で4.7m、深さ60cmを計る。また周濠外周は直径26m、墳丘基底面の直径は16.4mを計る。墳丘構築状態はまったく知ることができないが、周濠内には人頭大から拳大の河原石が点々とズレ落ちた状態で発見され、墳丘には多くの葺石が存在したものと推定できた。また葺石は東南、西側の三方向に多量に落込んでおり、この葺石中より土師器、須恵器が出土している。特に南側において多量に発

見され、鉄鏃の出土もあった。また畦畔の小石積中より剣1振が発見されている。かつてはかなり大規模な円墳であったと推定される。

遺物 (33図、35図) 須恵器、土師器、鉄鏃、剣などの出土がある。

土器 (33図) 須恵器 (33図1～4) は広口短頸壺 (33図1) 小形壺 (33図2) 甗 (33図3) 長頸壺 (33図4) があり、土師器 (33図5～8) は、坏形土器 (33図5・6) で底部はへら削りで内面は暗文が認められる。高坏形土器 (33図7、8) 坏部は大きく開き、脚部はズングリし極端に開く形態をもつ。

鉄器 (35図) 剣 (35図13) と鉄鏃 (35図26～31) が出土している。

剣 (35図13) 残存長36cm、身の最大巾3.5cmを計り鑄をもち、断面は扁平の菱形を呈す。きつさきと剣身中ほどより茎先を欠損している。

鉄鏃 (35図26～31) すべて欠損品である。長頸式尖根鏃で鋒は片刃、平造りで逆刺を持つ (35図26) 刃幅1.2cm、長さ2.7cmを計る。身は棒状形で断面長方形である。残念であるが全長は不明である。鉄鏃身 (35図27～31) すべて棒状形で断面長方形である。

イ) 井ゾエ2号墳 (31図、33図)

井ゾエ1号墳の南6mに周濠外周が認められ、1号墳中心部より計ると2号墳は30m地点に存在したことになる。2号墳はその大部分が宅地となり、全面は調査できなかった。そのため西側の周濠を一部確認したにすぎない。周濠の幅2.2m、深さ40cmを計り、周濠外周の直径約18m、墳丘基底面の直径13mを計るもので、周濠内は1号墳同様人頭大から拳大の河原石が多量に認められ、この古墳墳丘にも葺石の存在が推定できた。出土遺物は周溝内よりわずかに発見されている。また1号、2号墳ともに注意されるのは、周濠の一部がある部分で外側へ向いてのびている事実である。1号墳では北東へ、2号墳では北西へそれぞれ伸びている。両墳ともこの溝状の遺構と周溝内の覆土は、粘質黒色土であり、同時期の遺構と考えられ、古墳周濠に付随する施設と推定される。

遺物 (33図) 須恵器と土師器破片が少量ある。

土器 (33図9、10) 須恵器の蓋と坏底部である。

ウ) ツカノコシ古墳 (31図、34図、35図)

井ゾエ1号墳の西約25mにあり当初井ゾエ2号墳と考えていたものである。稲ハザと一部用地外のため全面調査はできなかった。周溝は南側と東側にのみ存在し、北側と西側では認められなく、直接ローム面より墳丘を構築したようである。そのため西と北側の墳丘外縁では、ローム面をわずかに削りその面へ人頭大の河原石を張りつけたごとき状態になっていた。周濠は東側で4.10m、深さ40cmを計る。また周濠内は粘質黒色土で多くの葺石が落込んでおり、この間より遺物が認められた。墳丘基底面の直径16.5mを計り大形の円墳である。またこの古墳の位置を示す畦畔にあった石積下部の調査において、河原石をほぼ円形に配置する遺構 (31図) が発見された。この遺構はツカノコシ古墳調査区に位置しており、周溝上に構築されていたもので、配石内外に石を集めてあるため後世の時期の所産と考えられる。またこの配石中底面より直刀欠損品と剣一振が発見され、石積中より古銭が出土している。

遺物 (34図、35図29図) 須恵器、土師器、直刀、剣、古銭の出土がある。

土器 (34図) 須恵器 (34図1～4) で広口長頸壺 (34図1、2) はきわめてその成作技法が雑であり、一見して地元産の須恵器であることがわかる。甗 (34図3) と坏 (34図4) がある。土師器は (34図5～10) があり、坏形土器 (34図5) は大形のもので内面は黒色処理されている。小形甗形土器 (34図6) 高坏形

土器(34図7、8)でいずれもズングリした脚部で底部は広く開く形態になるものと思われる。壺形土器(34図9、10)である。小形壺形土器(34図9)は胴部より底部を欠損するが、きわめて焼成の良好なもので頸部は縦の篋整形を行っており、壺形土器底部(34図10)は焼成の悪い土器でおそらく胴部球形に近い壺になるものと考えられ、底部は丸底状であるが、中心部がわずかに凹んでいる。

鉄器(35図)直刀と剣が出土している。

直刀(35図14)は半分以上を欠損するもので残存長27.5cm、身幅3cmを計るものである。剣(35図15)はきっさきと茎先を欠損する。残存長51.5cm、身幅4cmを計り断面は扁平の菱形を呈す。茎先部の目釘孔は認められないが、身の全長は60cm以内と推測され、身には部分的に木質部の付着を見る。保存状態は良好である。

古銭(29図25~30)寛永通宝6点が石積中より出土している。寛永通宝はこまかく分けると千数種にもなるほど多彩であり分類は困難である。鑄造1626年~明治初期まで作られている。

エ) 集石址(32図)

井ゾエ1号墳の北側周濠上面に発見されたものであり、周濠覆土の粘質黒色土上に人頭大から拳大の河原石の分布が認められた。これらの集石は井ゾエ1号墳周溝上部に存在する事より、周溝が埋まってからの時期のものと考えられる。集石下部は黒色土のため遺構の存在は確認できなかった。なお出土遺物は、集石中より形象埴輪の破片が出土している。

オ) 土壇№1(32図)

井ゾエ1号墳北側周濠の縁に発見されたもので、土壇上面には拳大の河原石が存在し、径1.2m、深さ50cmを計るものである。出土遺物はない。

カ) 土壇№2(32図)

土壇№1の東に発見され、土壇上面は1と同様河原石が数個存在している。楕円形を呈し長径1.4m、短径1m、深さ70cmを計るもので、内部から縄文中期土器片1点が出土している。№1、№2ともに縄文時代中期の所産と考えられる。

キ) 火葬墳墓(32図)

井ゾエ1号墳の東側周溝上に発見された石組をもつ火葬墓である。この遺構は底面に扁平な河原石の大きなもの3枚を置き、その周囲に河原石を立てたもので、側石はくずれ内側に落込んでいる、底面より火葬骨の発見があった。山本竹佐の火葬墓群と似ている。

遺物(29図)寛永通宝(29図31)1点の出土がある。

ク) その他の遺物(34図)

B地点調査区より発見されたもので、灰釉陶器の坏と坏底部(34図11、12)があり両種ともに付高台である。行基焼甕底部(34図13)の3点の出土をみた。

ケ) 神送塚古墳(35図)

駄科の東南端、新川の溪谷に臨んだ高い台地端、権現堂第1号墳の南南東200mの地点にあった大規模

な円墳で石室もあったと伝えられる。昔はあたり一面の木立で大林と称せられていた。慶応年中に当時の地主下平仙十郎氏が発掘し、六鈴鏡をはじめ金属器、土器など多数を得たが、その大部分は80m程北の同じ台地端、吉川奈市氏宅西裏の畑の西南隅にある「三界万霊」「馬頭観音」の二小碑の下に埋めてしまった。現在残っているものは、六鈴鏡、須恵器（平瓶）陶馬などがある。（以上郡史より）

当初この古墳の確認調査に主眼をおいたが、用地外に存在するらしくその正確な位置をつかむことはできなかった。しかし、位置確認をすべく付近一帯を今村正次調査員と聞き歩いた結果、調査用地外塩沢義男氏宅南側、新川に面する台地先端の竹ヤブ付近に存在したらしい事が判明した。また郡史に記されている「三界万霊」の碑の下に出土品を埋めた地点も判明した。その後調査中作業員よりそこを掘って直刀などを保管している人がいる事を聞き、その遺物を譲り受けたものが（35図1～12、16～25）それである。

遺物（35図）直刀、剣、鎌、馬具、短甲、鉄鏃などで、そのほか下平楠実氏が保管する六鈴鏡と、塩沢義男氏が保管する小形の青銅鏡（朱文鏡）一面がある。なおほかに陶馬、須恵器があるといわれるが実見していない。

直刀（35図1～8）があり、（1）はきっさきと基部を欠損し残長74cm、身部の長さ70cm、身部最大幅3.5cmを計る。（2）は1同様きっさきと基部を欠損し残長67.5cm、身部最大幅2.7cmを計る。基部に目釘孔一孔が認められる。（3）は全長87.5cm、身部最大幅3.5cmで関から茎先までの長さ16cm、目釘孔二孔が認められる。（4）は基部ときっさきを欠損するもので、残長79.5cm、身部最大幅3.5cmを計る。基部の目釘孔は確認できない。（5）は全長88cm、身部最大幅3.5cm、関から茎先までの長さ17.5cm、目釘孔二孔を認める。これら5振は大形の直刀であり、反は全くもたない。また平造で断面は二等辺三角形である。

（6）は身部中央より欠損するもので残長44.5cmを計る。（7）は残長53.5cm、身部の長さ40.5cm、身部最大幅2.5cm、関から茎先までの長さ13cmを計り、目釘孔は確認できない。（8）はきっさきと基部をわずかに欠損するもので、残長43.5cm、身部最大幅3cm、関から茎先残存部は10cmを計り、目釘孔一孔が認められる。以上2振は全長が短い直刀である。

剣（35図9、10）であり、（9）は全長38cmを計り茎先をわずかに欠損するもので、身の最大幅3.5cm鏃をもち断面は扁平な菱形を呈す。基部に目釘孔一孔が認められる。（10）はきっさき部と基部を欠損するもので、残長34.5cm、身部最大幅2.8cmで鏃をもち断面は扁平な菱形を呈す。

槍（35図11）残長24cmを計りきっさきをわずかに欠損している。身部はおよそ17cmを計るものと推定され、断面は分厚い変形の菱形を呈す。袋は内側にわずかに木質部が付着し長さ10cmで径3cmを計り断面は円形である。目釘孔の存在も確認され、きわめて保存状態は良好である。

矛（35図12）きっさきをわずかに欠損するもので、残長42cm、矛身は両刃で鏃をもち、断面は菱形である。身は25cmほどと推定され、袋部は長さ18cm、径3cmを計る。袋内側には木質部がわずかに付着し、目釘孔の位置は確認できない。

鎌（35図16）で横長の長方形鉄板に直刀をつけ一端をわずかに折りかえたものである。先端部がわずかに欠損しているため、全長は不明であり残長12.5cm刃幅は柄の着装部近くで3cmを計る。先端部に行くにしたがい細身となる。刃はほとんど直で柄の着装は折りかえし角度より身に対し鈍角である。

馬具（35図17、18）で轡の引手金具の一部である。全長17.5cmを計るもの（17）と18.5cmを計るもので断面は両種ともに長楕円形を呈す。

短甲（35図19）で譲り受けた資料中に残片多量があり、その推定復元図である。三角板鋸留式短甲である。きわめて保存状態が悪い。

鉄鏃（35図20～25）で5点がある。（20）は鋒部三角形でわずかに逆刺がつくり出され、狭鋒両丸造棘

鉈被腹袂三角形式鏃に分類されるものである。(21~25)は長頸式尖根鏃で、鋒は片刃、平造りで逆刺をもつ。これら5点の鉄鏃の身は棒状形で断面長方形である。すべて欠損品であり、全長を知ることはできない。

六鈴鏡(P L12-56)下平楠実氏が所蔵するもので、鏡の直径10cmを計り、それに径2.5cmの鈴6個が付けられ今日でもカラカラと音がするほど保存状態は良好なものである。三角縁の内側は櫛歯文帯、複線波文帯、櫛歯文帯とつづき、さらに蕨手文帯の中に八つの乳を配置しており、中心部に素鈕、円座鈕がある。銘文帯はない。昭和8年11月香取氏の鑑定をうけている。

朱文鏡(重圈文鏡)(P L12-57)神送塚出土と伝えられるもので、塩沢義男氏が所蔵している。直径7.6cmの小形な青銅鏡で、三角縁を呈す。三角縁の内側は鋸歯文帯、無文帯、鋸歯文帯、朱文帯、無文帯、とつづき、中心部に素鈕、円座鈕がある。このほか陶馬の出土があり、昭和27年8月大場氏の鑑定をうけている。須恵器の出土した事実も郡史に記されている。

神送塚古墳 井ゾエ1号墳 ツカノコシ古墳出土鉄器計測表(第3表)

| 図番号 | № | 出土地 | 種別 | 全長 | 残存長 | 身長 | 身幅 | 基部残存長 | 厚さ |
|-----|----|---------|----|--------|--------|--------|-------|-------|-------|
| 53 | 1 | 神送塚 | 直刀 | 推定90cm | 74 cm | 70cm | 3.5cm | 5.5cm | 0.9cm |
| " | 2 | " | " | 推定90cm | 67.5cm | 58cm | 2.7cm | 9.5cm | 0.8cm |
| " | 3 | " | " | 87.5cm | | 72cm | 3.5cm | 16 cm | 0.8cm |
| " | 4 | " | " | 推定90cm | 79.5cm | 72cm | 3.5cm | 8 cm | 0.8cm |
| " | 5 | " | " | 88cm | | 71cm | 3.5cm | 17 cm | 0.8cm |
| " | 6 | " | " | 推定90cm | 44.5cm | | 2.7cm | | 0.7cm |
| " | 7 | " | " | 推定60cm | 53.5cm | 40.5cm | 2.5cm | 13 cm | 0.7cm |
| " | 8 | " | " | 推定50cm | 43.5cm | 34cm | 3.0cm | 10 cm | 0.8cm |
| " | 9 | " | 剣 | 38cm | | 32cm | 3.5cm | 7 cm | 0.8cm |
| " | 10 | " | " | 推定45cm | 34.5cm | 28cm | 2.8cm | 6.5cm | 0.6cm |
| " | 11 | " | 槍 | 推定27cm | 24.5cm | 17cm | 2.0cm | 10 cm | 2.0cm |
| " | 12 | " | 矛 | 推定43cm | 42 cm | 25cm | 3.5cm | 18 cm | 0.8cm |
| " | 13 | 井ゾエ1号墳 | 剣 | 推定60cm | 36 cm | 推定45cm | 3.5cm | | 0.7cm |
| " | 14 | ツカノコシ古墳 | 直刀 | | 27.5cm | | 3.0cm | | 0.5cm |
| " | 15 | " | 剣 | 推定60cm | 51.5cm | 45cm | 4.0cm | 7 cm | 0.7cm |

(5) 下伊那における古墳文化とその背景

調査区B地点は、神送塚古墳（消滅古墳）の正確な位置確認にその主眼をおき調査を実施したが、調査対象地区内に、権現堂古墳群のイゾエ1号墳、イゾエ2号墳、ツカノコシ古墳の三基の消滅古墳が存在する事が判明し、神送塚古墳と合わせてその正確な位置確認の調査を行った。また郡史に記されているイゾエ2号墳とツカノコシ古墳の位置が記録違いであることも判明し、調査によってこれら三基の古墳の正確な位置、規模を知り権現堂古墳群の分布図を作成することができたのである。

調査した古墳は、すべて消滅古墳であり墳丘を欠いておるため地表観察から正確な位置や規模は知ることができず、調査により、古墳外周の周濠の確認をすることによって位置と規模を知ることができた。それによると、周濠が一周するものと一部に存在するものがあり、かなり大規模な円墳であったことが推測される。また周濠内部に葺石が落下している事実より三基ともに墳丘には葺石の存在が考えられた。なお周濠の一部がある部分で切れ、異なった方向に伸びていることも確認したが、どのような形態でいかなる性格を有するか見極めるには至らなかった。この事実はイゾエ1号墳と同2号墳に認められ、1号墳の場合は北側に、同2号墳の場合は西側に存在するものである。現在類例を知らないが、おそらく周濠に付随する設備として考えるのが適当かも知れない。また埴輪の出土はイゾエ1号墳周濠上部より形象埴輪の破片1点が発見されただけである。おそらく埴輪は三基の古墳とも存在していなかったものと推測される。

土器類は、土師器、須恵器が発見されており、特に東側及び南側の周濠底面近くより葺石と共に出土している。これらはほとんど集中的に出土している点、内部主体と関係がありそうであり、主体部正面位置の付近ではないかも推測される。出土した土器類は比較的細片化したものが多い点に注意したい。須恵器にあっては、きわめてその成作技術が高度なもの（33図1～4、9、10、34図3、4）とそれに比較して成作が雑であるもの（34図1、2）などが判然としている。前者の場合他地域より運ばれてきたものであり、後者の場合は運ばれて来た器物をまねて成作された可能性があり、胎土、焼成などの面からもその区別は容易である。この事実からも下伊那において古墳時代すでに須恵器生産があったことがわかる。現在奈良時代末期より平安時代に比定される窯址は発見されているが、今後の調査によっては古墳時代の窯址が発見される可能性もある。主体部については、墳丘が基底面まで削られており知る術がない。この三基の古墳については、今回出土したものの外はまったく不明であり、須恵器、土師器の形態分類より6世紀代の古墳として考えたい。神送塚古墳については、出土遺物の面より鉄製品として武器に直刀、劍、槍、矛、短甲、鉄鏃などがあり、農工具として鉄鎌がある。それに馬具の出土があり、青銅鏡に六鈴鏡と朱文鏡がある。

これらの出土品より総合して5世紀末から6世紀代の古墳と考えたい。なお神送塚古墳には埴輪の存在が考えられる。埴輪は円筒埴輪の残片であるが、現在塩沢氏宅に若干保管されている。今回調査の古墳は消滅古墳であり、墳丘、内部主体などまったく不明で確実な時期決定の資料は少なく、出土遺物の面より考察したものである。

下伊那における古墳の分布状態は県下最大の密集地帯であり、中でも特に天竜川を中心として竜西部の南、竜丘地区にあっては最も古墳の分布が密集している所であり、今日現在古墳も多い反面、消滅古墳の数はいかほどか推測されない。前方後円墳にあってはそのすべてが天竜川の河岸段丘上に立地している。今かりに下伊那の地域を大きく区別すると、竜東（天竜川より東の地域）竜西（天竜川より西の地域）

その中で飯田市の南を流れる松川で南北に区切ると、竜東に1基、竜西北部に2基、竜西南部に18基が存在する。その多くが後期古墳に属するものである。以上のことは先学の研究で明かであるが、いずれにせよ下伊那における古墳文化の研究は、すべての面で立遅れていると言っても過言ではない。今回の調査では、消滅古墳の確実な位置を知る事ができたし規模も知ることができた。またわずかではあるが周辺調査も行うこともでき、その結果種々な未解決な諸問題が山積されていることに気付いた。ここでは若干の問題を取りあげて、今後に残された研究課題としてあげてみたい。

まず問題として下伊那における古墳文化の特質や編年の位置付、小円墳の存在より群集墳としてのあり方、また古墳とその被葬者の問題、下伊那における古墳文化発生の基盤など様々な問題があげられる。

下伊那における古墳文化の特質としては、河原石積の竪穴式石室をもつ竜丘桐林に存在する兼清塚古墳（前方後円墳）の構築をもって下伊那の古墳文化は発生したと推定される。また発生の時期が古墳文化中期中葉で、その後多くの古墳が築造されているが、この時期に比定されるものは竜丘桐林地区のみに集中している。またそのほとんどが巨大な横穴式石室で後期の様相をもつものが多く後期古墳である。古墳の集中している所が竜西南部に濃密である。これら三点をあげることができる。次に編年の位置付けであるが、当地区の場合古墳のほとんどに手が加えられ破壊度が大きく、墳丘形態からはかなり制約をうける。

また遺物の面からも出土した古墳が不明なものが大部分であり、竜丘小学校に保存されている膨大な資料も不完全な資料として使用できるものが少ない。このような大部分の資料が、〇〇古墳出土らしいと言う程度のもので、編年的な基準要素として墳丘形態、外部施設、内部主体、また石室の様式、墳丘における石室位置など様々な資料を組合せて総合的にみていくことが最適と考えられよう。出土品からは大まかな時期判断程度ができるほどで、遺物自体からの編年はかなり危険性があるように思われる。まず確実に使用できるものに石室の様式がある。大きく三種に類型化することが可能であり、それらは竪穴式石室、竪穴式石室の影響を留める横穴式石室、巨大な石材を使用する横穴式石室などである。また墳丘における石室の位置からも三型式に分類することができる。それは墳丘の頂部近くに位置するもので、墳丘を構築してから石室を作ったと考えられるものである。もう一種は墳丘のほぼ中央部に構築される場合で、墳丘構築中半で石室を作りさらに墳丘を構築したと考えられる例である。さらにもう一種は石室が地表面と同一レベルに存在し、きわめて大形の石材を用いてあり、石室構築後墳丘を構築したと考えられる例で、この種の古墳にあっては石室が後円部と前方部に存在する例が認められる。

墳丘の形態からみると、当地方の古墳文化初期に属すると考えられる兼清塚古墳は、前方部と後円部の幅と高さほとんど変化が認められず、しかも石室が割石でなくて河原石の小口積竪穴式石室である点中期中葉以降（5世紀後半）と考えられる。次の竪穴式石室の影響を残すもので石室の位置が、墳丘の中程に位置するものは、副葬品の馬具により特徴づけられ、前方部と後円部の幅、高さに差がなく美しい墳丘である。石室を墳丘構築中半で設ける築造技術的面と、竪穴式石室の影響を留める面において、後期でも前半に位置づけたい。さらにもう一種は横穴式石室が地表と同一レベルに位置し石室は巨大化する。

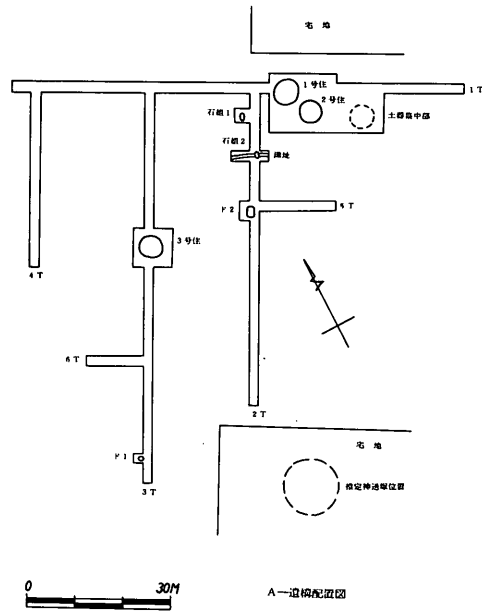
墳丘は後円部が小形化し、前方部が幅、高さ共に誇る典型的な後期古墳の形態を示すもので後期後半と考えたい。したがって当地方においては中期中葉とした5世紀後半より後期前半6世紀初頭、後期後半の7世紀前半の三時期に大きく編年が可能である。また円墳にあっては群集墳としての形態を示しているが直径25m内外の比較的大形な古墳で、副葬品に短甲を主とする特殊な古墳があり、馬具を伴わない点も注意したい。これらの古墳はわずかであるが、竜丘地区と座光寺地区の一部に限定してその分布地域が認められる。また石室は竪穴式石室の様式をもつ点、前方後円墳の古い時期に比定されるものと共通するものであろう。最近松尾地区においてもきわめて大形の円墳（妙前大塚古墳）より眉庇付冑などの出土があり

築造年代を5世紀中葉と考えられた例もあるが、主体部の確認が決定的でなく、副葬品からの編年の位置付けはその地域における時間的経過を考慮する必要がある。また石室が竪穴式であっても副葬品に短甲と馬具を伴っている古墳は、御猿堂古墳と同年か下ってもそれに近い築造年代と考えられる。すなわちこの種の円墳は5世紀後半から6世紀前半にわたり築造されたものとみたい。したがって神送塚古墳などは主体部がどのようなものであったか不明であるが、短甲、馬具、などの出土があり、編年の位置づけはこの時期か青銅鏡の出土したという点では、これより若干新しい時期になる可能性もあるが、およそ5世紀末より6世紀代の古墳として誤りはなかろう。そのほかの群集墳については、細部にわたる調査が行きとどいていないため不明な点が多い事と、断片的にのこる副葬品の種類が直刀、馬具、剣、槍、矛、鏃、玉類などでいずれも特定の年代を考える基準とはならないものであり、それらの分析によって築造年代を推定することは不可能である。しかし土器類の分析によっては、およそ群集墳としての上眼と下眼が把握できそうである。土師器でみると椀形を呈す坏形土器とともに高坏の出土があり、この高坏形土器は脚部が太くずんぐりした感じで下部の広がりが見られるものである。関東地方における編年では鬼高期類似の土器で、今回調査したイゾエ1号墳、ツカノコシ古墳から出土した土師器もこれに相当する。下伊那における古墳から多く認められる形態で、当地方における群集墳築造の主眼とみたい。また須恵器にあっては、広口の短頸壺、罎、坏などがあり、短頸壺は大形で罎は小形で、ともに口頸部に比較的に波状文が描かれており、第II様式の特徴をもつもので、6世紀の後半と考えてよかろう。群集墳築造年代の下眼は、土師器よりみると坏形土器は盤状の形態に変化し、高坏形土器も坏部は坏形土器と同様で脚部はきわめて細長い脚部に変化した形態を示し、関東地方の真々式併行期に比定できる器形を示している。須恵器にあっては坏、平瓶、長頸壺などがあり、坏は高台付になり第II様式期の特徴を備えるもので、下眼を8世紀の時期とみてよかろう。このようにみても、前方後円墳は5世紀中葉より6世紀初頭にかけて構築され、しかも竜丘地区という限定された地域にのみ築造をみている。また円墳にあっては5世紀後半より6世紀にかけて、比較的古い時期のものがわずかに築造され始めていることがわかる。さらに6世紀後半より当地方の古墳文化は発展を見、下伊那全域に拡大し群集墳の築造が開始され、7世紀前半になってまた前方後円墳は竜西南部に集中的築造をみるようになり、後半より築造は停止され群集墳の築造が活発となって8世紀へと至っている。各時期を通じて古墳築造と地域性を総合してみると、円墳の築造に比較して前方後円墳の築造にはきわめて大量の組織化された労働力と経済力を必要とする。したがって中期中葉（5世紀後半）の兼清塚古墳の存在は、下伊那における古墳文化を初めて接受した地域で、それだけの組織化した地域的小集団の存在が考えられる。6世紀代に入ると、下伊那各地域に前方後円墳が認められ、それぞれの地域を占域とする小規模な集団が存在したことが認められる。また前方後円墳が認められ、それぞれのまとまった形で認めることができる。この時期における前方後円墳のあり方は、その分布状態から観察するとそれぞれの河川により分断された段丘上に分散的な存在を示し、それに円墳が多く伴って分布している。

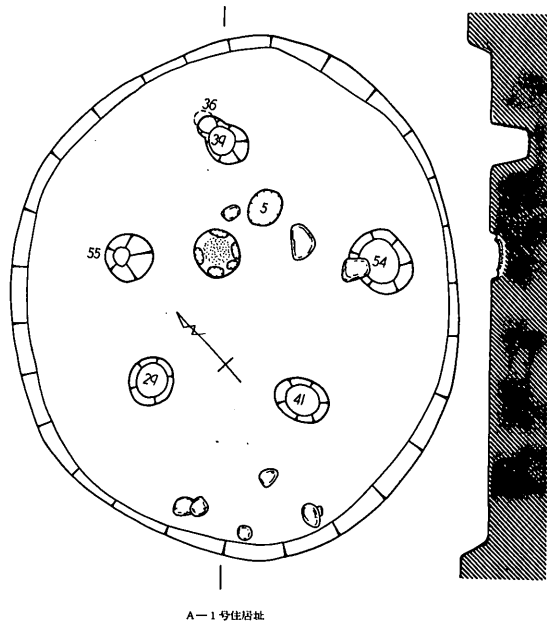
この事実はそれぞれ分断された地域に統一した集団が存在したことを示すものであろう。7世紀に至っては、また竜西南部の地域に限定されて前方後円墳の築造が認められる。また大規模な横穴式石室の古墳を築造していることは、かなり組織化された労働力と経済力を集中して投入しないうりその構築は不可能であり、古くよりこの地域には下伊那全域を領域とするような政治的主体性が存在したことが考えられよう。それは大きな労働力を集中投入し他地域に先駆けて前方後円墳と横穴式石室の古墳を築造したことによって示されよう。これに伴って他地域では群集墳の築造が多く認められ、それぞれの地域において一つの単位としての集団が自立性を強めている。

最後に各時期を通じて下伊那の古墳文化発展とそれをささえる重要な基盤となったものは、いかなる背景に原因があったかが問題になる。下伊那の場合5世紀後半にようやく古墳文化が流入し、他地域の場合をみると、北信の善光寺平においては4世紀後半から5世紀初頭にかけて古墳の築造をみている。当地方に古墳築造が初まったのが5世紀後半であり、年代が若干下っている。この事実は善光寺平においては早くも大和朝廷の政治力の浸透によるもので、多量の労働力を蓄積した権力者と、大きな経済的基盤である生産地帯の存在を示すものである。しかし当地方の場合は5世紀初頭においては、すべての面が不備であったことを示すもので、その対象となりうる権力者が存在しなかったことに主因がある。5世紀後半になりようやく古墳文化が入った事実を兼清塚古墳の存在により知ることができる。この事実は古墳築造をなしうる権力を所有する支配者の誕生を示すものである。その権力はなにを基盤としていたかという点、大きな生産地帯をひかえていたことこそ古墳文化発展への大きな力で、生産地帯としての土地の力は経済的基盤のみでなく、社会的にも大きなものでそこから産まれる生産力は支配者をより強力なものとしたことであろう。当時における主要な生産は、主として水田耕作であり、古墳周辺部の水田可能地帯を確認することも重要である。当地方における生産地帯をみると竜東においては大きな段丘が多くまた段丘上は水利の便が悪く、今日に至っても畑地帯が多く適当地帯が少ない。おそらく天竜川の氾濫原が主要生産地帯となったことであろう。竜西部の河岸段丘上も高燥な地帯が多く水田耕作には不適地である。

しかし段丘崖にそって湧水線が存在し、地下水位も高く今日でも50cm程で地下水が認められ、比較的湧水は求めやすく、これらの段丘上が主要生産地帯として重要な役割をはたしていたとみられる。この地帯は現在においても主要生産地帯として重要な地域であり、下伊那における古墳文化は、大和朝廷の東国進出という政治的背景と文化の伝播によって発展したものである。

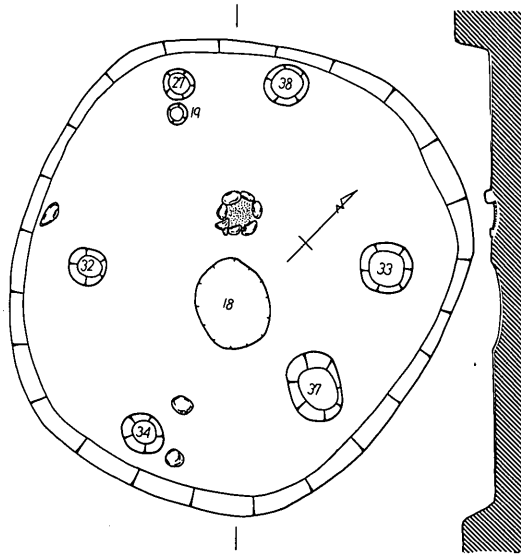


A—道構配置図

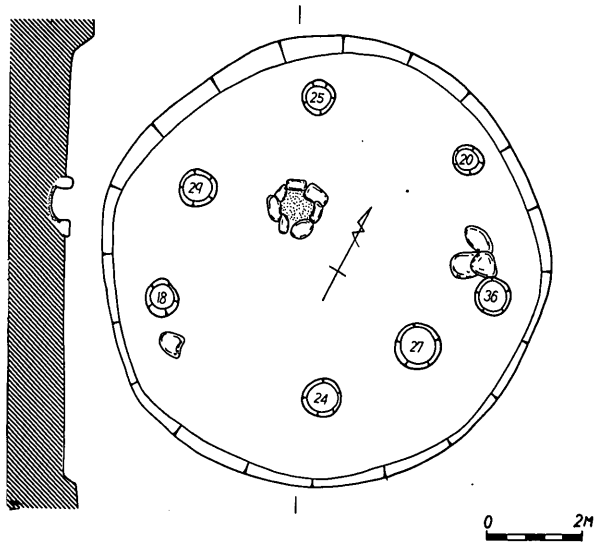


A—1号住居址

第2图 A地区道構配置図及F1号住居址 (1:80)

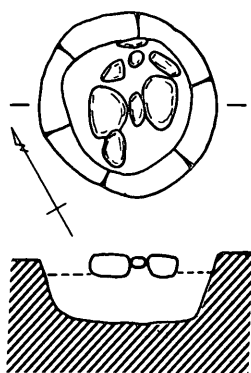


A-2号住居址

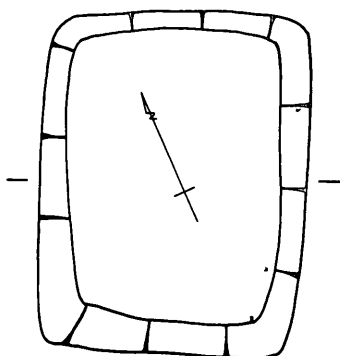


A-3号住居址

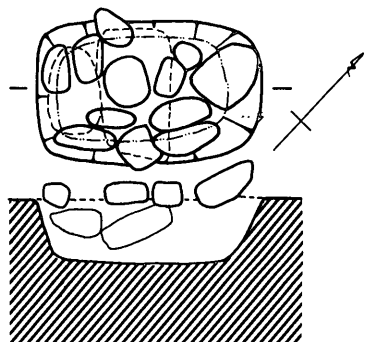
第3图 A-2·3号住居址 (1:80)



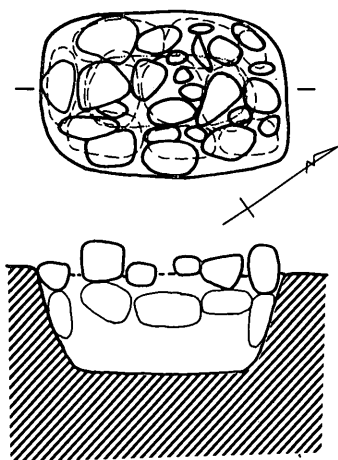
A-土壇 1



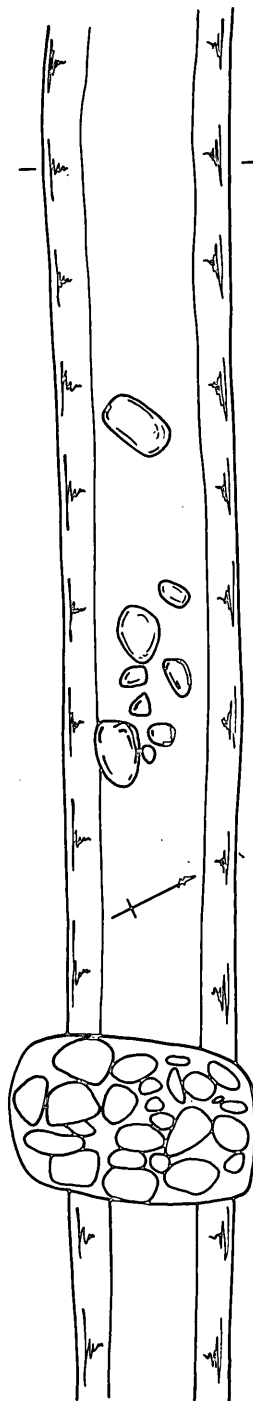
A-土壇 2



A-石組 1



A-石組 2



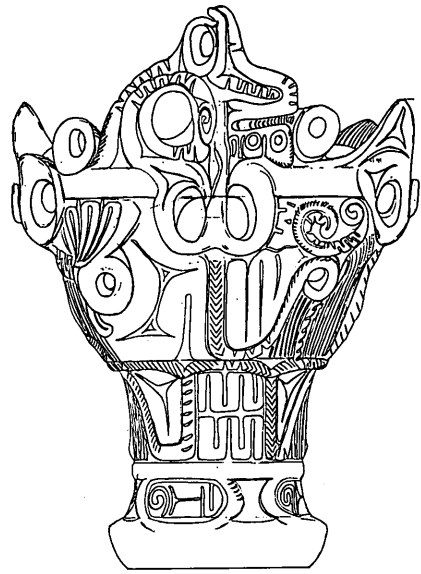
A-溝状遺構



第 4 圖 A-土壇1・2 石組1・2 溝状遺構



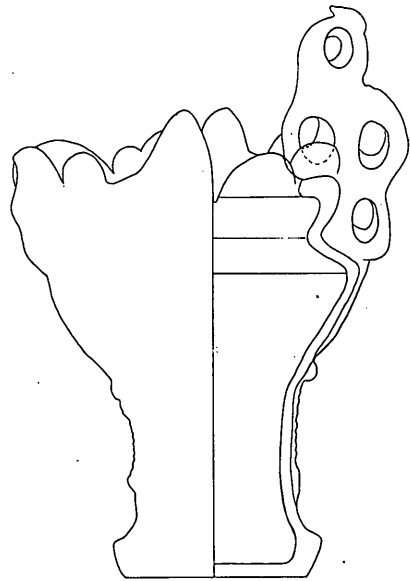
正面 1



背面 2

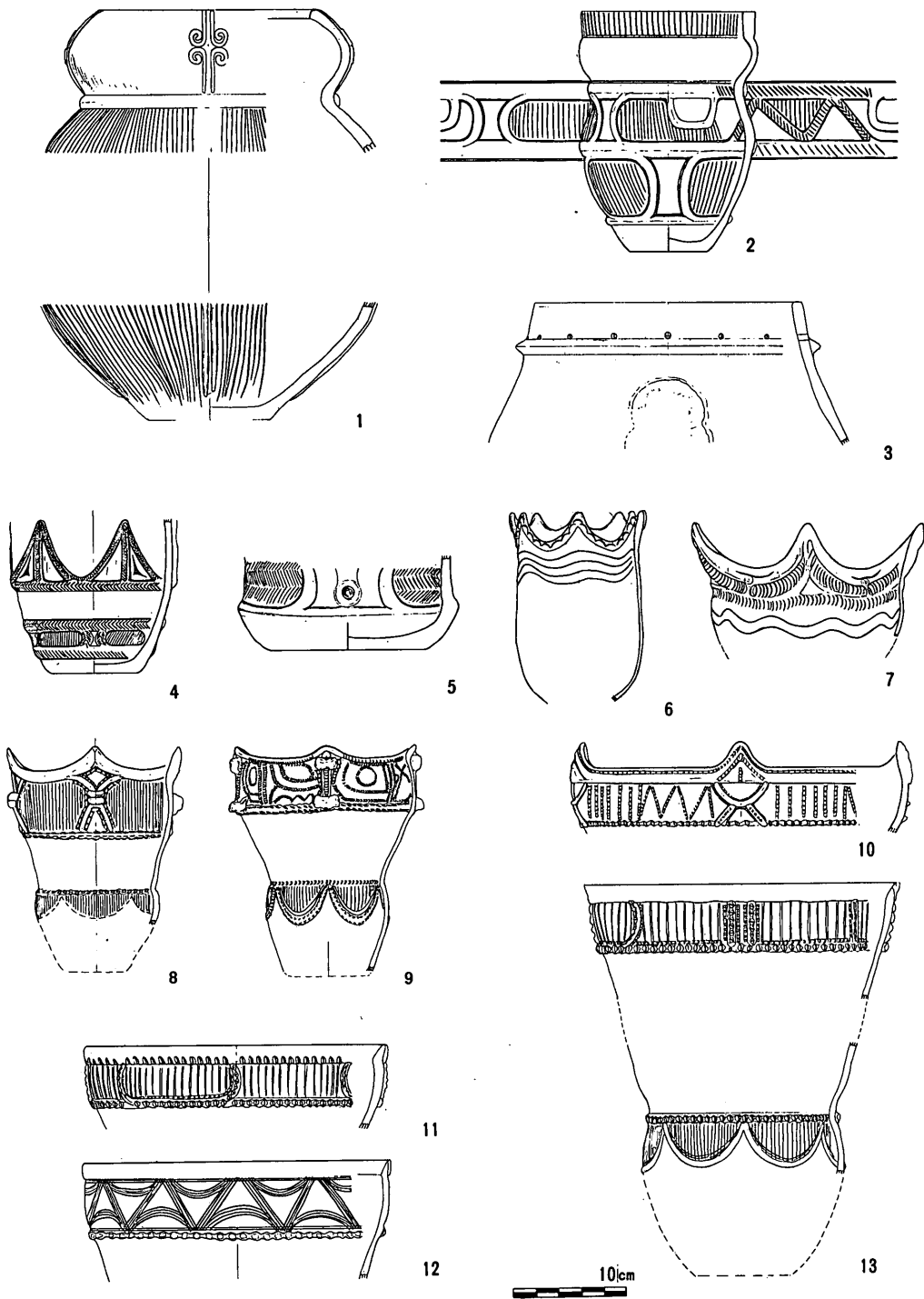


侧面 3

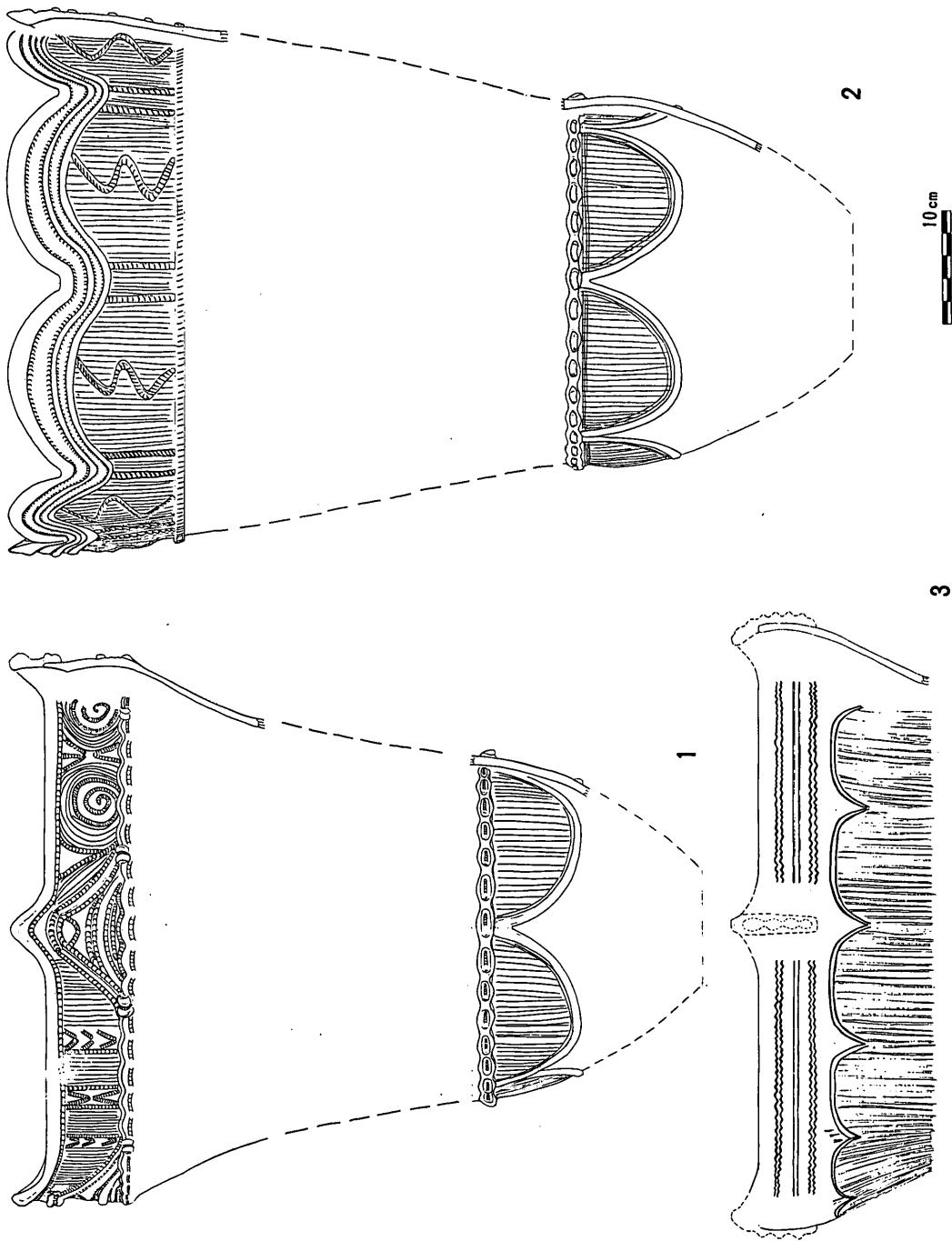


10 cm 4

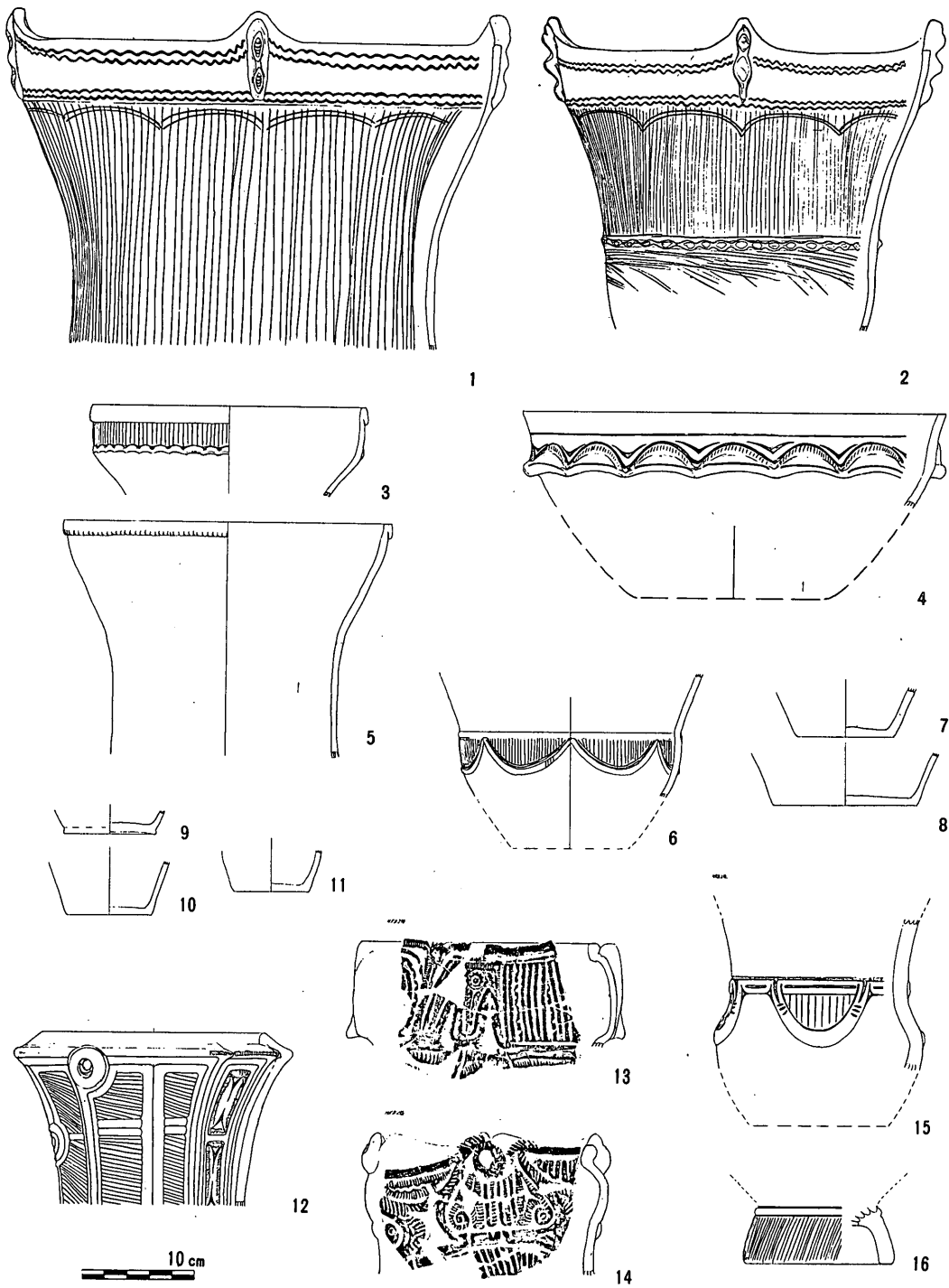
第5图 1号住居址出土土器(A)



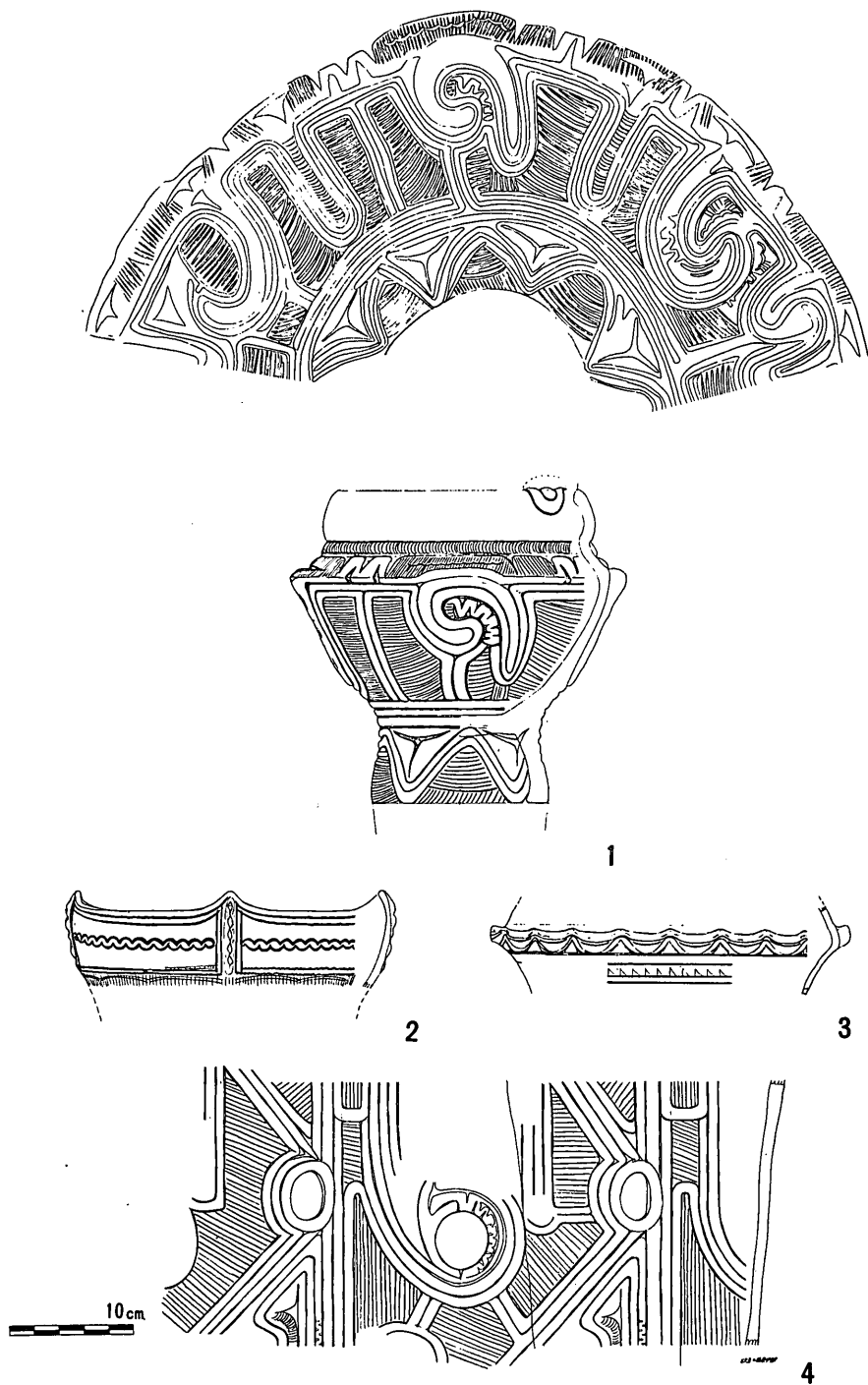
第6图 1号住居址出土土器(A)



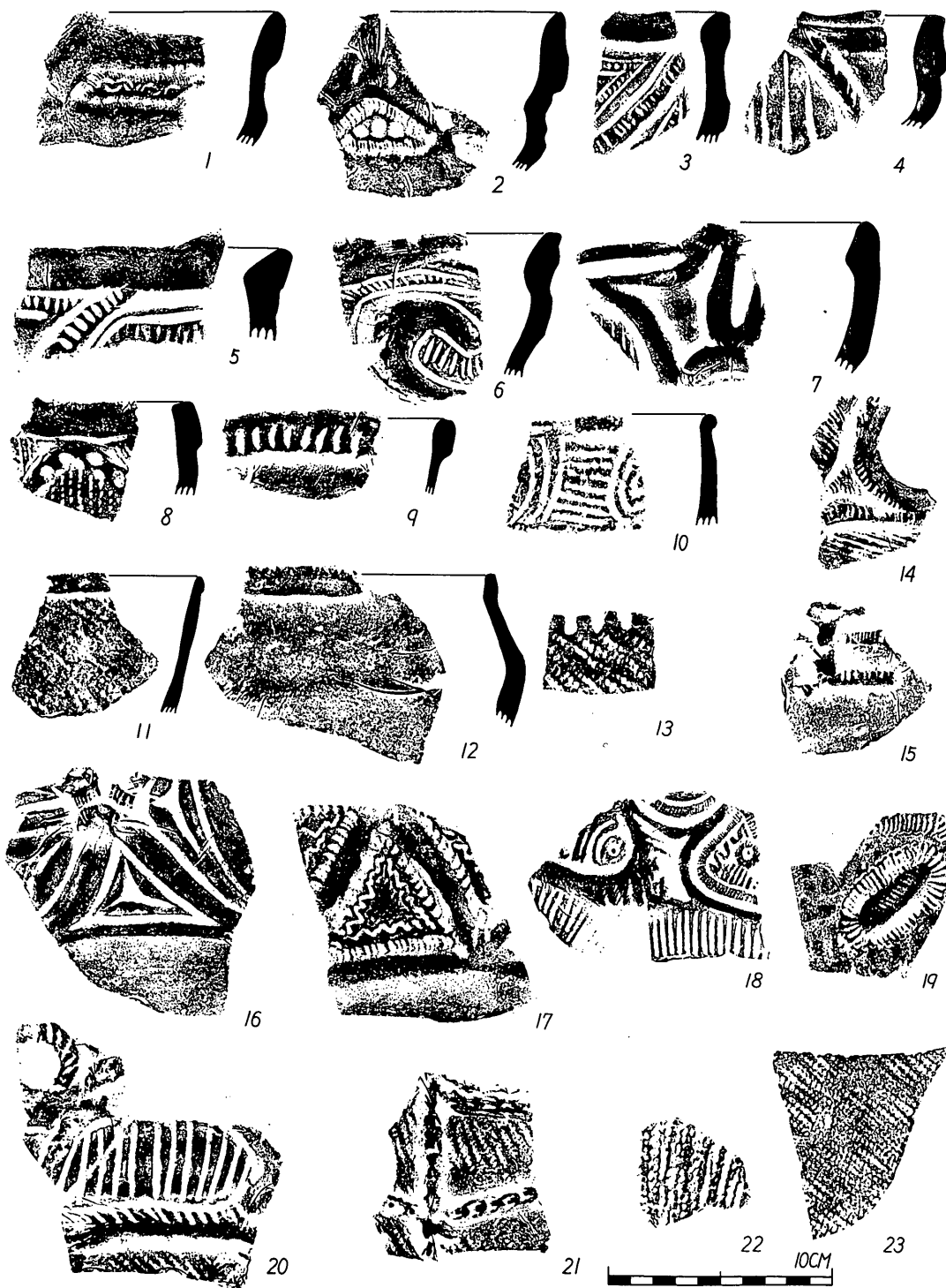
第 7 图 1 号住居址出土土器 (A)



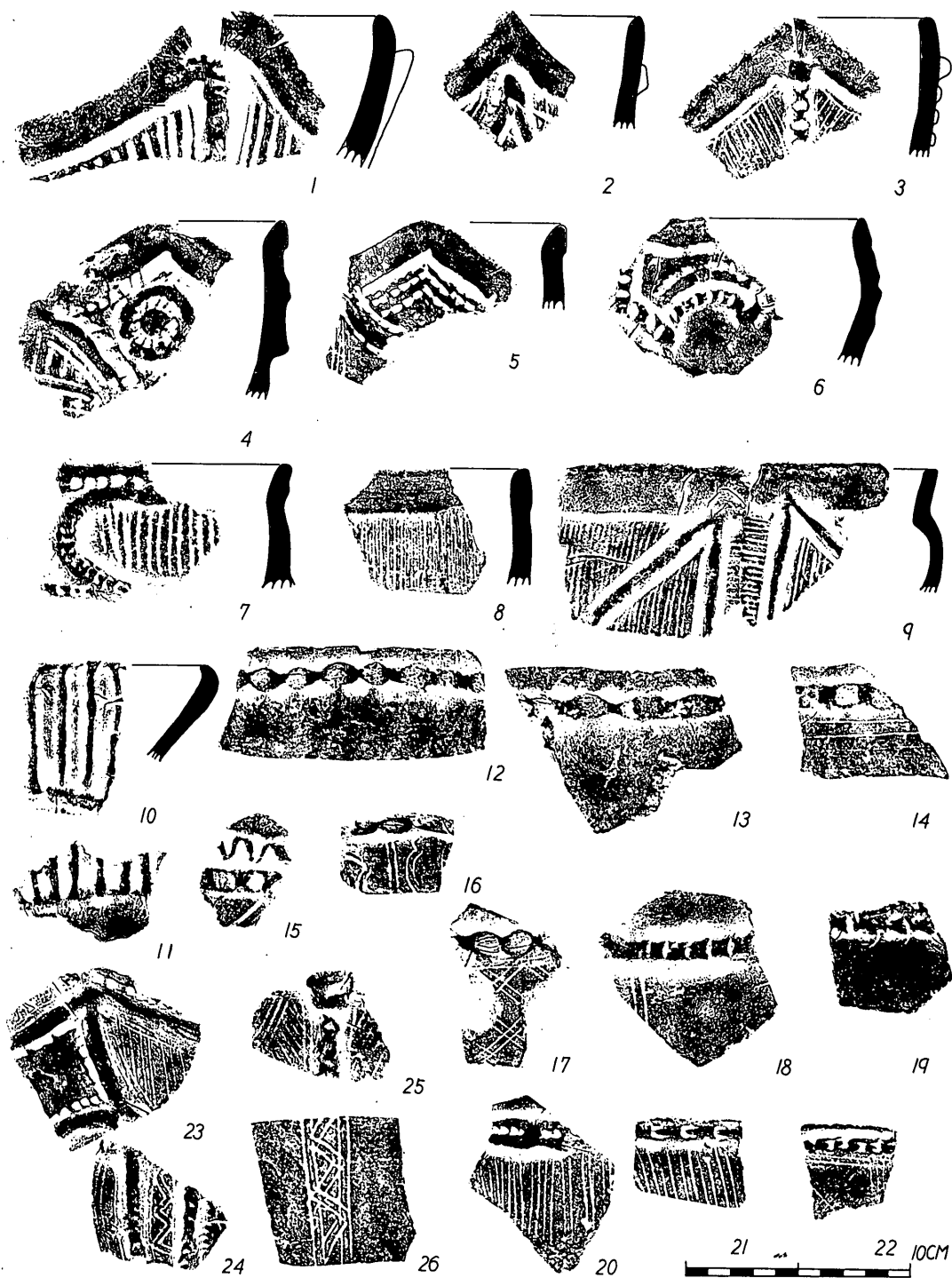
第8图 1号住居址·2号住居址 出土土器(A)
(1~11) (12~16)



第9图 1号住居址·土器集中部 出土土器(A)
(1) (2~4)



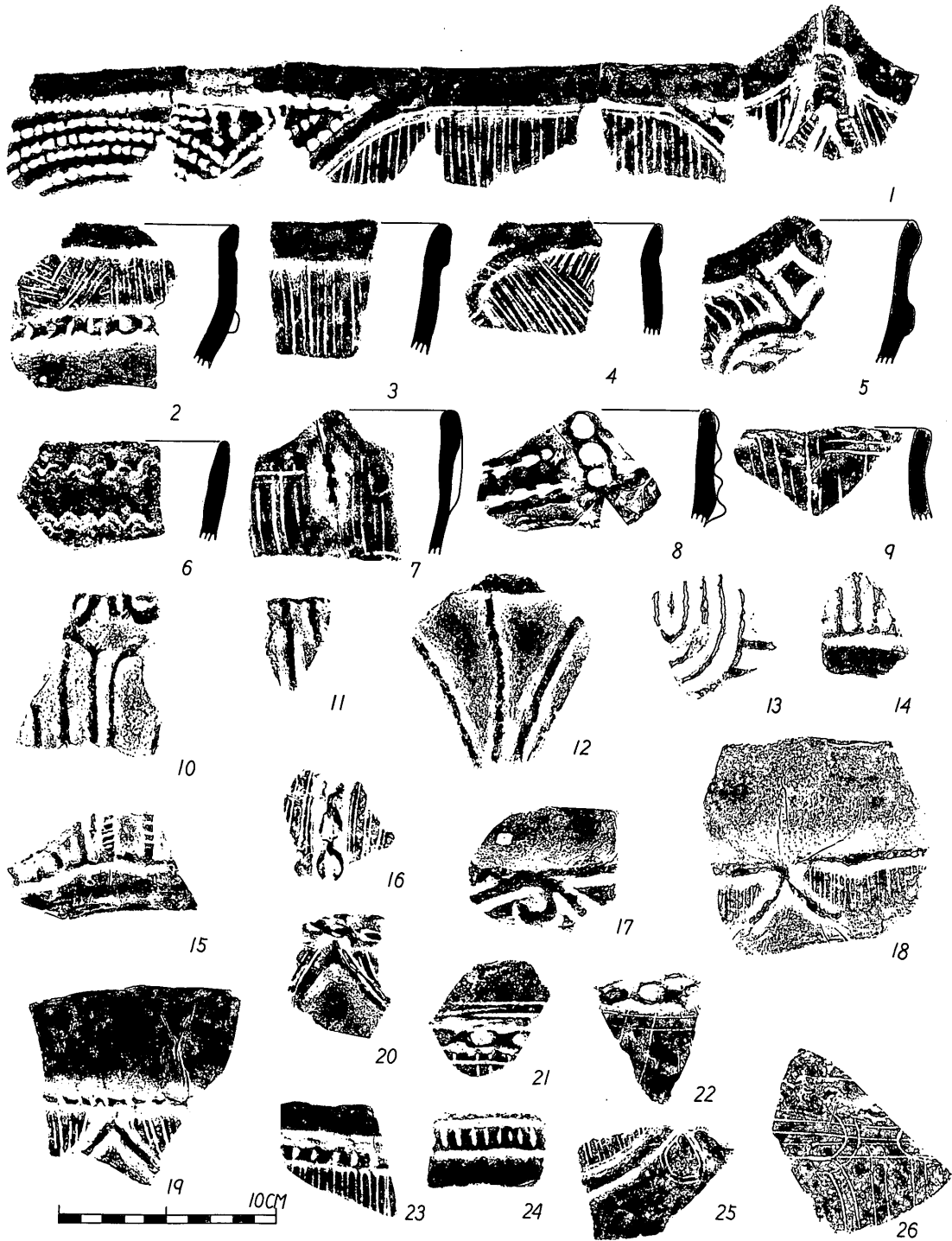
第10图 1号住居址出土土器(1:3)



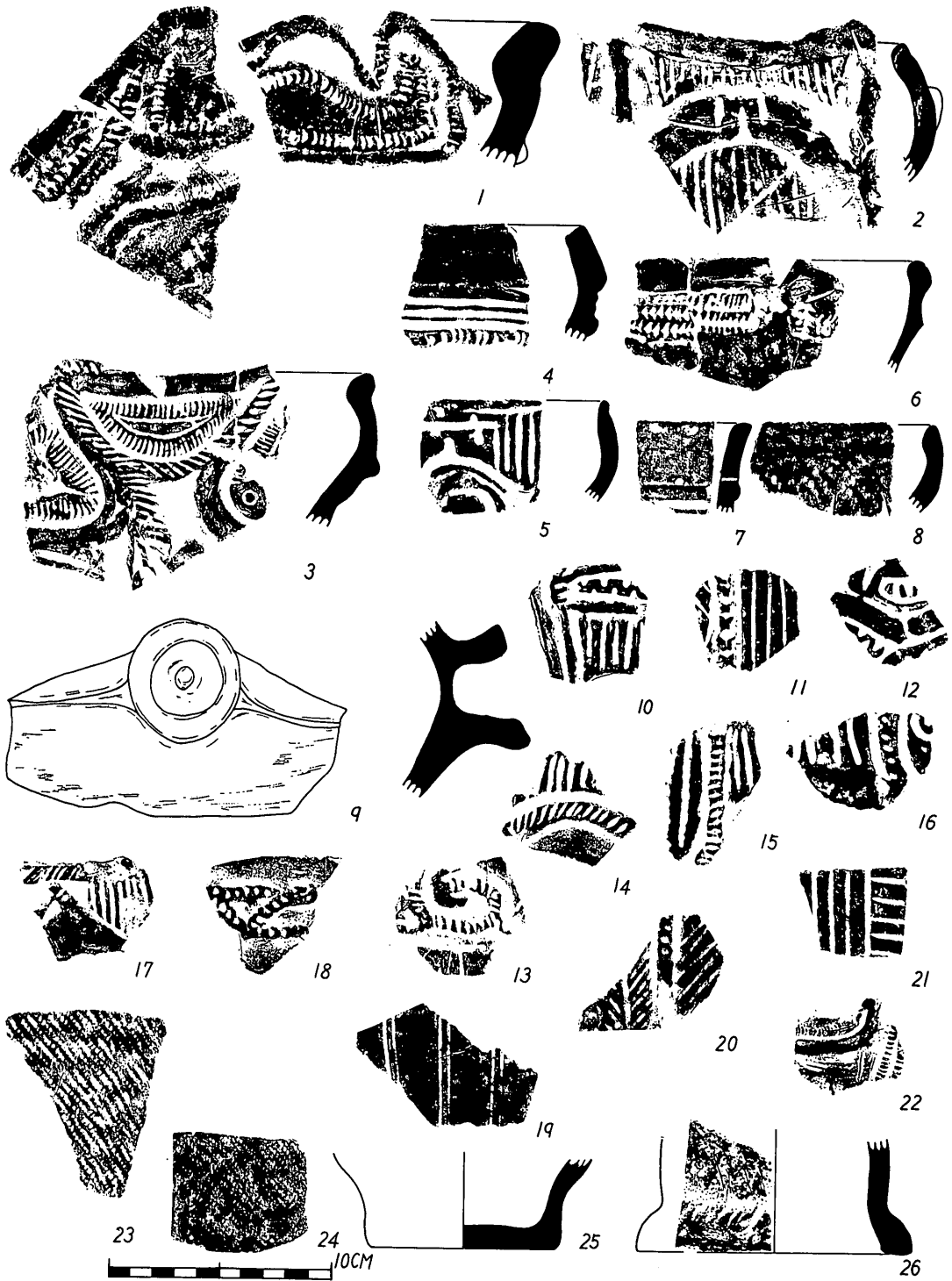
第11图 ①号住居址出土土器 (A) (1:3)

遺物の箱の中 2号位に付る。

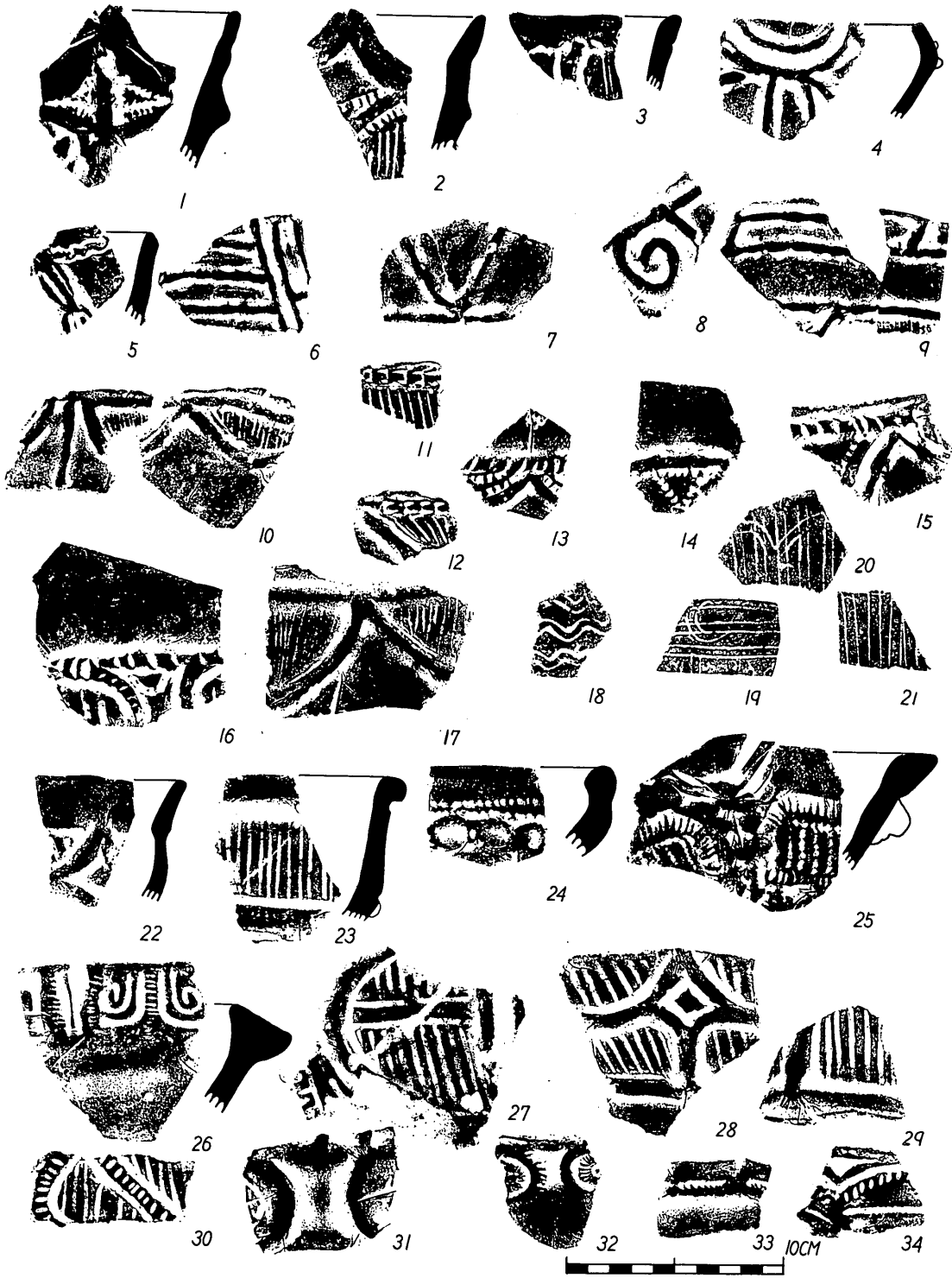
土器に記号付る。



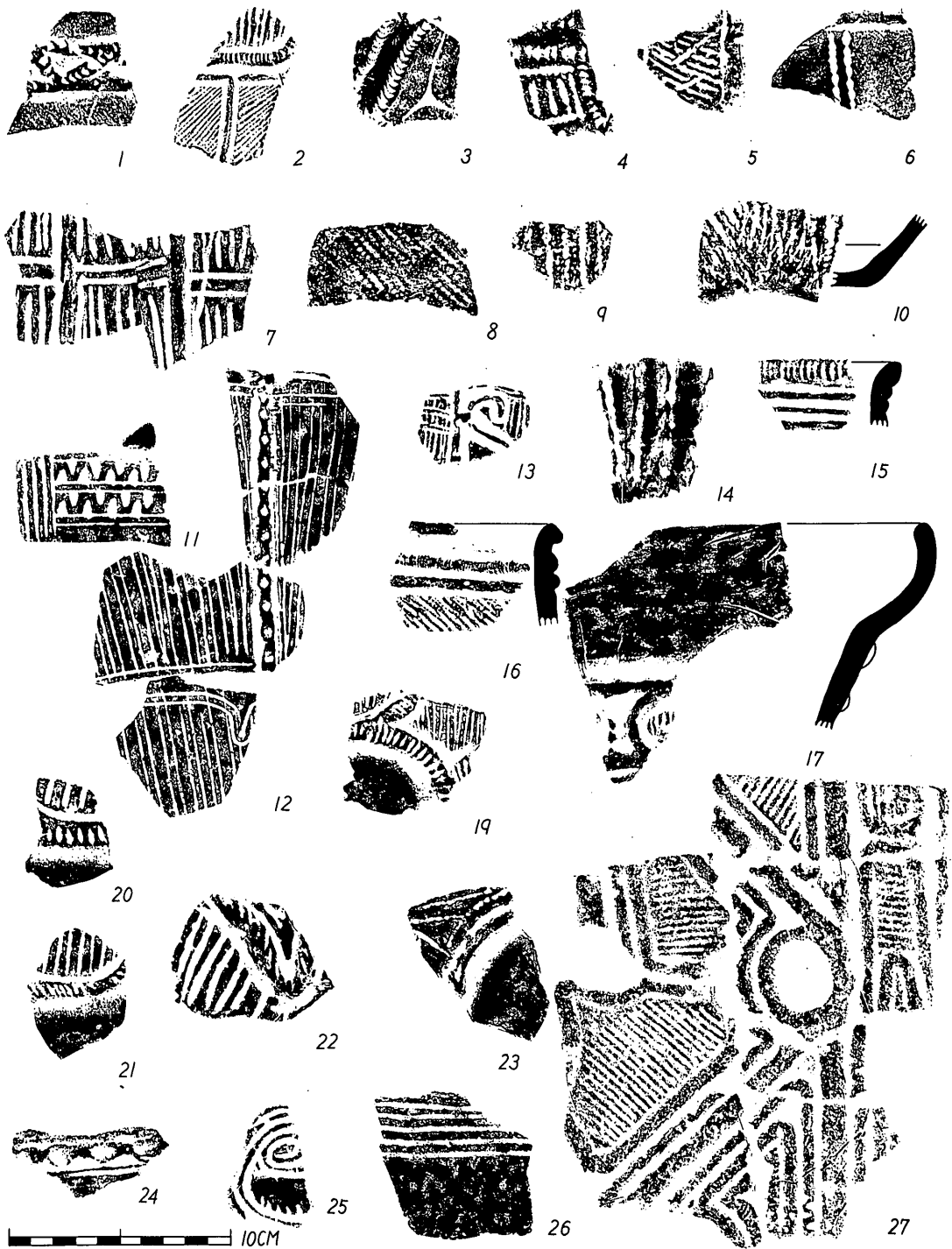
第12图 2号住居址出土土器 (A) (1:3)



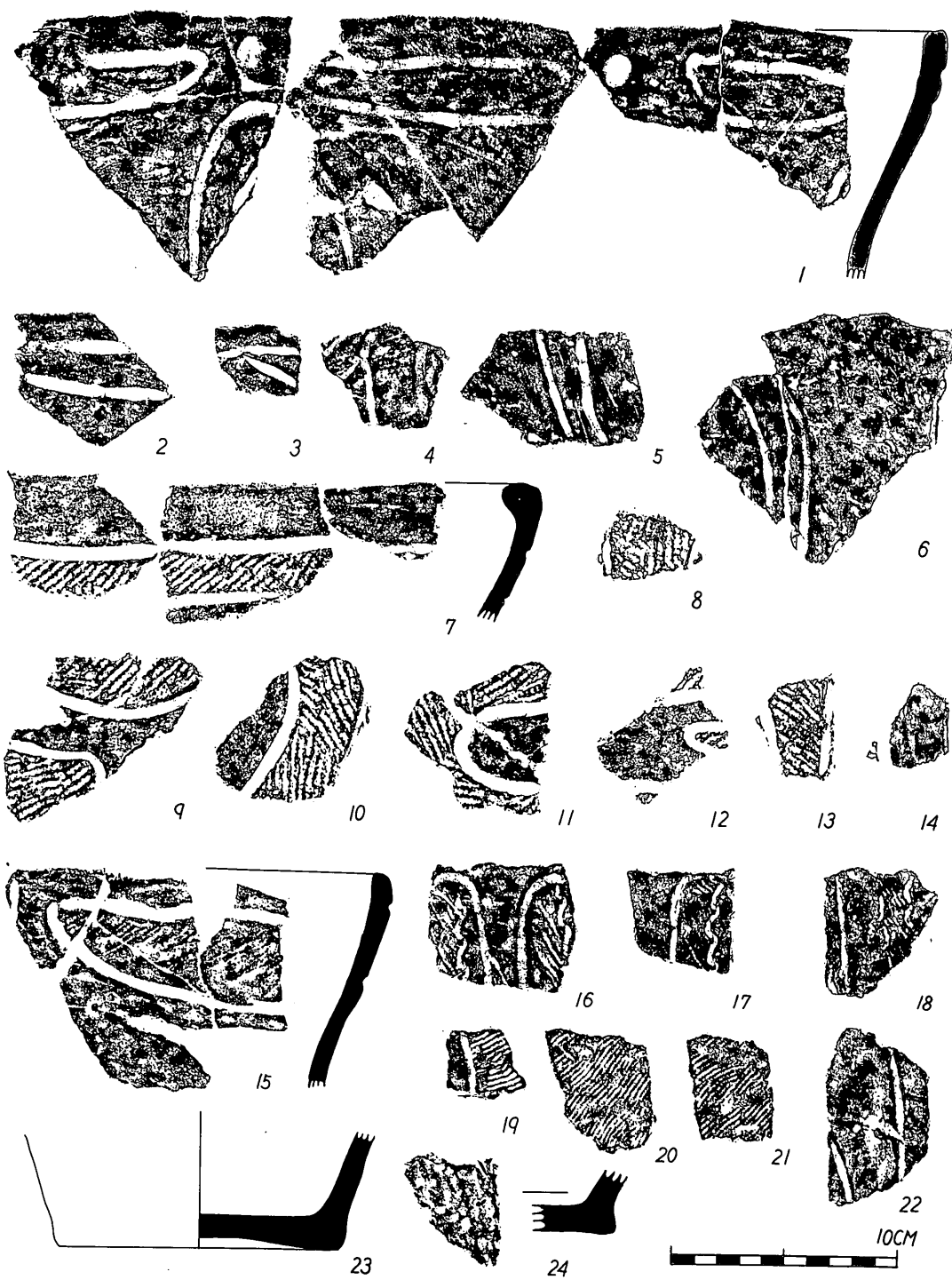
第13图 2号住居址出土土器(A) (1:3)



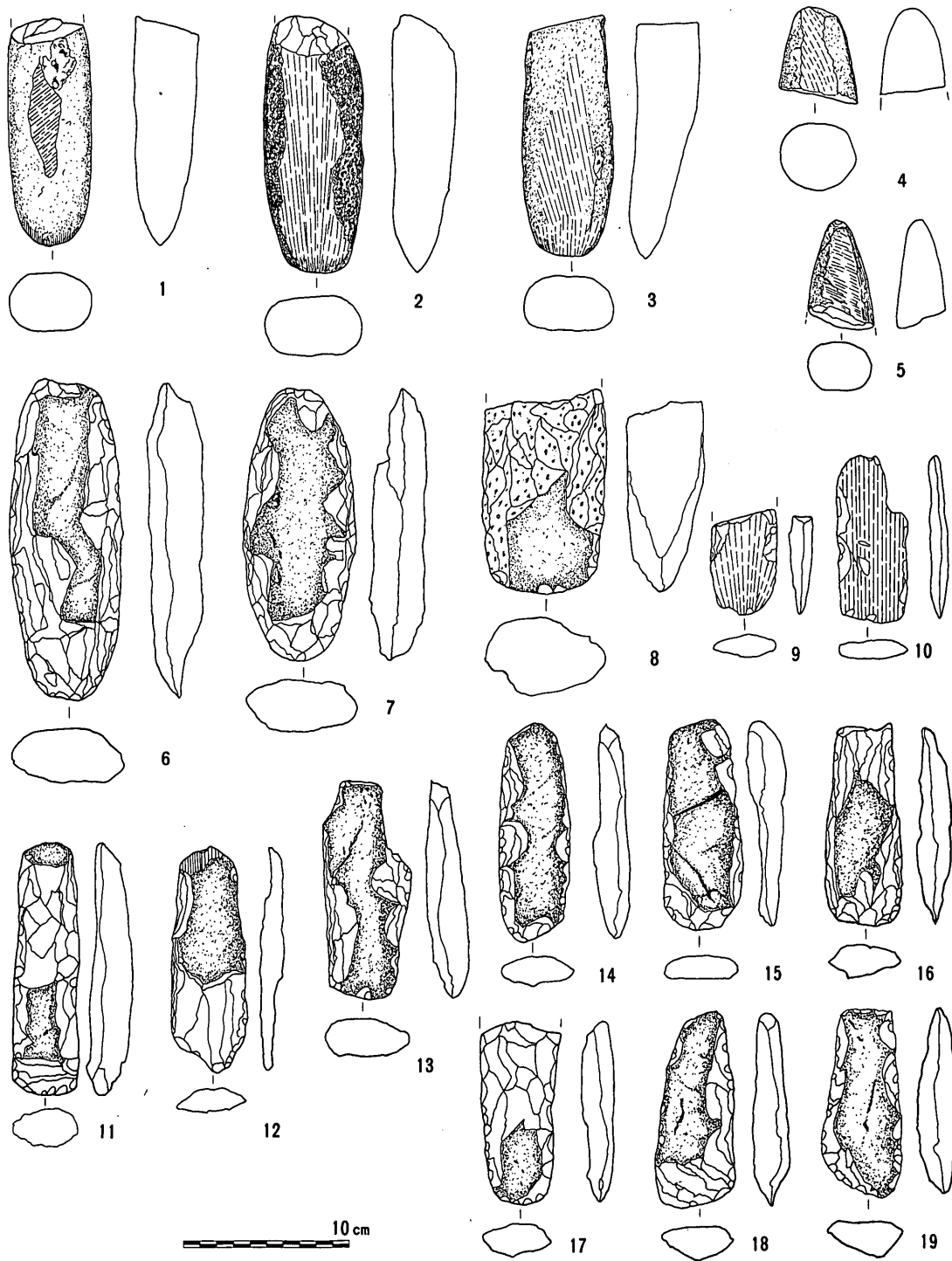
第14图 3号住居址出土土器(A)(1:3)



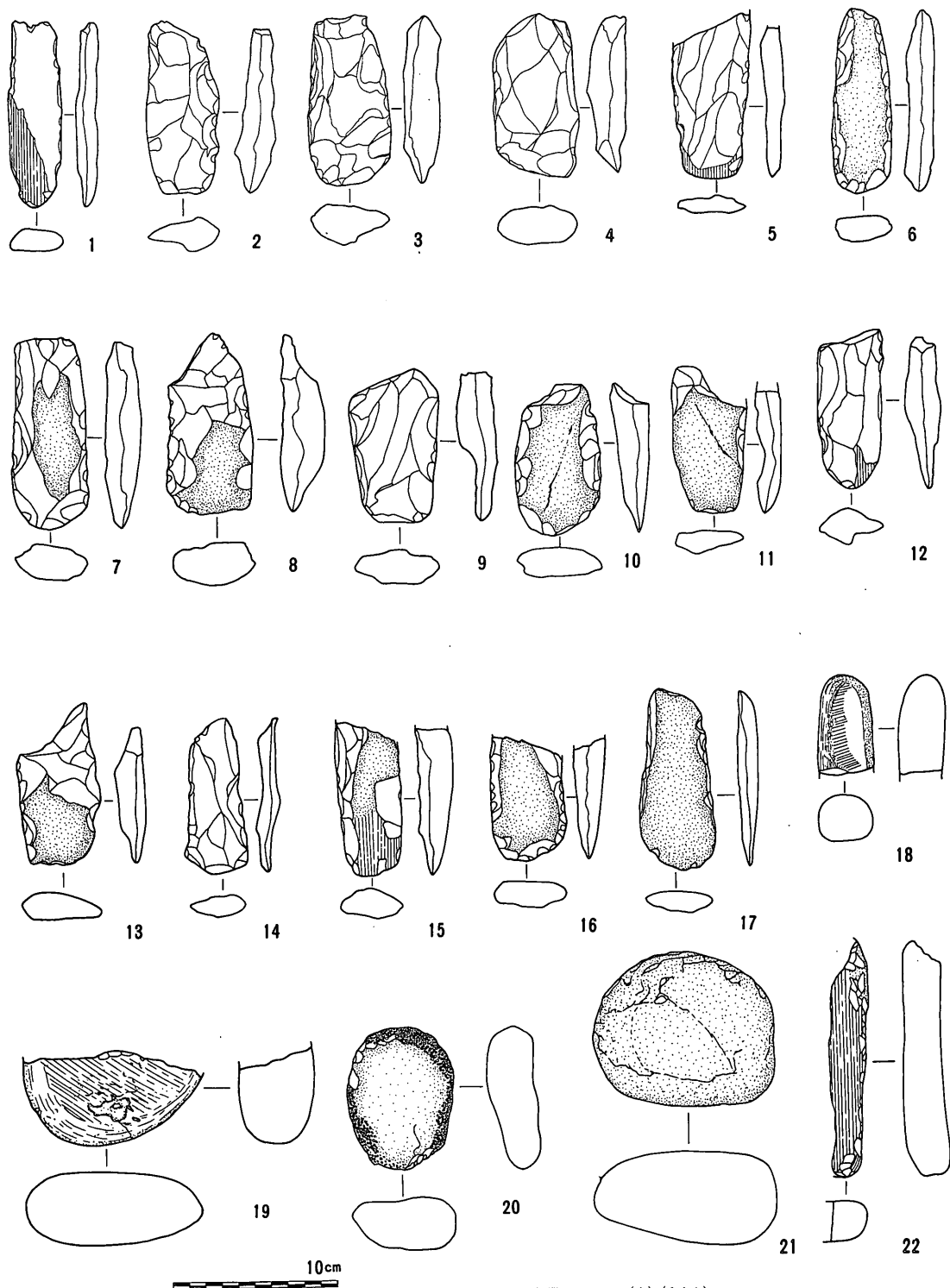
第15图 3号住居址·土器集中部出土土器
(1~10) (11~27)



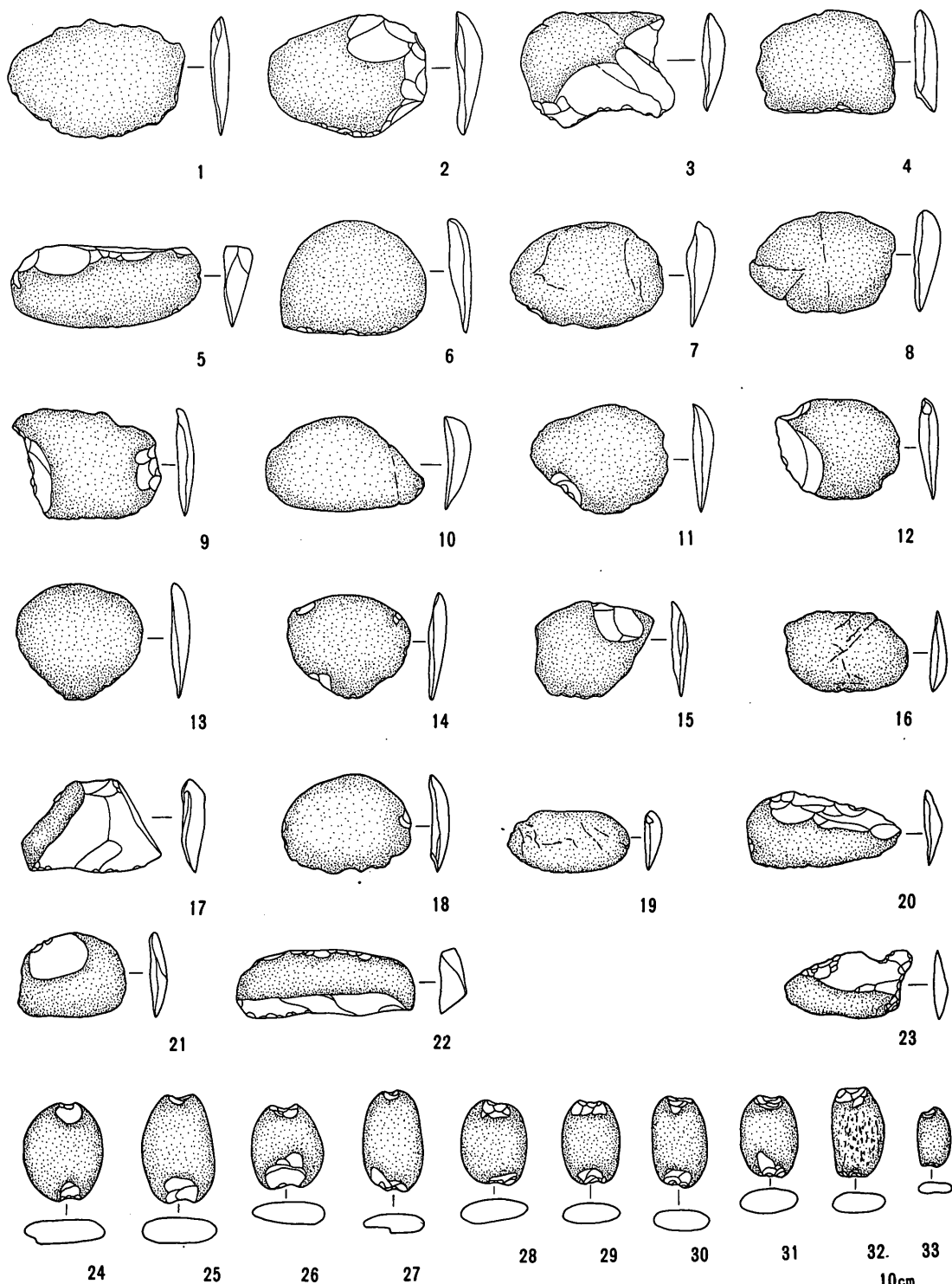
第16图 A—土坛1出土土器(1:3)



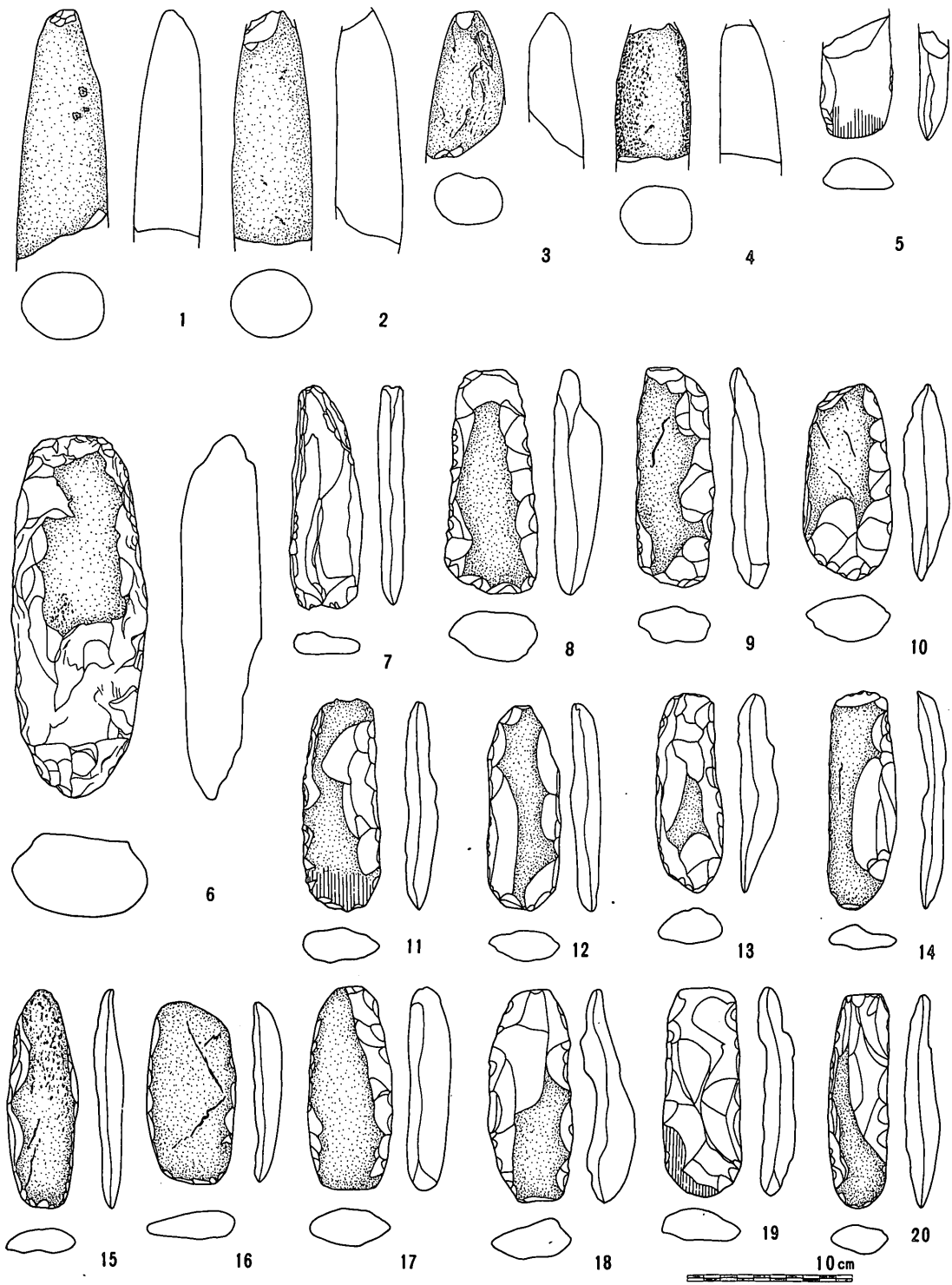
第17图 1号住居址出土石器(A)(1:4)



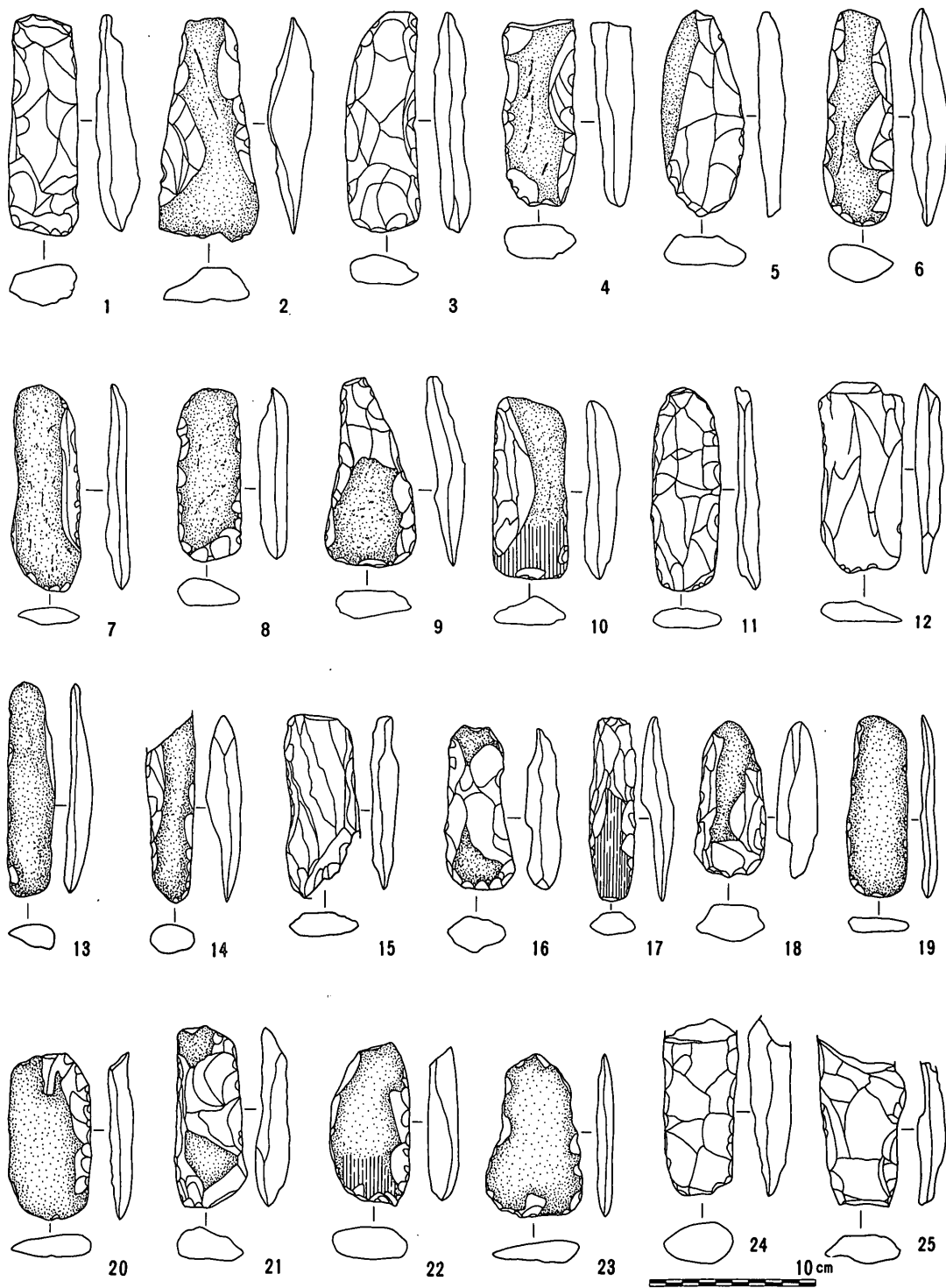
第18图 1号住居址出土石器(A) (1:4)



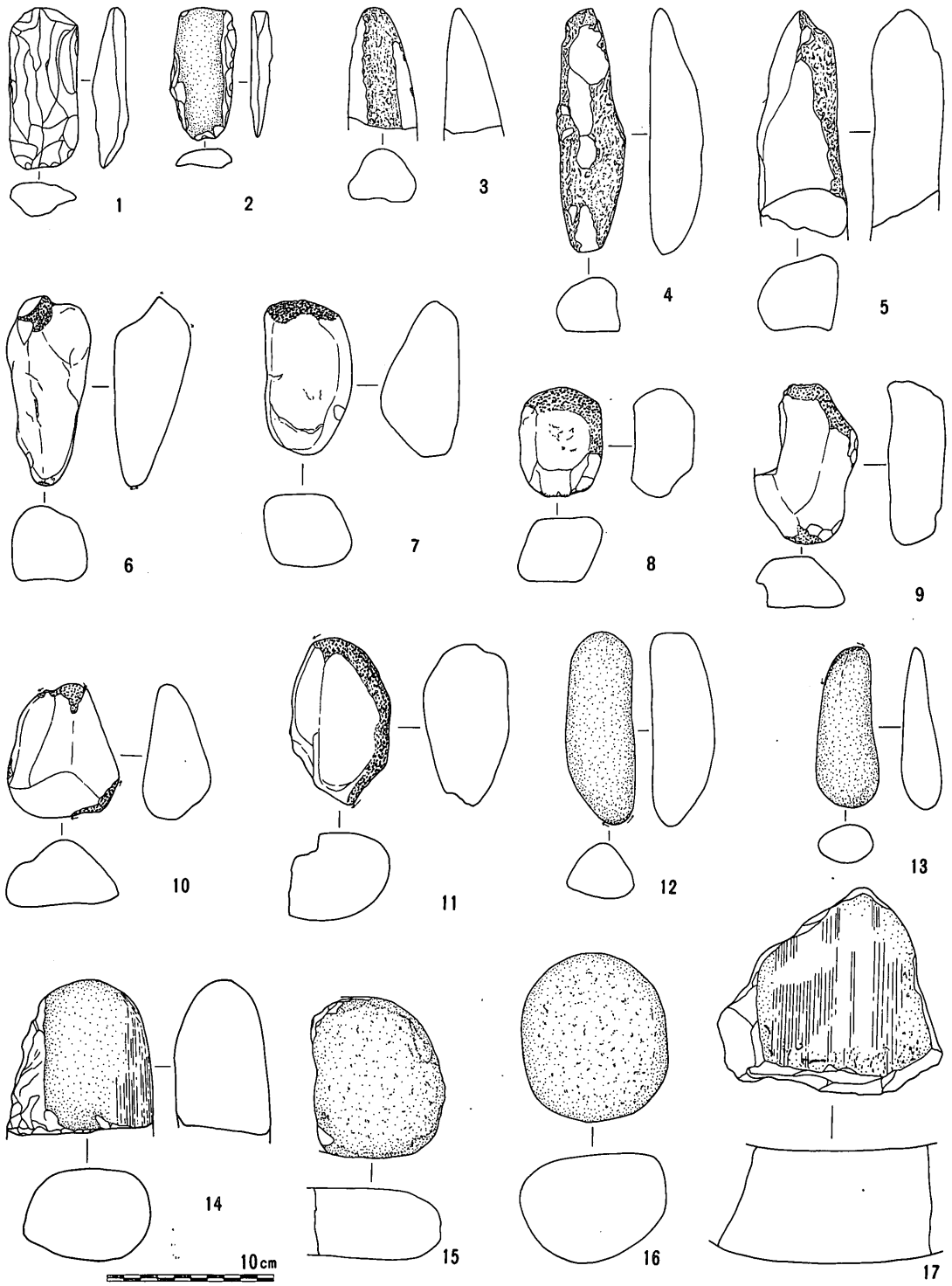
第19圖 1号住居址出土石器(A) (1:4)



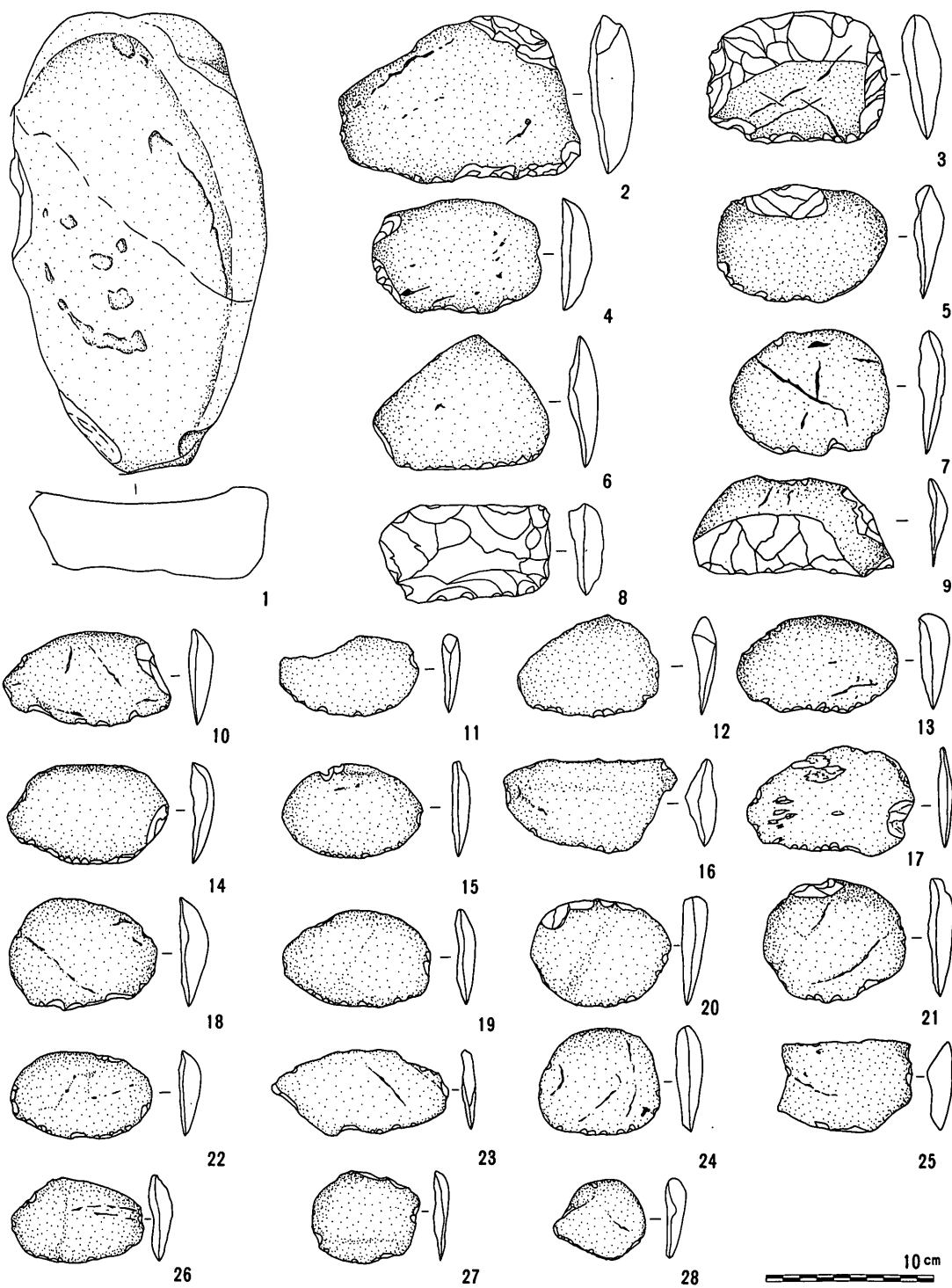
第20图 2号住居址出土石器(A)(1:4)



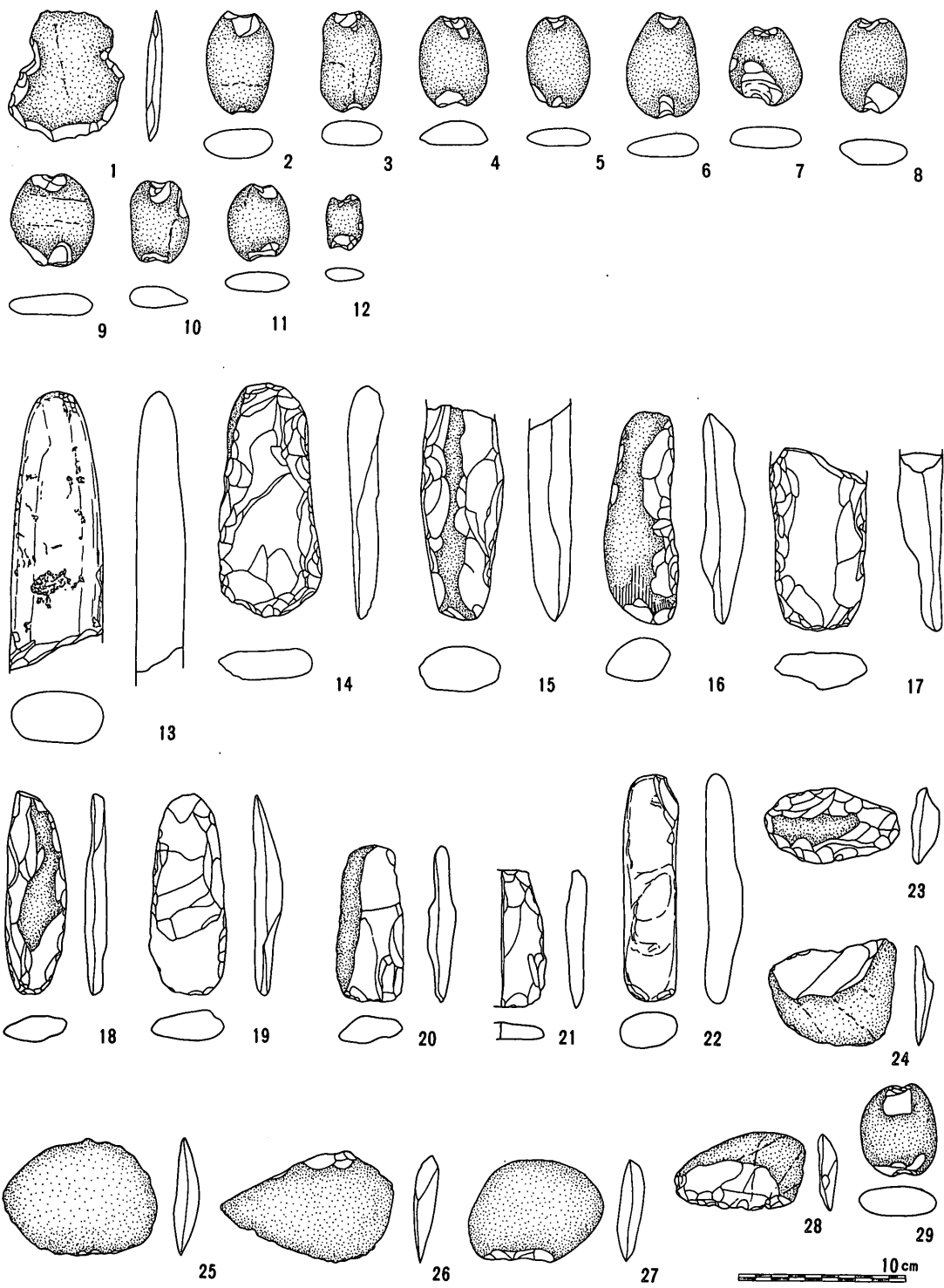
第21图 2号住居址出土石器(A)(1:4)



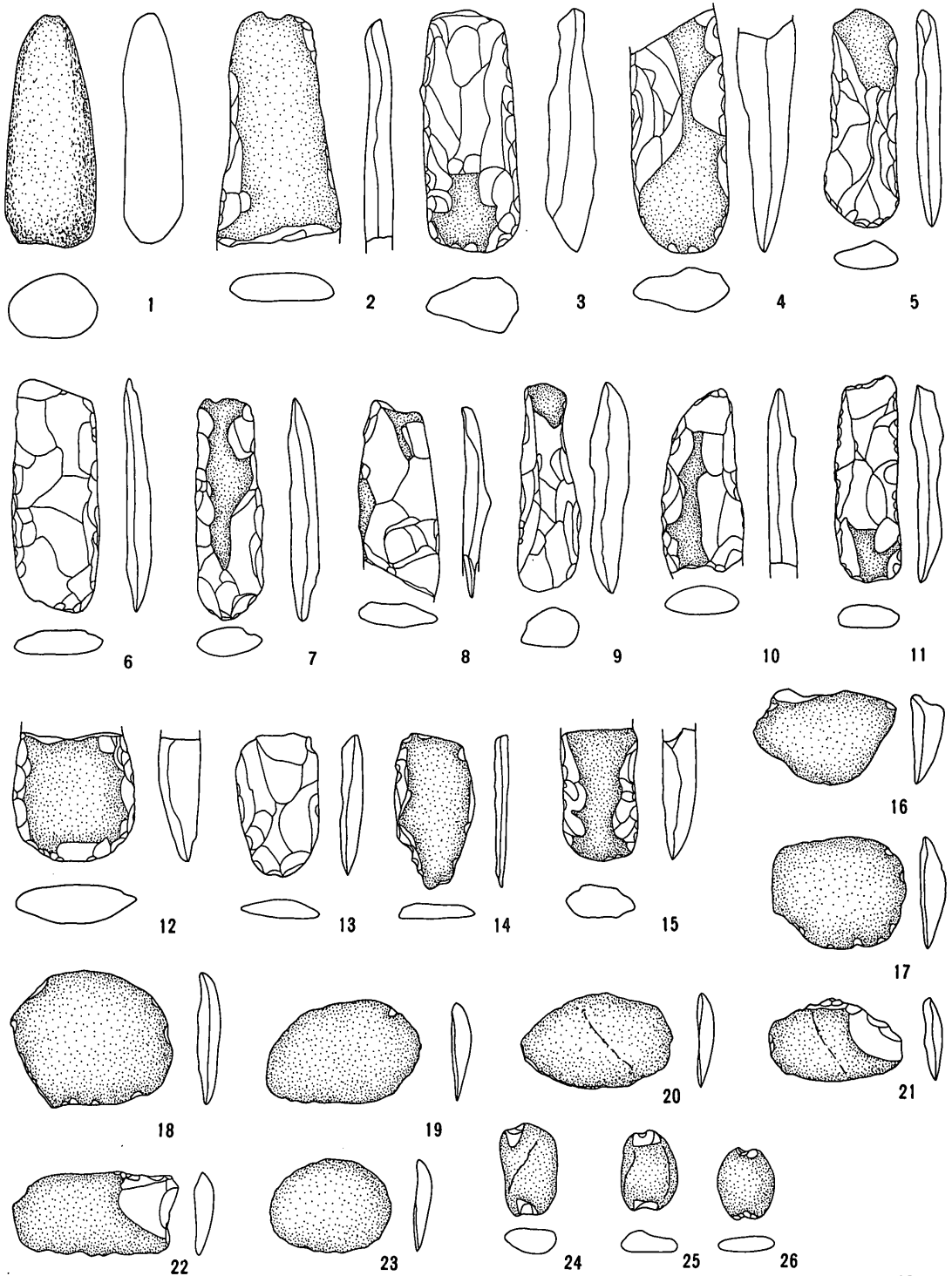
第22图 2号住居址出土石器(A)(1:4)



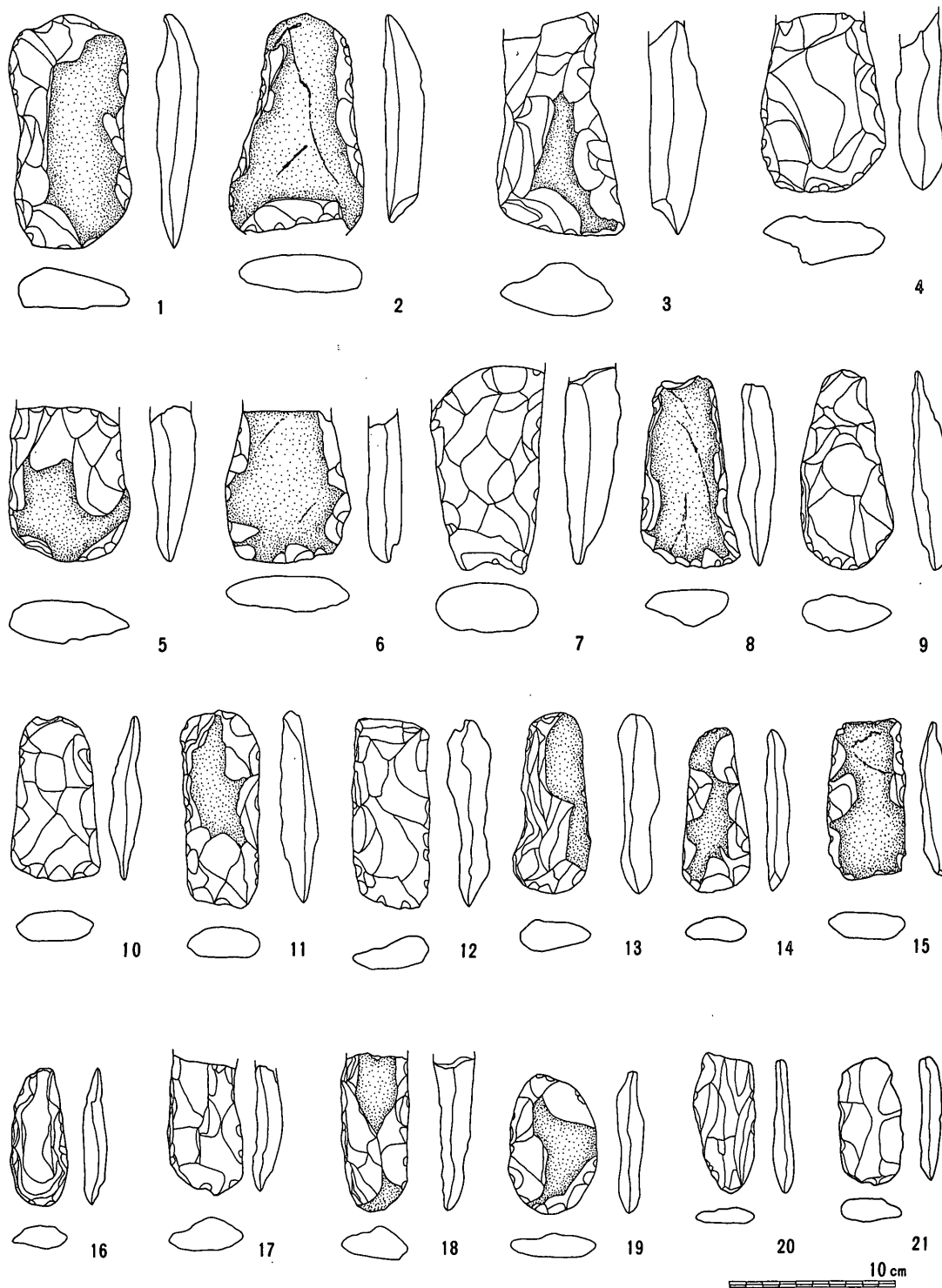
第23图 2号住居址出土石器(A)(1:4)



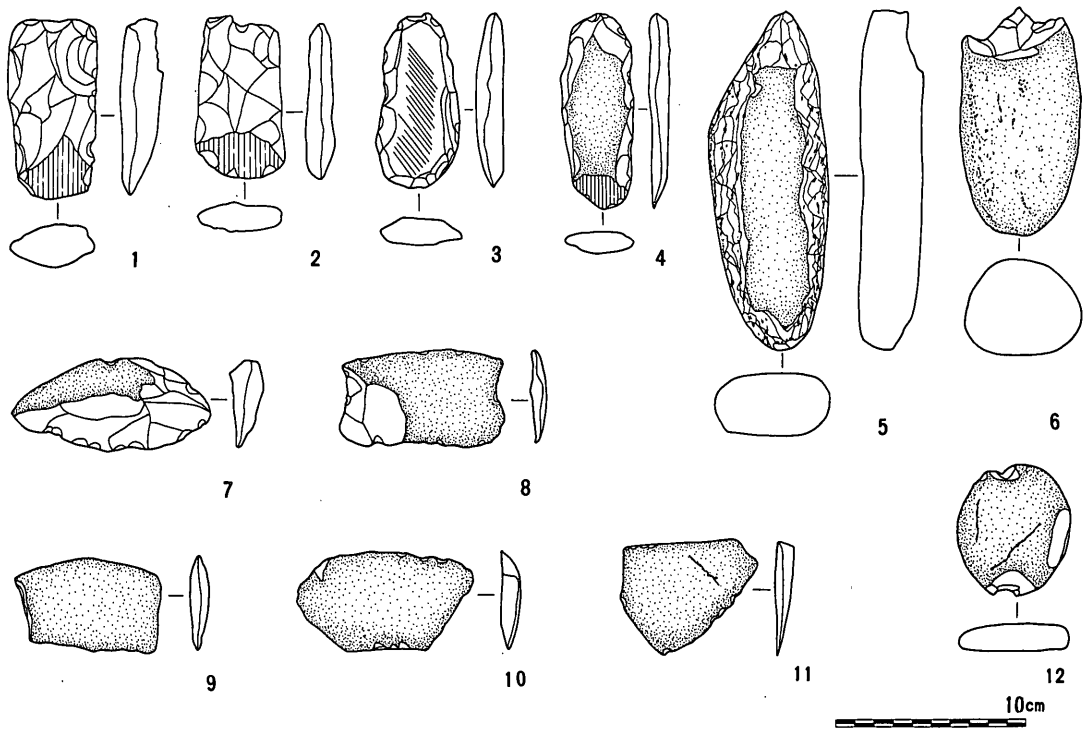
第24图 2号·(1~12)3号(13~29)住居址,出土石器(A)(1:4)



第25图 土器集中部出土石器(A)(1:4)



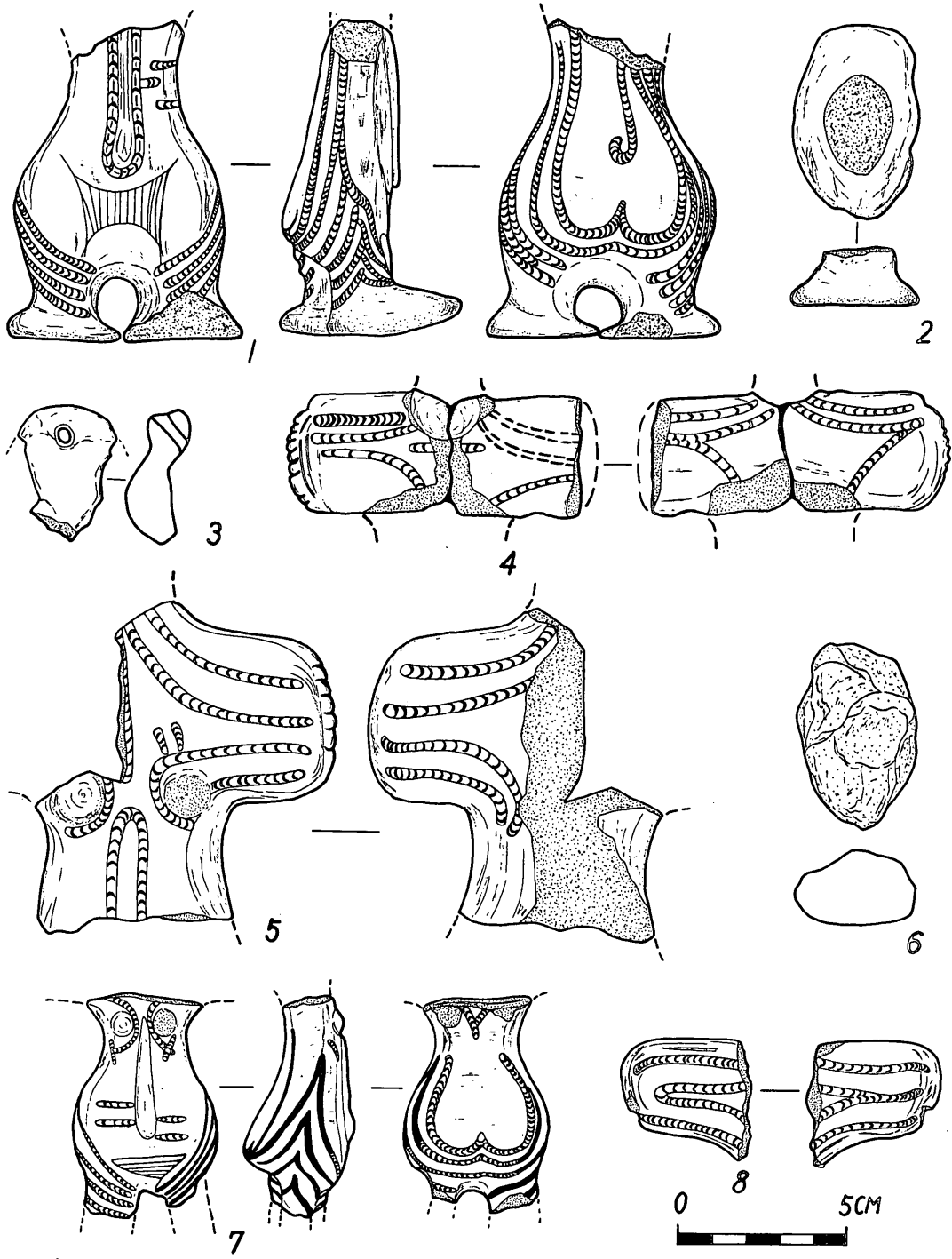
第26图 A区道槽外出土石器 (1:4)



第27図 A一遺構外出土石器実測図(1:4)

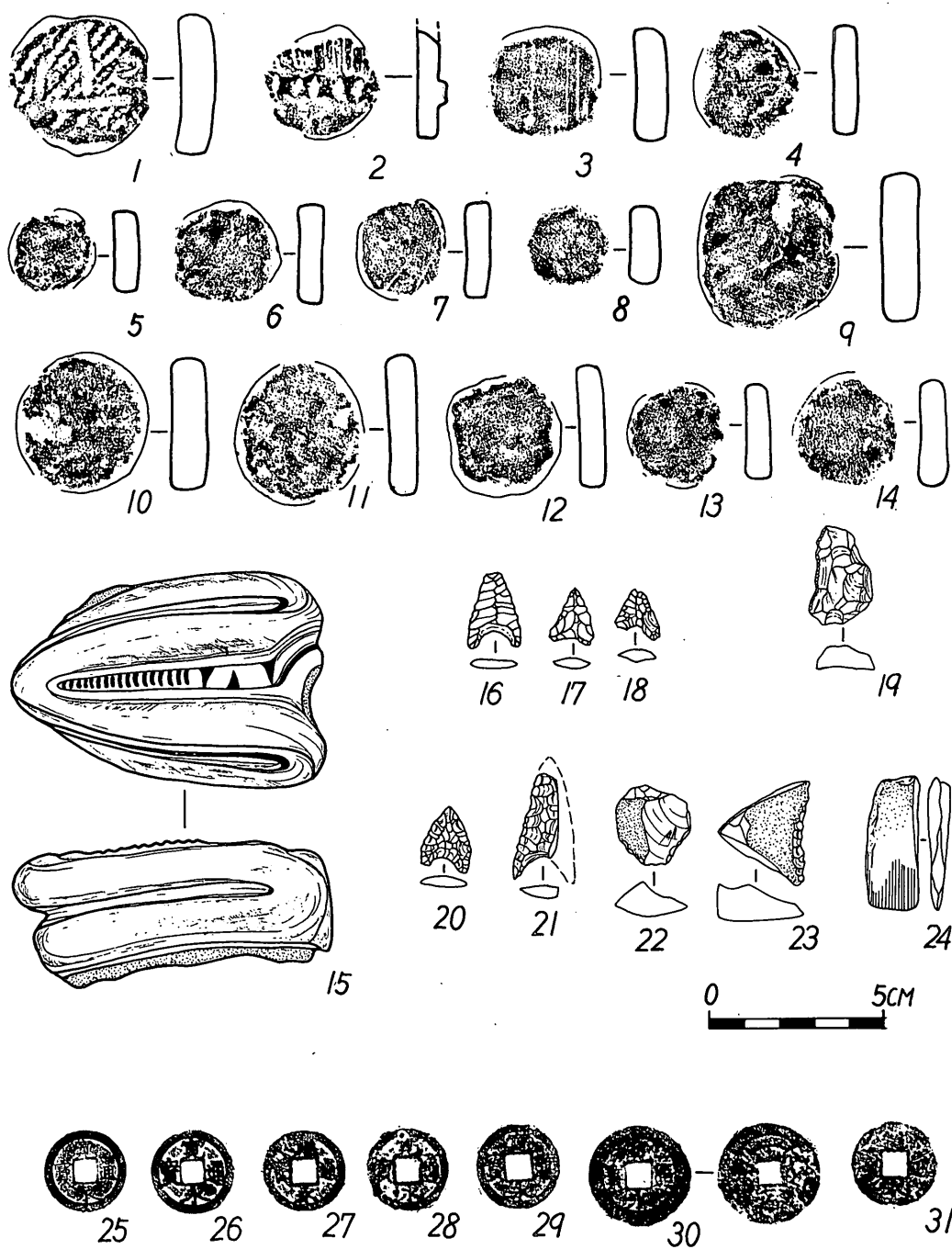
第2表 A地点遺構別出土遺物一覧表

| 遺物 \ 遺構 | 1号住居址 | 2号住居址 | 3号住居址 | 土器集中部 | 後期土坑 | その他 | 計 |
|---------|-------|-------|-------|-------|------|-----|-----|
| 土 偶 | 3 | 2 | 2 | 1 | | | 8 |
| 土製円板 | 6 | 6 | | | | | 12 |
| 打製石斧 | 38 | 61 | 11 | 9 | 6 | 29 | 151 |
| 磨製石斧 | 5 | 8 | 1 | 1 | | | 15 |
| 石 鏃 | 3 | 2 | | | | | 5 |
| 横刃形石器 | 62 | 76 | 11 | 8 | 4 | 8 | 169 |
| 石 皿 | | 2 | | | | | 2 |
| 敲打器 | 10 | 17 | | | | 1 | 28 |
| 石 錘 | 10 | 11 | 1 | 1 | 1 | | 24 |
| 粗製石ヒ | 1 | 1 | | | | | 2 |
| スクレパー | | 2 | | 1 | | | 3 |
| 磨 石 | 3 | 2 | | | 1 | | 6 |



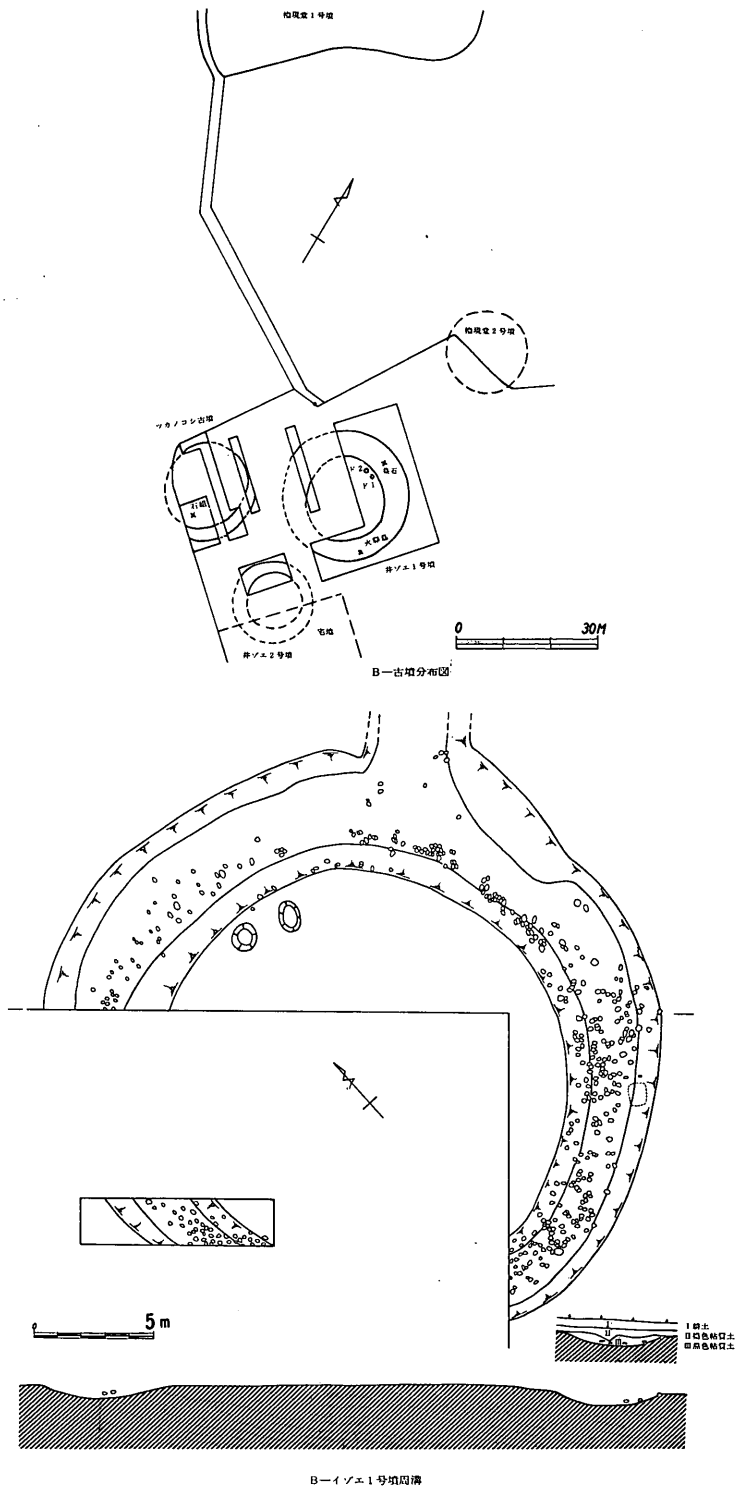
1号住居址(1~3)2号住居址(4·5)3号住居址(7·8)土器集中部(6)出土

第28图 A—住居址出土土偶·土器集中部出土土偶

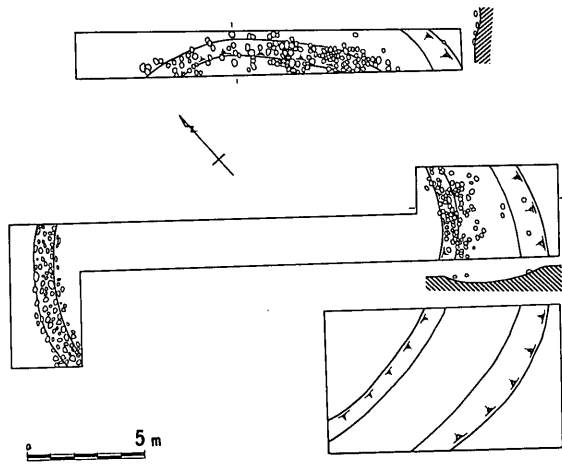


1号住居址 (1~8・16~18) 2号住居址 (9~15・20~24) 土器集中部 (19) ツカノコシ古墳石積内 (25~30)
B区火葬墓 (31) 出土

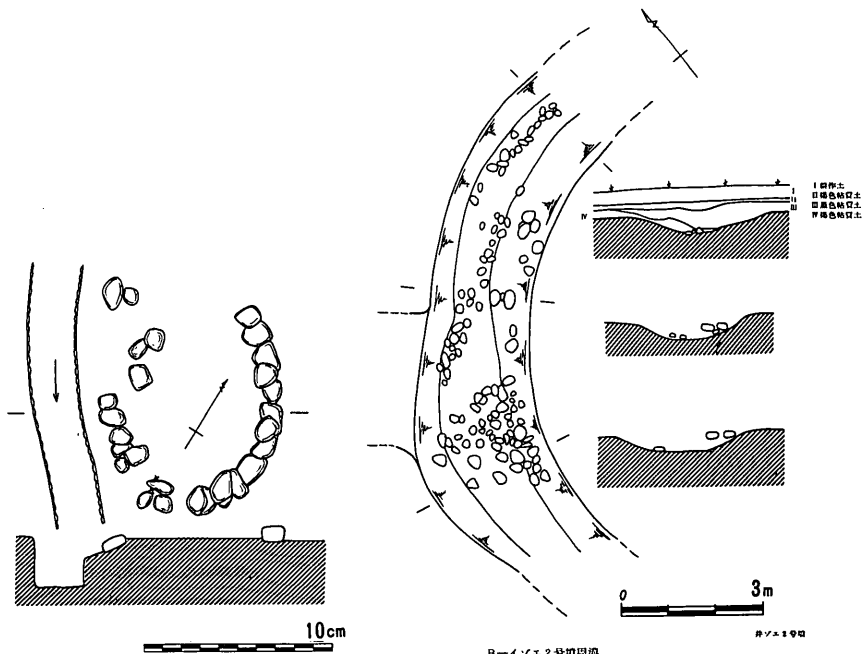
第29図 A一住居址出土土製品・石製品・古銭実測図及び拓影



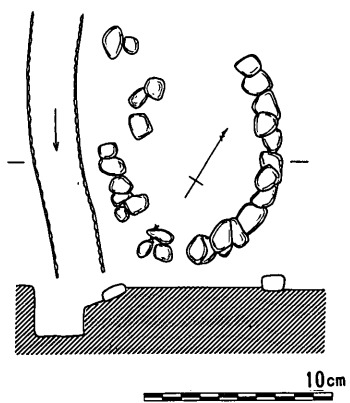
第30図 B地区古墳分布図及び伊ノエ1号墳周囲 (1:80)



B-ツカノコシ古墳周溝

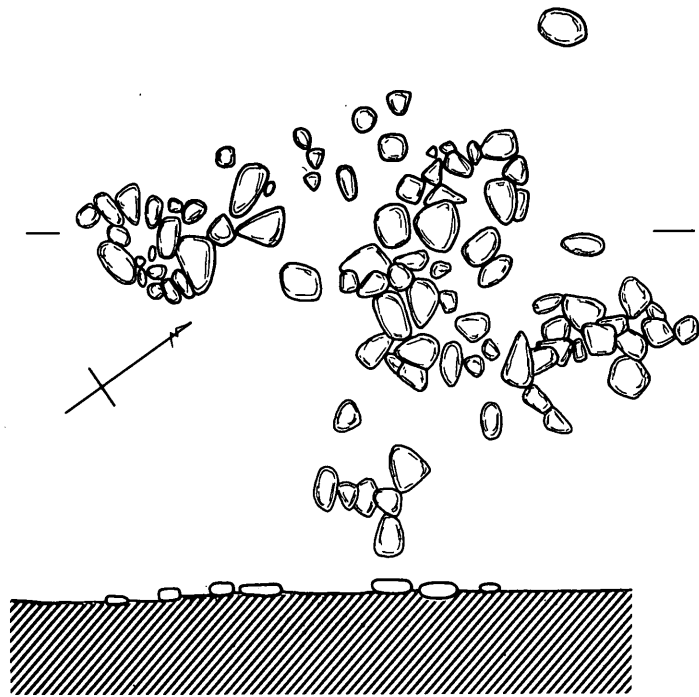


B-イソエ2号墳周溝

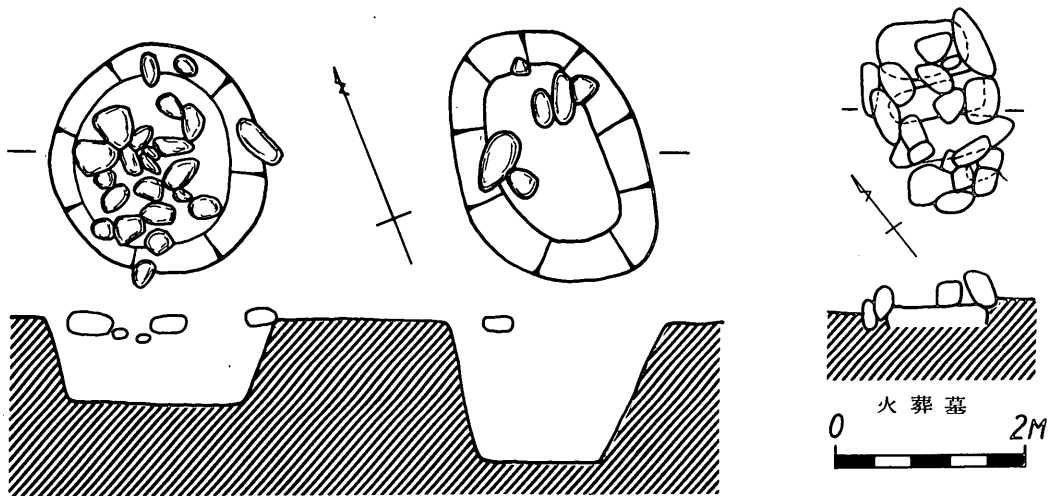


B-ツカノコシ石積下部遺構

第31図 ツカノコシ古墳・イソエ2号墳周溝・ツカノコシ古墳石積下部遺構 (1:80)



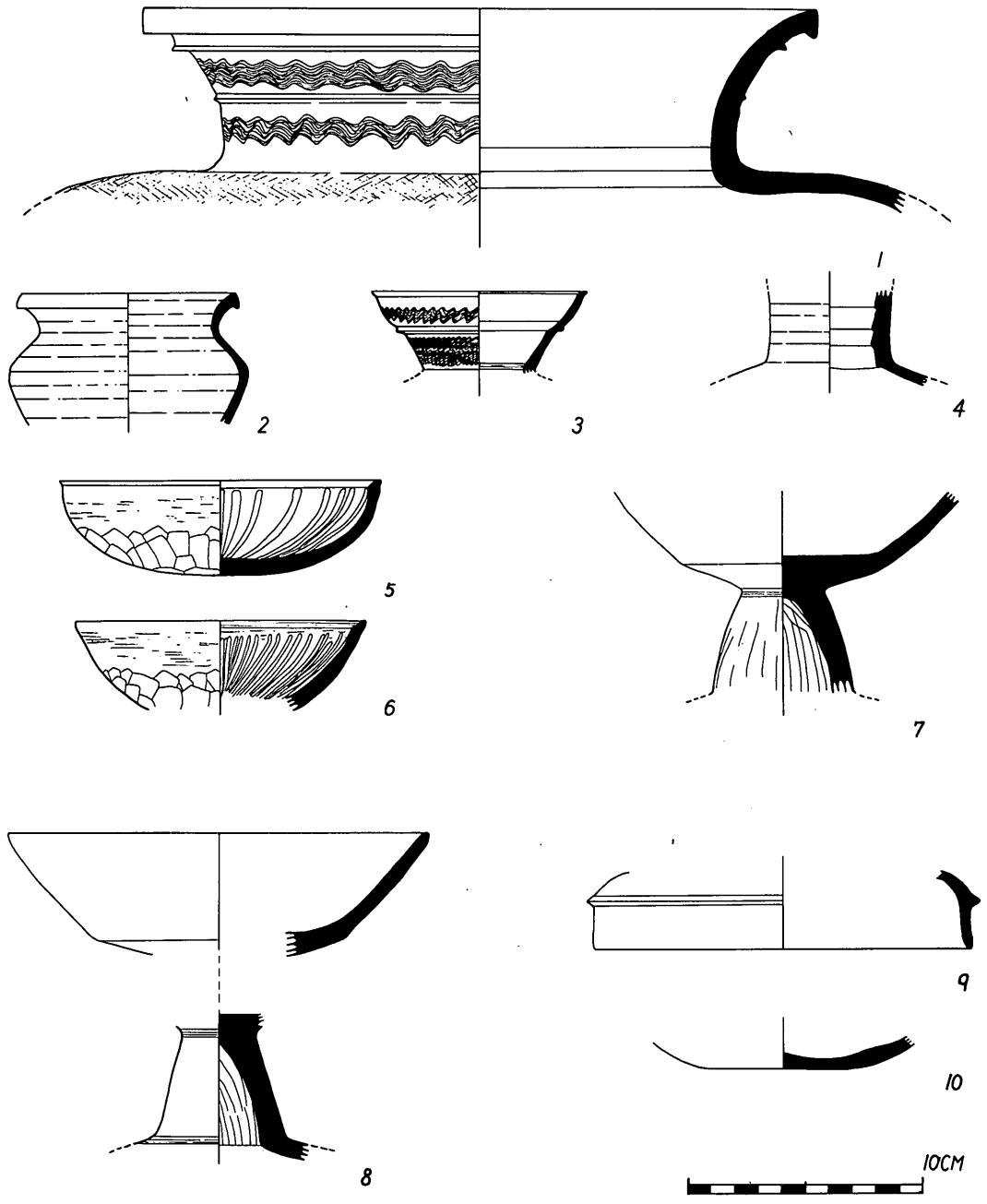
集石址



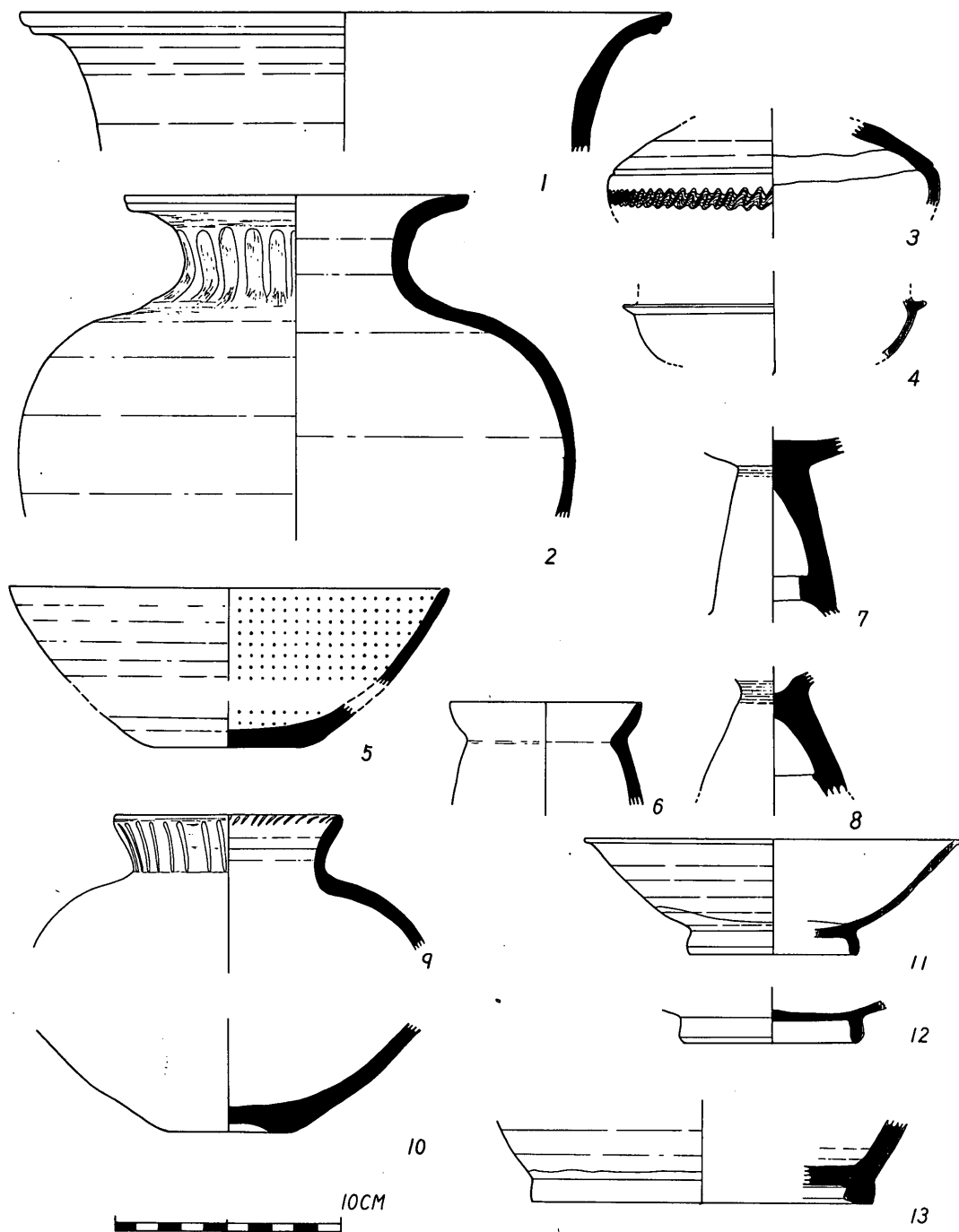
土坑 1・2

火葬墓
0 2M

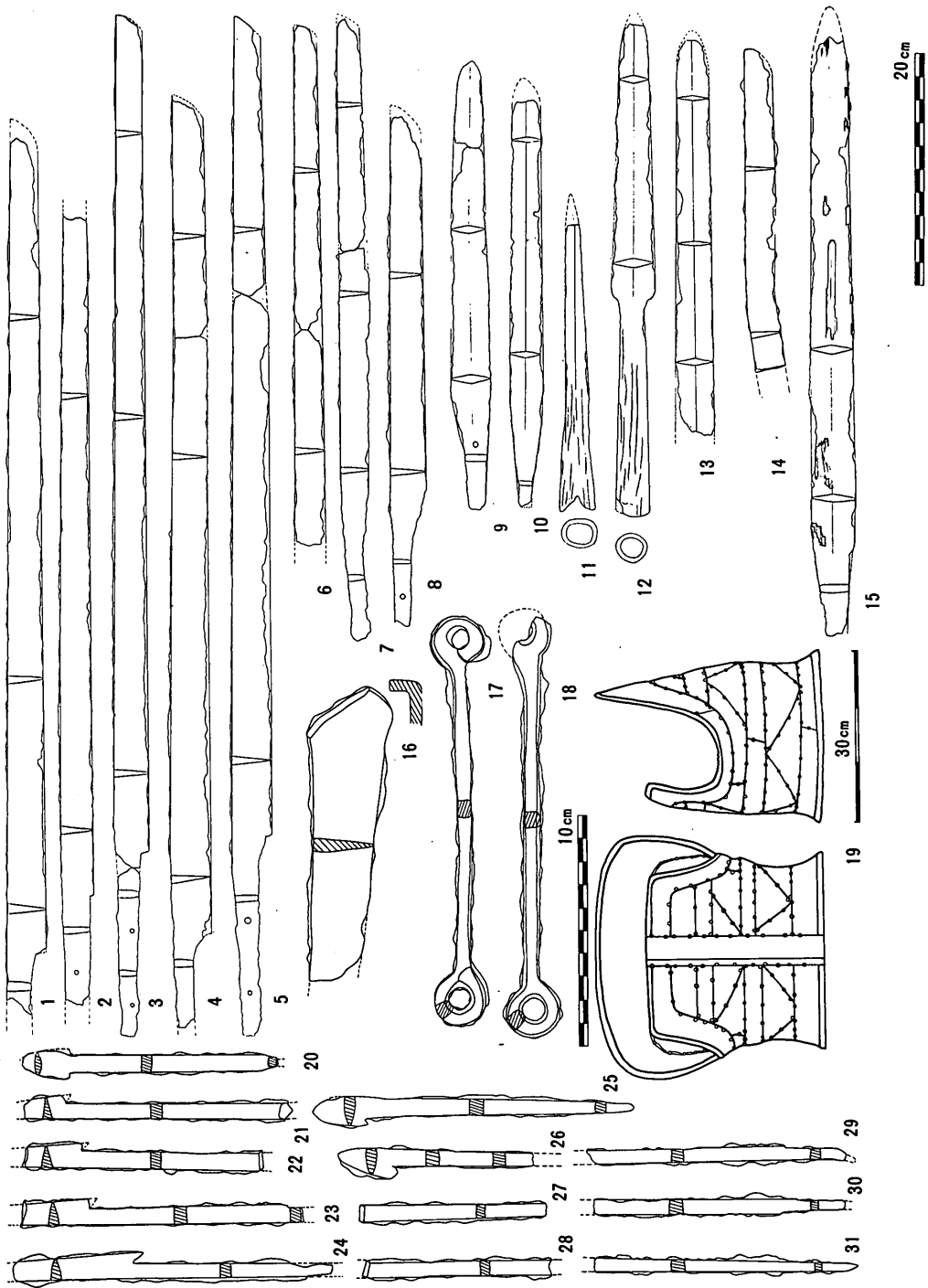
第32图 B—集石 土坑1・2 火葬墓



第33図 イゾエ1号墳・イゾエ2号墳 周溝内出土土器(1:3)
 (1~8) (9・10)



第34図 ツカノコシ古墳周溝内(1~10)・その他(11~13)出土土器(1:3)

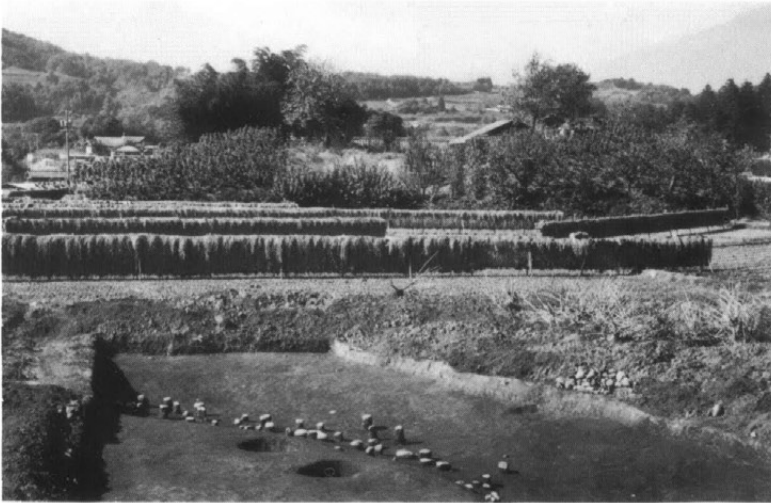


第35図 神送塚古墳(1~12・16~24)・イゾエ1号墳(13・25~31)・ツカノコシ古墳(14・15)出土遺物

図版 1 宮城遺跡・神送塚付近古墳群



A・B両調査区遠景（権現堂1号墳頂より）



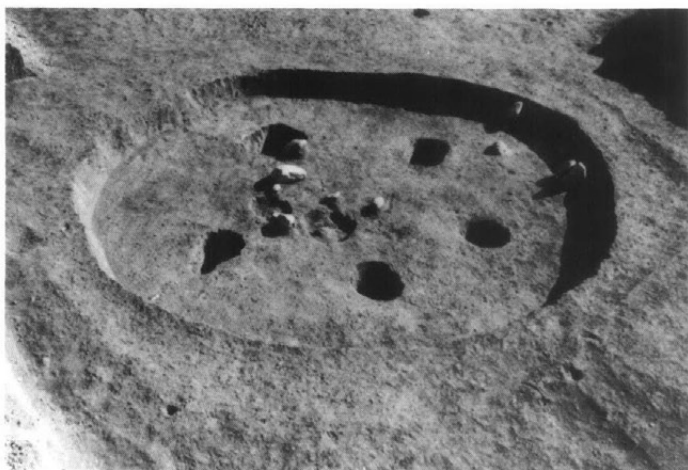
権現堂1号墳（井ゾエ1号墳より）



権現堂2号墳の現状

图版 2

1 号住居址
· 出土遺物



1 号住居址



1 号住居址出土台付土器



1 号住居址土器出土状态



正 面

1 号住居址出土深鉢

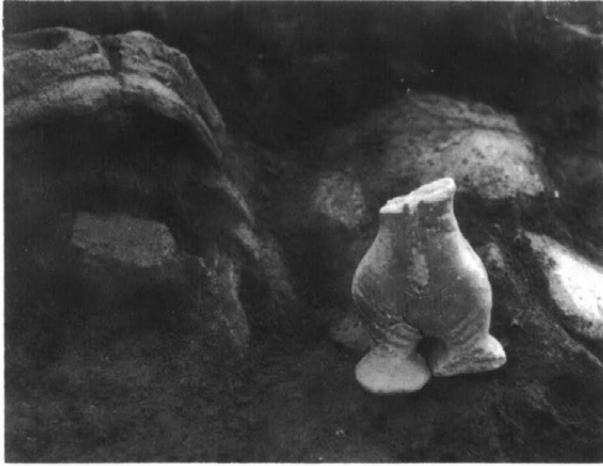


側 面



1 号住居址出土深鉢

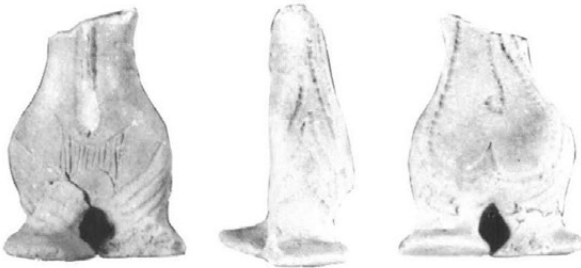
图版 3 1号住居址出土遺物



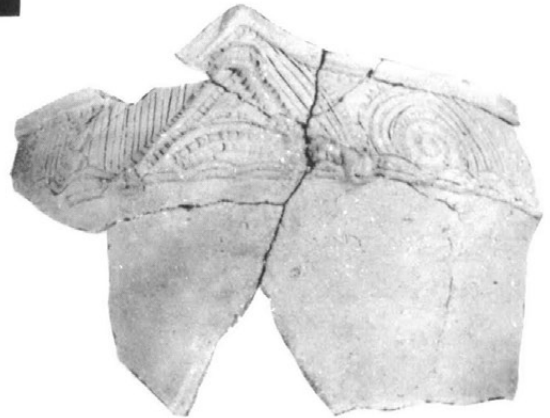
1号住居址土偶出土状态



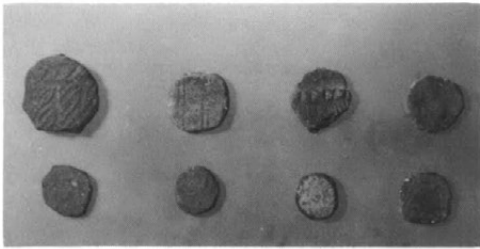
1号住居址出土小形土器



1号住居址出土土偶（正面，侧面，裏面）



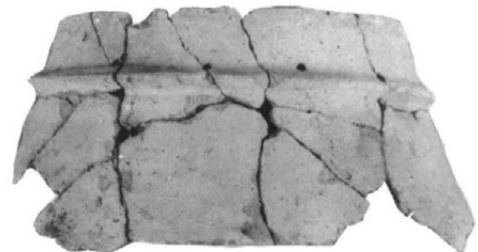
1号住居址出土深鉢



1号住居址出土土製円板

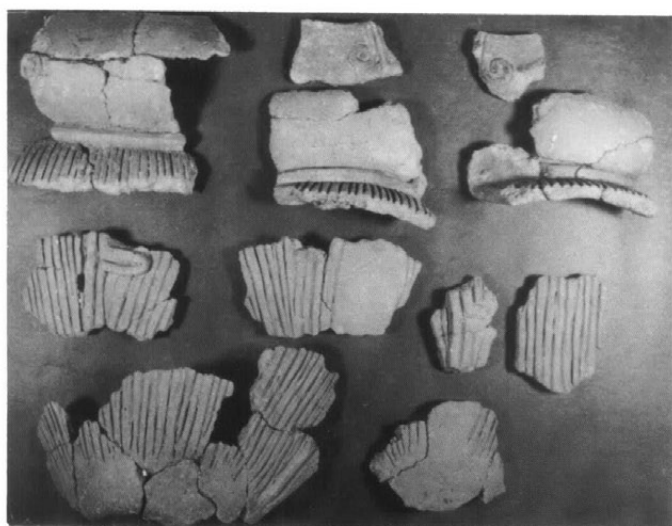
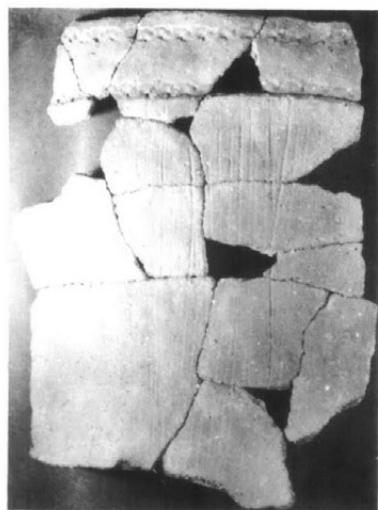


1号住居址出土石鏃

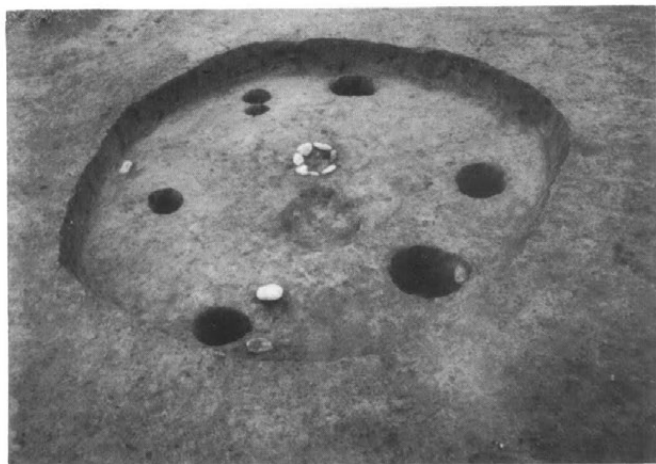


1号住居址出土鏤付有孔土器

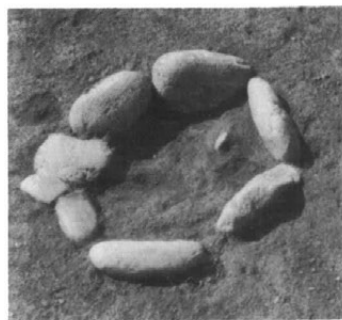
图版 4 1号住居址出土土器



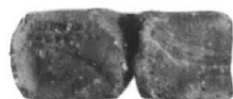
図版 5 2号住居址・出土遺物



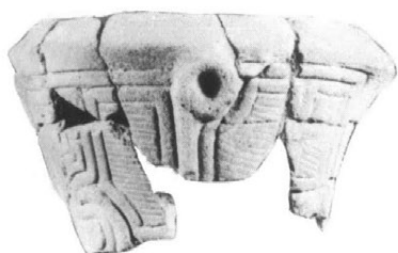
2号住居址



2号住居址 炉



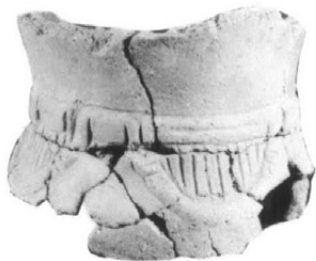
2号住居址出土土偶



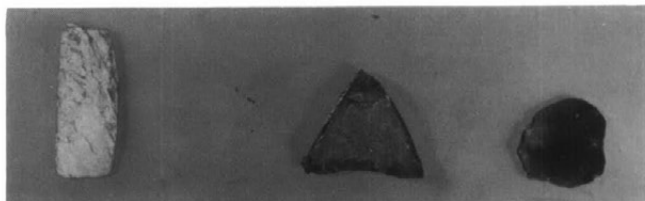
2号住居址出土深鉢



2号住居址出土土偶



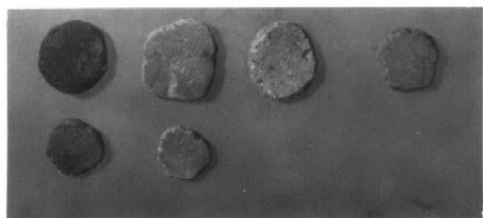
2号住居址出土深鉢



2号住居址出土石器 (小形磨石斧・スクレーパー)



2号住居址出土石鏃



2号住居址出土土製円板

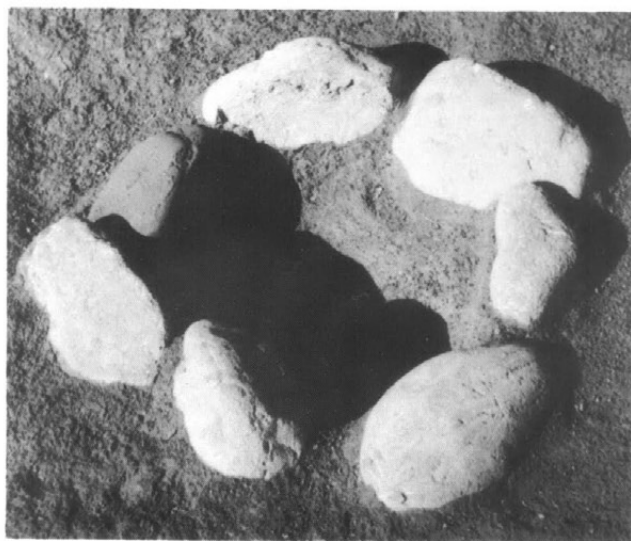


2号住居址出土土器

图版 6 3号住居址·出土土偶



3号住居址



3号住居址炉址

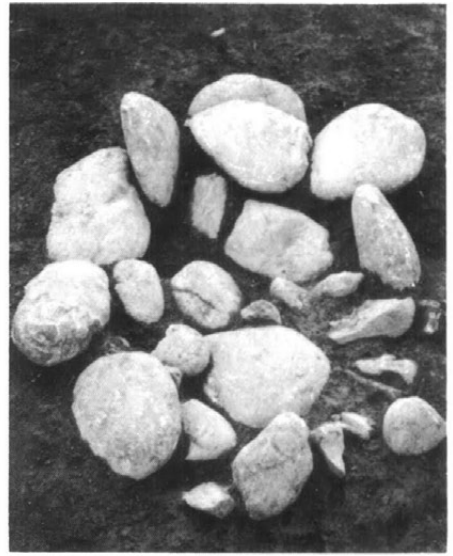


3号住居址出土土偶（正面，侧面，裏面）

図版 7 A区その他遺構



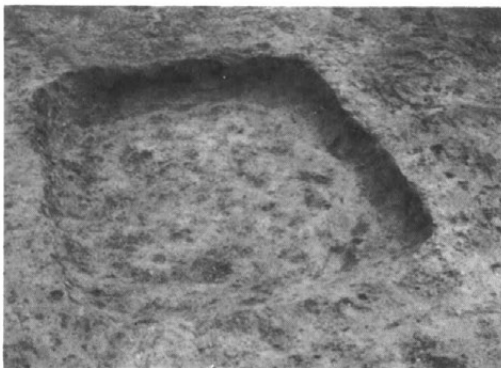
A区土塚1



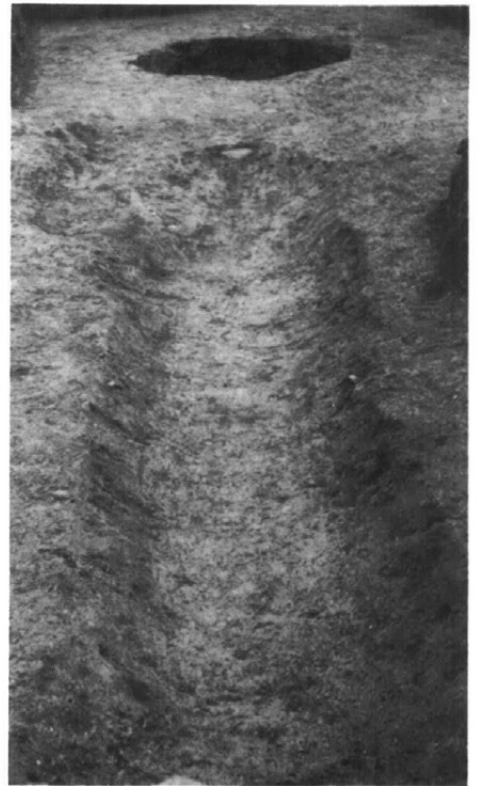
A区石組2



A区石組1



A区土塚2



A区溝址

図版 8 井ゾエ 1・2号周濠



B区井ゾエ1号調査区全景

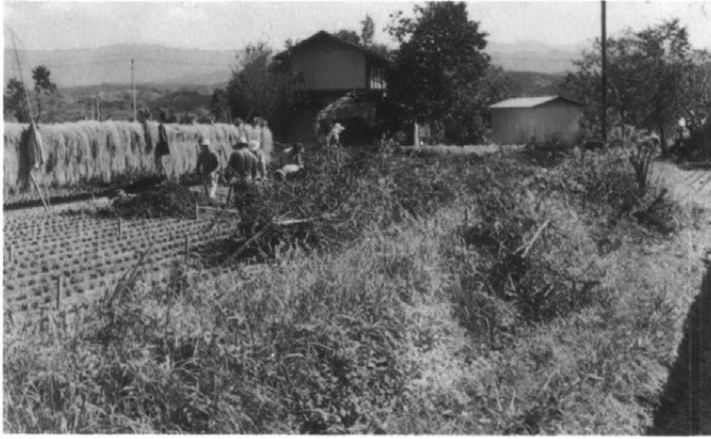


B区井ゾエ1号墳周溝内

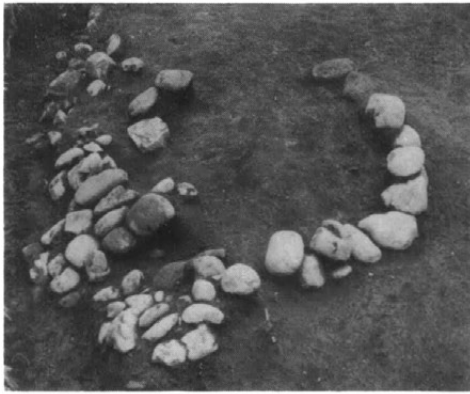


B区井ゾエ2号墳周溝内

図版9 ツカノコシ古墳・遺物出土状態



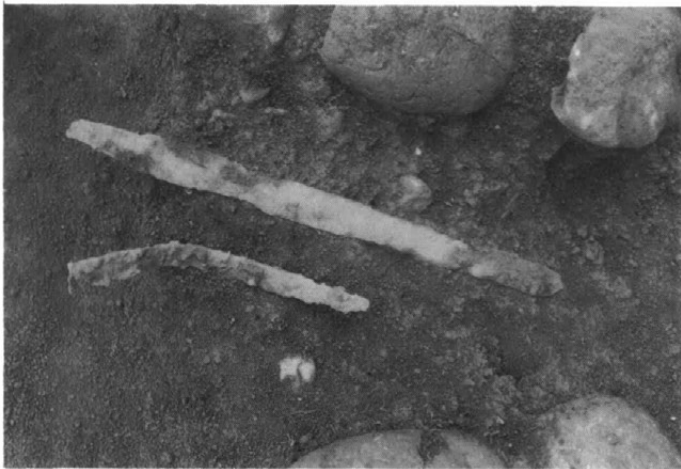
B区ツカノコシ古墳現状



B区石積下部の遺構



B区周溝内

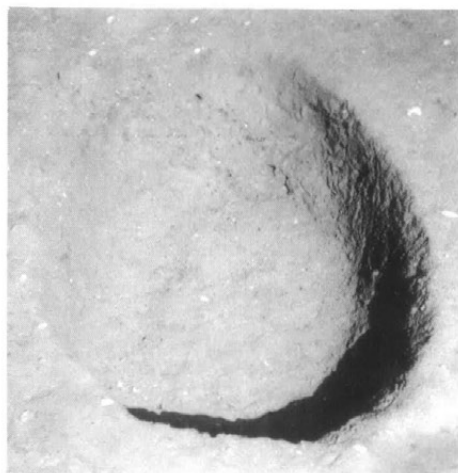


B区石積下部からの直刀、剣出土状態

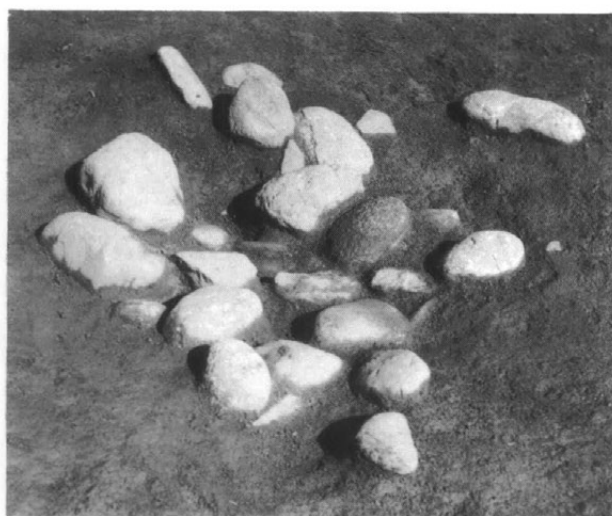
図版10 B区その他遺構



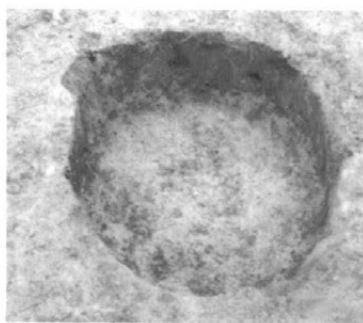
B区井ゾエ1号周溝上部の集石



B区井ゾエ1号土壇1



B区井ゾエ1号土壇2上面



B区井ゾエ1号土壇2下面



B区井ゾエ1号火葬墓下面



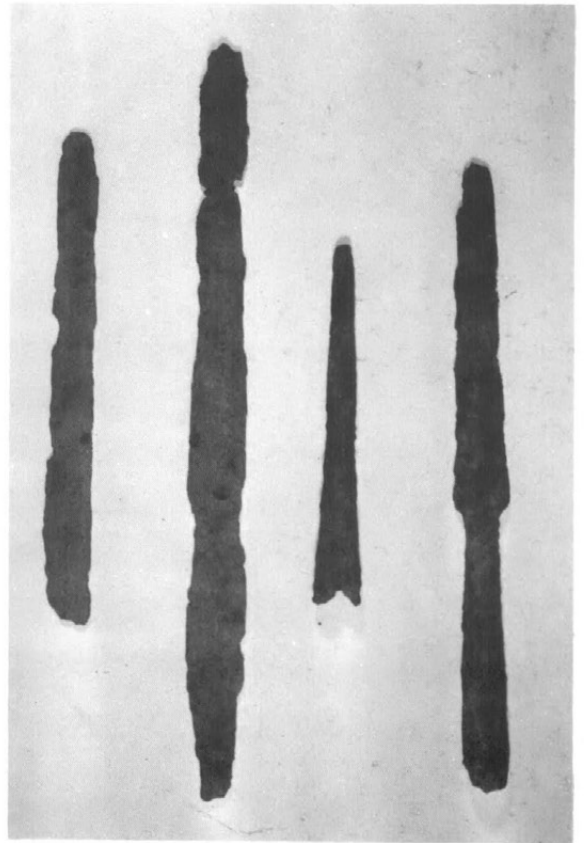
B区井ゾエ1号周溝上面の火葬墓上面



神送塚推定所在地

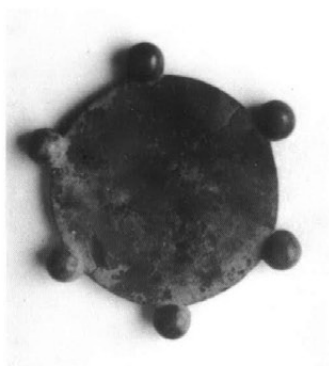


神送塚出土短甲



神送塚出土劍，槍，矛

図版12 神送塚古墳出土遺物

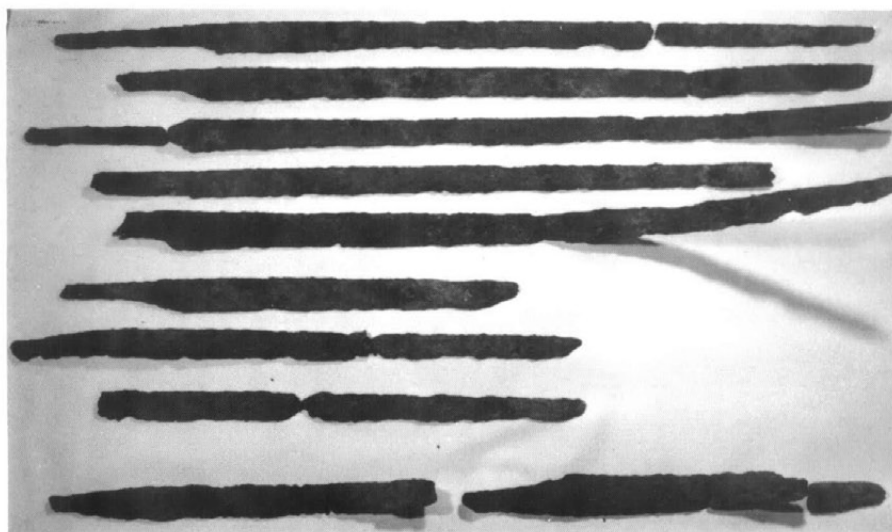


神送塚出土 六鈴鏡

神送塚出土伝 青銅鏡



神送塚出土鉄鏃、馬具、鎌



神送塚出土直刀、劍



調査スナップ



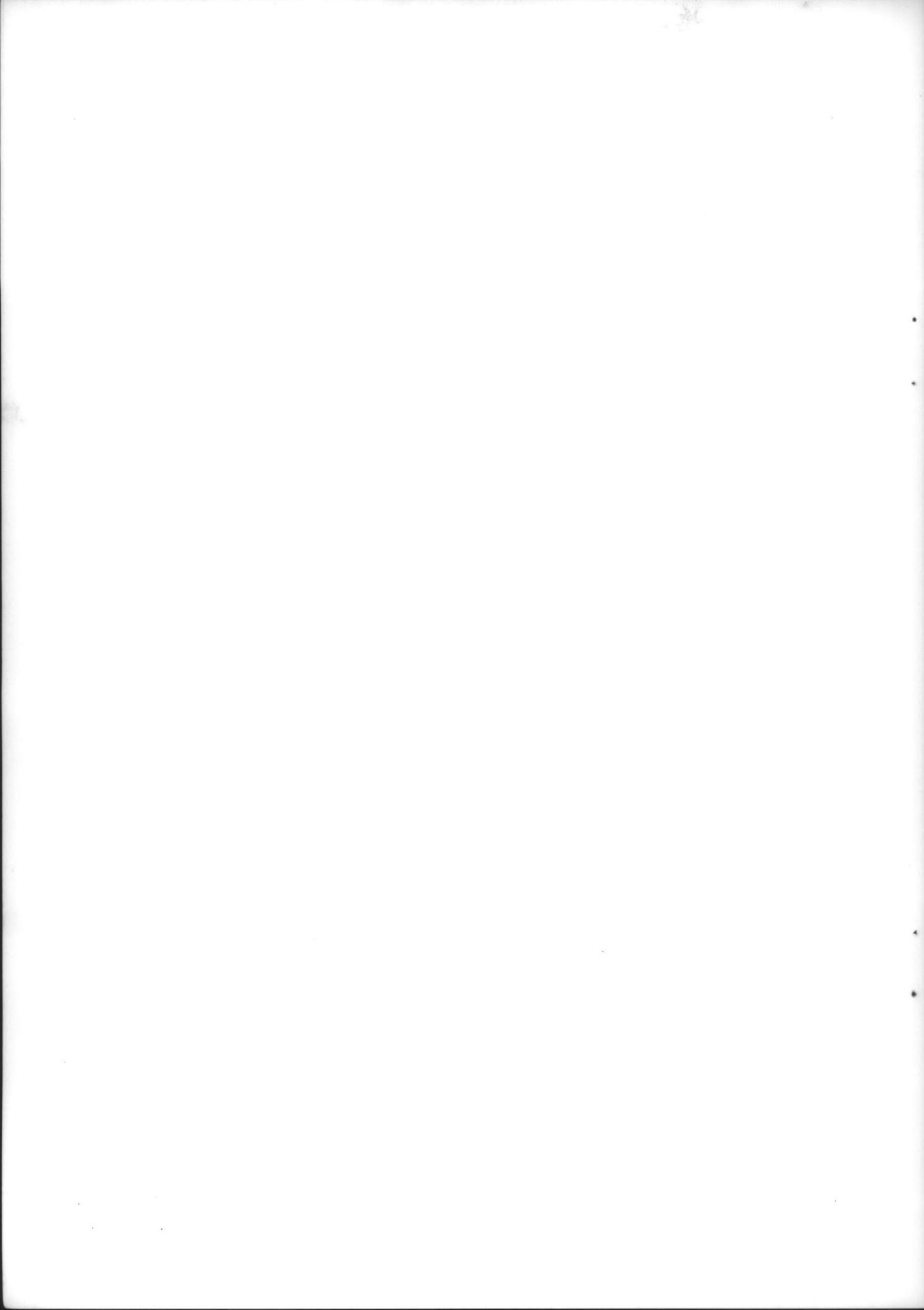
調査スナップ 井ゾエ1号周溝の調査



調査スナップ
ツカノコシ古墳
石積下部の調査



調査スナップ 住居址の調査



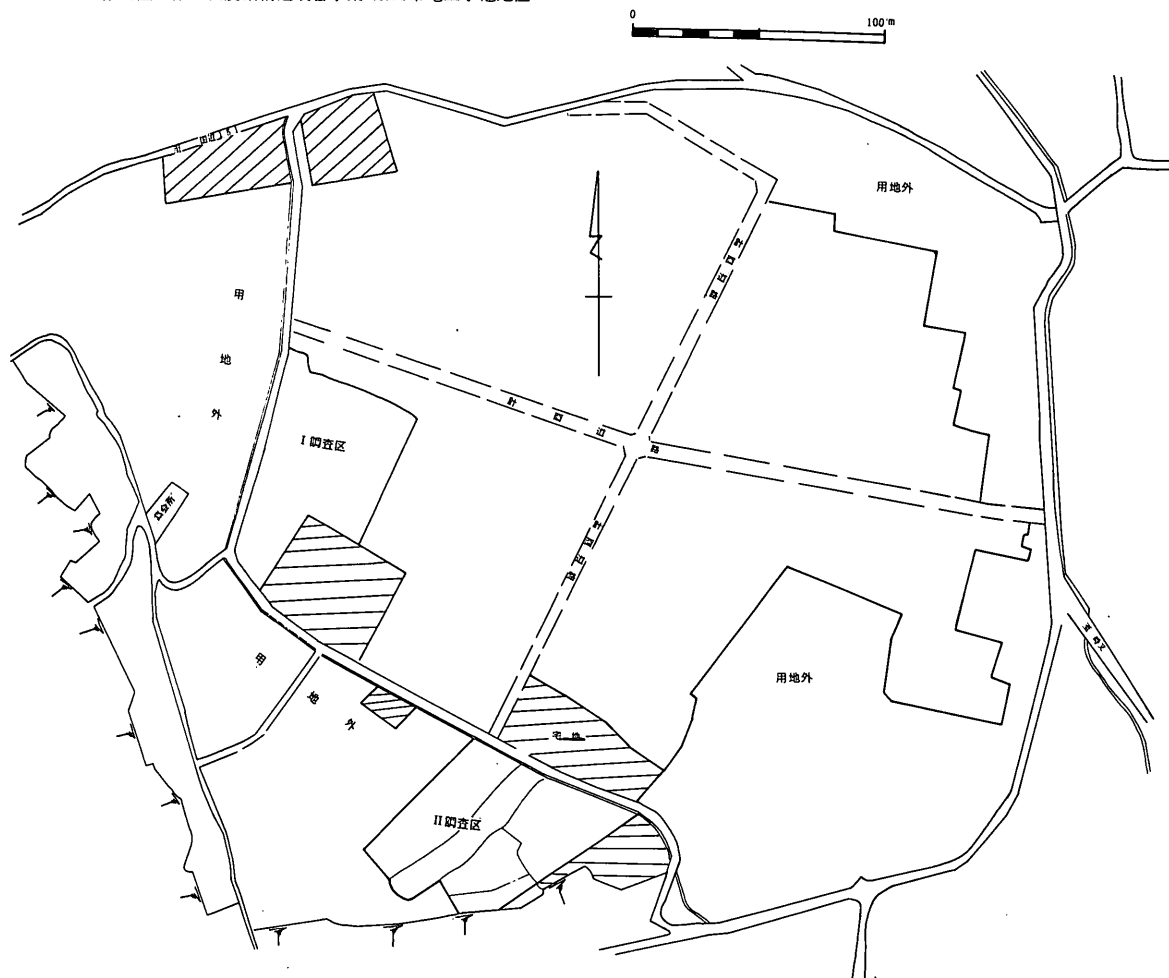
2. 小池遺跡

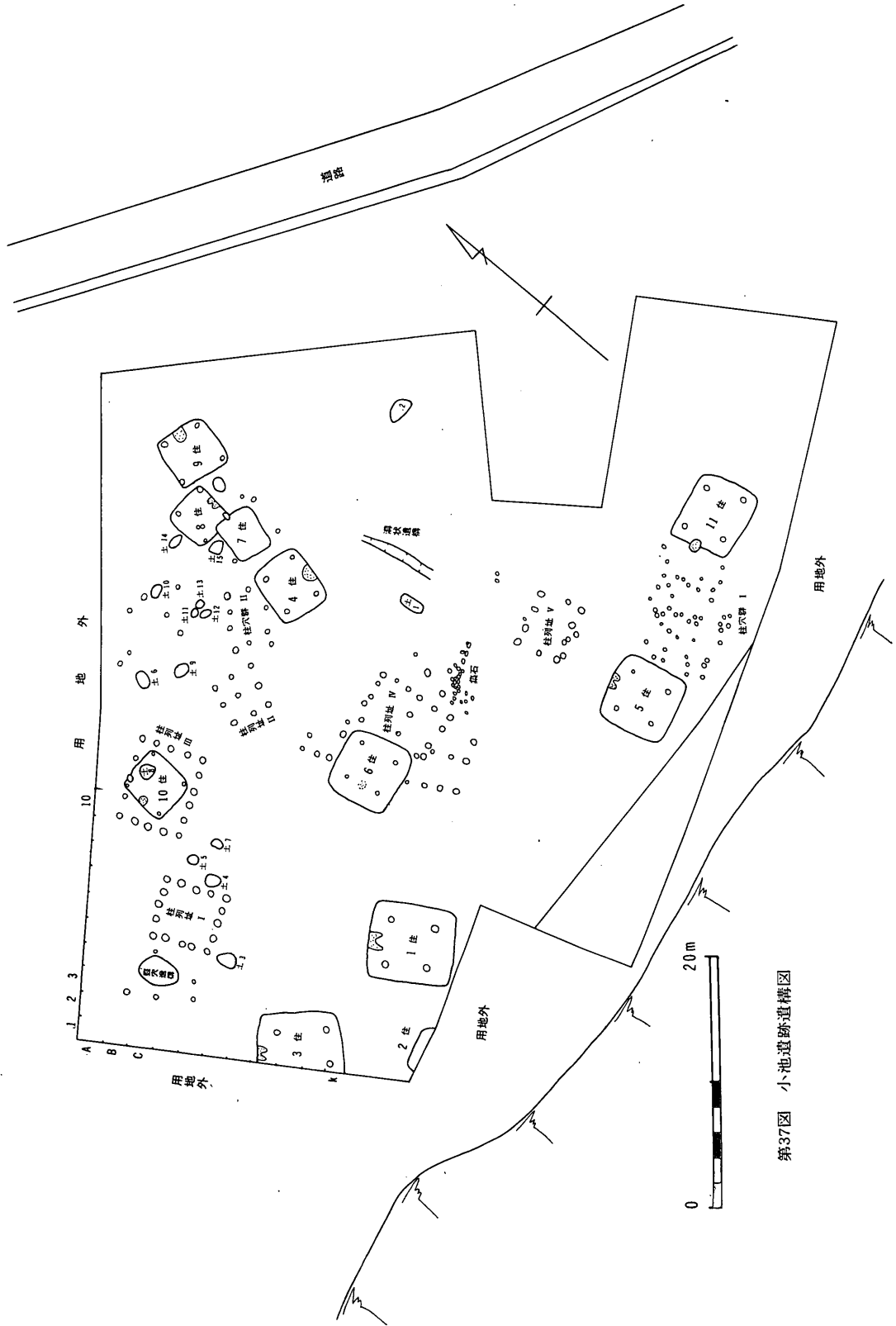
(1) 小池遺跡の位置 (図1)

国鉄飯田線時又駅より北西430 mに調査地区があり、竜丘小学校のある桐林面を北に、段丘崖を通る国道151号バイパスを西にして比高差20 mの段丘崖下に南から東に広がる小台地で、西は駒沢川の浸蝕谷によって塚原古墳群に対し、南には川路の天竜川氾濫原を見下し、東から南にかえて天竜川東岸の竜江地区を一望にする位置にある。

小池台地は南西側が高く、北東にいくに従い低地形となり、湿地帯となっている。農業改善事業面積は5.1 haであるため、分布調査により遺物の最も集中して採集された西側の畑地を第I調査区とし、南西端の道路より南側の微高地をなす一画を第II調査区とし、これを重点調査地区とした。(図36) 工事進行により、大部を占める湿地帯については遺構発見の際調査することにしたものである。

第36図 第二次農業構造改善事業 飯田市竜丘小池地区





第37図 小池遺跡遺構図

第Ⅰ調査区は南北・東西方向の1列をグリッド調査したが、表土下は粘質の土壤で、地下水は高く湧水のため調査不能であり、表採遺物の多かったのに対し下層よりの遺物はなく、遺構の発見もなく調査を断念した。おそらく表採遺物は西の微高地よりの流入とみられた。このため、第Ⅱ調査区に重点をおき調査したものであり、工事中の湿地帯よりの遺物・遺構は検出されなかった。

(2) 遺構と遺物

小池遺構で発掘調査した遺構は次のようである。

住居址 11 (弥生時代後期1, 古墳時代4, 平安時代6)

柱列址 5

竪穴遺構 1

柱穴群 2

土坑 15 溝状遺構 1 集石址 1

小池遺跡は耕土の下は水田の床土があり、この下は粘土質の土壤となり、ローム層となる。住居址の覆土は粘質土のため、出土した土器はいずれも脆く、器肌のはげているものが多い。

ア 住居址

ア) 弥生時代後期

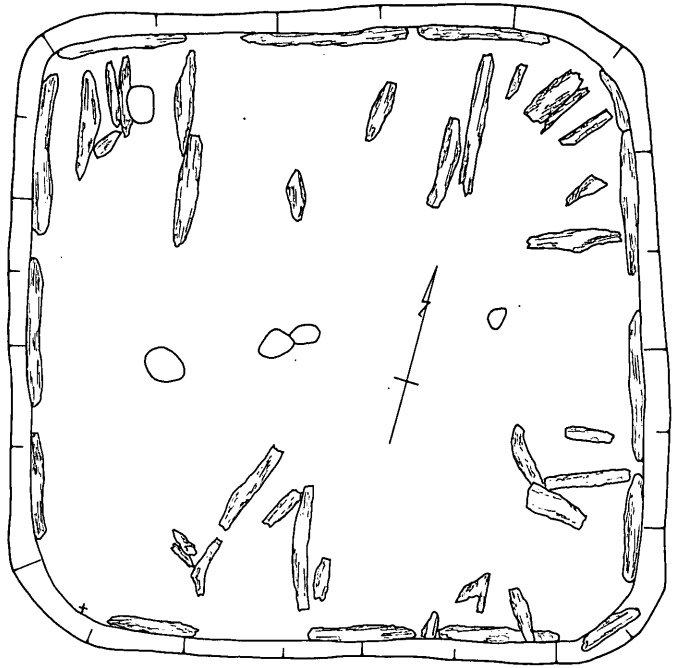
6号住居址

遺構(図38) 第Ⅱ調査区のほぼ中央部にあって5m×5.20mの隅丸方形の竪穴住居址、主軸方向はN17°Wをはかり、壁高40cmと比較的深い。主柱穴は4個、整った配置にある。炉址は西側の2柱穴間の中間にあって、南側に枕石1個を置き、北側に焼土塊があり、浅い掘り込みをなすものである。南壁に沿った西寄りには平らな焼土塊があり、南西隅に深さ22cmの台形のビットがある。これに住居址のほぼ中央から浅い溝がついてつながっている。今までは貯蔵穴とみられていたものであるが、この住居址では排水用のものと判明された。

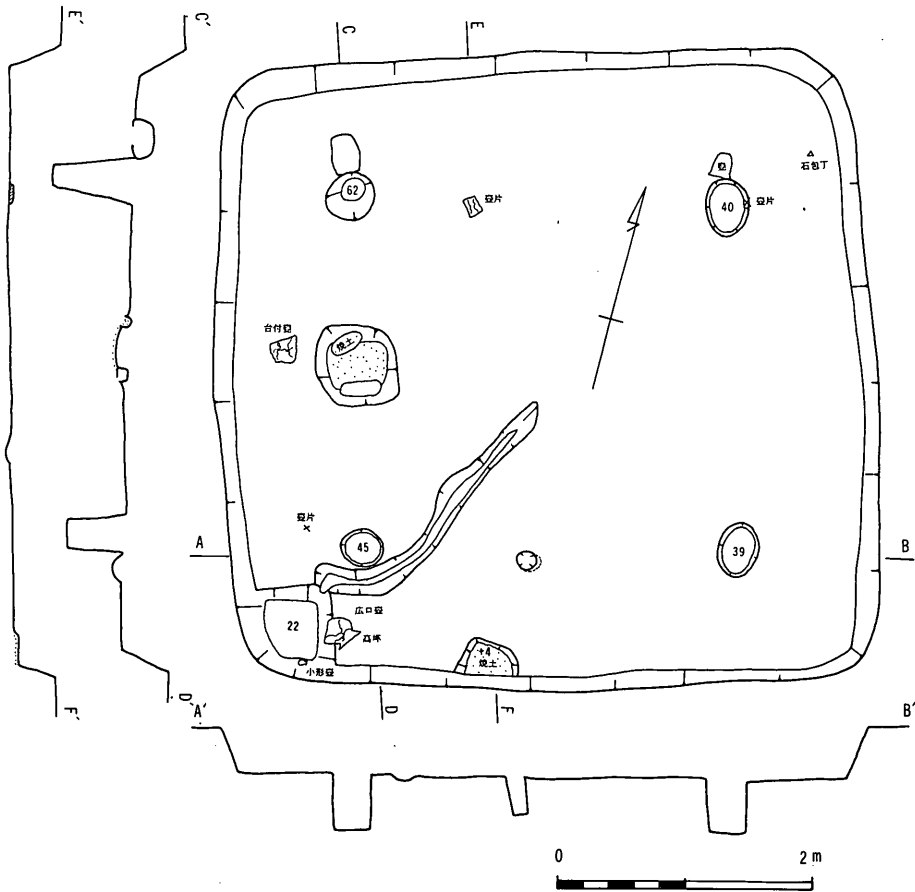
火災にあっていいため、住居址の構造を知る資料が得られた。壁は下に丸太を置き、これを押えとして板を立てかけている。このため壁は火災のため真赤に焼かれていた。床面には草の繊維とみる細い炭化物がみられ、住居址の中央の広い範囲は厚い灰の層があり、茅葺の屋根が焼け落ちた跡がみられた。

遺物(図59) 火災の住居址のため、遺物は原位置にあった状態で出土をみている。1の壺形土器は3個所に散らばり、2・3・6の広口壺、小形壺、高坏は排水穴の縁に4の甕は北東側の柱穴の北に、5の台付甕は炉址の西側に、いずれも床面に横倒しとなって出土し、8の石包丁は4の甕の東側の壁ぎわにあった。

壺形土器1は口径14.2cm、口縁部に縦の沈線、頸部に楯描きの5本の横走直線文とこの上下に振幅の大きな同位方向の波状文が施されている中島式の土器である。



小池6号住居址 火災跡



第38图 小池6号住居址

広口壺2は、口径16.8cm、高さ17cm、胴部は横にふくらみ断面が楕円形をなし、頸部が外側へカーブしながらのび、口縁部が更に段をなして強く外反する。口唇部の口縁部の段をなすところに竹管による小さな円文が並び、胴上半部に二段の楕描きの横走直線文が、下段の横走直線文には、縦の不規則な沈線が施される。朱彩ともみる赤色を呈すが、火災による変化であるか、器肌の荒れではっきりしない。古式土師器の形式にみられるタイプに近く、元屋敷広口壺E類に属する弥生時代終末の東海地方移入の土器である。

小形壺3は、口径6.5cm、高さ7.3cm、黄赤色を呈し、胎土は精良であるが、焼成は良くない。器台にのるものとみられるが、器台は発見されなかった。

甕形土器4は丸窓付土器で、口径12.5cm、高さ14.1cm、円窓は径5.4cmの円形で焼成後に穿孔している。赤褐色を呈し、無文の中島式の甕である。

台付甕形土器5はS字口縁をなす欠山式の土器で、口径15.2cm、台部を欠くが、復元可能のものである。高坏形土器6は脚部を欠く。黄赤色を呈し、胎土精良なもので、欠山式の後につく弥生終末期のものともみられ、5・6はともに東海地方移入の土器である。

石器は、7・8の打製石包丁の2個がある。7は出土位置が不明、重量は7は50g、8は35g、硬砂岩製、飯田地方弥生時代後期に最も多くみられる石包丁のタイプである。

イ) 古墳時代

1号住居址

遺構(図39) 南側は用地外ぎりぎりに、南西3.5mに2号住居址、西4mに3号住居址がある。6.40m×6.80mの隅丸方形の竪穴住居址、主軸方向N30°Wをはかる。壁高12~15cmと浅く、床面は南にやや傾斜し、粘質土の湿気を含むため検出に苦労した。主柱穴は4個、整った配置にあり、竈は北壁の中央部に密着し120cm×120cmの大きさを測るが、水田造成の際上部は削られ、原形を失っていた。

遺物(図60・61) 遺物は竈の東側に北壁面に平行してほぼ1列に2~8、10~15の土器が、竈西側には1の土器が横倒となり、竈の内部には9の甑と甕の破片が散らばっていた。おそらく住居内に置かれた原状を保って出土したものとみられる。

甕形土器(1~5) いずれも胴最大径は胴上半部にあり、1は口径21.7cm、高さ37cmの長胴、径7.3cmの不安定な平底をなし、胴最大径29.7cmをはかる。頸部は垂直ぎみに立って口辺部で緩く外反する。口縁部には横なで、胴部には篋削り痕がみられる。2は小形甕、口径12.5cm、高さ12.3cm、4は口径15.2cm 2と同じ胴ののびない平底とみられ、ともに口縁部に横なで痕がみられる。3は口径15.9cm、高さ22.9cm 口縁部は横の刷毛目、胴部は縦の篋削り整形がみられる。2~4は球形をなし、頸部は「く」の字状に折れ口辺部は外反し、3・4は頸部内面に稜をもつ。5は口径23.2cmの大形甕で、口辺部は削られ、胴下部は欠かされている。竈の上のにせ、1の甕の支えとする台に使用されたとみられる。

甑形土器(6~9) 6・9は瘤耳把手付大形、単孔で、口辺部は6はやや外反をみせ、9はほぼ垂直に立ち上がる。6は底部から胴部は丸味をもち、砲弾形になる。口径、高さともに21.4cm、口辺部から6cm下がって把手が付く。9は口径23cm、把手は口辺部から9.2cm下がって付く。ともに焼成はよく、刷毛目整形痕が僅かに認められる。小形甑7・8は鉢形の単孔、ともに焼成良く赤褐色を呈し、胎土は長石粒を多く含む。口辺部は内外面とも横なで、胴部は篋磨き、底部は篋削り痕をもつ。

坏形土器(10) 胴部は扁球状をなし、口縁部はゆるく外反する。口径9.6cm、高さ10cm、胎土、焼成良く赤褐色を呈し、器面は平滑である。

埴形土器(11~14) 素縁口の11~13は丸底、口径14.7cm前後、高さ4.5cm前後のほぼ同じ大きさをなし

口縁部は11は直立し、12・13はやや内屈を示す。立上り口辺をもつ14は口径14cm、高さ4.8cm、口辺部はやや外反しながら直立する。いずれも内面黒色である。

碗形土器(15) 口辺部は外反し、丸底、口径13cm、高さ7.1cm、口縁部と胴部の接合部の外面に稜線をもつ。胎土良く、焼成はもろく黒と褐色を呈す。

1号住居址の土器には須恵器の出土はなく、鬼高I式の特徴をもつ甕・坏・埴があり、これに長胴甕・内面黒色土器の出現、瘤耳把手付大形甕をもつことからみると鬼高I式からII式に移行する時期と考えられ、6世紀後半から7世紀初頭と推定される。

2号住居址

遺構(図40) 用地区域の南西端にあって大部分は用地外のため、住居址の北側4分の1程度の調査にとどまった。水分の多い粘質土のため床面検出に苦労した。東西3.55m、壁高37~40cmの小形の隅丸方形となる竪穴住居址である。柱穴は発見されなかったが、西壁に接して土壇状のピットがあるが遺物には差は認められなかった。

遺物(図62・63) 土器の出土量が多いが大部分が半壊品で、粘質土のため器肌は荒れ、脆くなっていた。

壺形土器(1・2) 1は埴ともみられ、口縁部は直に立上りが外反する。胴部は球形となり、口径12.5cm、胴最大径は17.7cm、輪積製作痕をもち、口縁部から胴上部は刷毛目、胴下部には篋削り痕がみられる。2は頸部がくの字状に鋭く折れて、口辺部は大きく外反し、胴部は大きく張るとみられる。

甕形土器(3~9) 大形に3・4がある。3は口径26.4cm、胴最大径28.3cm球形となる。4は口径22.4cm、胴最大径27.2cm長胴となる。ともに刷毛目整形が施されている。5の小形甕は口径9.5cm、高さ8.8cm、輪積製作により接合部に指圧痕を内面にもち、頸部の接合は両面に指圧痕が認められた。口縁部はくの字状に外反する。6・7はやや小形、8・9は中形で、9はやや胴がのびるが他は球形をなす。いずれも口縁部は、くの字状に大きく外反し、頸部内面に稜をもつ。頸部から口辺部にかすかに刷毛目痕がみられる。

甕形土器(10)は鉢形をなし、平底18個の径6~7mmの甕穴をもつ多孔式で、焼成前にあけられている。横と斜の刷毛目痕がみられる。

高坏形土器(11・12) 坏部のみであり独立した坏とみられるが、脚部の接合部より離れたものである。口辺部は大きく外反する。

坏形土器(13)は口径14.2cm、高さ5.2cm、素縁口辺で、口辺部はやや内屈し、外面は横なで、底部は篋削り痕がみられ、内面黒色である。

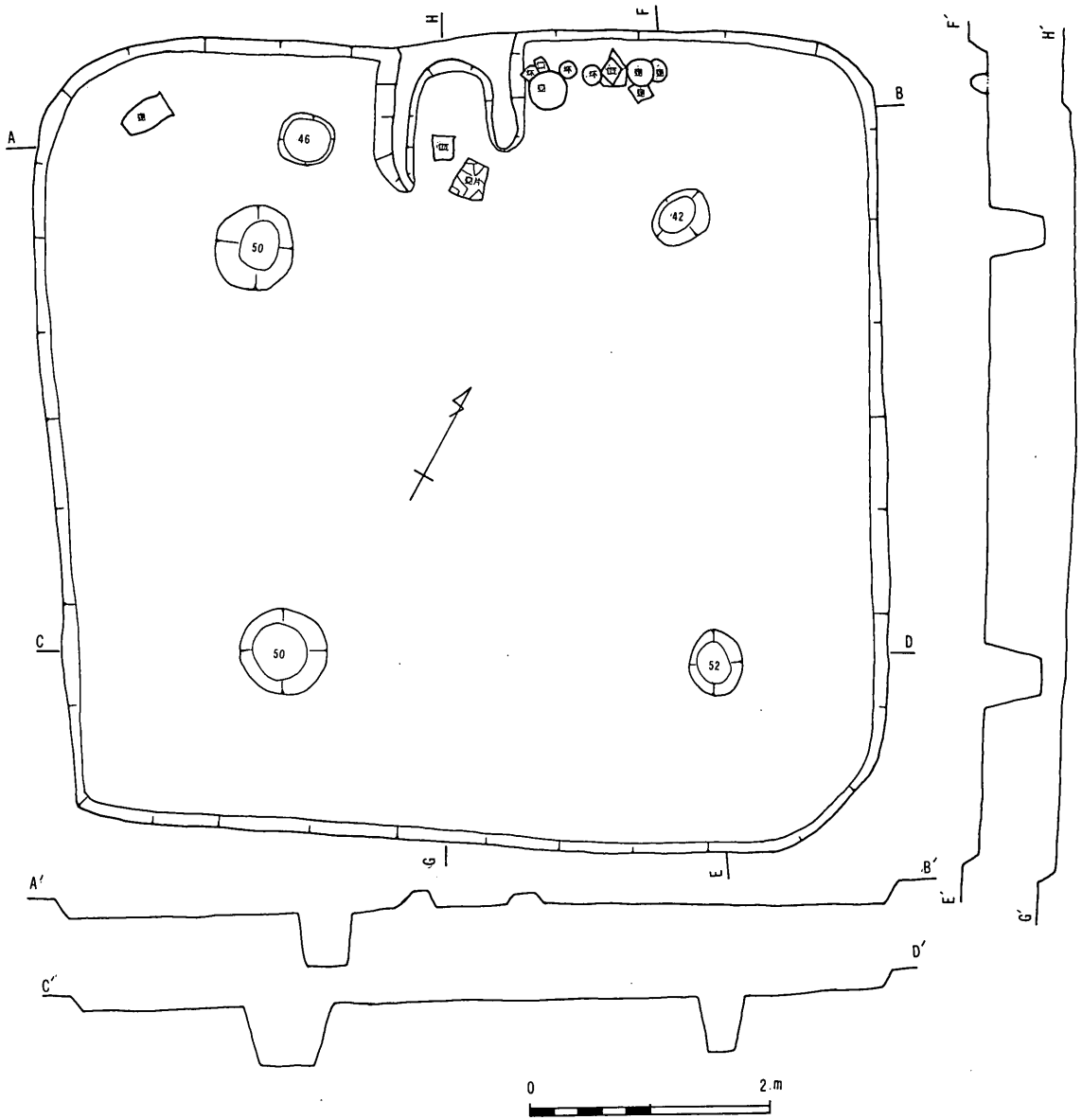
2号住居址の遺物には須恵器の伴出はなく、鬼高I式を主体にし、4の長胴甕の出現からして、1号住居址と同時期と考えられる。

3号住居址

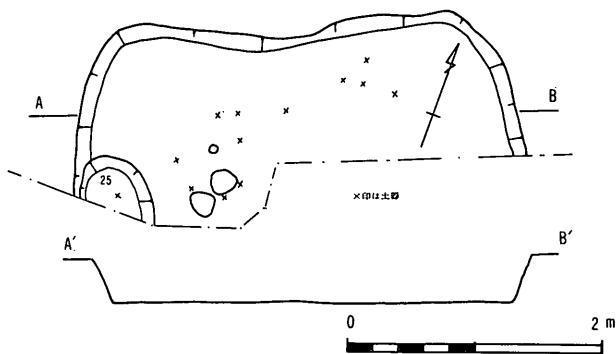
用地の西端に発見され、3分の1以上は用地外となり、調査できなかった。1号住居址の西4m、2号住居址の北西5mにある。

遺構(図41) 南北6.80m、隅丸方形の竪穴住居址で壁高20cm、主軸方向N50°Wをはかる。主柱穴は4個とみられ、北西壁に竈は密着し、2分の1は水田造成の際に切られているが、推定1.5m×1.5m大とみられ、粘土竈で中に土器片を挿入して補強している。

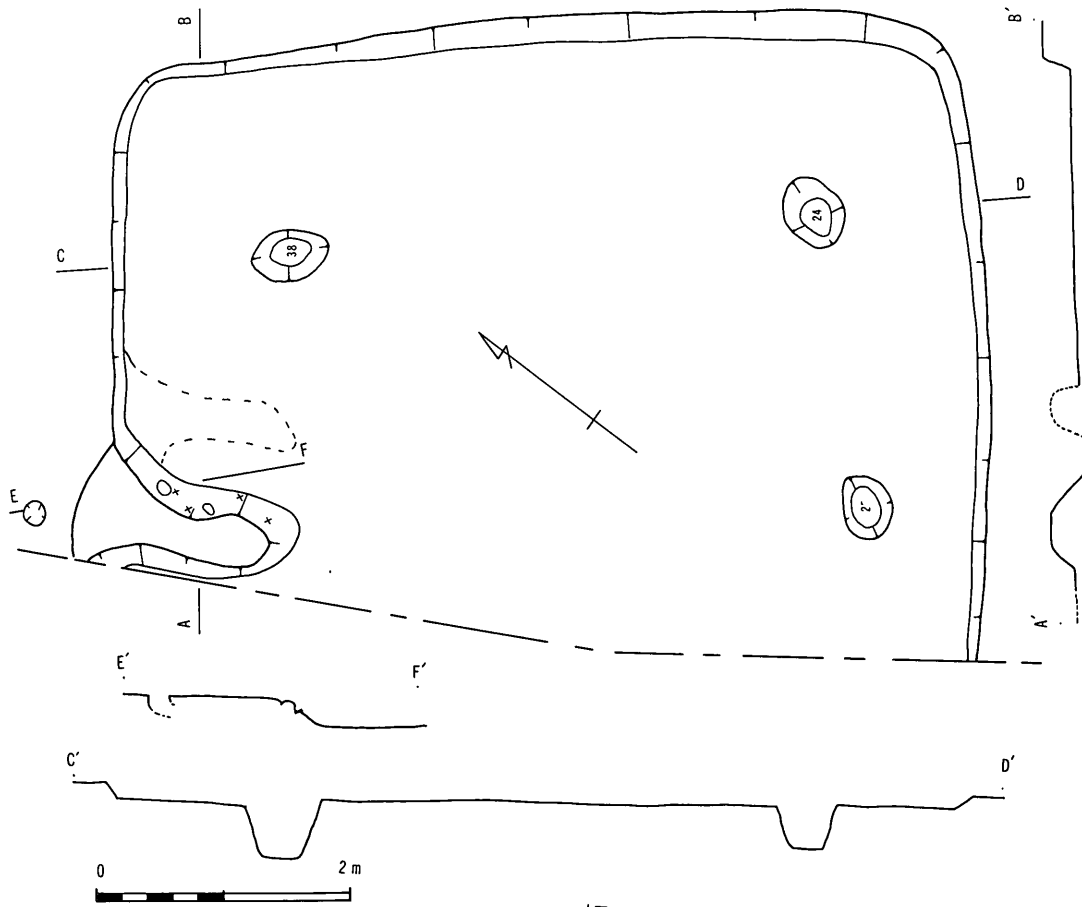
遺物(図64) 土師器と須恵器がある。土師器には、甕形土器1は口径18cm、高さ34.5cmの長胴形で胴



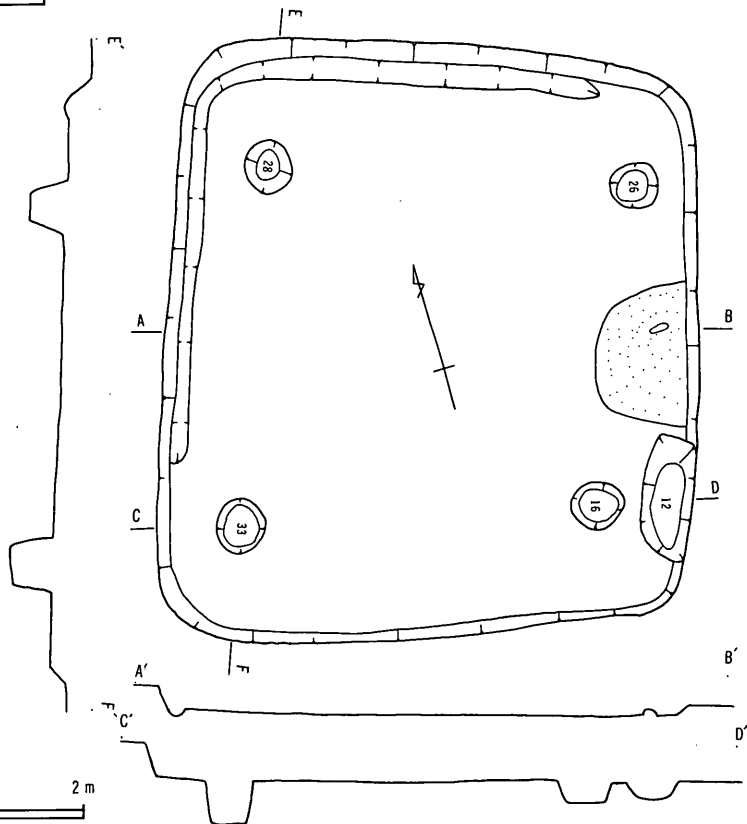
第39图 小池1号住居址



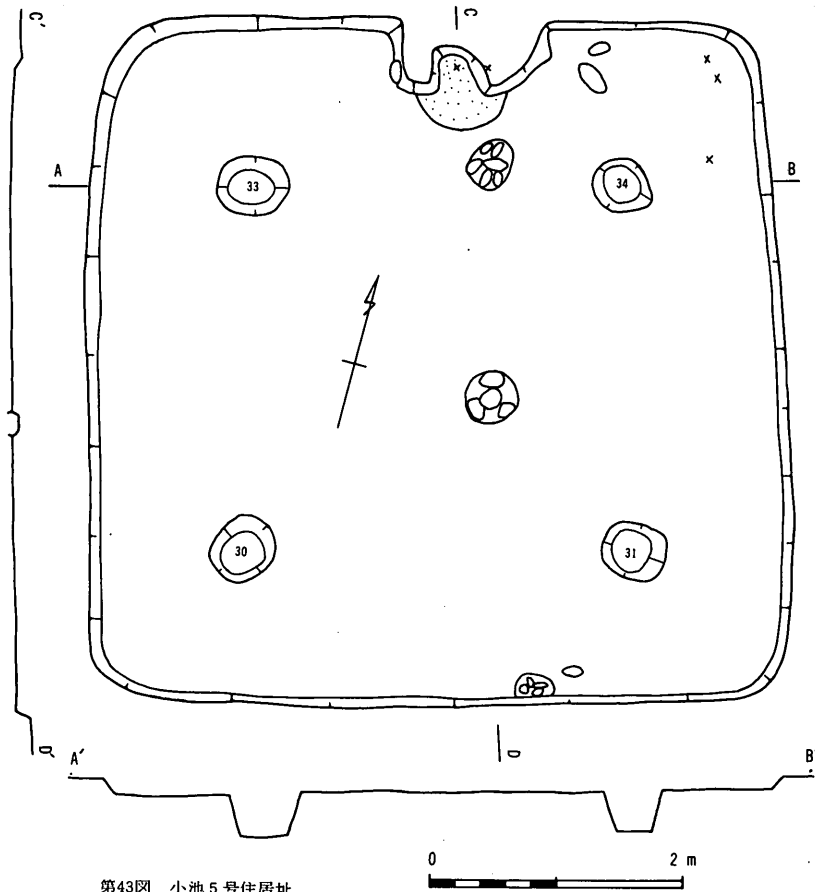
第40图 小池2号住居址



第41图 小池3号住居址



第42图 小池4号住居址



第43図 小池5号住居址

最大形は胴中央部にあつて径22.7cm，口縁部はやや外反して立ち，口辺部でさらに外反する。口縁部には横なで，胴部に刷毛目痕が認められる。坏形土器4は素縁口辺，口辺部は直立し，内面黒色である。5は脚部を欠くが器台とみられる。口径11.1cm，内面黒色，外面は横なで，淡赤褐色を呈す。

須恵器2・3は蓋坏の蓋部で，黝黒色を呈し胎土，焼成精良なロクロ技術の優れた古い様式にみられるものである。

5号住居址

遺構(図43)1号住居址の東20m，用地の南端部近くに発見され，10mで南は段丘崖となる。南北5.4m×東西5.55mの隅丸方形，壁高10cmと浅い竖穴住居址である。主軸方向N22°Wをはかる。主柱穴は4個整った配置にある。竈は北壁に密着しているが，上部は水田造成時に削られ原形を残さない。3個所に礫を円形に置くのが床面に密着してあるが，性格は不明である。床面は固く北から南に中央部に後の溝が浅く掘りこまれていた。

遺物（図65の1～6） 土師器に須恵器が伴出している。土師器は、甕形土器1～4があり、1～3は胴部は球形をなすとみられ、口縁部はくの字状に大きく外反し、2・3は頸部内面に稜をもつ。3は口径21cmの大形、2・3は口径17cm、2は横なで、1は刷毛目痕を3は口縁部は横なで、胴部には篋削り痕が認められる。4は長胴となり、口径14cm、口縁部は大きく外反するが胴は張らず、最大径13.7cm、緩く胴下部へ下がっていく。坏形土器5は素縁口辺で、口辺部はやや内屈をみせ、内面は研磨され、赤色、外面は平滑、赤褐色を呈す。

須恵器6は口径10.7cm、坏とみられる。胎土、焼成精良、ロクロ技術の優れた古い様式とみられる。灰黒色であるが、表面には自然釉がさかり黒色を呈す。3本の細い横走沈線文が引かれている。

3号住居址、5号住居址の土師器には鬼高I式とみるものと鬼高II式があり、これに古い様式とみる須恵器が伴出していることが注目され、時期は7世紀前半とみられる。

ウ) 平安時代

4号住居址

遺構（図42） 北1mに7号住居址が、ついで8号・9号住居址と1列に並んでいる。4.65m×4.2mの隅丸方形、壁高20cmの竪穴住居址。主軸方向N26°Eをはかる。支柱穴4個が整った配置にあり、北壁から西壁に沿って巾15cm、深さ5cm前後の周溝があり、竈は東壁に密着してあったが、水田造成によって削りとられ焼土を残すのみとなっていた。この南側に楕円形のピットが掘りこまれている。床面は粘質土のため検出に苦労した。

遺物（図66の7～10） 土師器と須恵器がある。土師器には7・8の甕形土器があり、7は小形の短胴口径13cm、高さ11.8cm、胴最大径は中央部にあり、径13.9cm、底径7cmのずんぐりした器形をなし、短い口縁がくの字状に外反し、外面は浅い楕描き痕が縦と斜に、口辺部は横なで、内面には荒い横位の楕描き痕をもち、底部に木葉痕が付く。8は大形甕で口径20.9cm、高さ34cm、短い口縁部が強く外反し、胴最大径23.4cmで胴上部にある。胴全面に楕状器具による条痕がつき、口縁部に楕状器具により圧痕がある。内面には輪積製作痕とこの接合部を压えた指痕が、口辺部に楕描整形が施されている。7・8ともに国分式の古い様式のものである。

須恵器には9・10の坏がある。9は完形で口径12.9cm、高さ3.9cm、糸切底、胎土は細かい長石粒を含み焼成は悪く、床面の粘質土によって器肌は荒れている。9は長石粒を多く含む粗雑な胎土で灰黒色を呈す。9・10ともに竜丘窯址産のものである。

4号住居址には灰釉陶器はなく、新しい国分式土師器もみられない。平安時代前半の住居址とみられる。

7号住居址

遺構（図44） 4号住居址の北1mに、北は8号住居址に密着している。3.70m×3.10mの隅丸長方形壁高10cm～15cmの浅い竪穴住居で、主軸方向はN6°Wをはかる。竪穴内部には柱穴はなく、4個の支柱穴が西側では10cm、東側では50cm壁より離れた外側のコーナー近くに配置されている。北壁西側には8号住居址と共通ともみられる2個の楕円形のピットがある。竈は認められず、また火を焚たとみる痕跡も竪穴の内外にもみられなかった。（西壁より30cm離れた土壇15号の内部には、炭・灰を多くもっていたが、焼土は認められなかった。）本住居址の構造・遺物からみて8号住居址の建増部で同一の住居であったと推定される。

遺物（図67） 土師器に甕形の1・2・7があり、この他小破片は多く、国分式の新しいものとみられる。

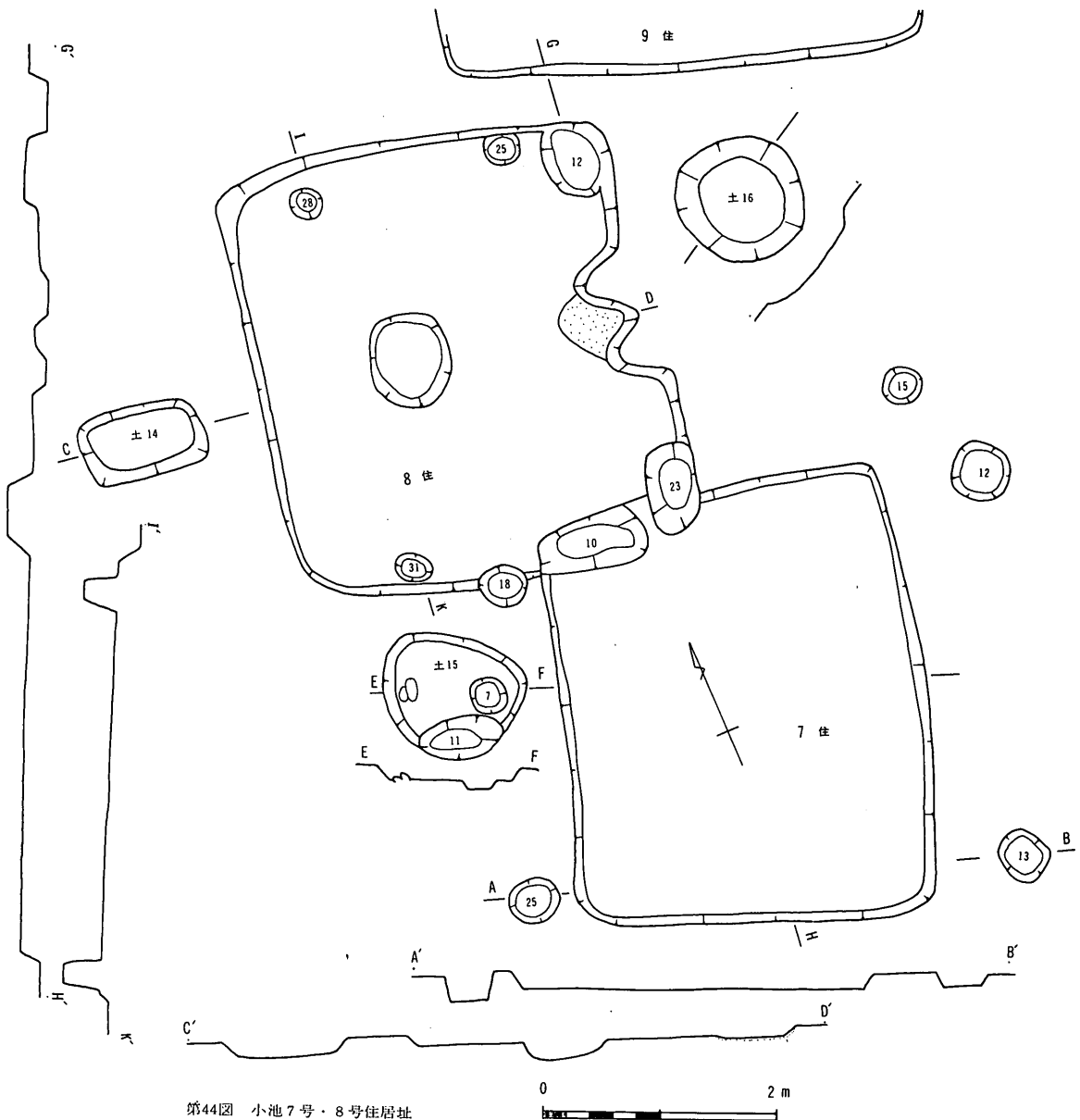
須恵器 3の蓋坏の蓋部は胎土、焼成悪く、ロクロ技術も劣り、5の底部とともに竜丘窯址産である。4の坏は丸底をなし、器面にたたき目があり、胎土は良いが生焼けである。6の大形甕底部は篋で鋭く挟む痕をもつ。7は櫛の刺突文をもち、胎土・焼成の良いもので、これらは美濃地方産のものである。この他、地方産の須恵片の出土は多く、僅かに美濃地方産の破片が混入している。

灰釉陶器 9の茶碗は東濃系で、特に内面の灰釉は濃い。

覆土上層より10の山茶碗があり、この他古瀬戸の緑色の灰釉のかかった瓶子片も出土している。

8号住居址

遺構（図44） 7号住居址の北に隣接し、3.90m×3.55mの隅丸方形、壁高10cmの浅い竖穴住居址で主軸



第44図 小池7号・8号住居址

方向N10°Eをはかる。主柱穴は4個とみるが、南東隅のは長楕円形をなし、7号住居址と共通する性格不明のピットである。竈は東壁に密着し、比較的小型とみるが、上部は水田造成時に削りとられている。東壁の北と南の隅に楕円形の深さ12cmのピットがある。住居の中央よりやや西寄りに土壇状の掘り込みがあり、焼土と炭灰をもち、炉址とみられる性格のものである。

遺物(図68) 土師器には1・4・6があり、甕形土器1は口径17.8cm、推定高さ20.5cm、短い口縁部は強く外反し、口辺部は横なで、内面は篋削り。頸部から底部にかけて篋削り痕をもち、底内部には底部接合の指圧を残す。木葉底で、国分式では古い様式である。4の椀形土器はロクロ水引跡をもち、胎土は砂質土で焼成はよくない。6は甕形土器の胴部で櫛描き整形が施される。これと同一個体とみる破片は多く出土している。

須恵器 2の坏は口径14cm、高さ3.8cm、糸切り底をなし、胎土・焼成の悪い脆い土器である。5の大型甕は口径30.1cm、外面にたたき目をもつ。胎土は大粒の石英粒を多く含み、仕上げの良くないもので、2・5ともに竜ヶ丘産のものである。

灰釉陶器 3の椀は口径14.9cm、推定高さ5cm、東濃系、灰釉が底部にまでたっぷりかかっている。その他小破片数点がみられる。

8号住居址の土師器は1の甕形土器を除き国分式の新しいもので、灰釉陶器の伴出からみて、7号住居址とともに平安時代後半のものともみられる。

9号住居址

遺構(図45) 8号住居址の北東60cmにあり、今次調査の北端部に発見された。4.37m×4.12mの隅丸方形、壁高20cm～25cmの竪穴住居址で、主軸方向はN18°Eをはかる。主柱穴は4個で竪穴の4隅に配置される。東と西側の中間部に各1個の柱穴があるが、その位置はずれており、主柱穴とはみられない。竈は北壁に密着するが僅かに東側に痕跡を残すのみで床面より1段高く焼土を残す。床面は粘質土で検出に苦労する。中央部より南東寄りに土壇状の深さ10cmの掘り込みがあり、内部に炭・灰と焼土をもち、炉址とみられる性格のものである。

遺物(図69) 土師器には1・2・3の国分式の甕形土器がある。1は口径16.5cm、推定高さ25cm、口縁部はいったん直立してから口辺部で強く外反する。内面には輪積み製作痕がみられる。口縁部には横なで整形が認められる。褐色を呈し、胎土は小粒の石英を含み焼成のかたいものである。2は口径17.8cm、口縁部はくの字状に外反し、外面は口唇部が横なで、口辺部から縦の櫛描き、内面は口辺部に櫛描き、頸部から下は横なでとなり、輪積製作痕を残す。明かるい黄褐色を呈し、胎土・焼成の良い、器壁のうすいものである。3の底部は櫛描き整形、内面には輪積製作痕をもち底部接合部を篋で压えた痕がみられる。

須恵器 4～6の坏があり、いずれも糸切底、5の底部には「/」の窯印が刻まれている。X状に見えるが、1本は破れ目が入った跡である。ともに胎土・仕上がりの良くない、竜ヶ丘地方窯産のものである。

10号住居址

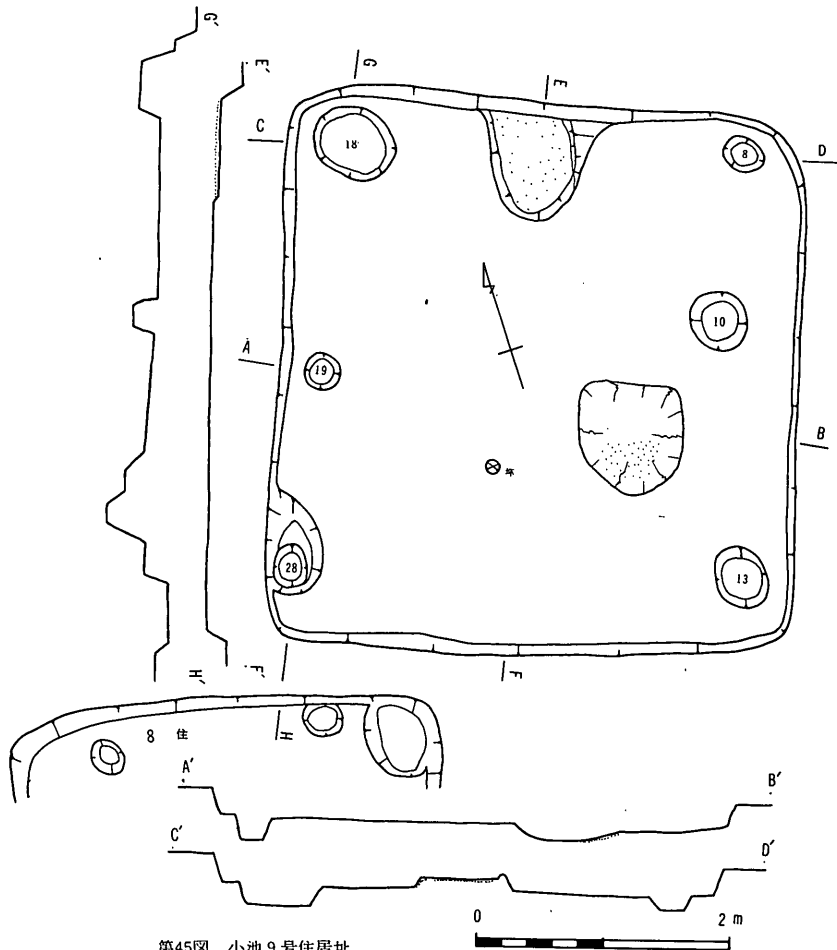
遺構(図46) 用地の北西端に発見され、柱列址Ⅲが住居址をとり囲んだ状態にある。4.33m×3.77mの隅丸長方形、壁高10cmの竪穴住居址で、主軸方向N18°Eをはかる。主柱穴は4個で竪穴の4隅に整った配置をなす。竈は西壁に密着してあったが、床面より僅かに高い焼土面がみられのみに破壊されていた。竈から壁に沿って周溝がめぐらされており、巾20cm前後、深さ6～7cmである。東周溝の中央部に鉄器が

その西側の床面に大型砥石、西周溝の南寄に坏が1個置かれていた。

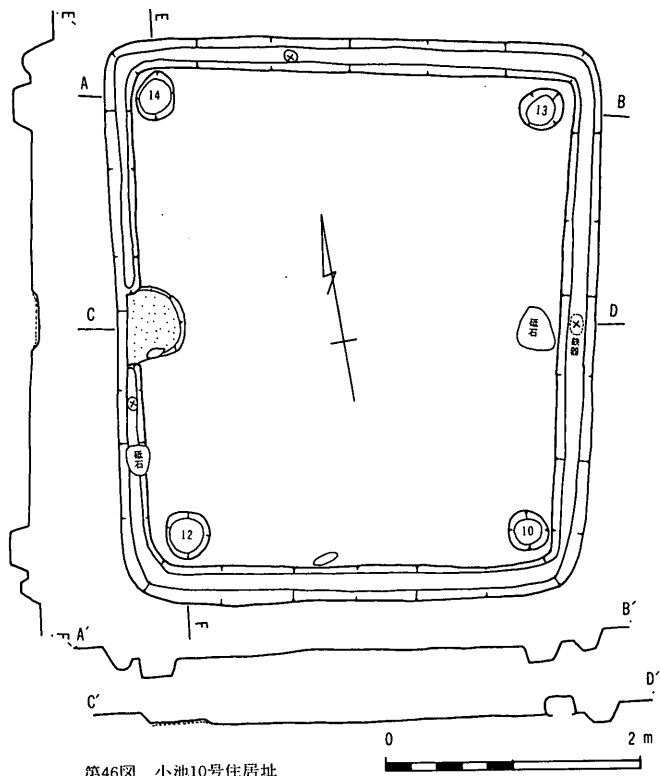
柱列址Ⅲは、本住居址より前にあったことが住居址にかかる柱穴から観察され、両者が時間的に異なることが認められた。また後に掘りこまれた土壇8号が竪穴の北寄りに発見されている。

遺物(図70の1~9) 土師器に1・2の甕形土器がある。1は口径19.5cm, 口縁部は短かく, く字状に外反する。口縁部は横なで, 胴部は斜の刷毛目整形, 内面には横なで整形が施され, 胎土, 焼成の良いものである。2の底部は, 外面は横なで, 内面は篋削り痕をもつ。これらの外に小破片が多くみられている。

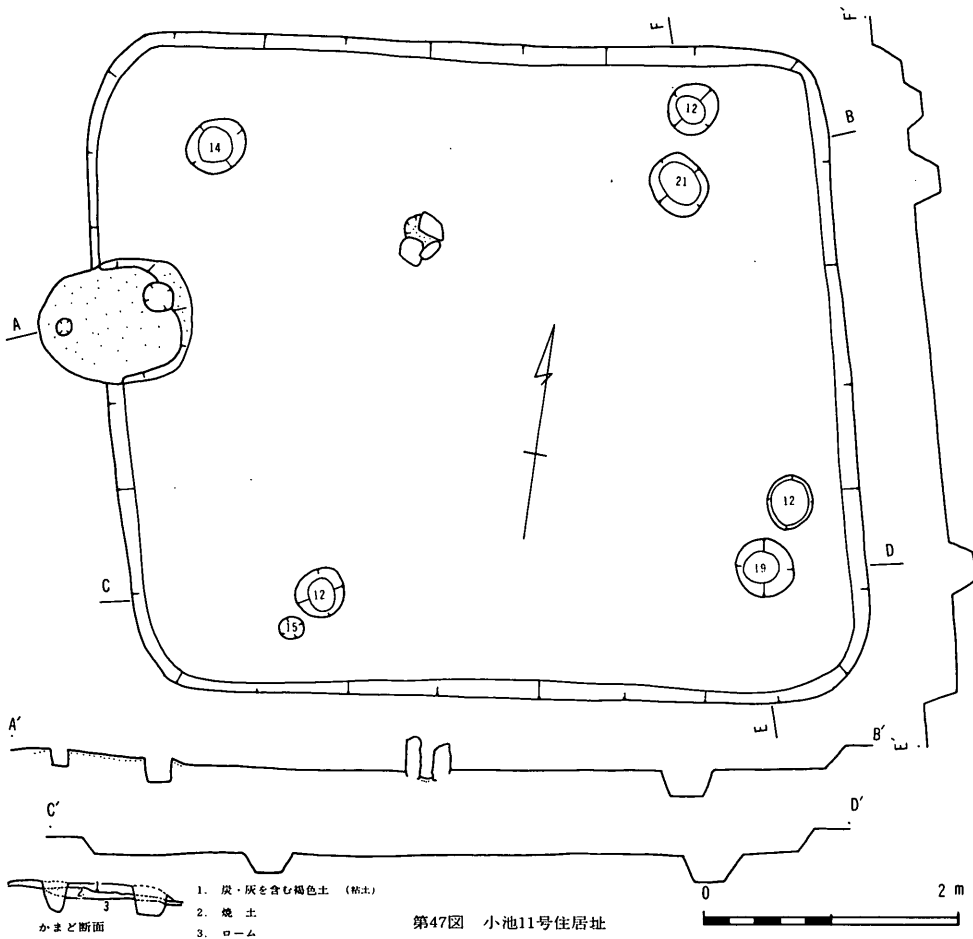
須恵器 3の蓋と4~7の坏がある。3の蓋は黝黒色を呈し, 胎土, 焼成の良い美濃須衛窯産のものである。4~7の坏は糸切底, 胎土には長石粒・石英粒を多く含み, 7を除いて焼成は良い。7は生焼けで粘質土中であつたため脆くなっている。いずれも竜丘地方窯址産のものである。これ等の他に破片は多く地方産のものに混って美濃須衛窯産のものも多くみられた。



第45図 小池9号住居址



第46図 小池10号住居址



第47図 小池11号住居址

砥石 8・9は砂岩製、大型で、一面のみに使用面がみられる。

鉄器（写真） 水分の多い粘質土中であつたため、錆の付着がはなはだしく、鉄塊状になって出土している。馬具と認められるものである。

10号住居址の遺物は、土師器では国分式の古いもの。須恵器は8世紀の美濃須衛窯産がみられ、灰釉陶器の伴出が認められない点からみて平安時代前半とみられる。また住居址内より馬具の出土は注目されるものである。

11号住居址

遺構（図47） II調査区の東端に発見され、5.15m×5.85mの隅丸方形、壁高20cmの竪穴住居址、主軸方向N14°Wをはかる。主柱穴は4個、支柱穴とみるのが3柱穴の側に1個ずつ付いている。床面は粘質土であり堅くない。竈は西壁に密着するが、楕円形に一段高く焼土をもつが破壊され原形をとどめないが煙道孔が壁外に残されていた。竪穴中央部の北寄りに3個の石囲いの小さな炉址とみられるものがあり内部に焼土をもつ。

遺物（図70の10～13） 土師器、甕形土器10は、口径18cm、口縁部はゆるく外反しながら立ち、口辺部で強く外反する。長胴となるとみられる。外面には横位の刷毛目痕がみられ、胎土は大粒の石英粒が多く含まれ、焼成はかたい。高環形土器11は坏上部を欠く。坏内部は内面黒色、胎土精良黄褐色を呈し、焼成はやや劣り、器面は平滑で坏の接合部は横なで痕がみられる。脚部の高さ7.7cmと比較的高く、なだらかに裾部は開く。ともに真間式に位置づくともみられる。

須恵器13の坏は口径12.6cm、高さ4.6cm、底部は糸切りの後、刷毛目整形が施され、器面にも刷毛目痕が認められる。胎土には小粒の石英粒を僅かに含む。ロクロ技術の優れたものであるが、生焼けて粘質土中であつたため脆くなっている。竜丘地方窯址産とはみられない。12の坏は胎土・焼成・仕上がりが良く美濃須衛窯産とみられる。図示以外にも、この系統の破片は多くみられている。

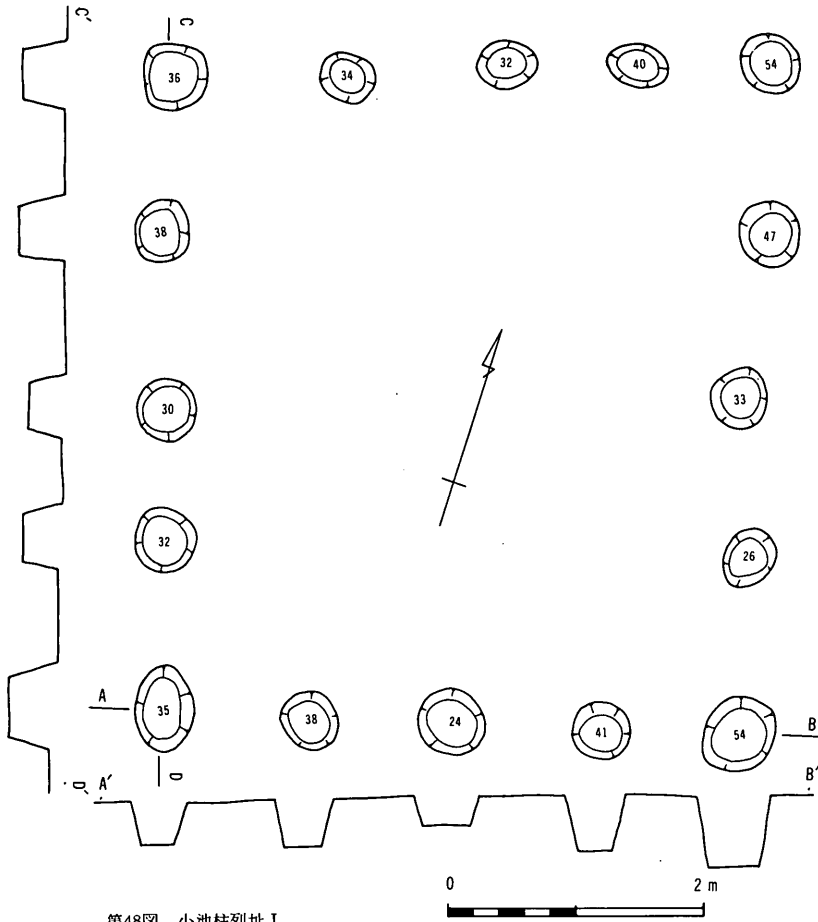
本住居址の土師器には国分式はなく、須恵器は美濃須衛窯産が大部分を占め、この地方産とみられるものではなく、奈良時代から平安時代初頭に位置づくものと考えたい。

イ. 柱列址

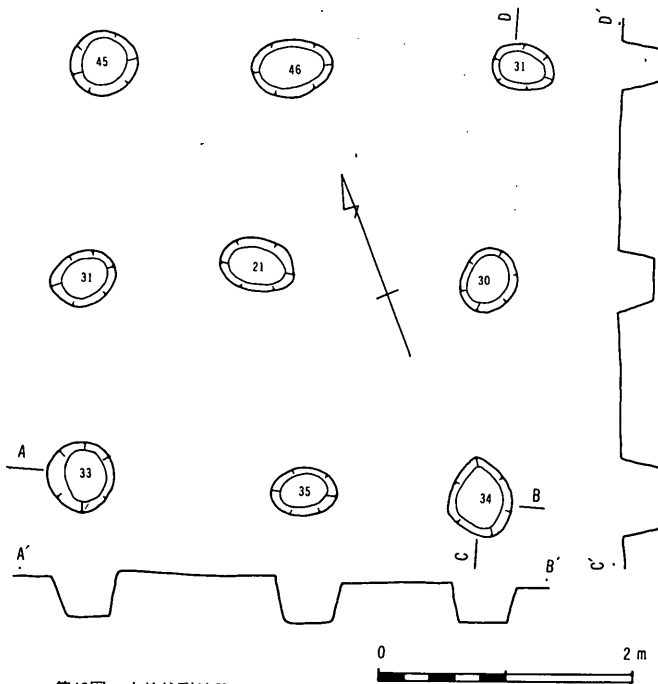
柱列址 I

遺構（図48） 用地の西端近くに発見され、西に竪穴遺構が隣りあう。5.60m×5.60mの正方形に、1辺に5個の柱穴が1m～1.3mの距離をおいて並び、16個の柱穴が正方形にとり囲む状態をなす。4間×4間の構造をなし、主軸方向はN15°Wをはかる。柱穴は径40～50cm、円形が多く、楕円形をなすものもあり、深さは20cm前後の浅いものから50cm以上の深いものもある。高床造りの建物とみられるが、これが倉庫であるか住居であるかは不明である。

遺物（図71） 柱穴内より出土したものに土師器の高環2と、須恵器の坏1がある。1の須恵器の坏は胎土・焼成精良な、ロクロ技術は優れ黝黒色を呈し、底部は篋削り整形を施す。外面に「ソ」の刻印が付く。土師器高環2は坏部を欠く。裾はゆるやかに開く。胎土は小粒の石英粒を含み、焼成よく明かるい色調を呈し内面には輪積み製作痕を残す。1・2ともに古墳時代後半のものともみられる。3は柱穴上層の覆土より出土した山茶碗系の底部で、胎土は灰色、爽雑物を含み、ロクロ製作後に荒い篋描きが施され仕上



第48図 小池柱列址 I



第49図 小池柱列址 II

がりは良くない。付け高台で、中世初頭とみられる。

住居址内よりは美濃須衛窯産の須恵器片、同時期とみる土師器片の出土をみるが、柱列址の時期を決定するには不十分である。

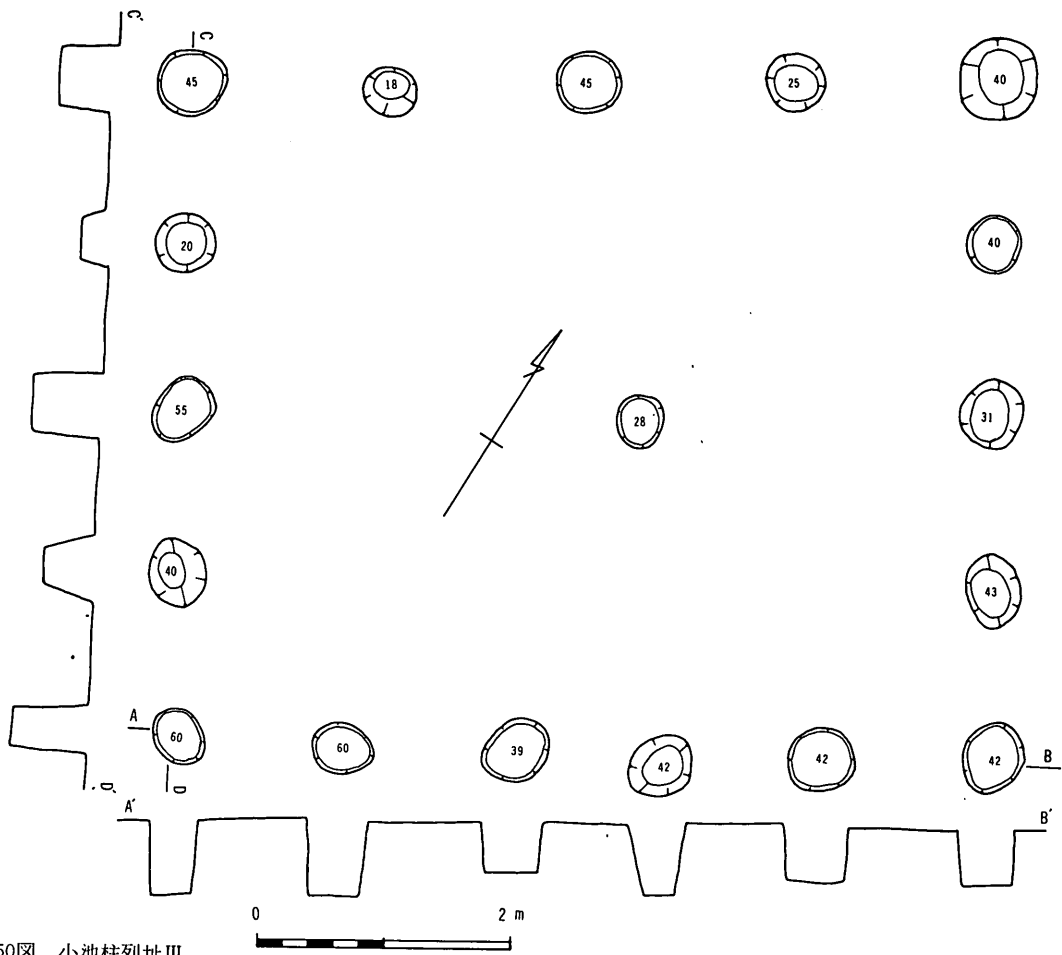
柱列址 II

遺構 (図49) 4号住居址の西4mにあって3m×3mの正方形、1辺に3個の柱穴が1.7mと1.5mの距離をもって並び、中央部より西に片寄って1個の柱穴がある。9個の柱穴よりなる2間×2間の構造をもち主軸方向N26°Eをはかる。柱穴の径は50cm前後、深さは30cm×40cm前後のものである。規模からみて高床造り倉庫と考えられる。

遺物 土師器・須恵器の破片があるが量的に少なく須恵器は美濃須衛窯産であるが、本遺構に関連するかは明らかにされなかった。

柱穴址 III

遺構 (図50) 10号住居址をとりまく状態にあるが10号住居址調査時の観察によれば、10号住居址より古いことが確認された。5.6m×7mの長方形をなし、柱穴は南北辺では南辺が6個、北辺が5個、東西辺は5個、4間～5間×4間の変則的な柱穴配置をなし、中央部に1個の柱穴をもつ。



第50図 小池柱列址III

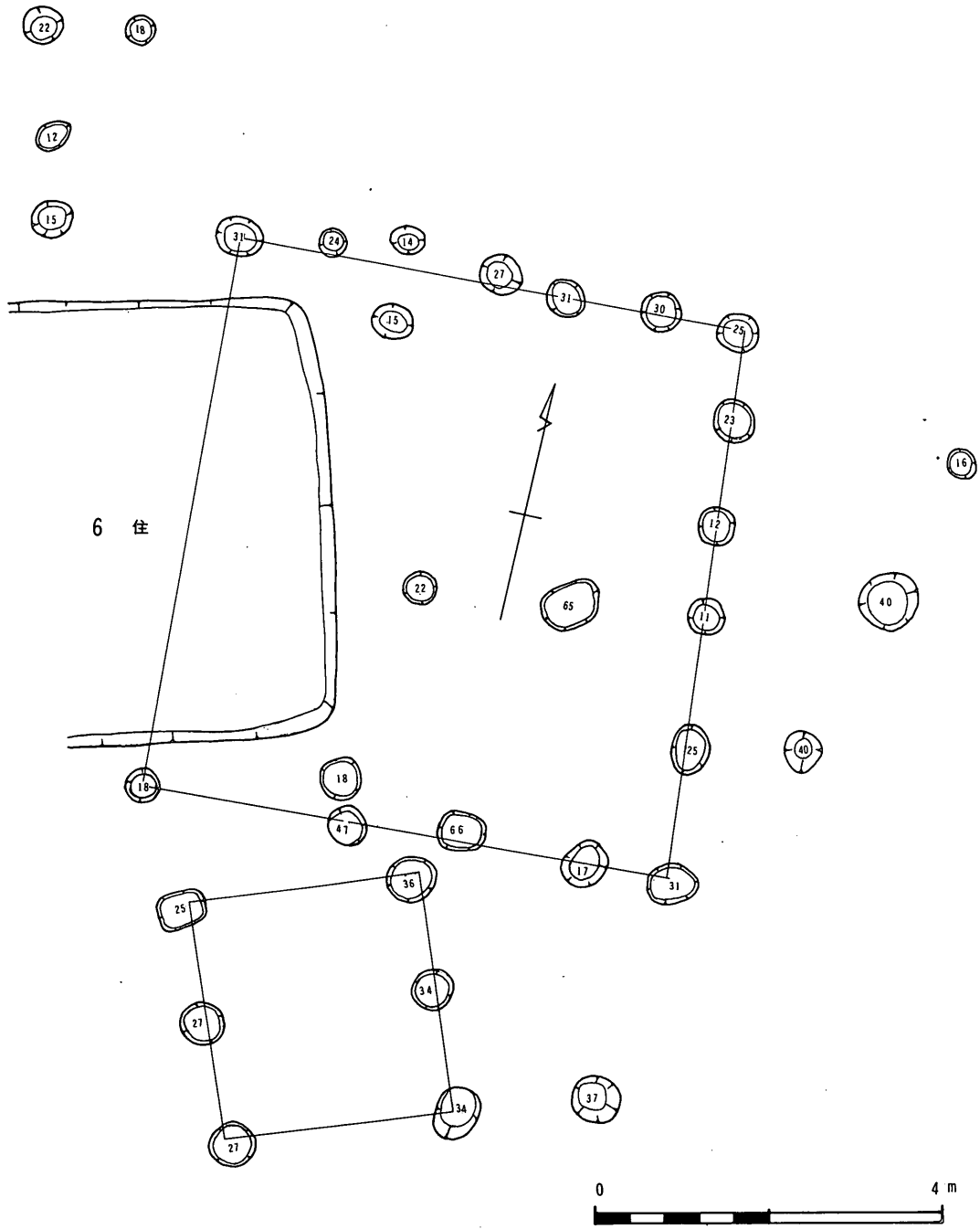
柱穴間の距離は南・東・西辺で1.3m、北辺は1.6mの等間隔にあり、主軸方向N28°Wをはかる。柱穴の径は50cm前後であるが、北東隅の1個は65cmと大きく、深さは20cmから55cmと不同である。高床造りの建物とみられるが、倉庫であるか、住居であるかは不明である。

遺物 本址に直接関係あるかわからないが、土師器片と須恵器片があり、土師器には国分式はなく、須恵器は美濃須衛窯産である。平安時代の10号住居址より古く、遺物からみて、8世紀前半とみられるものである。

柱列址 I～III、土坑3～5、7号検出中に出土した遺物(図72)には、土師器、須恵器があり、それぞれに時間差がみられる。

土師器 図72の6は高杯の坏部で焼成はよく、赤褐色を呈し器面は平滑である。この他に真間期とみる小破片から国分式の甕の破片が多くみられた。

須恵器 1の蓋、7の大形甕の底部は胎土、仕上がりの良いもので、7は外面に篋状器具の擦痕がみられる。8は櫛描波状文をもつ精良なものであり、9・10はたたき目をもつ甕の胴部で、いずれも美濃地方産とみられるものである。11～13は胎土、仕上げの粗らい竜丘窯址産のものである。



第51图 小池柱列址IV

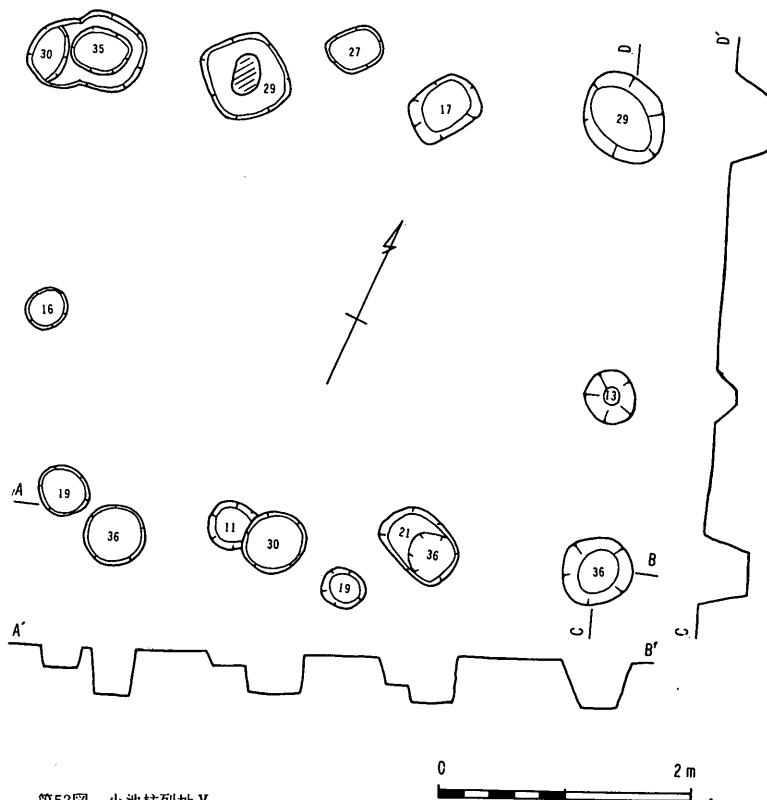
これらの遺物がどの遺構に属するかは不明である。土坑7号よりは平安時代の須恵器の坏3個と国分式の甕（図75の6～9）の出土をみ、その時期が明らかであるが、他の遺構については、時期を決定する資料は得られなかった。

柱列址Ⅳ

遺構（図51） 6号住居址にかかり、その東側に並ぶ柱列である。6.8m×6.5mの方形Aと3.1m×3.1mの方形Bをなすものがあり、この2個の方形柱列から成る。未調査に終わったが、（6号住居址を先に発見調査したため）北西に残る柱穴からみて、Aはさらに西側に張出部とみられるものがあったと推定される。Aの柱穴の配置は1辺に5個～6個が並び、北と南の柱穴の配置は不規則である。中央部を東西に2個の柱穴を残すが、その配置からみて5個が並んでいたと推定される。主軸方向はN6°Eをはかる。

Bは東と西に2.7mの距離をおいて、南北方向に3個の柱穴が1.3mの距離に並ぶ。2間×1間の構造である。主軸方向はN25°Wをはかる。Aは柱列配置を十分に把握できなかったが、構造からみて高床造りの住居と、Bは規模からみて倉庫とみられるものである。

遺物（図73） 1～4の土師器と5～8の須恵器があり、Aからの出土が多い。土師器1・2は甕形土器で、1は口径17.3cm、口縁部はくの字状に外反して立ち、やや内屈を示して口辺部で強く外反する。胴最大径は胴中央にあって19cmをはかり球状をなす。頸部は接合部を指圧し、さらに刷毛目整形を施している。内面は頸部には稜をもち、胴部は篋削り痕をもち、底部も篋削りとなっている。2は口辺部は直立ぎみに立ち、器壁の厚い土器で、頸部接合部は内外面とも指圧痕をもち、さらにその上を外面では刷毛目、



内面は篋がき整形が施されている。高坏3は素縁口辺の坏部を残す。4の椀形は口径12.5cm、高さ6cm、口辺部で急に外反を示す。1～4の胎土は良く、4を除き焼成はかたい。

須恵器は5～8を図示したが、この種の破片は多い。たたき目をもち、胎土・焼成の良いもので、いずれも美濃須衛窯産とみるものである。

土師器は本遺跡でははじめての様式であり、伴出の須恵器からみて8世紀前半とみられるものであり、国分期のものはみられない。本柱列址はこの時期のものとも考えられる。

柱列址 V

遺構(図52) 5号住居址の北4mにあり、4.7m×4.0mの方形に2間×3間に柱穴が並ぶ。柱穴の状態からみると、1回は建替えが行なわれたとみられる。主軸方向N16°Wをはかる。柱穴の大きさは不同であり、2個が重なるものもあるが、北と南は1.3mの距離に並び、東と西は2mと1.3mの距離に柱穴は並ぶ。

遺物は上層より、土師器、須恵器の小破片が出土しているが、本址に関連するものとはみられなかった。

ウ、 竪穴遺構

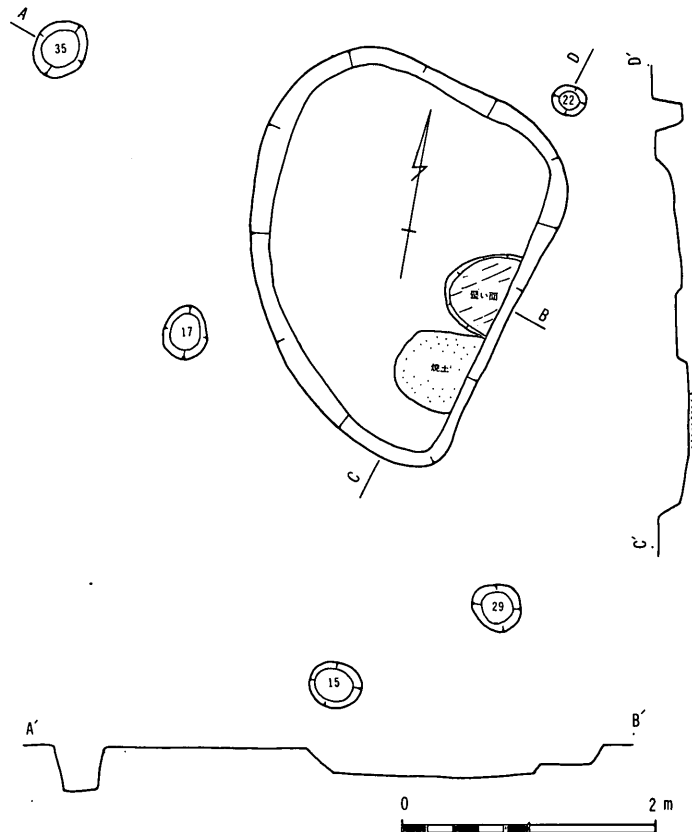
遺構(図53) 用地の西北端に発見され、柱列址Iの西に隣接している。2.90m×2.20mの4分の1円状をなし、壁高17cmの竪穴遺構である。

東と北壁は直線状に、南・西壁は弧をえがく。東壁の中央部に密着して床面より5cm高い堅い面をもち、その南側に接して焼土面があり、この上には炭・灰が多くみられ、明らかに火が焚かれた痕跡をもつ。主軸方向はN16°Eをはかる。床面は水分の多い粘質土であまり堅くなく中央部にいくに従いやや深さをます。

竪穴の外部には、西側に2個、南側に2個、北側に1個の柱穴がある。竪穴遺構の性格は、はっきり把握できなかったが、住居址ともみられるものである。

(注 中世の住居址には、飯田地方ではこのようなタイプのものが数例発見されている。)

遺物(図74) 土師器には1～4があり、1の甕形土器は口径15.5cm、口縁部はゆるく外反し、胴部は長胴とみられる口縁部の内外面とも横なで、胴部は篋削りの後、横なでの整形が施される。3は



第53図 小池竪穴遺構

高坏の坏部とみられ、胎土・焼成の良いものである。4は盤とみられ、高台が付く。2は高坏の脚部ともみられるが、器形不明の土器である。胎土は精選され、明るい朱色を呈し、器面は平滑、小形のもののがびったりと入りこむようになっており、同じ胎土であるが手づくね土器で、内外面に指文がみられる。

灰釉陶器5は小皿、内面には灰釉が多く付くが外面の釉ははげ僅かに灰釉がみられ、一見山茶碗ともみられるもので、東濃系のものである。

1の甕形土器はやや古いとみるが、他は平安時代末とみられるものである。

エ. 土 塚

小池遺跡で発見された土塚は1号～16号があり、この中には土塚であるかを疑うものもある。一応次の表にまとめたが、特別な土塚、遺物の出土をみたものについては後に記することにした。

小池遺跡土塚一覧表

| 番号 | 大きさ(cm) 東西 | 深さ (cm) | 形状 | 主軸方向 | 遺物 | 備考 | 時期 | 図 番号 |
|----|---------------|---------------|-------|--------|-------------------------------|-----------------|-------------------|---------|
| 1 | 210×75 | 15 | 長楕円 | N 6° W | 土師器・坏(内面黒色)・須恵器底部3破片多(美濃系) | 東2mに溝状遺構 | 奈良時代 ~ 平安初期 | 54 |
| 2 | 95×250 | 80 | 半月状 | N90° W | 須恵器片(竜丘窯産) | | 平安時代 | 55 |
| 3 | 150×130 | 10 | 隅丸台形 | N11° W | なし | | | 〃 |
| 4 | 95× 95 | 35 | 隅丸方形 | N10° E | なし | | | 〃 |
| 5 | 97× 93 | 23 | 円形 | N 9° W | なし | 2段になる | | 〃 |
| 6 | 120× 90 | 28 65 | 楕円形 | N12° W | 縄文晩期甕 1個体 | 2段になる | 縄文晩期 | 56 |
| 7 | 105× 60 | 14 | 隅丸長方形 | N 9° E | 土師器(国分式甕) 須恵器坏(竜丘窯産) 3こ | | 平安時代 | 55 |
| 8 | 135×120 | 15 | 変形楕円形 | N37° W | なし | 内部に炭多し | | 〃 |
| 9 | 108× 94 | 10 | 楕円形 | N52° W | なし | | | 56 |
| 10 | 80×107 | 53 | 〃 | | なし | 2段になる | | 〃 |
| 11 | 70× 60 | 10 | 円形 | N40° W | なし | | | 〃 |
| 12 | 64× 65 | 10 | 〃 | N38° W | なし | | | 〃 |
| 13 | 60× 70 | 11 | 隅丸方形 | N85° E | なし | | | 〃 |
| 14 | 63×105 | 15 | 〃 | N82° W | 土師器 碗(糸切底) | 炭灰をもつ | 平安末期 | 44 |
| 15 | 105×121 | 12 ~ 20 | 円形 | N68° W | 土師器 甕底部・須恵器・皿・甕(竜丘窯産) | 炭灰をもつ 2個のピット | 平安時代 | 〃 |
| 16 | 116×110 | 15 | 円形 | N43° W | | 炭灰多量 | | 〃 |

1号土坑 (図54)

溝状遺構の位置からみて方形周溝墓とみられ調査をすすめたが別のものとなる。

遺物 (図75の1~4) 1~3は須恵器の高台付底部で、胎土・焼成は比較的良く、美濃須衛窯産とみられる。4の土師器は素縁口辺の坏で、内面黒色、口辺部は僅かに外反を示し、真間期のものとみられる。いずれも奈良時代から平安時代初頭とみられる。

2号土坑 (図55)

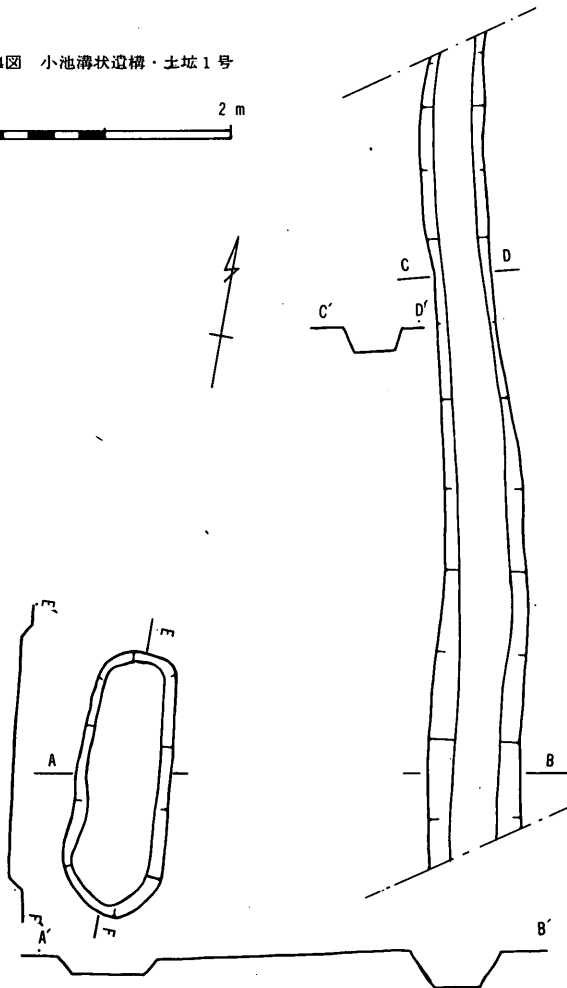
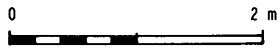
半月状をなし、80cmと深い土坑である。遺物 (図75の5) は高台付坏の底部で胎土やや粗く竜丘地方窯産の古いものとみられる。

6号土坑 (図56)

楕円形をなし、内部が一段深く掘りこまれ、縄文晩期の大型甕が1個体分 (図76) の出土をみているが半分は水田造成時に欠きとられてしまっている。口径30cm、推定高さ60cm、口辺部には隆帯がめぐり、こ

の上に両側からの指圧による凸起が隆帯を6等分する位置に配られて1巡する。おそらく甕棺と考えられるものである。

第54図 小池溝状遺構・土坑1号



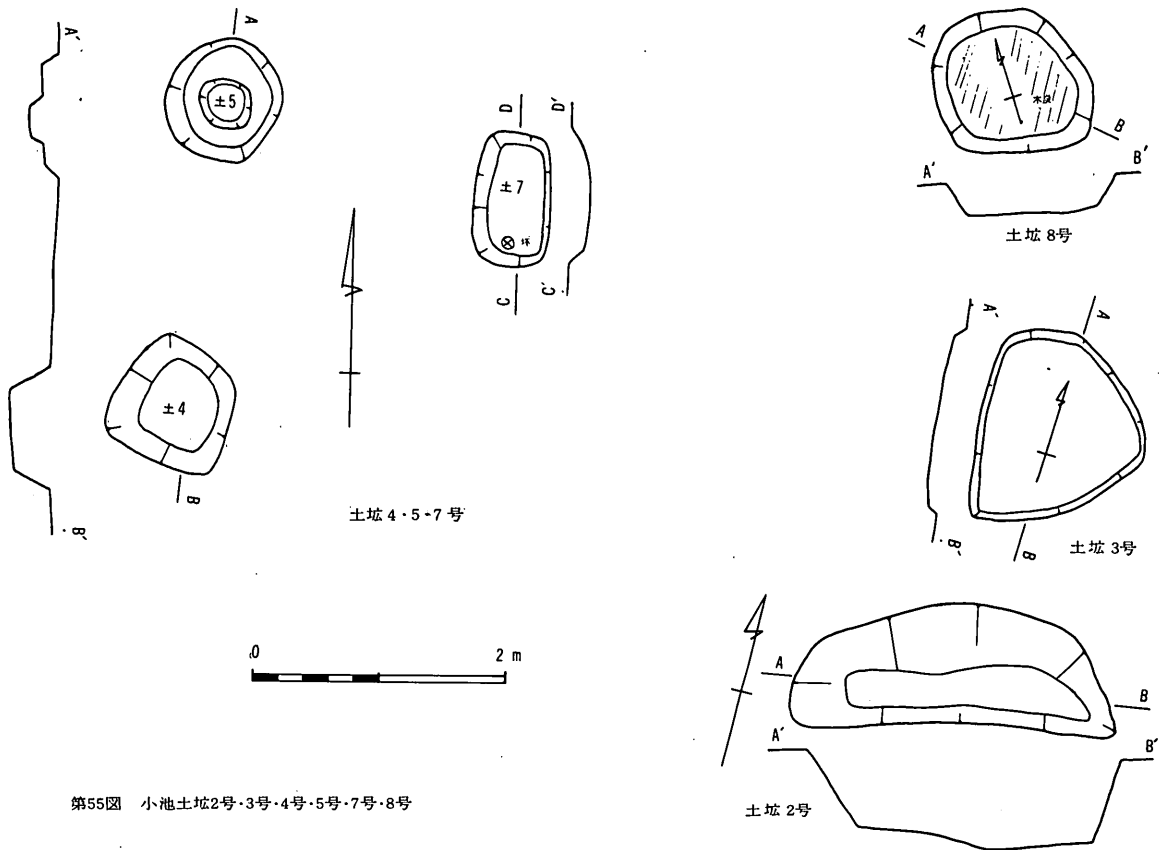
7号土坑 (図55)

整った隅丸長方形をなし、遺物 (図76の6~9) は南壁ぎわに出土をみている。土師器6は国分式、口辺部は強く外反し、口辺部は横なで頸部には櫛で上におさえつけた痕をもち、胴部は櫛描き整形が施される。須恵器7~9は糸切底、胎土は粗く、8・9の焼成はよいが7は不良。いずれも竜丘地方窯産であり、平安時代のものである。

14号・15号・16号土坑 (図44)

7号・7号住居址に隣接してあり内部には炭・灰が多くみられた。14号土坑よりは土師器 (図75の10) の椀形とみるものがあり、糸切底、胎土・焼成よく、褐色を呈す。平安時代末期とみられる。

15号土坑の遺物 (図75の11~13) 須恵器11は高台付盤とみるもので、



第55図 小池土壇2号・3号・4号・5号・7号・8号

胎土・焼成よく、ロクロ技術の優れるもので美濃地方窯産とみられる。12の大形甕は口径28.8cm，外面にたたき目をもつ胎土は粗く，竜丘地方窯産である。土師器13は甕形の底部，胴部には縦の櫛描き，下部になると荒い横位の篋削り痕をもつ。国分式で，いずれも平安時代のものである。

オ. 溝状遺構・配石遺構・柱穴群

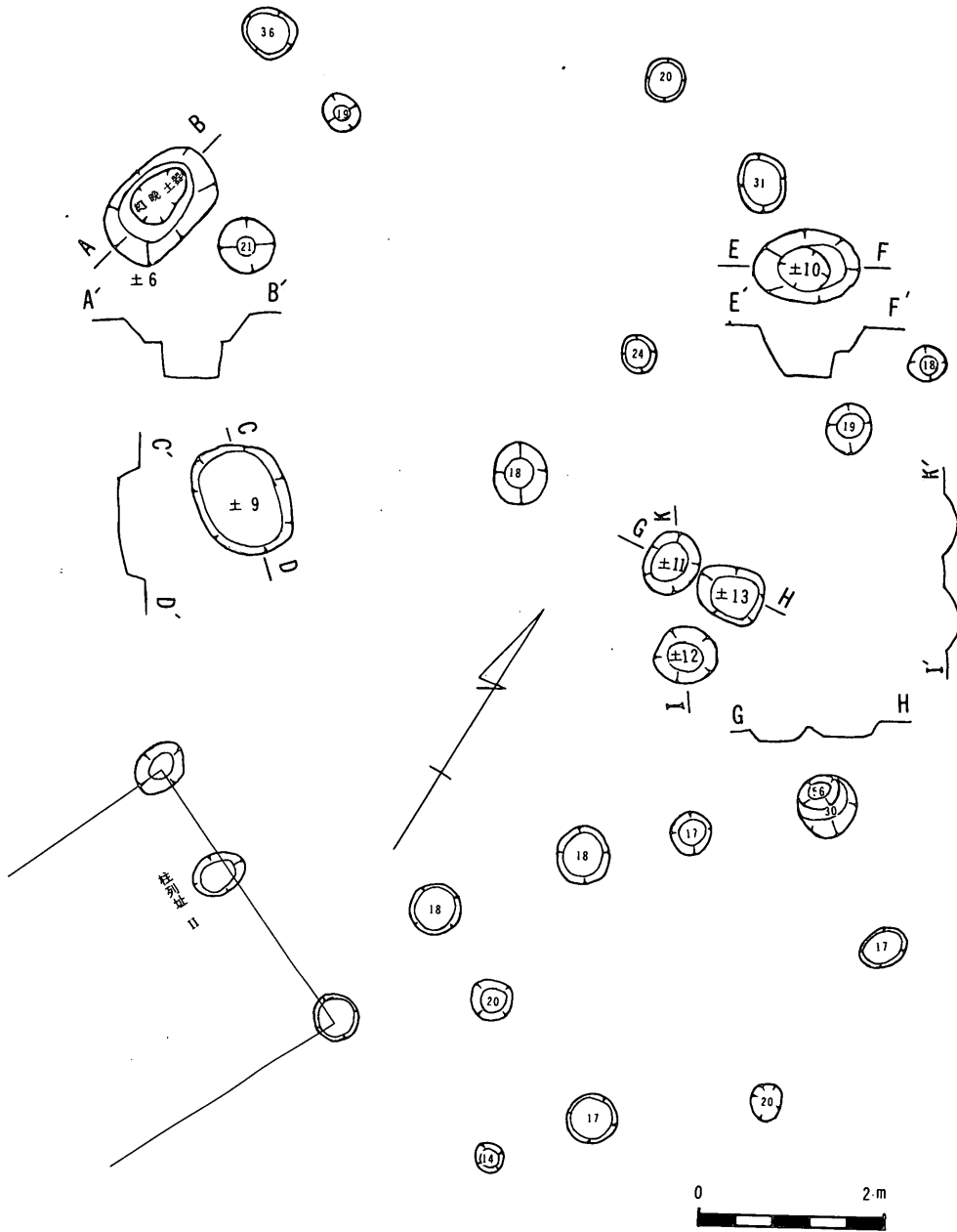
ア) 溝状遺構 (図54)

II調査区の東側に発見され，1号土壇の東3mにあり，方形周溝墓の周溝とも初めはみられた。巾50cm～70cm，深さ20cm～30cmの溝で，傾斜にそって北から南にとおり，やや西にカーブして配石遺構につながっている。

遺物は土師器，須恵器の小破片がみられるもので，上の方からの流入である。

イ) 配石遺構

遺構 (図57) 東西方向に5.5mの間に不規則に人頭大から1抱え大の川原石 (天竜川の) を並べたものである。溝状遺構につながっており，これと関連をもつものとみられたが，十分な調査はできなかった。遺構のある位置は水田が造り替えられた痕跡をもつところで，かつて水田造成時の石垣の崩れと



第56图 小池柱穴群II, 土坑6号·9号·10号·11号·12号·13号

も見受けられたが、その性格は把握することはできなかった。

遺物（図75の14～18） 配石遺構周辺の遺物が多く、直接関連するものとはみられない。須恵器14は直口壺とみられ、16・17の破片も同一個体のものとみる胎土・焼成・仕上がりの良いもので、たたき目に横または縦の沈線が引かれている。15は坏の底部、篋削りが施されている。美濃須衛窯産とみられる。18は上層より出土した咸元通宝（安南胡1,402～08）であり、この外中世陶片の出土もみている。

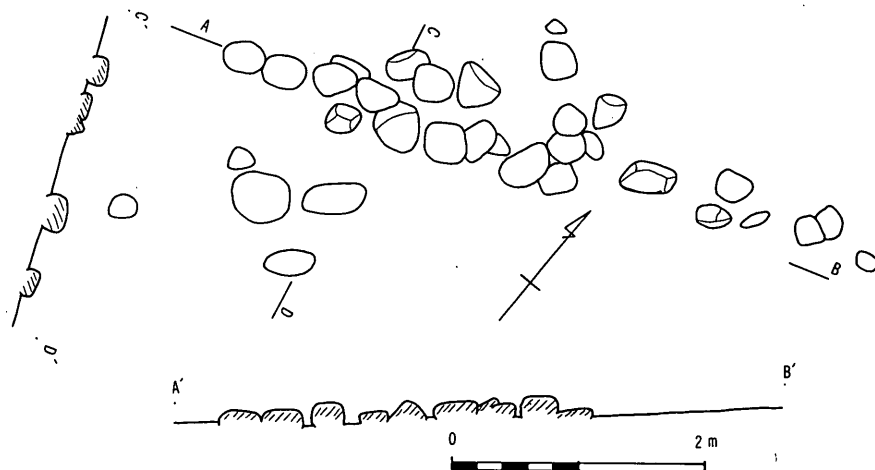
ウ) 柱穴群

柱穴群 I（図58） 5号住居址と11号住居址の間であって40個以上の柱穴が不規則にあり、列のおもものはみられない。柱穴の大きさは30cm～40cmが多く、中には径50cm大のもあり、15cm前後の小さなものもある。深さも不同で6cm～50cmと巾がある。

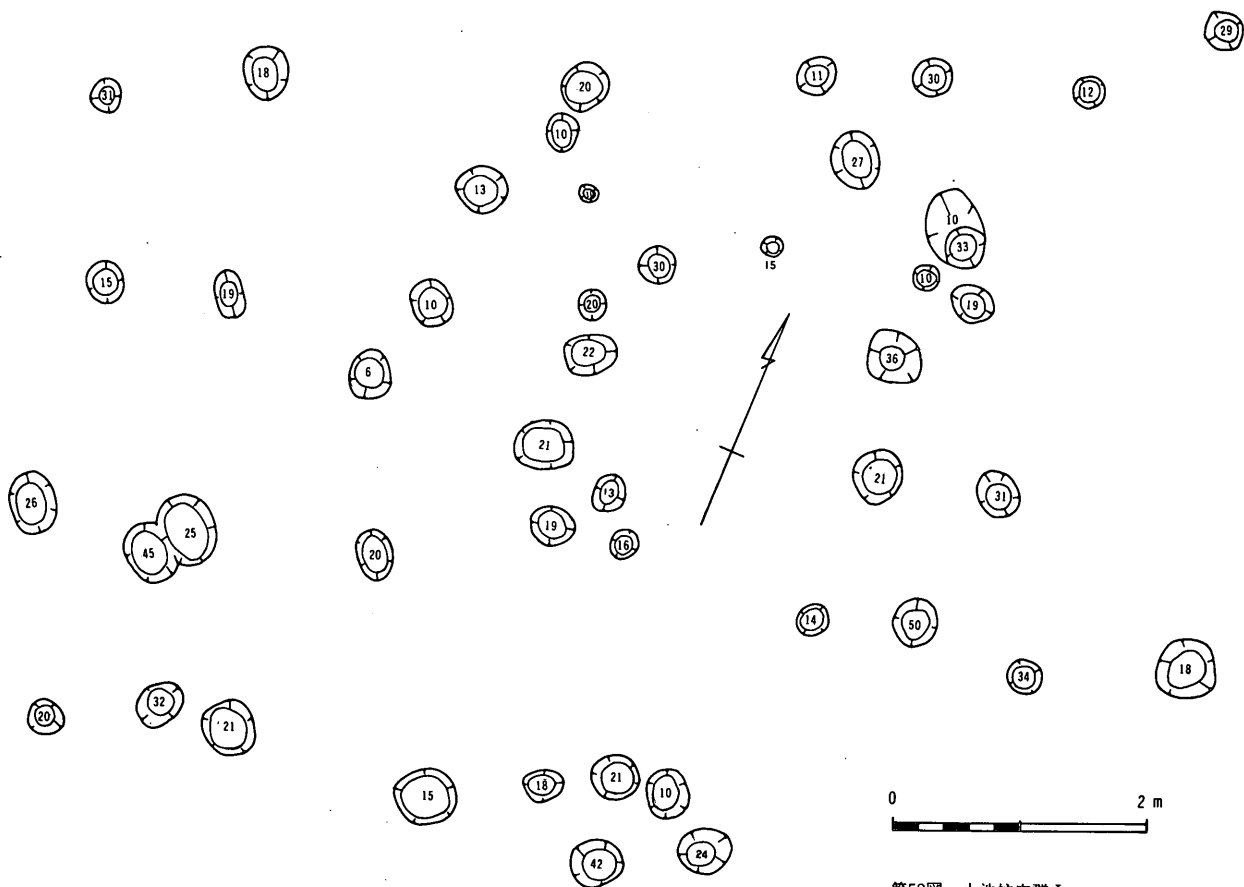
遺物は上層より僅かに須恵器、土師器の小破片と中世陶器片があったにすぎない。

柱穴群 II（図56） 4号・7号・8号住居址の西側にあり、20個近くの柱穴が不規則にある。この柱穴群の間に土壇6号・9号～13号があり、南側には柱列址IIがある。径30cm～50cmの大きさを持ち、深さは20cm前後のものが多い。遺物は上層より、土師器・須恵器の小片がみられているにすぎない。

柱穴群 I・IIともその性格は把握できなかった。



第57図 小池集石遺構



第58図 小池柱穴群 I

(3) ま と め

小池遺跡では、表採遺物の最も多くみられた I 調査区では湧水が多く、遺構の発見もなく調査を断念した。表採遺物は西の微高地をなす所よりの流入と解せられた。台地の南西端にある II 調査区では、縄文晩期の土坑・弥生後期・古墳時代後半から平安時代の住居址、柱列址をはじめ多くの遺構が発見され、農業構造改善事業計画外の大部分を占める駒沢川の自然堤防をなす微高地帯に集落が発達し、事業計画の大部分を占める湿地帯は古くから水田が開かれたところとみられ、弥生時代以後の立地条件にかなった遺跡と受けとめられた。

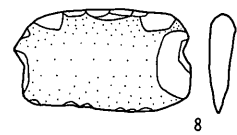
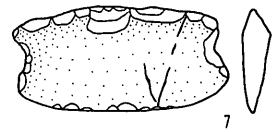
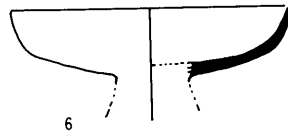
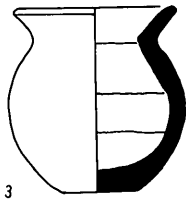
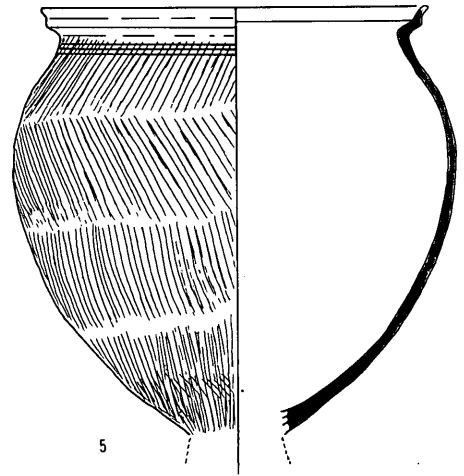
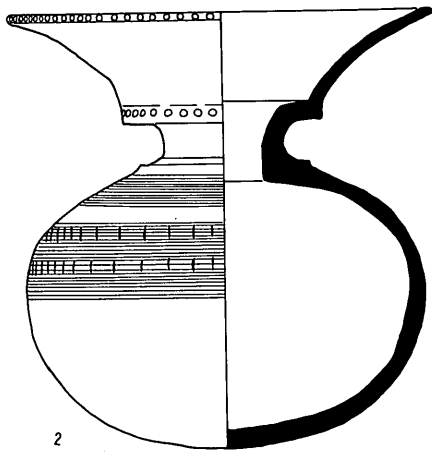
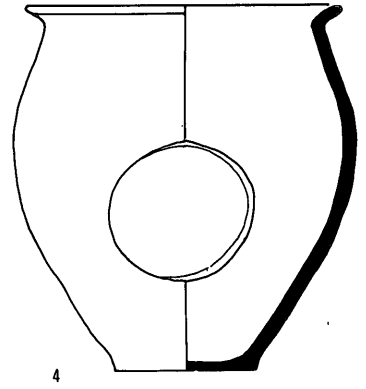
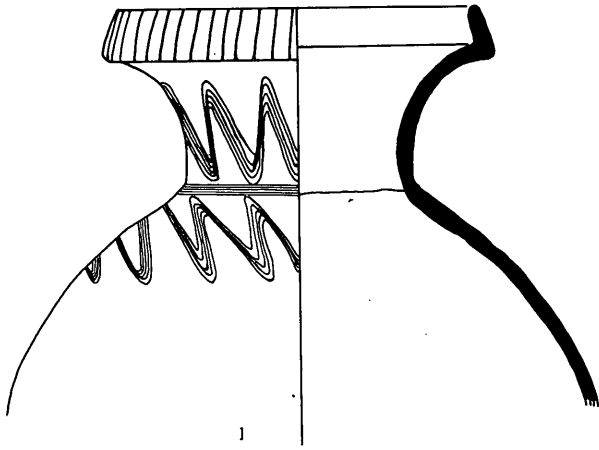
縄文時代の遺物には土坑 6 号の甕棺とみる晩期の大型甕の出土をみた以外は、打石斧（図76の 2～5）が遺構外から出土している他は縄文時代の遺物はみられない。

弥生時代後期の火災の住居址では住居の構造が把握され、ここより出土した土器のセットは弥生終末期における下伊那地方が東海地方の影響を強く受けとめていた様相を示すものであった。

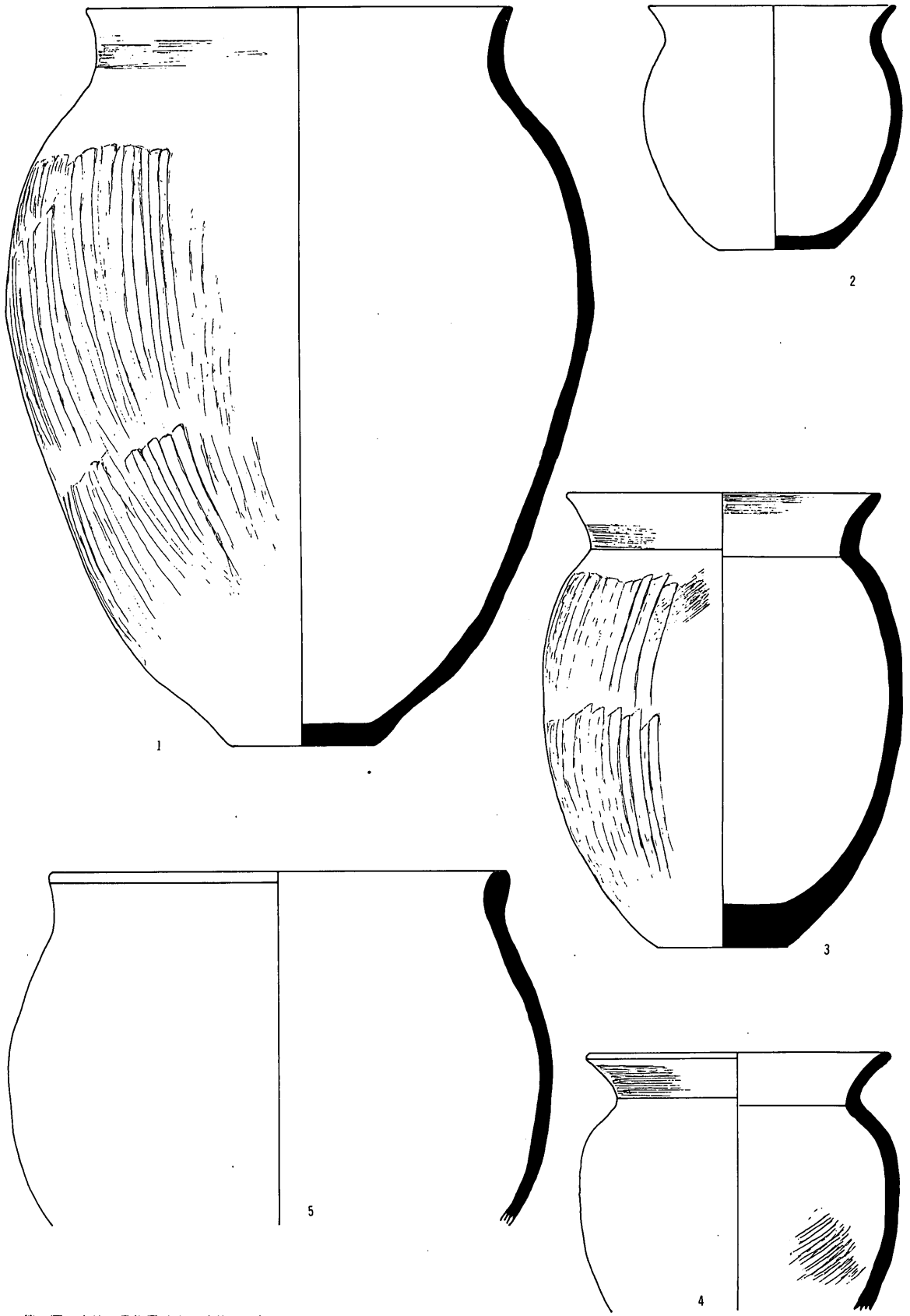
古墳時代の住居址4のうち、土師式土器は鬼高Ⅰ式を主体にし、Ⅱ式への移行期と推定される土器を伴い、6世紀後半とみるものと、鬼高Ⅱ式を主体としⅠ式を伴出する7世紀前半とみるものがあり、前者には須恵器の伴出はなく、後者にはⅢ様式とみる須恵器を伴うようになってきている。

平安時代の住居址には、土師式土器では国分式の木葉底をもつ古い様式に、須恵器は美濃須衛窯産と竜丘地方窯産を伴出する平安時代前半のものと、国分式の新しい様式と竜丘地方窯産の須恵器に灰釉陶器を伴う平安時代後半のものがあり、それに真間式とみる土師器に美濃須衛窯産の須恵器を伴出する奈良時代から平安時代初頭とみる11号住居址がある。

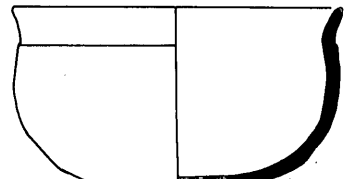
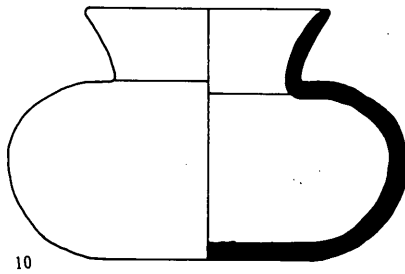
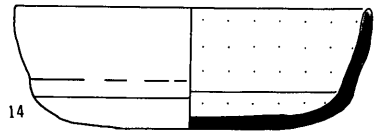
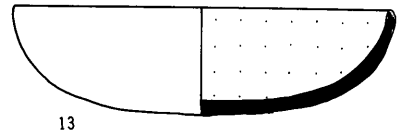
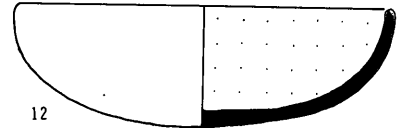
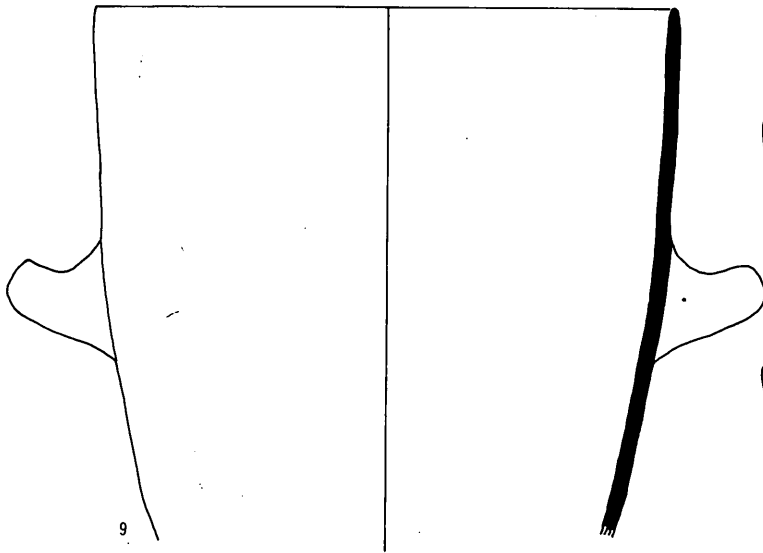
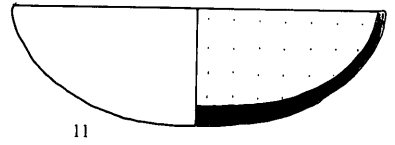
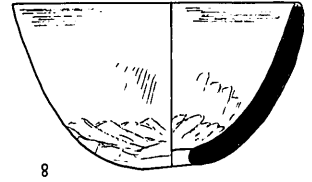
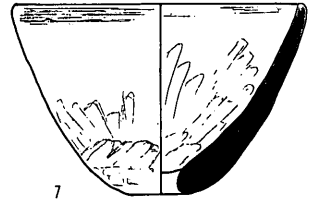
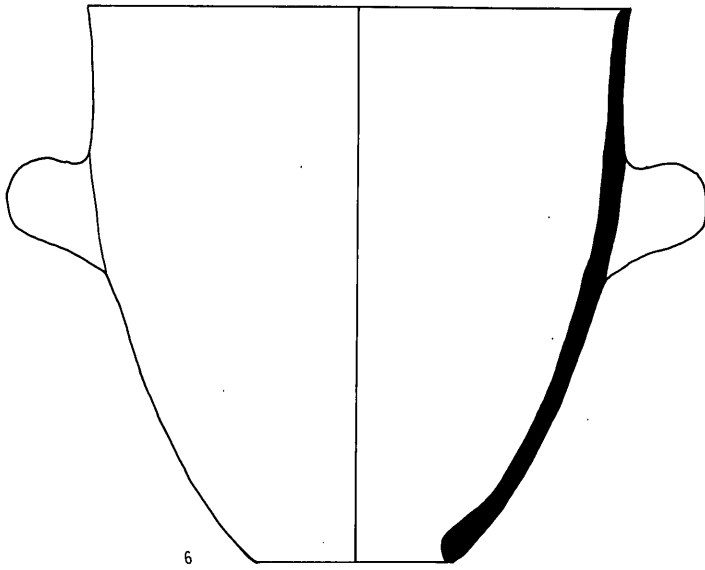
柱列址については、これが高床造りの構造からみて倉庫と考えたいが、柱列址Ⅳは遺物の多いこと、張出し部をもつ構造から住居とみられるものである。建造時期については、柱列址Ⅲは平安時代前半とみる10号住居址より古く、柱列址Ⅳの遺物は真間期とみる土師器と美濃須衛窯産の須恵器の伴出からみて、8世紀と考えられるが、他の柱列址については遺物の量も少なく、また、これらが遺構に関連するものとも不明であり、その時期を決めかねるものである。同時期における集落の中において高床造りの倉庫、それに伴う住居をもつ一画があったとも推定されるが、今後の調査例によって解明されていくものと期待したい。



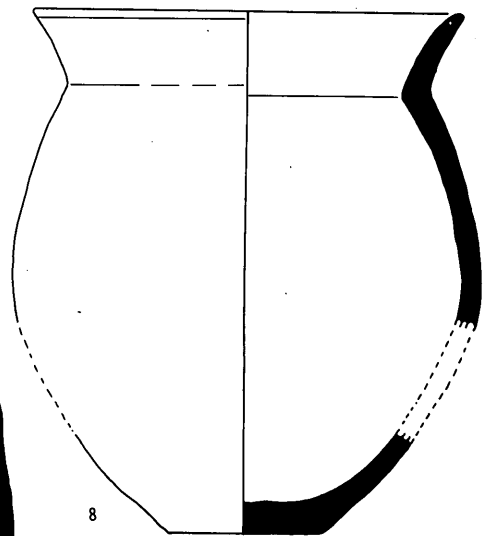
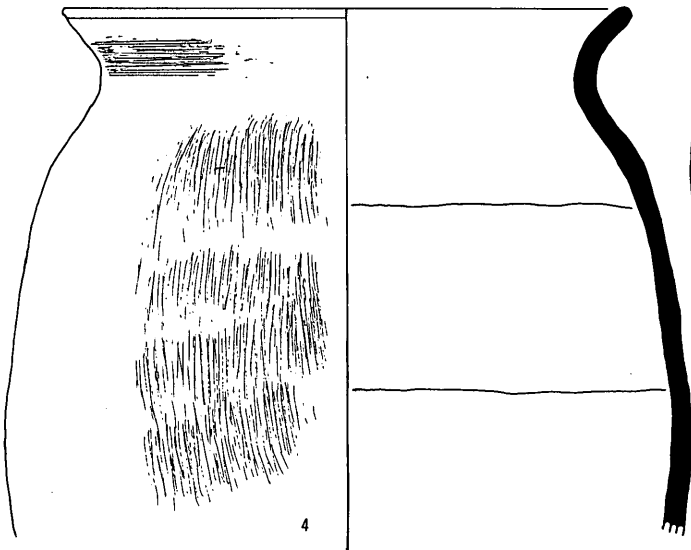
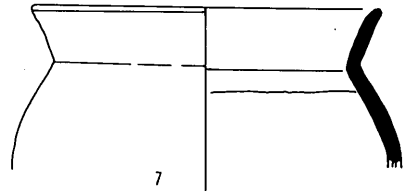
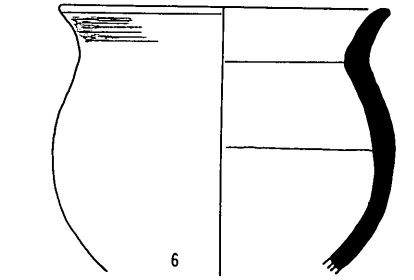
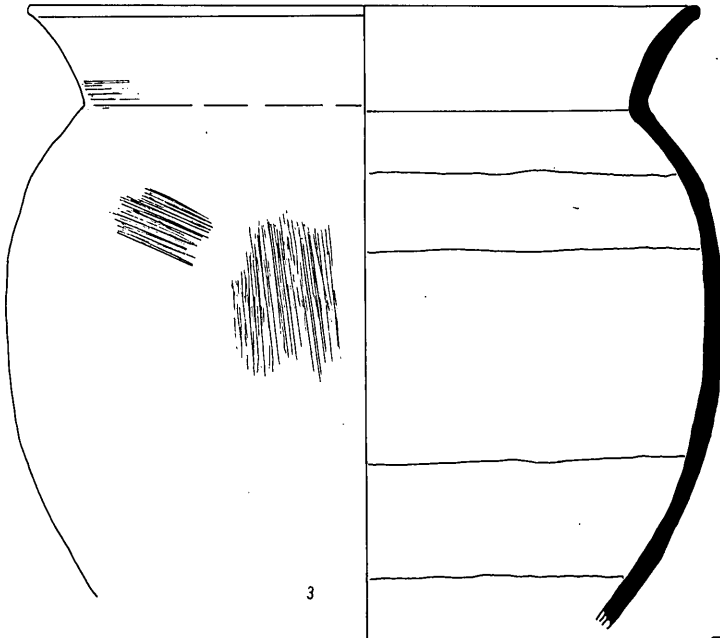
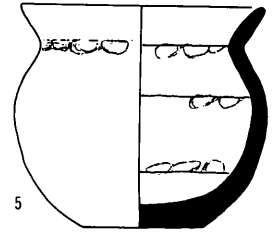
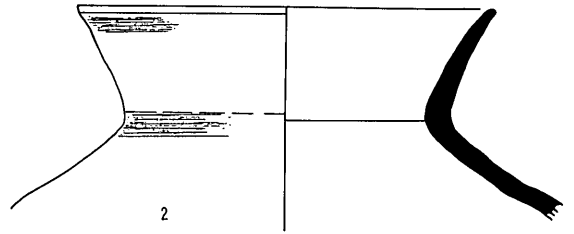
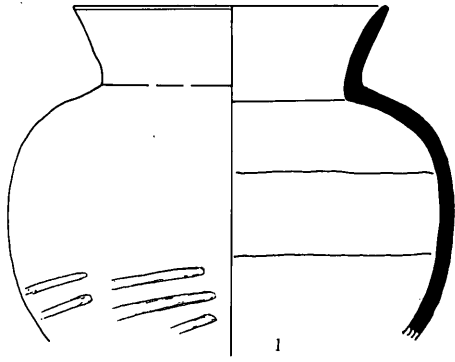
第59图 小池6号住居址出土遗物 (1:3)



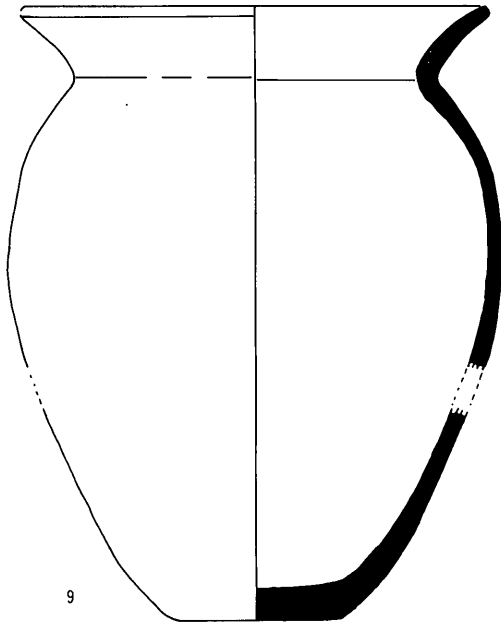
第60图 小池1号住居址出土遺物I (1:3)



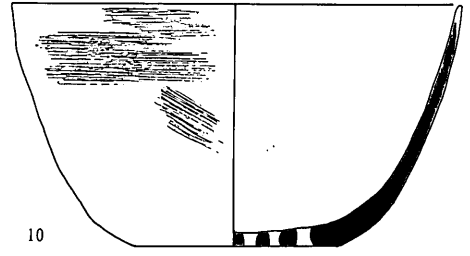
第61图 小池1号住居址出土遺物II (1:3)



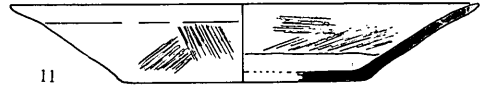
第62图 小池2号住居址出土遗物I (1:3)



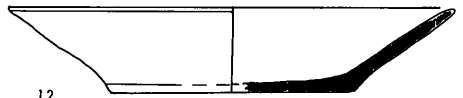
9



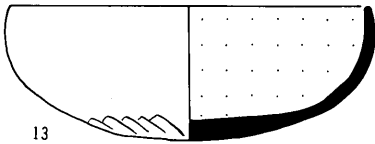
10



11

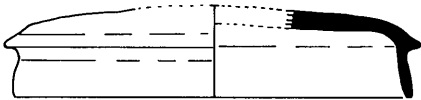


12

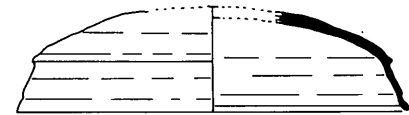


13

第63图 小池2号住居址出土遺物II (9~13) (1:3)



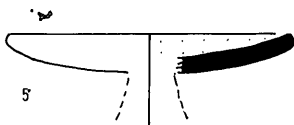
2



3

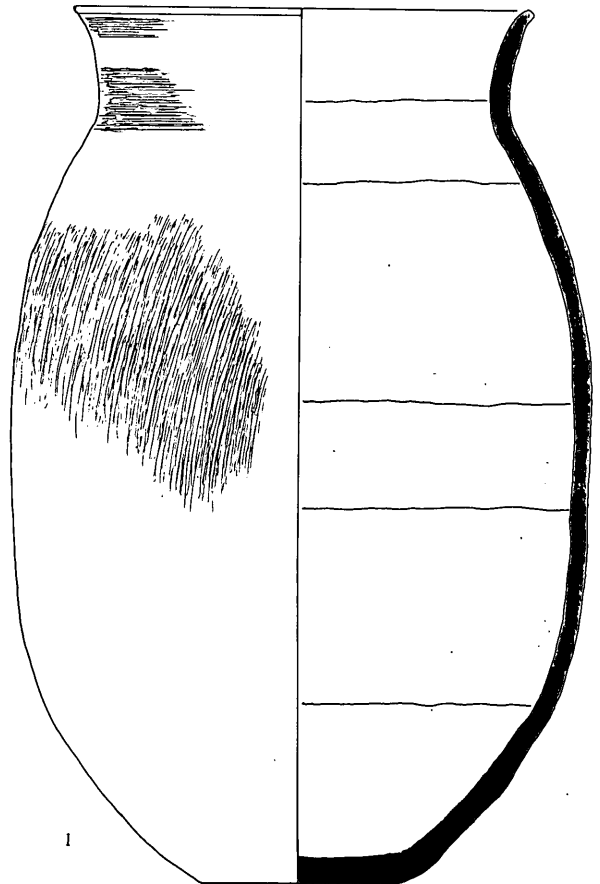


4

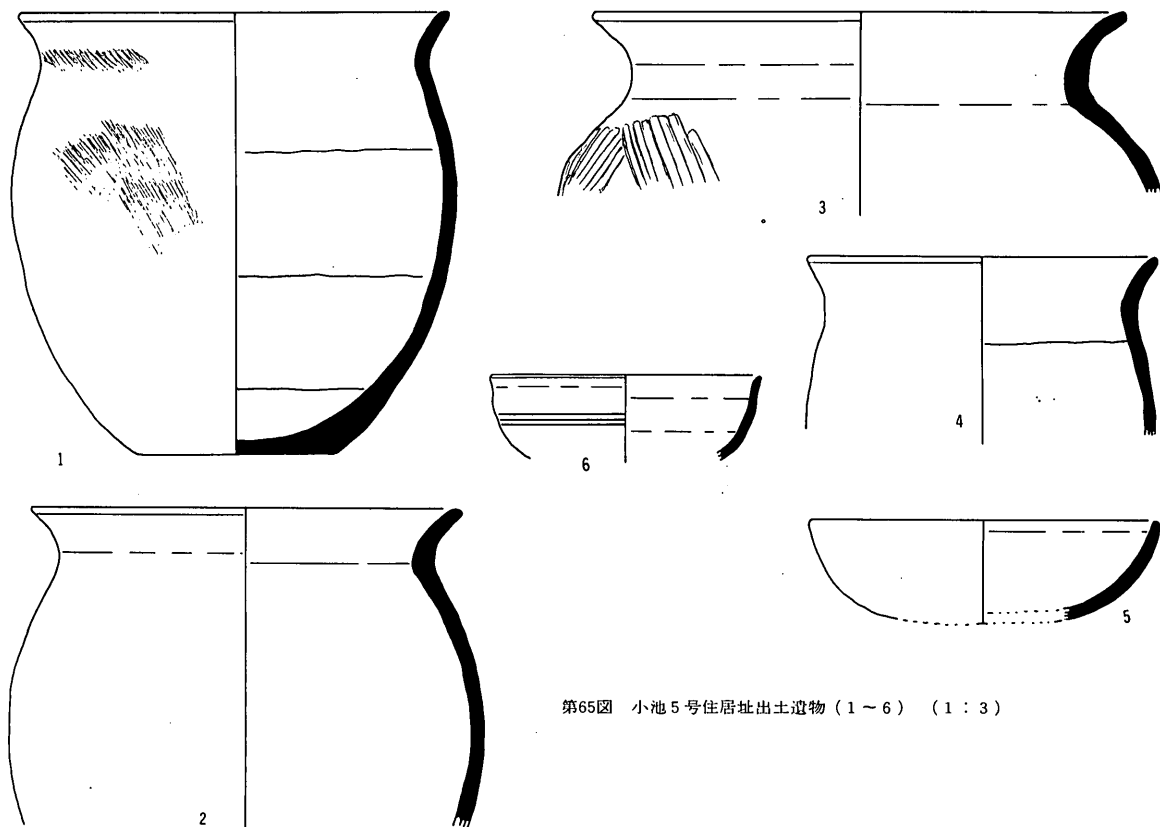


5

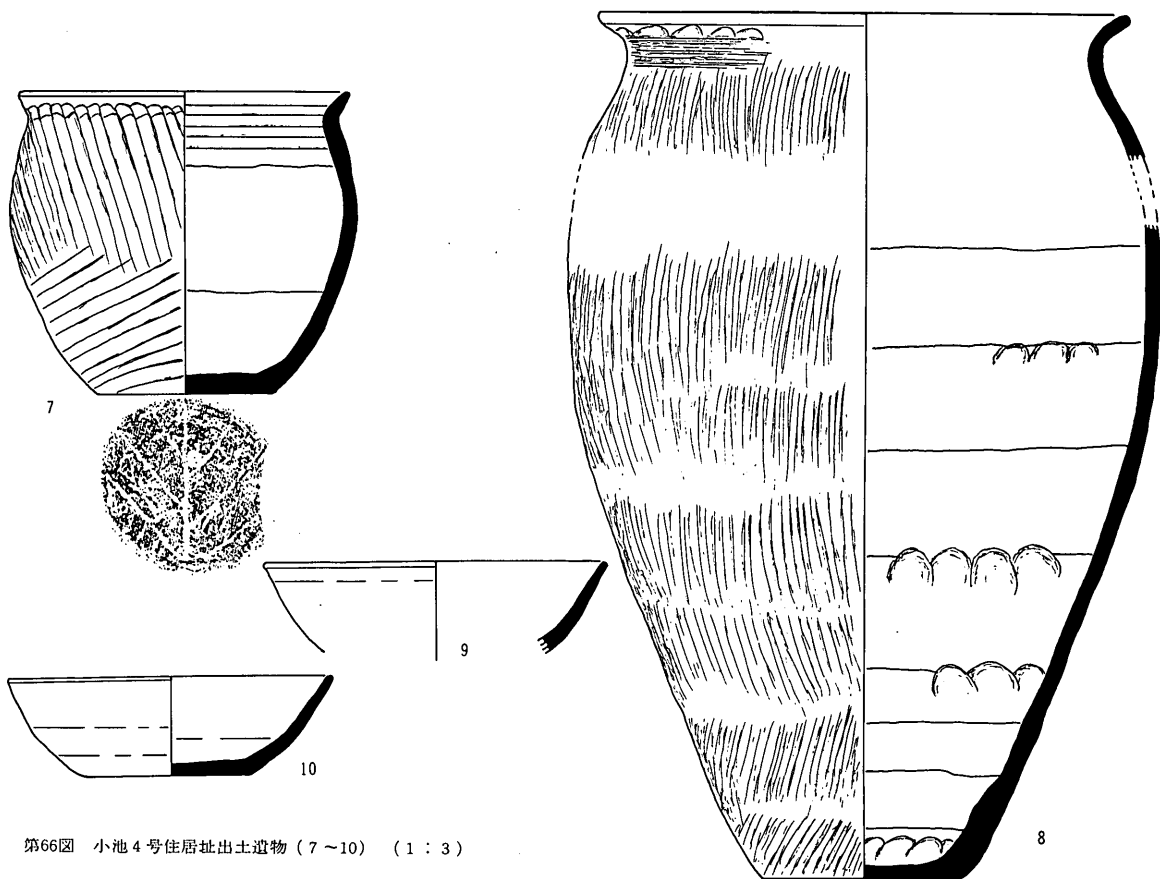
第64图 小池3号住居址出土遺物 (1~5) (1:3)



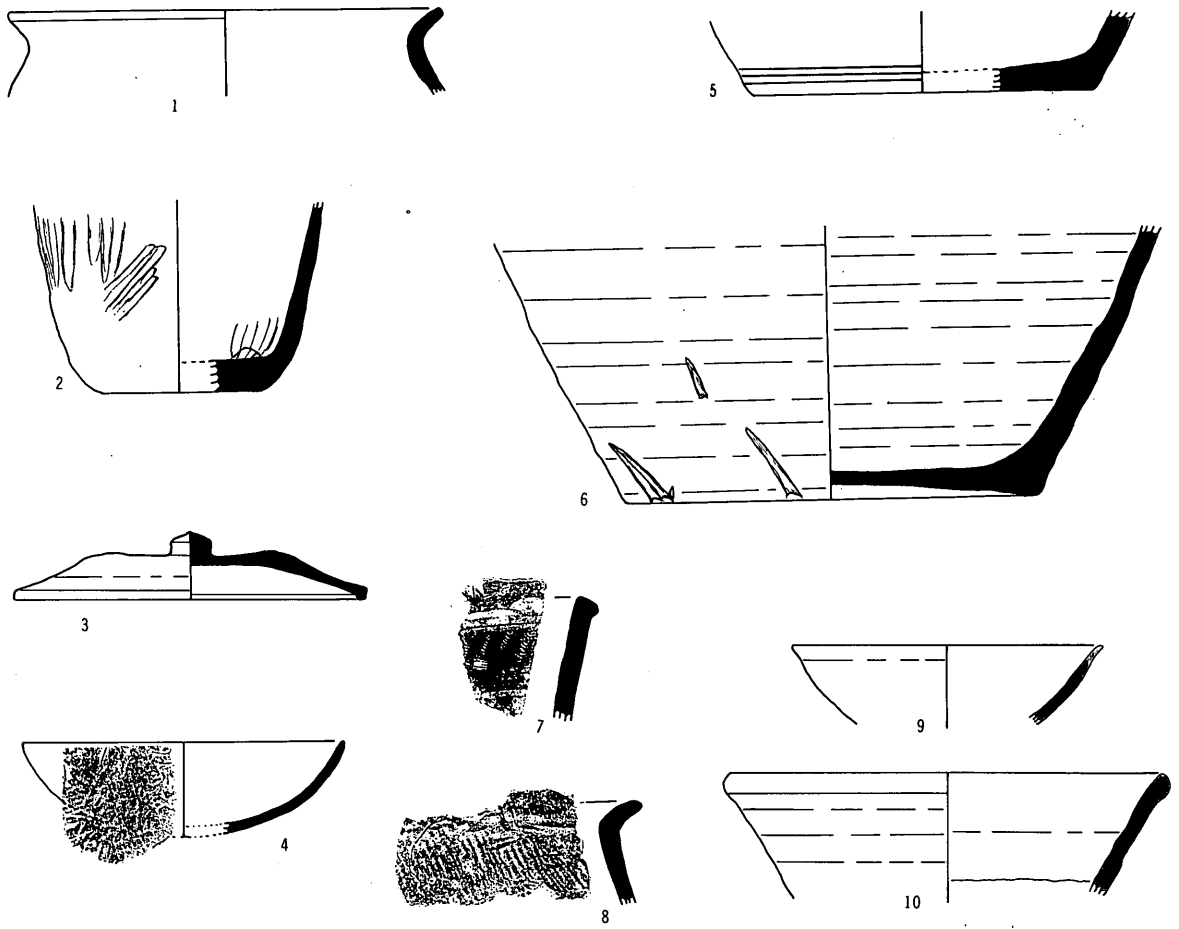
1



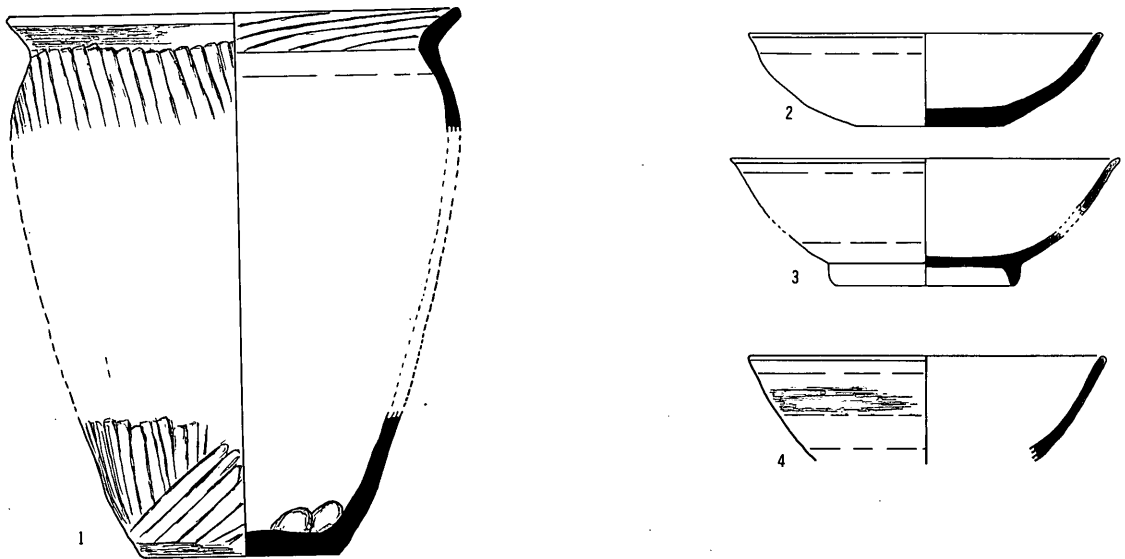
第65图 小池5号住居址出土遺物 (1~6) (1:3)



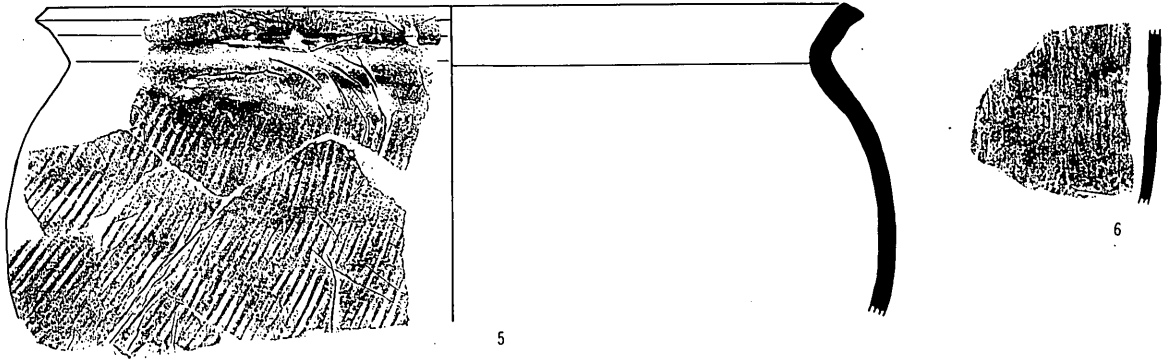
第66图 小池4号住居址出土遺物 (7~10) (1:3)



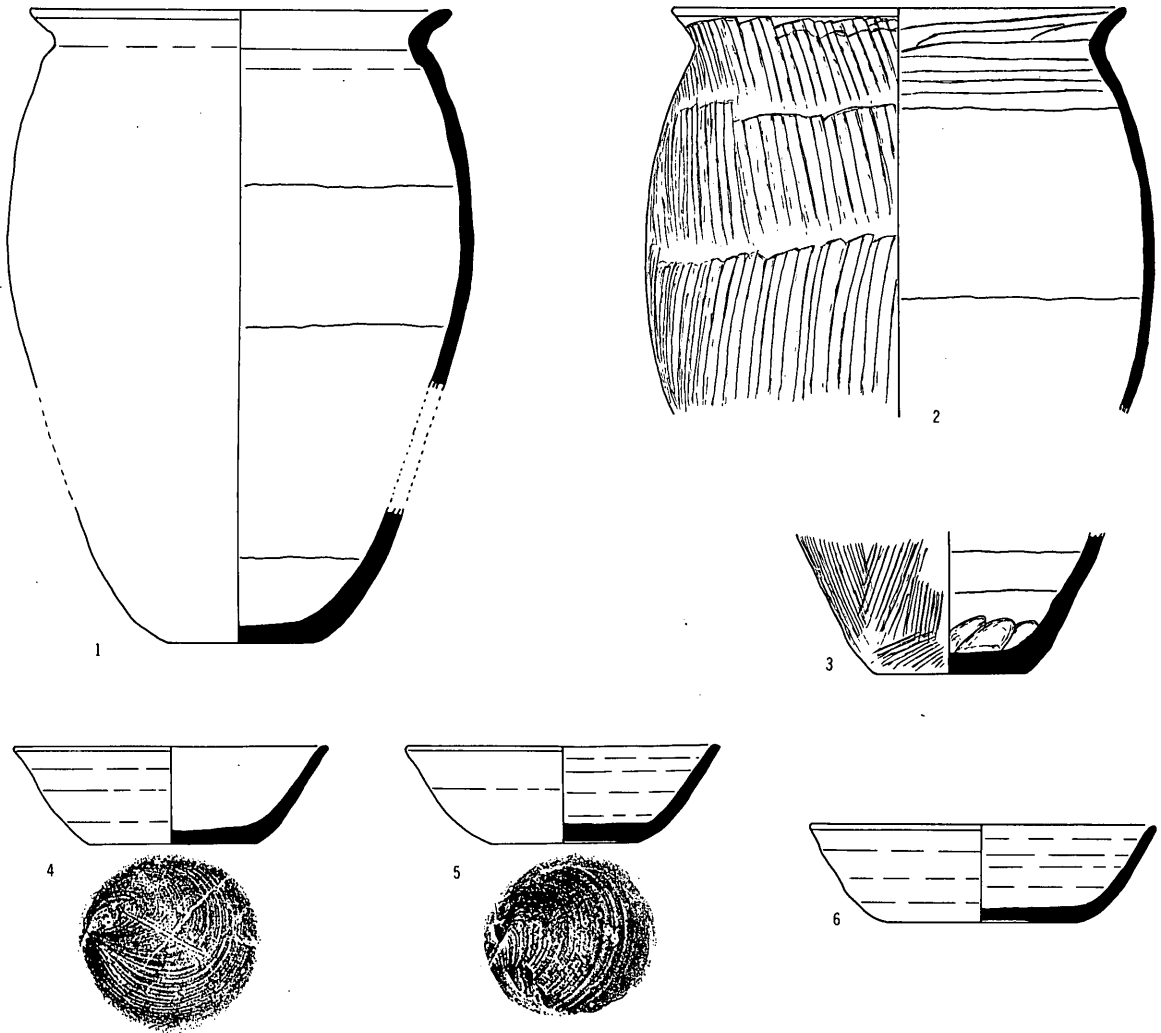
第67図 小池7号住居址出土遺物 (1:3)



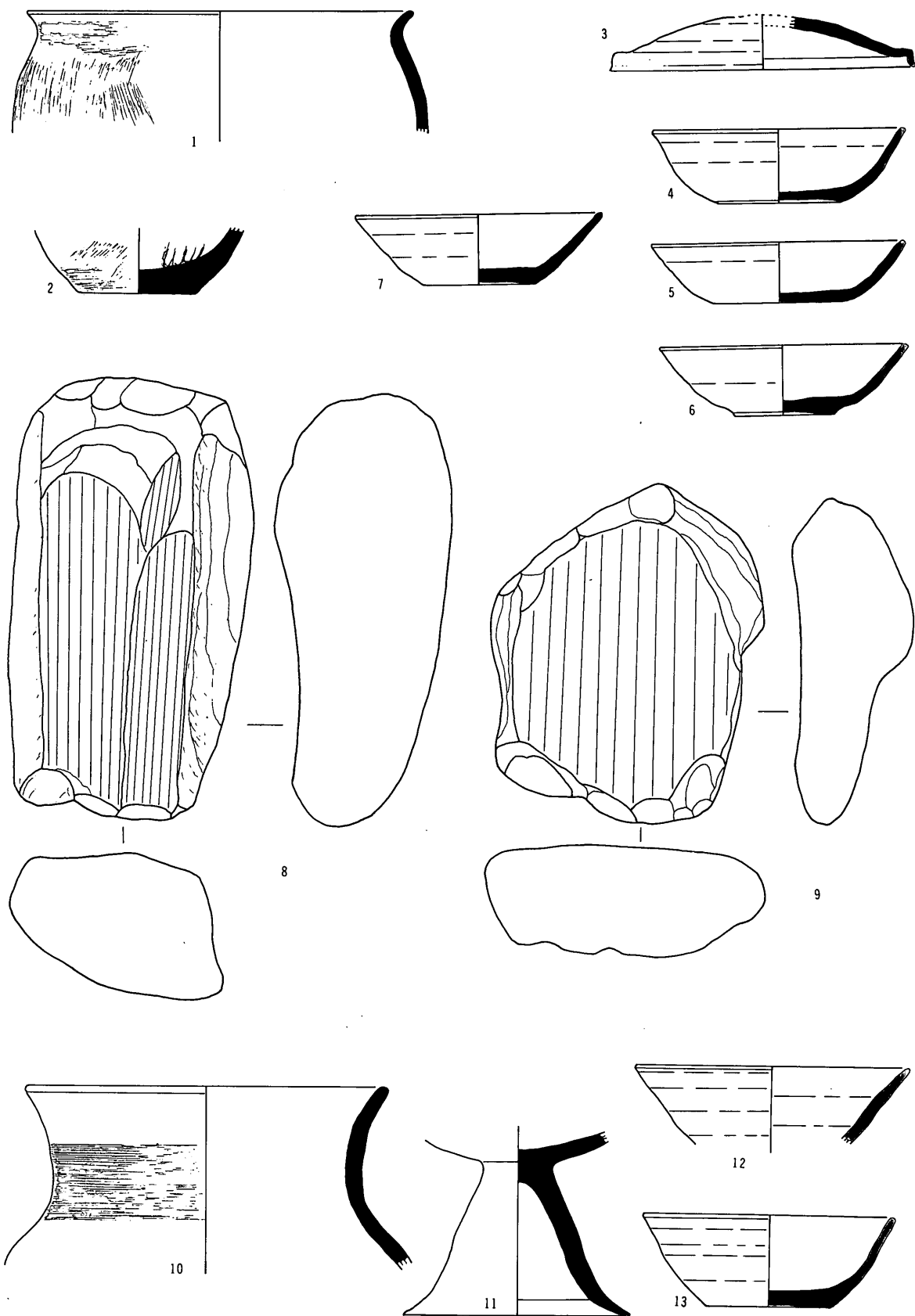
第68の1図 小池8号住居址出土遺物I (1:3)



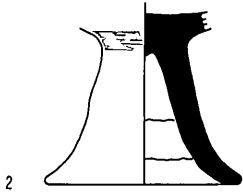
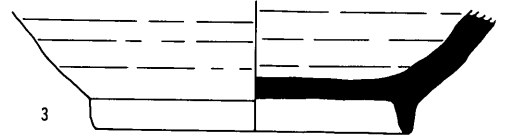
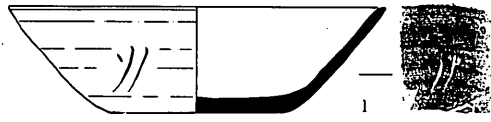
第68の2図 小池8号住居址出土遺物 (1:3)



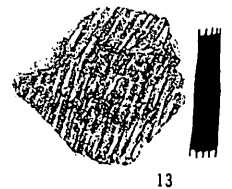
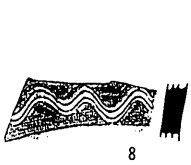
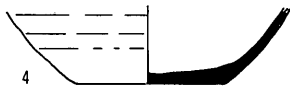
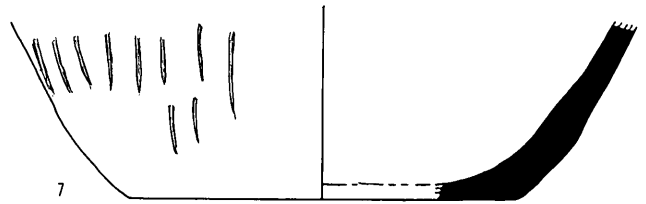
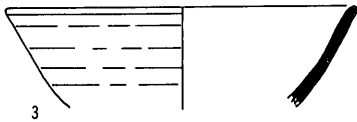
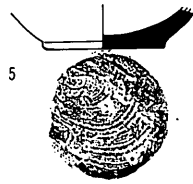
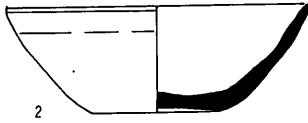
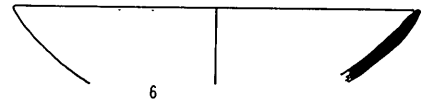
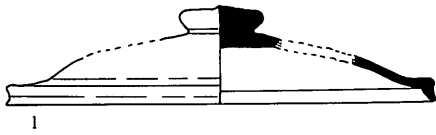
第69図 小池9号住居址出土遺物 (1:3)



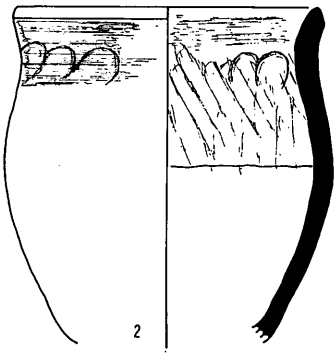
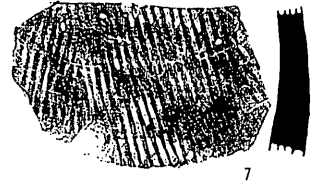
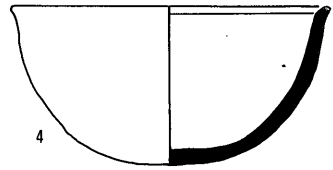
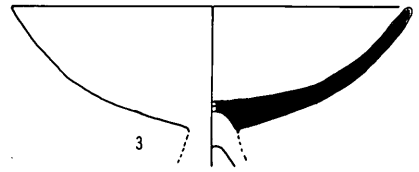
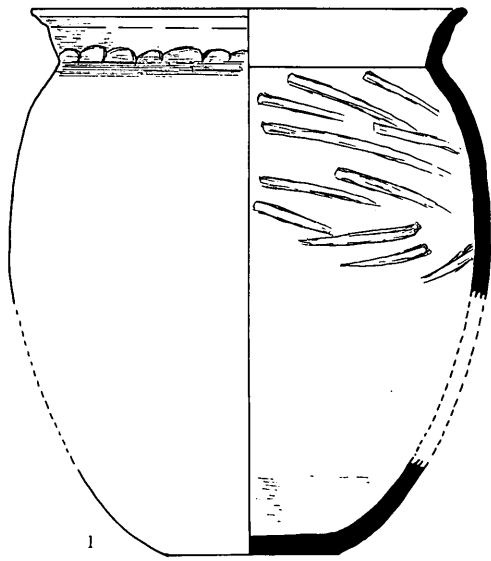
第70图 小池10号·11号住居址出土遺物(10号住1~9,11号住10~13) (1 : 3)



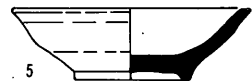
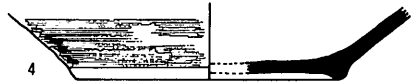
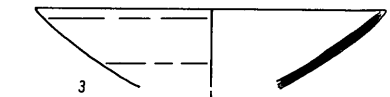
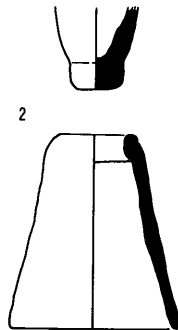
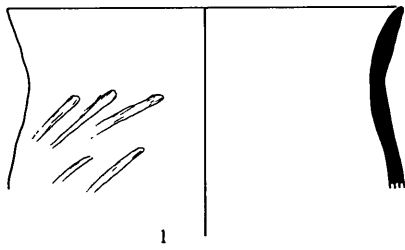
第71图 小池柱列址 I 出土遺物 (1 : 3)



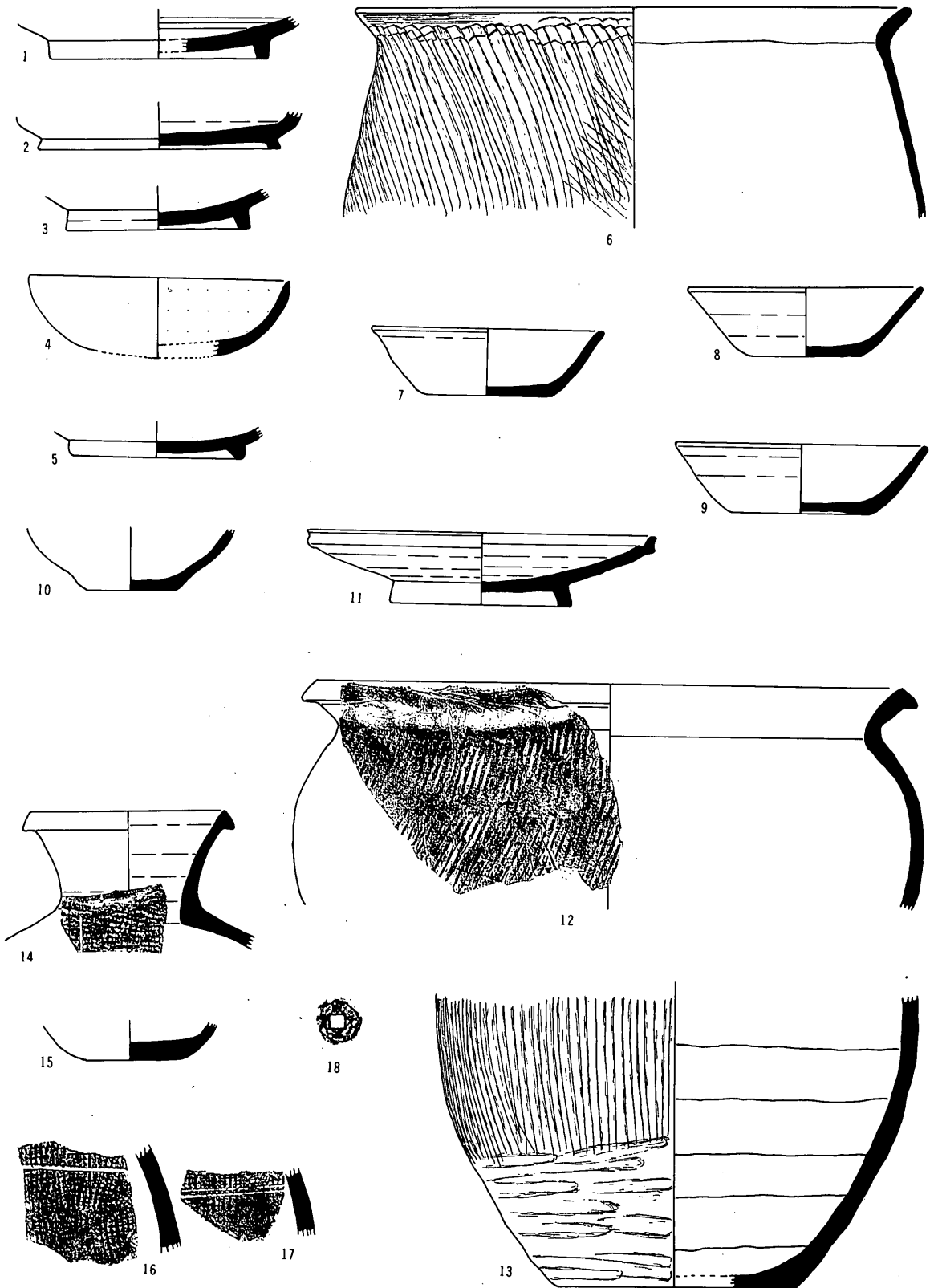
第72图 小池柱列 II, III, 柱穴群 II 出土遺物 (1 : 3)



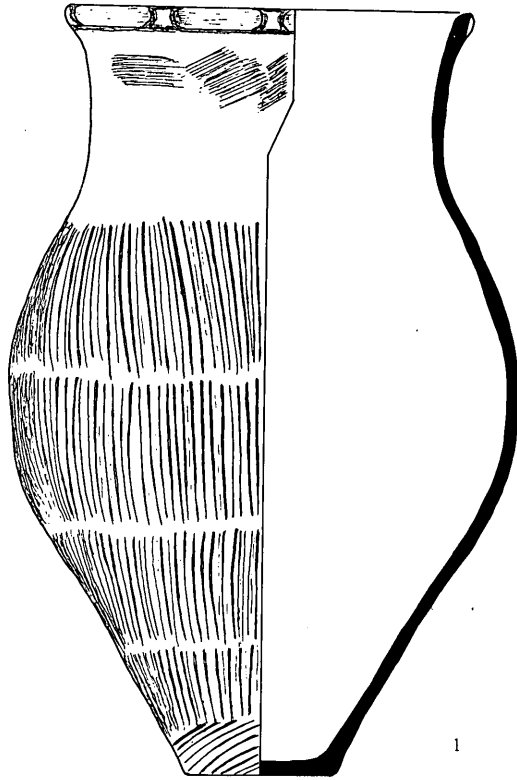
第73图 小池柱列址IV出土遺物 (1:3)



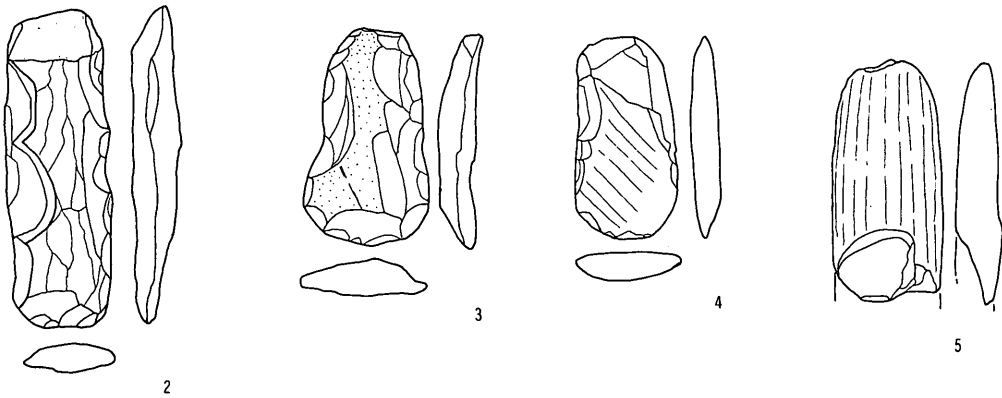
第74图 小池竖穴遺構出土遺物 (1:3)



第75図 小池土坑(1号1~4, 2号4, 7号6~9, 14号10, 15号11~13),
配石遺構(14~18) 出土遺物 (1:3)



小池6号土壇出土土器 (1:6)



遺構外出土縄文時代打石斧 (1:3)

第76図 縄文時代の遺物

IV 考 察

宮城遺跡における縄文時代中期中葉の勝坂式土器は下伊那地方では今まで散見されていたにすぎないのであったが、1号住居址では勝坂式の土器がセットとして出土をみたのは初めての例である。諏訪地方編年では藤内Ⅱ式に比定されるが、土器の文様には相違点がみられ、下伊那地方独自の様相をもつものである。これに伴出する土器は平出Ⅲ類A式であり、下伊那地方で最近になってこれらの発見例が数例みられ、本遺跡の資料は注目すべきものである。平出ⅢA式については、飯伊地方の出土例からみて、その編年的研究、標準遺跡の設定がなさるべき課題である。

本遺跡住居址内よりの石器の出土量はきわめて多い。1号址では約80個、2号址では100個をこえておりその種類も多様である。石器の種類の比率をみると打石斧40%、横刃形石器28%余で、両者で70%を占めている。磨石斧は7%、石錘が13%となる。台地上にあって石錘の占める割合が高い。石皿は2号址で2個をみているが1号・3号址になく、3号址の石器は土器の出土量とともに少なく、16個が出土しているが、種類の比率は1号・2号址と大差ない。住居址出土の石器中に凹石が発見されないことが注意される。

狩猟具としての石鏃が少なく、漁撈具とみる石錘が多く、採集具とみる打石斧、横刃形石器を多量にもつからみた台地上の生活基盤は何にあったか、縄文中期中葉における問題点であり、竜丘地区においてはこれが中期末葉の加曾利E期にまで石器保有の状態が続いている例がみられている。

下伊那地方の古墳については、今までの見解では、周濠をもつのは特殊な古墳とされてきた。下伊那史によれば下伊那の682の古墳中に濠をもつもの6基、葦石のあるものは11基にすぎない。この中、竜丘地区では周濠をもつが1基、葦石のあるもの2基（竜丘村誌では3基）となっている。このように極めて少ない例しかわかっていないのが地表面からみた調査結果であった。

今次調査した消滅古墳一井ゾエ1号・2号・ツカノコシ古墳とも周濠がめぐり、濠内に葦石の転落が認められている。濠を掘りつつその土砂を盛り上げて墳丘を構築する過程が看取され、古墳調査の手掛りを得たものと受けとめられる。

下伊那地方の最近の古墳発掘例によれば、竜丘鏡塚では一部調査であったが、墳丘裾部よりさらに外部に向って掘りこまれていることが看取され、葦石は耕作のために大部分は除去されていたが、部分的に残るのが認められた。竜丘中原Ⅰ号古墳では、濠を認めるまでの調査はしなかったが、葦石は認められ、傘大から人頭大の石を帯状に部分的に敷かれた状態が認められた。妙前3号古墳では周濠は1部の調査であったが、深さ3m、推定巾は裾部からの緩傾斜を含めると11mに達する濠の存在が認められ、葦石は人頭大から一抱え大の大石が墳丘の3分の2まで裾部から敷きつめられていた。

葦石については妙前3号墳では、天竜川の大きな支流松川に近く、容易に川原石の運搬が可能で、葦石に多量の石が利用されたと解され、中原Ⅰ号墳では台地上の鞍部にあり、墳丘を盛り上げる時のローム下よりの天竜層の石を裾部に並べて葦石にしたとみられる。今次調査の場合には段丘崖下の新川の川原石を主にして葦石となしたものと、その石の大きさから推定される。墳丘の傾斜度の強い面には全面に（妙前3号墳例）、帯状にめぐらす（中原Ⅰ号墳例）等、墳丘の崩壊を防ぐための葦石が敷かれている。

古墳築造にあたって、墳丘を盛る土砂を採るために濠が掘られ、この中から出た石を、規模の大となる古墳では近くに得られる川原石を運び、これを帯状に、さらには全面近くまで土留めのため敷きつめ葺石とした過程がとられたものと一般的には考えられる。濠がめぐり、葺石をもつ古墳は実際には多かったものと推定される。

周濠は豪雨により墳丘の崩れ、周辺の土砂の流入によって早い時期に埋められ、葺石は土地利用のさめ除去され、雑木林となった場合は長年月の落葉等の堆積によって地表面がら見られなくなっている例は多いとみられる。

神送塚と付近古墳群の築造年代は墳丘は消滅し、その構造から決めることはできなくなっている。神送塚については下伊那史第二巻には六鈴鏡、須恵器平瓶、陶馬の他は発掘時金属具、土器等多数を三界万盃^(注8)、馬頭観世音の2碑の下に埋めたとあり、ここより大刀8、剣2、矛2、短甲片1個体、馬具、鉄鎌、尖根鎌の出土をみている。武具を主体とするものであり、剣、矛は5世紀のものであるが、剣と大刀の比は1:4となり、尖根鎌、馬具、第II形式の須恵器の伴出からみて、後・I期の6世紀前半の築造と考えたい。井ゾエI号・ツカノコシ古墳の大刀と剣・尖根鎌、鬼高I式の土器器からみて築造時期は6世紀後半を下るものでないとみられるが、下伊那史第二巻には、これら古墳の出土品は段丘崖端部の栗の根元に埋めたとあり、これら遺物の発見によっては幾分訂正されるものとみられる。^(注9)

出土遺物は一回埋替えられ直接発掘資料でないが、資料からみれば限り、神送塚では、前・IV期—5世紀後半の築造であり、その後の追葬が予想されるものがある。

権現堂1号墳を盟主とする古墳群の築造を5世紀末から6世紀後半をあまり下らない時期と考えられ、下伊那地方においては早い時期の古墳群の出現とみるが、これについては今後の研究課題である。

小池遺跡では表採遺物の最も多くみられたI調査区では湧水が多く、遺構の発見もなく調査を断念した。表採遺物は西の微高地をなす所よりの流入と解せられた。台地の南西端のII調査区では縄文晩期、弥生後期、古墳時代後半から平安時代にいたる遺構・遺物が数多く発見され、用地外の大部分を占める駒沢川の自然堤防上の微高地帯に集落が発達し、湿地帯をなす用地内の大部分は古くから水田地帯であったとみられ、弥生時代以後の立地条件にかなった遺跡と受けとめられた。

弥生時代後期の火災の住居址では、住居の構造が把握され、竪穴の壁に沿って丸太を置き、これを押えに板を壁に立てかけてあり、今までのこの期の住居址発見例に多くみられ、貯蔵穴とされた住居片隅のピットが本住居址では排水用のものであることが確認された。

この住居址出土の土器セットは、弥生時代終末期のもので、下伊那地方に盛行した中島式に比し、東海地方の土器がより多く出土していることが注目される。駄科安宅C I号住居址出土例が先にあり、中島式文化圏への東海系文化の流入が高まった時期と受けとめられ、また、古墳時代への移行を示す勢力圏の変化が急速にすすめられた竜丘地区のおかれた位置が研究課題であり、発掘例の比較的少ない伊那谷の中位から低位段丘面の今後の調査に期待するものである。^(注10)

小池遺跡における古墳時代後期、奈良時代、平安時代から後半にいたる集落、柱列址の存在と、塚原古墳群をはじめとする桐林低位段丘面の古墳群構築の背影、その築造時期、奈良時代とみる前林廃寺跡開善寺境内の古瓦出土、駒沢川上流の須恵器窯址群との関連等、今後に残される多くの課題である。

駒沢川上流にある宮洞・小白井・堤洞・河内洞の竜丘地方窯址産の須恵器は胎土、仕上がりは粗く一見

地方産とわかるもので、小池遺跡においては平安時代の前半から後半にいたる住居址より出土をみておりこれをさかのぼる遺構よりの出土はない。竜丘地方窯址群の発生期を9世紀初頭以後と考えたいが、これについての確証は得られていない。下伊那地方に残る須恵器の窯址についての研究は今後の課題である。

農業構造改善事業に伴う発掘調査面積は広く、調査は限定された費用と、工事に伴う時間的制約のため極めて小範囲の調査に終わっている。現在各地に進行中の農業構造改善事業による遺跡の破壊は大きく、段丘面の遺跡全面の破壊にまでおよんでいる。遺跡保存のためには、工事方法の検討が考慮すべき時期であることを強調したい。

- 注1 伴信夫「飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」 信濃 昭42.12
・佐藤魁信「角田原」 1973.3 高森町教委
・飯田市大門町遺跡（新発見遺跡）で昭48年宅地造成中に住居址1が発見され、多くの資料が得られ、飯田高校考古学研究クラブ員が報告書をまとめている。
- 注2 竜丘前ノ原遺跡で住居址1が発見、飯田高校考古学研究クラブが調査、加曾利E式土器に伴出する打石斧・石錘を多量に検出している。
- 注3 下伊那史第2巻の竜丘地区古墳中、周濠をもつのは丸山古墳1基、葎石をもつもの松が崎古墳、大塚古墳の2基である。
- 注4 竜丘村誌では注3以外に葎石をもつに殿垣外5号墳を追加している。
- 注5 大沢和夫 「鏡塚発掘調査報告書」 昭42, 10 飯田市教委
- 注6 佐藤魁信「飯田市桐林中原I号墳発掘調査報告書」1972.3 長野県考古学会誌
- 注7 佐藤魁信 「妙前大塚（3号）古墳」外部構造 昭47.3 飯田市教委
- 注8 市村威人 「下伊那史第二巻」 P440~442
- 注9 " " P440
- 注10 佐藤魁信 「安宅・大島」 安宅遺跡の遺構及び遺物 1969.2 飯田建設事務所

発掘調査組織

1. 竜丘地区緊急発掘調査委員会

| | |
|------|-------------------|
| 橋本玄進 | 飯田市教育委員長 |
| 矢亀勝俊 | 飯田市教育長 |
| 河野通幸 | 飯田市教育委員 |
| 山下順蔵 | 〃 |
| 森本信也 | 〃 |
| 田中富雄 | 飯田市教育委員会事務局社会教育課長 |

2. 調査団

| | | | |
|------|--------------|------|------|
| 団長 | 佐藤甦信 | | |
| 調査主任 | 遮那藤麻呂 | | |
| 調査員 | 今村正次 | 塩沢仁治 | 松村全二 |
| 〃 | 片桐孝男 | 林登美人 | |
| 協力員 | 下伊那教育会考古学委員会 | | |
| | 吉沢輝人(委員長) | 松沢英男 | 梅村金彦 |
| | 小林正治 | 市瀬洋吉 | 林光男 |
| | 飯田高校考古学研究クラブ | | |

3. 指導者

| | |
|------|-----------------|
| 大沢和夫 | 飯田女子短大教授 |
| 今村善興 | 長野県教育委員会文化課指導主事 |
| 桐原健 | 〃 |

4. 事務局

飯田市教育委員会社会教育課

| | | | |
|-------|--------|------|---|
| 田中富雄 | 社会教育課長 | | |
| 山下舜平 | 課長補佐係長 | | |
| 川手周三 | 係長 | | |
| 長谷部三弘 | 主事 | 太田美佐 | 〃 |
| 河合武文 | 〃 | 林茂喜 | 〃 |

5. 竜丘地区農業構造改善事業担当

| | | | |
|--------|------|------|------|
| 農林課 課長 | 小林三郎 | | |
| 〃 係長 | 小林衛 | | |
| 〃 技師 | 牧田裕隆 | 中村俊助 | 藤本照之 |

6. 作業員

| | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 寺 沢 二 郎 | 吉 沢 徳 男 | 宮 沢 富 夫 | 池 田 治 国 |
| 北 村 重 実 | 中 平 兼 茂 | 後 藤 正 直 | 高 内 武 一 |
| 西 尾 多三郎 | 下 平 貞 雄 | 牧 島 茂 実 | 久保田 尚 子 |
| 小木曾 道 子 | 近 藤 たまえ | 牧 島 卷 子 | 久保田 きみえ |
| 知 久 さとえ | 塩 沢 岩 恵 | 下 平 八千子 | 池 田 キ シ |
| 下 平 信 子 | 下 平 セツ子 | 沢 柳 嘉 子 | 久保田 かね子 |
| 沢 柳 美津子 | 林 みよし | 下 平 美代子 | |

お わ り に

飯田市にとって農業対策は産業振興の中心的課題であり、都市近郊型農業の展開をはかるため、土地基盤の整備は必要性から今回の第2次竜丘地区農業構造改善事業（ほ場整備）が実施されることになり、関係部課との事前協議のうえ、鈴南、小池地区の発掘調査を行なうことになった。

従ってこの事業は規模も大きく事業区域の中には、小池遺跡、宮城遺跡、神送塚等代表的な埋蔵文化財の散布地にして、現地調査のうえ慎重に検討を行い、昭和48年6月28日文化庁に対し発掘調査及び補助金申請書を提出認可補助金を得て10月8日より着手した。

今回の事業費は、国庫補助金1,500,000円、県費補助金450,000円、飯田市負担金1,050,000円をもって飯田市教育委員会の直轄事業として緊急発掘調査記録保存事業を実施し大きな成果を残してここに完了した。

この発掘調査は、耕地であるため収穫期の時期後の時点より発掘開始をしなければならない。状況の中で期間的にも困難な点があったが、幸い各方面の格別なご援助とご指導によって予期していたよう貴重な結果をみることができ感謝にたえない。

調査体制は、指導者に大沢和夫氏、県教育委員会文化課指導主事今村善興氏、団長には佐藤甞信氏を先頭に、主任遮那藤麻呂、今村正次、片桐孝男、塩沢仁治、松村全二、林登美人各氏には経験豊かな知識を以って終始献身的なご尽力を頂き今回調査報告書刊行に到達できたご苦労とご熱意に対し深く敬意を表する。

昭和 49 年 3 月

飯田市教育委員会社会教育課



工事前の遺跡

前方は飯田市竜江地区 中央は天竜川



工事中の遺跡



工事終了後の遺跡

図版15 遺構全景



上段面西からみる
左から竪穴遺構、柱列址Ⅰ・Ⅲ、10号住居址……



上段面東からみる
右から9号・8号・7号住居址、柱穴群Ⅱ、柱列址Ⅱ



中段面西から
右から6号住居址・柱列址Ⅳ・配石址



下段面東から
左から11号住居址・柱穴群Ⅰ・5号住居址

図版16 弥生時代の住居址（6号）



6号住居址



6号住居址の排水用の
ビットとこれにつながる溝



6号住居址の火災跡



6号住居址の炉址



6号住居址の小形壺の出土



6号住居址出土、小形壺と甕形土器（丸窓付土器）
窓の一部欠ける

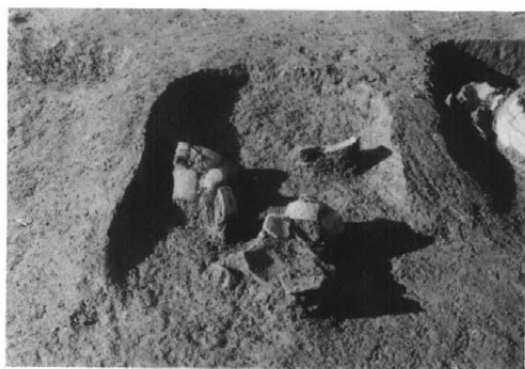


6号住居址出土、広口壺

図版17 古墳時代の住居址(1号・2号・3号・5号)



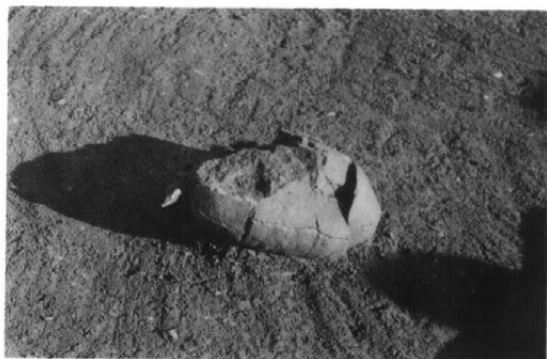
1号住居址



1号住居址の竈
上部は水田造成の際削られる



1号住居址の土器の出土状況



1号住居址の長胴甕の出土



1号住居址出土 甕形土器



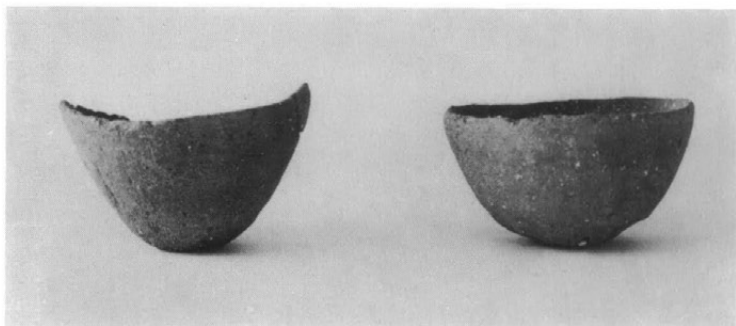
1号住居址出土 埴・甕形土器



1号住居址出土 坏・碗形土器



1号住居址出土 甗形土器



1号住居址出土 小形甗形土器



2号住居址



2号住居址土器出土状況



2号住居址土器出土状況



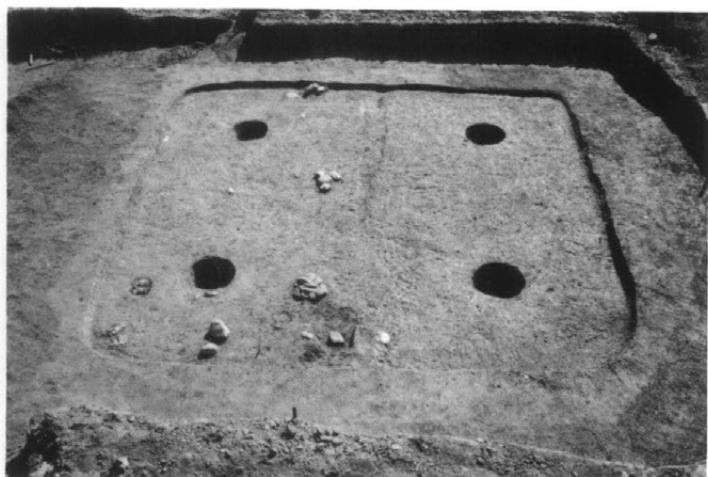
2号住居址出土 甗・壺形土器



3号住居址

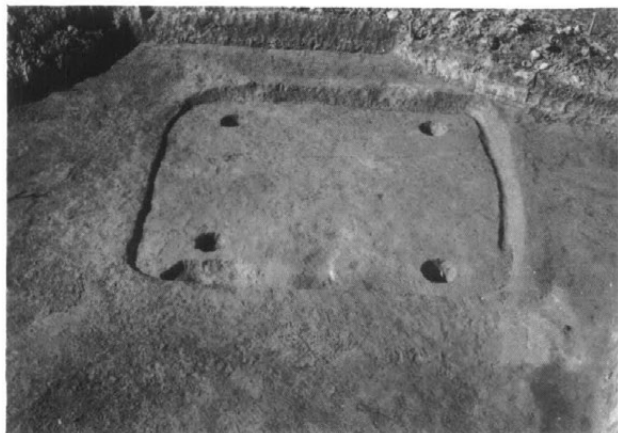


3号住居址出土瓠形土器



5号住居址

図版18 平安時代の住居址(4号・7号・8号・9号・10号・11号)



4号住居址



8号・9号住居址, 16号土坑



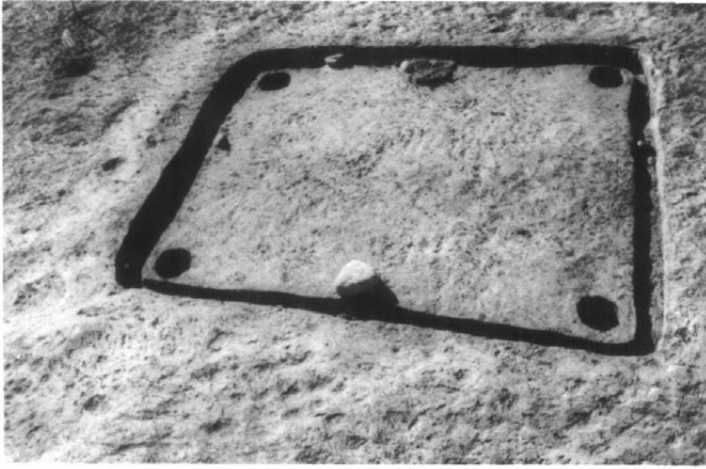
7号・8号・9号住居址 14~16号土坑



9号住居址 須恵器・坏の出土



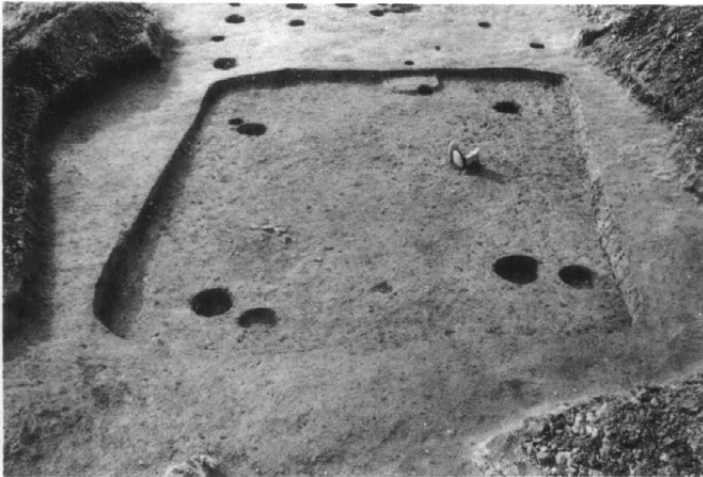
9号住居址坏底部の刻印



10号住居址



10号住居址出土の鉄器

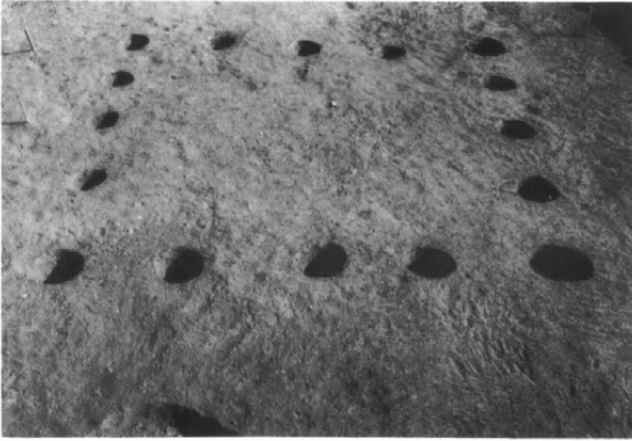


11号住居址

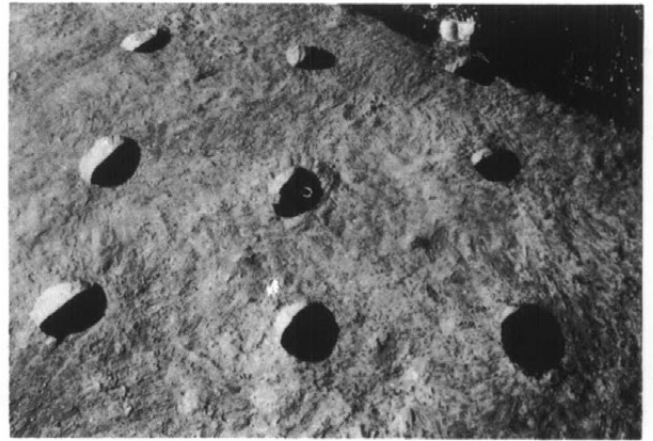


11号住居址の炉址状石組（内部に焼土をもつ）

图版19 柱列址 (I ~ V)



柱列址 I



柱列址 II



柱列址 III

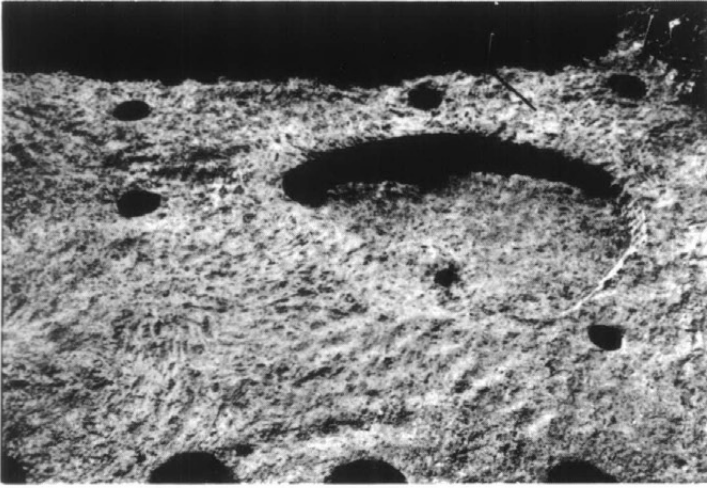


柱列址 IV

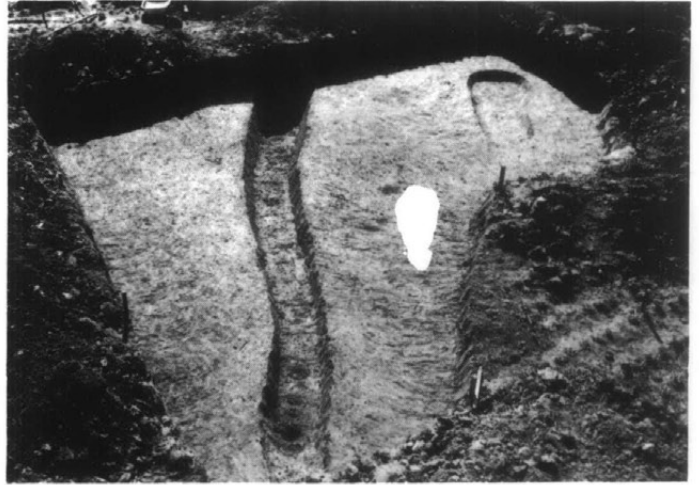


柱列址 V

図版20 竖穴遺構・土壇その他



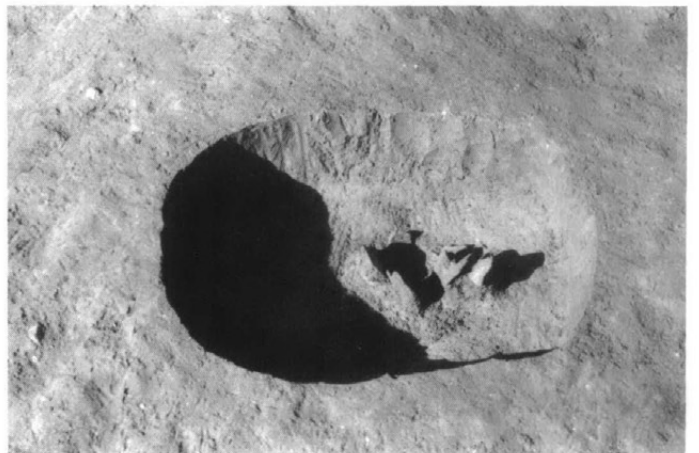
竖穴遺構



溝状遺構・1号土壇



2号土壇



6号土壇



7 号 土 塚



柱 穴 群 I



柱穴群IIと土塚6, 9~13号



配 石 遺 構

図版21 発掘スナップ



グリッド調査



5号住居址の検出



10号住居址を掘る



柱列址を掘る

小池・宮城・神送塚

昭和48年度竜丘地区農業改善事業
埋蔵文化財発掘調査報告書

1974・3

長野県飯田市教育委員会

印刷 飯田市通り町 憐秀文社

